京都市文化財保護課
研究紀要

創刊号

目　次

記念寄稿

京都市の文化財保護行政とその歩み……梶川　敏夫　1

建造物

京都ハリストス正教会生神女福音聖堂の建築経緯について……石川　祐一　17

白山神社所蔵史料「元治元年　田貫村惣堂　御堂普請諸造用覚帳」について　……原戸喜代里　27

養源院客殿の仏壇羽目板

（狩野山楽筆「唐獅子図」）の修理事業について ……千木良礼子　35

安井　雅恵

美術工芸品

曽我蕭白筆「雲龍図」襖（十念寺蔵）について……安井　雅恵　65

祇園祭・八幡山の鶴形欄縁金具修理における

蛍光エックス線分析調査と復元製作について ……山下　絵美　71

名勝

山県有朋と無隣庵保存会における無隣庵の築造と継承の意志の解明……今江　秀史　89

民俗文化財

「地蔵盆」に関するアンケート調査結果……村上　忠喜　115

大原野神社の御田刈祭と相撲の神事……福持　昌之　133

埋蔵文化財

洛外における堀の変遷……馬瀬　智光　145

羽束師遺跡遺跡周辺の環境復元

－弥生時代後期～古墳時代初頭の調査成果を中心として－ ……黒須亜希子　187

2018年3月

京　都　市

研究紀要刊行にあたって

京都市内には３千件を超える有形無形の文化財があり，全国の国宝の約１９％，重要文化財の約１４％が集中しています。これら以外にも京都市の指定・登録文化財や周知の埋蔵文化財包蔵地が多数存在しています。これらの文化財を指定や登録する際には，本市の文化財保護技師が中心となり入念な基礎調査を行っています。また，「市民が残したいと思う京都を彩る建物や庭園」や「京都をつなぐ無形文化遺産」「京都遺産」などの本市独自の文化財保護制度による新たな文化財ジャンルの創出も行っております。これらの基礎調査の成果や独自制度の内容，並びに新発見の情報などを紹介する目的で研究紀要を刊行する運びとなりました。

この研究紀要の刊行には主に４つの目的があります。第１に今後の文化財指定に必要な基礎調査で得られた情報の提供及び公開，第２に本市が長年にわたり行ってきた文化財保護に関する仕組みの説明や独自制度の解説，第３に市内に所在する文化財そのもののもつ魅力の発信，第４に文化財の修理・調査報告書の限られた紙面で報告することの出来なかった資料データの公開を目的としています。

可能な限り多くの方に公開したいという思いから，デジタル配信という新たな取組も行います。

現在，これからの時代にふさわしい文化財の保存と活用の在り方が国家的な検討となり，文化財保護行政の大きな変換点にある今，本紀要を大いに御活用いただければ幸いです。

平成３０年３月

京都市文化市民局
文化芸術都市推進室
文化財保護課長
中川　慶太

記念寄稿

京都市の文化財保護行政とその歩み

梶川　敏夫

１．はじめに

この度，京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文保課」という。）で初めて研究紀要が出版されることになったが，1970年に今の文保課が発足してから実に47年目のことである。

かつて文保課に在職中，文化財に関する各専門分野の技師を多く抱える職場として，研究紀要の出版を強く望んでいた一人として，今回の出版に至ったことを素直に喜びたいと思う。

筆者は，定年退職した2010年３月末まで文保課に所属し，その内25年間は京都市埋蔵文化財調査センター（以下「埋文センター」という。）に勤務，最初の嘱託職員の期間を含めて36年間，技師として京都市に奉職した。定年後は（公財）京都市埋蔵文化財研究所（以下「埋文研」という。）に再雇用（次長）となり，2014年度は，京都市考古資料館（館長）も兼職して2015年に退任，1972年の大学卒業から発掘調査のアルバイトや嘱託職員の期間及び大学の非常勤講師期間を含めると，これまで44年間に亘って文化財保護に関係した仕事に従事していたことになる。

この紀要では以上の経緯を踏まえ，個人的に知る範囲で文保課の設立前後からの歩みと，これまで一番長く担当した埋蔵文化財の業務について論じてみたい。

なお，以下の記述は，『古代文化』第68巻第１号（(公財）古代学協会，2016年６

写真１　文化財保護課の定年退職前の2010年２月
文化財保護審議会でお世話になった先生方と文化財保護課職員（右から２人目が筆者）

月30日，及び次号の69号に投稿した「京都市の文化財保護44年を振り返って（その１・２）」を，さらに要約してまとめたものである。

２．これまでの主な業務の経緯

筆者は，1972年春に大学を卒業後，京都市で最初の文化庁国庫補助事業（埋蔵文化財）である羅城門跡，西賀茂鎮守庵瓦窯跡の発掘調査にアルバイトで参加し，その後，平安宮跡・六勝寺跡などの発掘調査を経験，その間に京都市が最初に出版した『京都市遺跡図・台帳』作成を担当して1972年に発行，京都市の記念物行政の仕事の第一歩を踏み出した。

同年，鳥羽離宮跡調査研究所（杉山信三所長）に所属して，鳥羽離宮跡や六勝寺跡，栢杜（かやのもり）遺跡などの発掘調査を担当したが，出身が理工学部ということで専門知識が必要と考え，大学に戻って１年間考古学を履修した。その後も，奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センターで初めて主催された長期専門研修に参加し，さらに２回の専門研修に参加して，埋蔵文化財の保護に関する基本的な技術を身につけた。

1974年には，文保課の非常勤嘱託員となり，２年半後の1976年秋に技術員（現：文化財保護技師）に採用されて，主に埋蔵文化財を中心とした記念物行政を担当した。

1976年には，京都市がそれまで市内の発掘調査を行っていた任意の調査会（平安京調査会・六勝寺研究会・鳥羽離宮跡調査研究所・伏見城研究会）を統廃合し，（財）京都市埋蔵文化財研究所（以下「埋文研」という。）を設立し，右京区の花園に事務所を設けて，市内発掘調査の大半をこの財団が引き受けることになった。

その後，文化庁国庫補助を受けて京都市埋蔵文化財調査センター（以下「埋文センター」という。）が上京区の西陣に建設されることになり，筆者も担当者の一人として加わり，建物は1979年に竣工，花園にあった埋文研がここに移転して，同年11月には京都市考古資料館がオープンした。

翌年の1980年には，文保課から埋蔵文化財部門が独立して埋文センターへ異動となり，筆者はそこで埋蔵文化財に関する行政指導を担当しながら，1981年に京都府と同時に制定された文化財保護条例に伴って，各分野の専門技師が採用されることになり，その指導のために半月毎に文保課と埋文センターを行き来していた。

埋文センターでは，文化財保護法に基づく申請の受付や指導，埋文研やその他の調査機関との連絡調整，調査現場の指導や試掘調査などの業務を行っていたが，その後，四半世紀を経た2005年に，京都市の組織統廃合により，埋文センターは廃止が決定，元の古巣である文保課（岡崎の京都会館）へ異動することになった。

2008年には，技師出身者としては初めて文保課の課長となり，２年後の2010年3月に同課を定年退職，退職後は先述のとおり，埋文研（考古資料館）へ再任用となり，平成26年（2015）に任期満了で退職，その経験を活かし，現在は京都女子大学文学部史学科（2001年から），京都造形芸術大学歴史遺産学科（2011年から）の非常勤講師として，考古・歴史・文化財保護などの授業を担当している。

３.文化財保護課の設立経緯ほか

京都市の市政が発足したのは1889年，市役所が1889年に開庁し，1930年に京都市観光課が発足，それが1941年に文化課となり，第二次世界大戦後の1947年に市役所内に文化局が誕生して，1948年には文化観光局が設けられた。

1958年４月１日には，京都市長と教育委員会委員長との覚書で，本来，教育委員会に属する業務である文化財保護（文化芸能），スポーツに関する業務を，市長部局の文化観光局で補助執行することになり，1962年には京都市観光施設課内に文化財係が置かれ，1965年に文化財係が文化課に吸収されて保存係となっている。

1969年には，文化財修理や伝統行事に対して補助や助成をする，（財）京都市文化観光資源保護財団（以下「保護財団」という。）が発足，その翌年の1970年４月の機構改革で，文化観光局内に文保課が設けられ，京都会館内の執務室に上記の保護財団と同室で業務が開始された。

1970年当初の文保課は，課長以下６名全員が行政職員で，同年10月に京都市として初めての専門の文化財保護技師として浪貝毅氏が採用され，専門の非常勤嘱託職員も置かれて８名体制であったと記憶している。

最初の嘱託職員は面識が無く，二人目の岡田保良氏は，その後，国士舘大学のイラク文化研究所の教授のほか，ユネスコの元イコモス執行委員として世界遺産登録にかかわって国内でも広く活躍されている。

次の嘱託の玉村登志夫氏は，平安京跡を南北に縦断する地下鉄烏丸線工事に伴って，京都市交通局内に高速鉄道烏丸線内遺跡調査会が発足し，その埋蔵文化財専門職員として採用され，その後，交通局から埋文センターに異動し，さらに2005年からの文保課を経て2009年春に定年退職されている。

筆者は，先述のとおり，1972年から文保課でのアルバイトや鳥羽離宮跡調査研究所調査員を経て，前任の玉村氏の後任として，1974年４月から非常勤嘱託員として２年半勤めた後，1976年10月から正式に文保課の技術吏員（文化財保護技師）に採用された。この採用に当たっては，同年11月に設立された埋文研へ，浪貝毅氏が調査課長として出向したことによる欠員補充で，それ以後，文保課で一人の技師として多忙な業務を担当することになった。

４．京都市の文化財保護行政

1971年の日本考古学協会『埋蔵文化財白書－埋蔵文化財破壊の現状とその対策－』には，「京都市内の遺跡は新築・改築の工事などにより未調査のまま無数に破壊された」との記述があり，この当時，市内にある遺跡に関する行政指導や調査はほとんど行われていなかったことを物語っている。

その前の1963年に京都府教育庁指導部文化財保護課（以下「府文保課」という。）が，平安宮跡を公報に登載して理解を求めたことはあったが，それ以後は積極的な保護対策もなく，さらに1970年，京都市の開発部局に通達された助役通達「史跡・名勝・天然記念物の指定地域ならびに埋蔵

文化財包蔵地における建築確認申請に関する事務処理要領（1972年10月1日から実施）」があったにも関わらず，埋蔵文化財包蔵地にかかる開発については一部しかチェックできていなかったのである。

1970年に文保課が発足し，記念物担当の主査1名が配置されていたが，当初の文保課の業務は，祇園祭や大文字五山送り火など，伝統行事に関する業務が主で，記念物に関しては，一部を除いて従前どおり府文保課に任せきりであったと，後に京都府の技師の方から聴いたことがある。

京都市では，この当時の市内の土地開発や建築などの許認可は，法的許可権限を持つ行政指導部局が申請地内の遺跡の有無をチェックをしておらず，当然，文保課には文化財保護法に基づく届出[1]もされないことから，遺跡に関する行政指導を受けずに，工事着工が可能となっていたのである[2]。

それが一変したのは，1970年秋に浪貝氏が技師に採用されてからで，氏は着任早々，京都市最初の文化庁国庫補助による発掘調査を実施し，浪貝氏の指示で京都市で初めての『京都市遺跡地図・台帳』を筆者が担当して作成，1972年11月に発行して京都市独自で埋蔵文化財の行政指導（ただし，当時の法的権限は文化庁及び京都府にあった）が行えるようになり，さらに遺跡地図は，数年毎に内容を見直して改訂し，内容の充実を図った。

この遺跡地図を使って，住宅局建築審査課や建築指導課のほか，消防局予防部指導課と協議を行って「事務処理要領」を作成，以後はこの要領に基づいて，遺跡内で行われる各種土木工事等の申請物件を開発指導部局が遺跡地図と照合し，申請地に遺跡などが存在するかどうかのチェックが行われるようになった。

さらに，建築確認申請を最初に受理する各消防署の窓口には，遺跡のチェック漏れが無いように遺跡範囲を明記した2,500分の1の都市計画図の縮小版を作成して，詳しい遺跡範囲を閲覧できるようにした。

これらの制度改革により，申請地が記念物に該当する場合，指導部局は文化財保護法に基づく申請手続きが必要であることを指導し，それを受けて文保課では法的な届出や京都市文化財調査指導カードの提出を求めて，文保課の指導が終われば指導済証を交付し，その申請物件のみを消防署や開発指導部局が受理できるようにした。さらに遺跡地図も一般に販売して設計事務所や開発業者などにも積極的に普及啓発し，周知徹底に務めた。

しかし，市内の埋蔵文化財包蔵地の面積は広大で，その中で行われる各種土木工事の総てを同様に行政指導するのは不可能であることから，遺跡を重要度に応じてランク分けし，当初は一般遺跡とは別に平安宮跡，鳥羽離宮跡，六勝寺跡の3遺跡を重要遺跡として，遺跡内で工事をする場合は総て文保課へ届出が必要とし，後日，山科区にある中臣遺跡もそれに付け加えた。さらに，遺跡の重要度や過去の調査成果，工事規模や掘削深度などに応じて，発掘，試掘，立会，慎重工事等に指導を分け，臨機応変に行政指導できるようにマニュアル化を推進した。この当時，全国的にこのような行政指導を実施している事例は少なく，文化庁からも注目され，その情報で，多くの地方自治体が参考例として視察に

来られ，また情報提供の依頼もあった。

このように行政内部の改革を進めながら，浪貝氏の斡旋で，六勝寺研究会（木村捷三郎代表）・鳥羽離宮跡調査研究所（杉山信三代表）・平安京調査会（田辺昭三代表）のほか伏見城研究会など任意の調査会が組織され，市域内の発掘調査を担当してもらっていた。

その後，行政指導した調査がスムーズに行えるように，京都市がこれら任意の調査会を統廃合して1976年11月に埋文研（当初職員数22名）が設立され，その組織立ち上げ準備も筆者が手伝った。

これは，行政側が短期間に多くの職員を採用することは極めて困難であるため，京都府の認可を受けて財団法人の調査機関を設立することで，多くの専門のプロパー職員を採用することが可能になった。

このような経緯の中で，1972年2月には，学識経験者18名からなる「京都市文化観光資源調査会」が組織され，行政に対する外部専門委員の指導助言を受けられるようになり，後年の1981年には，全国で最も遅れて京都府と同時に「京都市文化財保護条例」が公布され，同調査会は翌年の1982年に組織変更されて「京都市文化財保護審議会」となっている。

これら文化財保護行政の改革を推進された浪貝氏は，埋文研の設立と同時に調査課長として出向し，その後，1979年4月に文化庁記念物課の調査官に栄転，4年後の1983年春には京都市の埋文センターの所長として帰任され活躍が期待されたが，惜しくも1992年12月に享年51歳で逝去されている[3)]。

5．埋蔵文化財の行政指導（平安宮跡・平安京跡）

遺跡地図を発行して遺跡の周知徹底に努めても，京都市内には約800箇所以上の埋蔵文化財が存在し，それらを代表する平安京跡は市街地のほぼ中央部にあり，東西約4.5㎞・南北約5.2㎞，北中央にあった平安宮（大内裏）跡でも，東西約1.2㎞，南北約1.4㎞の規模を有し，その中では，日々開発工事が行われている。

このような大規模な都市遺跡をどのように指導し，保存のための調査を行うかは，行政にとっても極めて大きな課題であり，遺跡内で日々行われる各種土木工事等の届出（通知）を受理して指導するには，行政内部にそれなりの組織や人員を確保し，また発掘調査等の受け皿となる調査組織の構築も必要である。

京都府教育委員会で遺跡地図が作成されたのが1971年（翌年刊行），京都市も翌年に遺跡地図を作成して行政指導を開始したが，先述のとおり指導マニュアルもなく，調査組織も脆弱で，まず調査の受け皿となる組織作りやマニュアル作りから始めなければならなかった。

当初の平安宮跡（鳥羽離宮跡・六勝寺跡を含む）は，重要遺跡として総ての土木工事等について届出が必要として行政指導を行っていたが，一方の平安京跡で行われる土木工事等は，公共機関や民間の大規模開発については指導をしていたが，民間を含めて周知の埋蔵文化財包蔵地として行政指導するようになったのは，文保課の内部改革を進め，調査の受け皿となる埋文研などの調査組織を設立して以後の1977年

からである。

平安宮跡は，地上に遺構は何も現存せず，豊臣秀吉による聚楽第や徳川家康による二条城の築城など，後世の開発等で攪乱された場所も多く，また遺構面が浅いこともあって残存状況は極めて悪い場所であった。

それでも，筆者が埋蔵文化財の行政指導業務に携わった頃は，京都府教育委員会のほか平安博物館や（財）古代学協会の努力により，ようやくその実態が解りかけてきた頃で，遺跡の大半はまだ五里霧中の状態であった。

この当時，届出に関する平安宮跡の行政指導は，京都市の市史編纂所発行『京都の歴史』付図や（財）古代学協会の角田文衞氏からご提供頂いた平安宮復元図のほか，奈良国立文化財研究所制作の平安宮復元鳥瞰図などを頼りに行っていた。また，在野の研究者の津田菊太朗氏から手製の平安宮復元図を提供いただき，文保課に持ち込んで行政指導に活用させていただいた。

平安宮跡の初期段階での発掘調査は，角田文衞氏らを中心に（財）古代学協会や平安博物館により，独自に解明が進められ，朝堂院跡の延禄堂・修式堂の基壇の一部や，推定豊楽殿跡東方で東西溝跡のほか，内裏内郭回廊跡（1979年に史跡指定）も発見，調査され，平安宮を復元する上で大きな成果を上げておられる。

また，この頃に奈良県の明日香で高松塚古墳の障壁画が発見（1972年）されたこともあって，発掘成果は地元新聞などマスコミにも取り上げられようになり，漸く市民の埋蔵文化財への理解も深まっていった時代である。

平安宮跡では，1973年から文保課も文化庁国庫補助事業として調査に参画するようになり，筆者は平安宮跡では，長殿跡，内裏跡，造酒司跡，中和院跡，小安殿跡，真言院跡，豊楽殿跡，太政官跡，会昌門跡，朝堂院跡，小安殿跡などの発掘調査のほか，市域全体の試掘・立会調査なども担当した。

最近までの平安宮跡では，埋文研の精力的な発掘調査により，朝堂院跡，豊楽院跡，内裏跡，中務省跡，造酒司跡など，平安宮の主要な宮殿官衙跡の遺構を数多く検出して復元も進められ，1977年からの京都市遺跡発掘調査基準点による基準点測量の導入と，今日に伝わっている宮城図などにより，平安宮跡の宮殿官衙の推定場所を地上に復元することも可能となった。また，調査成果を纏めた報告書も数多く出版[4) 5)]されるなど，1970年代の平安宮跡がほとんど分からなかった時代に比べて，この40年近くの発掘調査成果により，平安宮の解明や復原が飛躍的に進んできたことは喜ばしい限りである。

次に平安京跡は，1972年の遺跡地図に範囲を掲載されていたが，先述のとおり，1976年まで公共工事や一部民間の大規模工事を除いて，文化財保護法に基づく一般の土木工事等の届出など行政指導の対象とはなっていなかった。

平安京跡を南北に縦断する1974年からの地下鉄烏丸線工事に伴う発掘調査では，旧二条城跡の発見など，平安京跡には各時代の遺構・遺物が良好に残存していることが明らかとなり，さらに1976年には埋文研が設立され，一定量の発掘調査の受諾が可能となっていたこともあって，行政内

部で検討を重ねた結果，1977年の遺跡地図改訂で平安京跡を周知の埋蔵文化財包蔵地として取り扱うことになった。

振り返れば，京都市内の埋蔵文化財包蔵地内の届出件数は，1971年には年間僅か2件が，1972年の遺跡地図発行後は119件，平安京跡が周知された翌年の1978年は747件，1982年には年間1,000件を超え，さらにバブル期の1989年には1,785件となり，一時は行政指導がマヒ状態となった。

また，この当時は，埋蔵文化財が市民がまだよく理解されていない時代で，所謂「原因者負担（受益者負担）」による指導件数も増加し，法的根拠の乏しいなかでの原因者との費用負担交渉や調査期間の確保など，説明や厳しい対応に追われ，精神的に追い詰められる日々が続いた。

そのような苦しい経過を経て，現在のように埋蔵文化財への理解も深まり，遺跡内での建築や土木工事の計画に際しては，事前に期間を含めて調査経費を見積もっておくような時代になってきたのである。

このような，平安京跡の発掘件数増加に伴い，平安京の実態が次々と明らかになっていったことも事実で，その成果の総てを網羅するのは不可能であるが，平安京条坊遺構，里内裏や高級貴族の邸宅である堀河院跡，高陽（かや）院跡，冷泉院跡，斎宮邸跡のほか，最近では藤原良相（よしみ）の西三条第（百花亭）跡が明らかになるなど，多くの場所で遺構・遺物が検出され，平安京復元にとって，大きな成果となっている。

最近では，これら発掘調査等の成果は埋文研などのホームページで誰でも閲覧できるようになっているのはありがたい。

6．そのほかに担当した市内遺跡の調査

ここからは，筆者が担当した埋蔵文化財の調査について，記憶を頼りに振り返ってみたいが，京都市内での埋蔵文化財調査は，1976年以降は市内の発掘調査の大半を埋文研が行い，そのほか（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター，京都府京都文化博物館や（財）古代学協会，民間の調査機関などが行っている。ここでは1976年以降，種々の事情により行政側がやむを得ず実施した調査及び私的な興味から遺跡解明を目指した調査等を含むことを諒とされたい。

筆者が最初に発掘調査を経験したのは，1972年春の平安京の正門である羅城門跡（南区唐橋羅城門町の唐橋花園児童公園）で，この発掘調査では，羅城門跡に関する遺構は何も見つからなかった[6)]。

その後，北区西賀茂にある平安時代前期の造瓦所のひとつである，鎮守庵瓦窯跡（北区西賀茂鎮守庵町）の発掘調査現場に参加し，３基のロストル式平窯と灰原のみの窯跡が検出され，緑釉瓦のほか「近」「中」銘軒平瓦や「官」ほかの刻印瓦も出土，平安京所用瓦の生産に関する実態解明に大きな成果となった[7)]。

次に鳥羽離宮跡調査研究所の調査員として行った鳥羽離宮跡（伏見区竹田・中島）の調査では，院政期の安楽寿院九体阿弥陀堂の大規模な地業跡の調査を担当した[8)]。

さらに1972年には，左京区岡崎周辺にあった院政期を代表する六勝寺跡の筆頭寺院である，法勝寺跡（白河天皇御願）の

調査に参加した。調査場所は，寺跡の推定東域に当たる動物園北東隅の爬虫類館建設地で，そこでは池の東岸の洲浜（すはま）跡が見つかっている[9]。

次に担当した調査は，1975年とその翌年に実施した法勝寺の金堂跡の調査（左京区岡崎法勝寺町）で，二条通北側にある約２mの高台西端を調査したところ，高台は金堂の基壇跡であることが判明し，復元した金堂基壇は，東西約56m，南北約30m，高さ２m以上もある大規模なものであったことが判明した[10]。

その後，六勝寺跡では尊勝寺跡で西限築地跡や西塔跡，その北方の店舗建設予定地から大量の瓦溜跡を調査し，平安神宮境内では東西溝を伴う築地状遺構を検出し，六勝寺復元に新たな成果を加えた。

1973年には鳥羽離宮跡調査研究所の調査員として，醍醐寺の子院跡である栢杜（かやのもり）遺跡（伏見区醍醐柏森町）を1973年９月12日から翌年３月末まで発掘調査を担当した[11]。

この調査では，敷地北側から一辺が約９mの平安時代後期に建立された八角円堂跡を検出，東側には付属建物が取り付き，眺望良好な西側からは庭園跡と舞台風の建物跡が見つかった。さらに調査地中央からは，柱間寸法が６.09mもある方三間の建物跡が見つかり，建物跡の東側からは大仏様の建築部材が多数出土し，鎌倉時代に東大寺を再興した重源が建立した国宝浄土寺浄土堂（兵庫県小野市）と同規模の九体丈六堂跡と判明した。しかし，この時点で『醍醐寺雑事記』巻５に「大蔵卿堂八角二階　九躰丈六堂　三重塔一基…」にある三重塔が見つからず，その後，2001～2004年に先の調査地外の南方隣接地で発掘調査が行われ，三重塔跡（一辺10.3m）が新たに見つかった結果，栢杜遺跡は，北から八角円堂（二階建物）・方形堂（九体丈六堂）・三重塔が，中心間約42m間隔で南北に一直線で並ぶ特異な伽藍配置の寺院と判明した[12]。

写真２　栢杜遺跡の八角円堂跡（南から）

この遺跡は，1983年に史跡醍醐寺境内（飛び地）に追加指定後，改めて見つかった三重塔跡を含んで，さらに追加指定されている。

次に，1974年と1975年６～７月には，北白川廃寺（左京区北白川東瀬ノ内町）の発掘調査を担当した。

この場所は，考古学者で京都大学名誉教授であった小林行雄氏の自宅のすぐ近くで，白鳳期創建の五重塔跡（瓦積基壇を後に石積みに改修）の調査を行い，小林氏の指導を受けて調査を進めた[13]。

調査した塔跡は，一辺13.6mの瓦積基壇を，後世の９世紀前半頃に一辺14.1mの石積基壇に改修したもので，法隆寺の五重塔に近い規模の塔基壇跡と判明した。

その後，しばらくは行政指導に専念していたが，1984年５～６月にケシ山窯跡群（北区上賀茂ケシ山町）の調査を行った。調査では，７世紀後半代の並列した２基の

瓦窯跡（窖窯）と，そのすぐ隣接地の斜面から複数の横穴を持つ７世紀前半のタタラ遺跡に伴う炭焼窯跡２基を発見し，併せて発掘調査を行った。

２基の瓦窯のうち，向かって左の１号瓦窯跡は，斜面に沿って岩盤を掘り抜いた全長5.72ｍの有段式の窖窯で，右側の２号瓦窯は以前の造成工事で焼成室が大きく削り取られ１号窯よりも残りは悪かった。

瓦窯跡の調査中すぐ隣で見つかった２基の炭焼窯は，燃焼室（兼，焼成室）に９箇所の横口を持ち，製鉄に使用する高温で燃焼する白炭を生産する専用の炭焼窯であった。この炭焼窯に伴う灰原は，瓦窯に伴う灰原の下層に広がり，７世紀前半の須恵器（杯）のほか大小の鉄滓塊が見つかったことから，白鳳期の瓦窯の操業前に，製鉄関連施設が付近にあったことが判明，この地域で早くから製鉄が行われていたことを明らかにすることができた[14]。

その翌年の1985年には，洛北の栗栖野瓦窯跡（左京区岩倉幡枝町）の調査を行った。宅地造成工事に伴って行った発掘調査で，飛鳥・白鳳期から平安時代にかけての10基の窯跡が見つかり，そのうち６号窯は有段式の窖窯で，飛鳥・白鳳期に焼成途中の瓦を窯から取り出さないままの状態を保った窯跡と判明，当初，埋文センターの北田栄造氏と長谷川行孝氏の二人が発掘調査を担当していたが，急傾斜地に設けられた窖窯のため調査中の崩壊も危惧されるため，焚口から焼成室の７列目まで約４ｍ分の瓦を取り上げ調査を終了せざるを得なかった[15]。

写真３　栗栖野６号釜の残存瓦（７世紀）
写真は長谷川行孝氏

その後，瓦を取り出した所まで重機が斜面を削り取った段階で，工事業者の了解を得て調査する機会に恵まれ，同年８月６日の僅か一日の猶予で，筆者と長谷川行孝氏と二人で，危険を覚悟のうえで窯内（16段）の瓦全てを取り出し，仮実測まで終えることができた。

取り出した瓦を整理した結果，この窯で焼成した瓦は，平瓦460枚，丸瓦81枚（総て行基式）の計541枚で，飛鳥・白鳳期の窖窯１基で焼成する瓦の数量は，平・丸瓦合わせて540～550枚であることが判明し，古代瓦生産の実態解明に大きく寄与する成果となった[16]。

次に1985年の『京都市遺跡地図』改訂作業に伴って踏査した如意寺跡は，大津市にある園城寺（三井寺）の別院で，京都東山の一峰「如意ヶ嶽」南麓を，京都市左京区の鹿ケ谷から大津市の園城寺を結ぶ約５㎞の古道「如意越え」に沿って堂塔社殿が点在していた山林寺院である。

創建は，智証大師円珍ともされるが不詳で，平安時代中期，藤原忠平の日記『貞信公記抄』天慶元年（938）４月13日条に如意寺の記載があり，史料から創建は平安時代中期頃にさかのぼり，鎌倉時代には幕府の援助もあって最盛期を迎え，その後，15世紀後半の応仁・文明の乱以後に廃絶し，山中に幻の寺となった。

1985年から個人的な興味で山中の踏査を開始し，園城寺に伝わる古絵図（景観年代1312～36年）[17] を頼りに調査を進め，途中で埋文研の調査員の協力も得て，約1年以上をかけて多くの建物跡を発見し，最終的には2年以上を費やして，古絵図に描かれた本堂及び子院の推定位置を明らかにすることができた[18]。

この遺跡調査中に指導を賜った京都国立博物館の上山春平館長（当時）は，美術史研究と考古学研究の密接な交流と連携協力が必要であるとして，1986年2月，館長主催で各分野の専門家が集まって「如意寺研究会」が開催され，それ以後も博物館では3回開催され，大きな成果となった。

その後，この研究会は1990年に（財）古代学協会に引き継がれ，1990～96年に本堂・深禅院地区の発掘調査や東方の灰山遺跡の地形測量などが実施され，平安時代創建の山林寺院のあり方や伽藍構造，遺物からの考察など，実態を知る上で大きな成果をあげておられる[19]。

次も遺跡踏査の成果の一つであるが，1988年に左京区大原にある寂光院の西方約1.5㎞の山中にある遺跡（左京区静市静原町）を，地元の有志の方の案内で踏査した。その結果，谷筋の北斜面に複数の平坦地の存在と，平安時代にさかのぼる瓦や須恵器，緑釉陶器，土師器などを表面採集し，さらに作り出しのある礎石（花崗岩）も確認したことから，平安時代にさかのぼる山林寺院跡と判断した。

さらに恩師の杉山信三氏から『門葉記』をご教示いただき，その記述内容から天徳3年（959）4月19日条に，初め明燈寺があったが廃絶，後の天慶8年（945）に僧延昌が花堂を草創したのが補陀落寺で，元は清原深養父（ふかやぶ）の山荘があった所とする寺歴が明らかとなり，10世紀前半創建の山林寺院跡と判明した。さらに，この寺に関しては『今昔物語集』のほか，『平家物語』大原行幸には，後白河法皇が文治2年（1186）に落飾した建礼門院徳子を訪ねる途中，補陀落寺を叡覧されたとする記述もあり，地元民のちょっとした情報から，歴史上でも著名な山林寺院跡を発見，確認できた意義は大きいといえる[20]。

次に紹介するのは，1992年3月19～28日まで，智積院境内（東山区東大路通七条下る東瓦町）で行った祥雲寺客殿跡の発掘調査である。

天正17年（1589），豊臣秀吉と愛妾淀殿との間に最初に誕生した鶴松（棄（すて）君）は，天正19年（1591）に僅か3歳で夭折し，その菩提を弔うために前田玄以を奉行とし，妙心寺の南化玄興（虚白）を開山として，文禄2年（1593）に創建されたのが祥雲寺で，客殿内部は，長谷川等伯・久蔵親子ら長谷川派一門の絵師が揮毫を担当したと考えられている。その後，大坂夏の陣を経て豊臣氏が滅亡，徳川家康は慶長六年（1601），先の天正13年（1585）に秀吉の紀州攻めで廃塵に帰した根来寺の子院である智積院に，この寺を「日本一番之寺」と称して与えた。

この祥雲寺の建物は，江戸時代の天和2年（1682）と昭和22年（1947）の2回の火災で烏有に帰したが，その都度，障壁画は僧侶たちが持ち出して伝え残り，桃山時代障壁画の最高傑作とされる国宝智積院障壁画がそれである。

1991年，智積院では，開祖覚鑁（1095～1143）寂弱後，850年目の遠忌事業で，1947年焼失の江戸期再建の講堂跡地に講堂再建を計画，旧講堂焼け跡の約850㎡を対象に同僚の長谷川行孝氏と発掘調査を行った。

その結果，焼けた講堂の真下から大規模な建物（客殿）跡を初めて発見した。検出した遺構上には二面の焼土層が存在し，下層が天和２年，上層が昭和22年の火災面と判明し，祥雲寺の客殿跡と判断した。

検出した客殿跡は，東西36ｍ，南北23.1ｍと秀吉の意向を反映した全国最大規模の客殿建築であったことが明らかになり，長谷川派の障壁画に関する調査研究にも大きな影響を与える成果となった[21]。

最後に，1985年の遺跡地図の改訂作業で確認した安祥寺上寺跡（山科区御陵安祥寺国有林）についてご紹介したい。

安祥寺は９世紀中頃，仁明天皇女御の藤原順子を願主，入唐僧恵運を開基として，現在の山科区の盆地北方に建立された寺院で，恵運勘録の『安祥寺資財帳』（以下『資財帳』という。）が伝え残り，上寺と下寺があったことや，上寺には，礼仏堂や五大堂などの主要堂宇を含めて13棟の建物や石童（塔），宝幢のほか浴堂には釜や湯槽があったと記され，寺跡は安祥寺国有林の標高約350ｍの山腹尾根上に残る[22]。

一方の下寺は，現在も京都府立洛東高校西側に法灯を伝えているが，江戸期に境内を毘沙門堂に割譲され，創建当初の下寺の元の位置は現在のところ不明である。

上寺跡は，1981年に京都国立博物館の八賀　晋氏らにより地形測量が行われて初めてその実態が報告[23]され，筆者も1985年の遺跡地図改訂作業の一環で安祥寺上寺跡を踏査して，遺跡が良好に残存しているのを確認し，資財帳の情報を含めて伽藍の復元を試みた[24]。

その後，職場関係の有志や顧問をしている京都女子大学考古学研究会の部員の協力で上寺跡の踏査を進め，表面近くに元位置を保つ礎石を多数発見，その成果を畏友の京都大学大学院の上原真人教授に相談し，上原氏の努力で，京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラムの研究テーマに取り上げてもらえることになった。

2002年12月から京都大学，京都府立大学，花園大学，京都女子大学の教員や学生たちの協力を得て，礎石確認と測量調査を実施し，資財帳にある礼仏堂・五大堂・東西僧房・軒廊の堂宇跡のほか，資財帳に記載のない方形堂跡を発見する大きな成果となった。

COE研究会は，それ以後も，現在の安祥寺（下寺）の調査も含めて進められた。

その後，京都大学で何回かの研究会が開催され，歴史（文献），美術工芸，建築，考古学等，専門の諸先生方の協力による学際的な研究となった[25]。

図１　安祥寺復原図（南東から）

７．その他の担当業務

（１）京都市遺跡発掘調査基準点設置事業

平安京跡など大規模遺跡調査の情報統一を目指して，田中 琢・田辺昭三両氏の提言[26]を受け，文化庁補助事業を活用し，全国に先駆けて1977年から２年間「京都市遺跡発掘調査基準点」設置事業[27]を実施し，市内にある公立学校などの建物屋上や地上に70個所以上の基準点を設置した。これ以後，発掘調査現場では，この基準点から測量することにより，調査現場の測量図面は近畿座標原点からの直角座標（Ｘ・Ｙ）で表すことが可能となり，離れた場所の調査図面を正確に合成，あるいは位置関係を知ることが可能となった[28]。

また，この成果から平安京復元モデルが作成され，平安京造営の精度を計測した結果，平安京造営尺は一丈（10尺）が2.9846668ｍ，平安京の基準方位は北が西に０度14分27秒傾くことも判明，この数値と検出される条坊遺構の誤差は±1.1ｍとなり，平安京が極めて高い精度で測量して建設されていたことが証明され，さらに発掘調査前の測量により，その場所が平安京条坊のどの位置に当たるかが事前に分かるようになった[29]。

その後の2000年からは，精度の高いGPS測量により座標上の位置を求め，発掘調査現場の図面等が作成されている。

（２）京都市埋蔵文化財調査センターの設立と建設

現在の京都市考古資料館は，元は西陣織物館の跡地で，土地を京都市が買収，埋文センターを建設することが決まり，1978年から筆者も整備担当に加わることになった。

大正３年（1914）竣工の煉瓦造の旧本館は外観を保存し，内部を改修補強して京都市考古資料館の展示室兼事務所とし，北側の旧事務棟は内部改修して埋文研を移転させ，調査室と事務室に活用，収蔵庫は新築する計画として文化庁補助金を受けて工事を進め，1979年に竣工した。

同年11月には，京都市考古資料館（文化庁の指導により考古資料館は国庫補助対象外）がオープンし，翌年４月には，京都市の文保課から埋蔵文化財担当部門を独立させて埋文センター事務所が開設された。

これにより埋蔵文化財に関する行政指導，調査・研究，収蔵，展示を統合した拠点施設が完成した。

しかし，この施設も先述のとおり，設置後25年を経過した2005年に，市の組織改革により埋文センター廃止が決定されて文保課へ統廃合されることになり，埋文研および文保課分室を残して古巣の京都会館へ戻ることになった。

（３）源氏物語千年紀「源氏物語ゆかりの地」説明板の設置

『源氏物語』の流布が確認できる『紫式部日記』寛弘５年（1008）11月１日条から，2008年はちょうど千年目の記念すべき年（「古典の日」）を迎え，この年を迎える当たり，何か記念する事業ができないかということで，「源氏物語ゆかりの地」説明板設置事業を文保課のコンセプトとして予算要求した。

これは，これまで長年にわたる発掘調査

等により，平安京・宮跡など多くの場所で遺構が検出され，『平安京提要』に纏められた成果や，文献史料，古絵図などを使って復元すれば，『源氏物語』に登場する内裏の殿舎のあった場所を地上に落とすことが可能となり，地上に遺構が何も残っていない平安宮跡を中心に市内全域を対象にして説明板を設置しようと計画したもので，その予算が認められたのである。

2007年から翌年にかけて，同志社女子大学の朧谷 寿教授や，当時の上京歴史探訪館副館長の山中恵美子氏らにも協力いただき，筆者の描いたイラストも活用して，市内全域を対象に40箇所に説明板を設置し，併せて小冊子も作成して配布した。さらにその後も，文化庁からの助成金を活用して顕彰施設を増やし，過去の分も含めて，これまで平安宮跡だけでも40箇所の説明板を設置している。

（4）遺跡復元イラストの制作

遺跡を保存するためには，行政が遺跡内で工事をする設計者や施工主側に懇切丁寧な説明と保存への理解を求めることは当然であるが，遺跡についての理解や知識が乏しい一般市民への説明には，専門的な遺構実測図ではなく，ビジェアルな遺跡復元イラストが必要であると考え，さらに行政指導にも活用できることから，遺跡を復元したイラストを平安宮豊楽殿跡が発見された1987年頃から描き始めた。

その後，1994年の平安建都千二百年記念の年の少し前，角田文衞氏から『平安京提要』巻頭に掲載する平安京復元図の制作依頼があった。

当時は行政指導のほか，翌年開催予定の「甦る平安京展」の展示委員や平安京復元模型なども担当して多忙を極めた時期で，当初は締め切りにはとても間に合わないので無理と返事をしたが，平安京に替えて平安宮復元図を作成することでお引き受けし，それから約4箇月間，個人的な休日や私的時間をほとんど費やして描いたのが「平安宮復原図」である。この図は締め切りの関係で京域の左・右京域を描くことができず，後日，京域部分を描き加えたのが京都市美術館で開催された『甦る平安京展』展示図録の巻頭カラーに掲載された平安宮復元図である[30]。

その後，発掘調査で成果のあったものなどから，建築などの専門の先生方のご指導を受け，現場担当調査員の意見を参考にして遺跡復元イラストを現在までに50枚ほどを制作し，博物館・資料館などの展示や図録，歴史図書，教科書や副読本などのほか，遺跡説明板など普及啓発に幅広く活用していただいている。

これら遺跡復原イラストは，2000年4～7月に花園大学歴史博物館で展示され，さらに2016年5月から約1年間，京都アスニーの平安京創生館で展示に供していただいた[31]。

図2　平安宮復原図（南から）

８．おわりに

文保課は，1970年に岡崎公園内の京都会館（ロームシアター京都）で誕生し，当初は嘱託を含めて８名体制で業務が開始された。その後，執務室は京都会館別館（現：美術館別館）や市役所本庁舎内へ移転，さらに庁舎内でも移転し，2005年には古巣である京都会館へ一旦戻ったが，現在は，市役所本庁舎前のYJKビル２階に執務室が置かれ，職員数も二条城，歴史資料館を含めると職員数42名，嘱託５名（2015年度）と，全国地方公共団体の中でも屈指の職員数となっており，発足当初からでは５倍以上の組織に変貌している。また，当初の組織である文化観光局から1995年には文化市民局（文化芸術都市推進室）となり，筆者が2010年春に定年退職した後も，組織改革が次々と進められているようである。

これまでの文保課のエポックとしては，1976年の埋文研の設立，1979年の埋文研の西陣への移転と京都市考古資料館のオープン及び翌年の京都市埋蔵文化財センターの設置（2005年廃止），1981年の文化財保護条例の制定とそれに伴う専門技師職員の採用，1994年の「古都京都の文化財」のユネスコ世界遺産登録と平安建都千二百年事業の推進，2003年には清水寺近くに京都市文化財建造物保存技術研修センターがオープンし，2009年の課長時代には「京都の祇園祭の山鉾行事」がユネスコ無形遺産登録されている。この他にも文保課では大きなエポックは沢山あったが，ここでは紙面の関係で割愛させていただきたい。

以上，おぼろげな記憶を頼りに文保課のあゆみと，埋蔵文化財行政に携わった経験を交えて記述させていただいた。これから文化財保護に従事する方々へ，文保課の歴史の一コマを含んだOBからのメッセージとさせていただければ幸いである。

註・参考引用文献

1）文化財保護法第93条「土木工事等による発掘届出」で，周知の埋蔵文化財包蔵地内で土木工事等をする場合は，着工する60日前までに市町村などの所轄の教育委員会へ届出をすることが明記されている。

2）浪貝 毅「文化財レポート　平安京の発掘調査－都市再開発地域における調査の実態－」『日本歴史』1973年12月号，吉川弘文館，1973年。

3）梶川敏夫「故浪貝毅氏を偲んで」『京都考古』第68号，京都考古刊行会，1993年。

4）角田文衛ほか『平安京提要』，（財）古代学協会・古代学研究所，1994年。

5）『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊，（財）京都市埋蔵文化財研究所，1995年。

6）浪貝 毅・福山敏男「羅城門跡発掘調査報告」『京都市埋蔵文化財年次報告』1971，京都市文化観光局文化財保護課，1972年。

7）吉本堯俊・上原真人「西賀茂鎮守庵瓦窯跡発掘調査報告」『京都市埋蔵文化財年次報告』1971，京都市文化観光局文化財保護課，1972年。

8）杉山信三『鳥羽離宮跡』1972，鳥羽離宮跡発掘調査研究所，1973年。ほか

9）六勝寺研究会編「京都市動物園爬虫類館建設工事に伴う法勝寺跡発掘調査」『法勝寺跡』京都市埋蔵文化財年次報告1974－Ⅱ，京都市文化観光局文化財保護課，1975年。

10）梶川敏夫ほか『法勝寺跡』京都市埋蔵文化財年次報告1974－Ⅱ，京都市文化観光局文化財保護課，1975年。

梶川敏夫ほか「法勝寺金堂跡第Ⅱ次発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告』1975，京都市文化観光局文化財保護課，1976年。

11）杉山信三ほか『栢杜遺跡調査概報』，鳥羽離宮跡調査研究所，1975年。

12）南孝雄「栢ノ杜遺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報』平成16年度，京都市文化市民局，2005年。ほか

13）三上貞二・山口博・梶川敏夫『北白川廃寺塔跡発掘調査報告』1975，北白川発掘調査団・京都市文化観光局文化財保護課，1976年。
梶川敏夫「北白川廃寺塔跡発掘調査概要」『京都市埋蔵文化財年次報告―1975』，京都市文化観光局文化財保護課，1976年。

14）梶川敏夫『ケシ山窯跡群発掘調査概要報告』，京都市埋蔵文化財調査センター編，1985年。

15）北田栄造ほか『栗栖野瓦窯跡発掘調査概要』，京都市文化観光局編，1985年。

16）梶川敏夫「京都洛北における造瓦窯 －栗栖野瓦窯跡の追加調査－」『古瓦図』，ミネルバ書房，1989年。

17）泉 武夫「園城寺境内古図の製作年代」『古代文化』第43巻第６号，（財）古代学協会，1991年。

18）梶川敏夫『如意寺跡発見への挑み』『園城寺』第56・57・58号掲載，1986～1987年。
梶川敏夫「如意寺跡－平安時代創建の山岳寺院－」『古代文化』第43巻第６号，（財）古代学協会，1991年。

19）江谷寛・坂詰秀一『平安時代山岳伽藍の調査研究－如意寺跡を中心にして―』古代學協會研究報告第Ⅰ輯，（財）古代学協会，2007年。

20）梶川敏夫『京都静原の補陀落寺跡－平安時代創建の山岳寺院跡―』『古代文化』第42巻第３号，（財）古代学協会，1990年。

21）梶川敏夫『祥雲寺客殿跡の発掘調査』智積院講堂新築工事予定地の埋蔵文化財発掘調査報告，真言宗智山派総本山智積院，1995年。

22）中町美香子・鎌田元一『安祥寺資財帳』，京都大学文学部日本史研究室，2010年。

23）八賀晋「安祥寺上寺跡」『京都社寺調査報告』Ⅱ，京都国立博物館，1981年。

24）梶川敏夫「山岳寺院」『平安京提要』，（財）古代学協会，1994年。

25）京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム　第一四研究会編『安祥寺の研究Ⅰ－京都市山科区所在の平安時代初期の山林寺院－』（『グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成』成果報告書），2004年。
同『安祥寺の研究Ⅱ』，2006年。
上原真人編『皇太后の山寺―山科安祥寺の創建と古代山林寺院―』，「王権とモニュメント」研究会，2007年など。

26）田中 琢・田辺昭三「平安京を中心とした埋蔵文化財発掘調査記録方法の改善について」『京都市観光資源調査会報告』，京都市文化財保護課，1977年。

27）梶川敏夫『京都市遺跡発掘調査基準点成果表・点の記』，京都市文化観光局文化財保護課，1979年。

28）浪貝 毅「考古学からの平安京研究」『平安京提要』，（財）古代学協会，1994年。

29）辻 純一「条坊制とその復元」『平安京提要』，（財）古代学協会，1994年。

30）梶川敏夫・長宗繁一『よみがえる古代京都の風景～復元イラストから見る古代の京都～』，京都アスニー，2016年。

梶川（かじかわ）　敏夫（としお）（京都女子大学・京都造形芸術大学非常勤講師，元文化財保護課長）

建造物

京都ハリストス正教会生神女福音聖堂の建築経緯について

石川　祐一

１．はじめに

京都ハリストス正教会生神女福音聖堂は，明治36年（1903）に建築された。日本正教会の本格的な大規模木造聖堂としては現存最古の教会堂建築であり，昭和61年（1986）に京都市指定有形文化財に指定されている。これまで同聖堂については，建築家・松室重光の設計・監理によるものであるとされてきた[1]。この建設経緯については，平成19年（2007）に『宣教師ニコライの全日記』の邦訳が刊行されたことで，同資料の分析から，①ロシアにおいて作成された図面集が存在すること，②ニコライ主教がロシアから持参した同図面集に基づき松室が実施設計を行ったことなどが，いくつかの論考により報告されている[2]。

京都ハリストス正教会では，平成27年度事業（京都指定文化財の補助事業）として聖堂の外壁塗装の復原等の修理を実施した。この際，京都市文化財保護課は古写真等の他，雛形となったと考えられる図面集の提供をハリストス正教会より受けることができた。

本稿では，既往研究の整理及び確認された図面集から，京都聖堂の建築経緯について報告し，京都ハリストス正教会聖堂の文化財的評価の再考を行いたい。加えて，外壁塗装工事について報告する。

２．京都聖堂の建築経緯

日本ハリストス正教会の京都における布教は明治20年（1887）頃に始まり，同29年に京都聖堂の建設が決定された。この決定から聖堂の竣工までの経緯をニコライ主教の日記（『宣教師ニコライの全日記』）[3] から追ってみたい。

（１）土地購入～基本設計案の決定

明治31年（1898）7月16日（28日），5,500円の価格で土地購入の話がまとまり，同21日に土地の登記が終了した[4]。

明治33年（1900）7月24日，京都に到着したニコライ主教は，シメオン三井道郎神父と聖堂建設について協議している。その際，信徒のイオフ高田（九郎）から，同志社の建築に参加した小島という請負人と，建築家の松室重光を紹介された。ニコライ主教は当初，木造の小さな聖堂を想定していたが，簡素な建物は京都にそぐわないと判断し，300人収容を計画する。持参した「建築図の冊子」のうち，鐘楼の無いタイプの図面を見せたが，鐘楼が必要とのシメオン三井神父の意見により，鐘楼付きタイプに変更した[5]。翌日には，シメオン三井神父との話し合いにより，将来的な発

展を見越して450～500人収容に変更している。なお，請負人については，小島よりも信用の高い大西に発注することにし，見積書作成のため大西に建築図を渡している[6]。

（2）実施設計

明治33年（1900)7月28日（8月10日），ニコライ主教は建築家の松室重光と面会し，教会堂とイコノスタスの図面を渡した。また，請負人の大西による見積もり書を示した。その際，松室と次の4点を約束している。①教会堂と4棟の日本家屋（司祭用の2棟，信徒集会所などの2棟）の詳細図面，及び煉瓦塀の図面を1ヶ月間で作成すること，②作成した図面は東京に送付しニコライの承認・変更指示を受けシメオン神父が建築申請の手配をすること，③請負人に見積もりを出させニコライ主教が承認すること，④建築家（松室）が請負人を自由に行使できること，である。当日，松室の助手が建設地を訪れ，敷地を測量している[7]。

ニコライ主教と松室との協議から，基本設計として建築図が既に存在しており，同図を基に既に請負業者の見積もりを得ていることが分かる。また，現地の敷地を測量した結果，基本設計図である「建築図」を実際の敷地規模に合わせて修正し，実施設計（詳細設計）を行なっているものと考えられる。

8月30日（9月12日）には，東京に居るニコライ主教の元に，京都のシメオン神父から教会堂及び附属建物の図面が送付された。これは松室が約束通り約1ヶ月間で「建築図」を基に実施設計図を作成したものと考えられる[8]。10月13日（26日）には，6人の請負業者からの見積り書がニコライ主教に送られ，大西が最も安価であったことが記されており[9]，工事請負人が決定されたと思われる。

（3）着工～竣工

明治33年（1900）12月6日（19日）には建築申請の書類が作成されているが，この時既に基礎工事は着工されていたことが記されている[10]。明治34年4月21日には成聖基礎式が行われている[11]。明治34年（1901）11月23日（12月6日）の日記には教会堂の建物が既に「落成」していることが記され[12]，イコノスタスと鐘を除き建物が竣工していることが分かる。

なお，同12月13日（26日）の日記では，請負人の大西が追加請求を行なうなどしてトラブルとなっていること，その一方松室の献身的な働きが賞賛されている[13]。

（4）イコノスタスの製作

明治36年（1903)2月26日（3月11日），ロシアから神戸に到着していたイコノスタスと鐘が，京都に運ばれた。梱包を開封したところ聖龕に毀損が見つかり，松室が呼ばれてイコノスタスと鐘の設置について協議した[14]。翌27日（3月12日）には指物師が呼ばれ，イコノスタスの修理が始められた[15]。同28日（3月13日），イコノスタスが聖堂の寸法より約35㎝長いことが分かり，折り曲げて設置することになった[16]。3月1日（14日）から3日（16日）にかけてイコノスタスが設置され，その後毀損部分の修復が行われた[17]。現在，京都聖堂のイコノスタスは両端が折り曲げら

れているが，これは聖堂の平面寸法よりも長いサイズで製作されたことに起因することが同日記より確認できる。3月23日（4月5日）には，京都からの電報によりイコノスタスの修理が完了したことを知る[18]。そして4月27日（5月10日），聖堂の成聖式が執り行われた[19]。

3．雛形となる建築図面集の存在

『宣教師ニコライの全日記』の記述から，京都聖堂の設計に際しては，雛形となる「建築図の冊子」が存在し，同図面を基に松室重光が実施設計を行なったことが確認された。この「建築図の冊子」については，これまでもその存在が指摘されていたが，今回，現仙台ハリストス正教会のセラフィム辻永昇　大主教が建築図面集を発見し，コピーを入手していることを確認することができた。

辻永氏は，ウクライナ東部のロストフナドヌーのカピノス設計事務所所蔵の図集を発見し，同事務所からそのコピーを入手している。これは，「教会外観及び正面の設計図　附属するイコノスタシスの設計図，会堂の設計図（集落部における教会建設の際に推奨できるもの）」（以降，「教会外観及び正面の設計図」と称する。）と題され，目次やキャプションは全てロシア語で記載されている。刊行年は明治32年（1899）で，モスクワの「聖シノド印刷所」によるものである。「教会外観及び正面の設計図」中の図案には，№1～46までの番号が付され，№1～32までが教会建築の図案（立面図，平面図，断面図），№33～37が屋根，扉，柱頭飾りなどの細部意匠，№38～46にはイコノスタスの図案が掲載されている。

辻永氏は，「教会外観及び正面の設計図」の編纂者が建築家であるコンスタンチン・トーンであること，トーンは1836年（天保６年）にロシア正教会宗務院の依頼によって最初の「聖堂図面見本集」を編纂していること，その目的はロシア帝国全土に建設されていく聖堂の「フォームとスタイルが然るべき形で維持されるため」であったと述べている[20]。

また，辻永氏は，「教会外観及び正面の設計図」には，刊行年である1899年（明治32年）以降の日本の正教会聖堂の原型が見られることを指摘し，その事例として，大阪聖堂（№19），松山聖堂（№21），函館聖堂（№28），京都聖堂及び豊橋聖堂（№22）等をあげている。さらに，正教会の聖堂建設に際しては，構造形式，収容人数，類型（塔の有無など）に応じて図集からタイプを選択することにより，ある程度機械的に基本設計案を示すことができたとする[21]。

京都聖堂の雛形と考えられる図面№22（図2）のキャプションには，「木製教会の見取図」，「収容人数450～500人」と記載されており，京都聖堂が最終的に450～500人の収容人数に変更されたことと符号する。図面№22の立面図と現状立図面（図1）を比較すると，入口部分の円柱の装飾など微細な部分を除けば，ほぼ一致していることが分かる。平面図（図1）についても図面№22の縮尺が不明であるものの，形状はほぼ一致している。

このことから，①ニコライ主教とシメオン神父によって構造，収容人数，鐘楼のあ

る形式等の基本条件が決定され，「教会外観及び正面の設計図」の図面№22が選択されたものと考えられる。また，松室重光はニコライより提供された図面№22を基に，敷地条件に合わせて実施設計を行っており，このため約1か月という短期間での実施設計が可能であったものと推察されるのである。

『正教新報493号』には「京都ハリストス正教会聖堂新築工事設計図」（図3）と題する京都聖堂の西側及び南側立面図，平面図が掲載され，100分の1の原図を350分の1に縮小したものと記載されている[22]。同図は建具意匠などを省略しているものの，平面及び立面図が現状と一致することから，基になる原図は松室重光が実施設計図として作成したものの一部であると考えられる。

4．京都ハリストス教会聖堂の位置付け

先行研究や雛形図面の発見から，京都聖堂の位置づけを再検討してみたい。これまで京都聖堂の設計は松室重光とされ，後の豊橋聖堂，松山聖堂等のプロトタイプとなったと考えられてきた。しかし，正教会の設計には雛形となる図面集が存在しており，京都聖堂においてもロシアからもたらされた「教会外観及び正面の設計図」から建築図案が選択されて基本設計案となったことが分かる。松室は敷地条件に合わせた実施設計を短期間（約1ヶ月間）で行なっており，同設計資料の一部と考えられる図面も確認することができる。

また，京都以外の聖堂についても，松山聖堂（明治41年（1908）），大阪聖堂（明治43年（1910）），豊橋聖堂（大正2年（1913））などのように[23]，構造，収容人数，外観の類型等など諸条件に応じて「教会外観及び正面の設計図」から選択された基本設計案に基づくものが確認される。

京都聖堂は，雛形となる「教会外観及び正面の設計図」に基づく設計過程を日記等の資料及び実施設計図から追うことができる事例として重要である。こうしたロシアから移入された雛形に基づく正教会建築としては，確認される範囲では最初の事例であり，現存最古の遺構として，極めて重要な遺構であると評価することができる。

5．外壁塗装の復原的修理について

京都ハリストス正教会生神女福音聖堂では，京都市の補助事業として，平成27年（2015）10月～平成28年（2016）3月において外壁塗装，一部内壁下地修理などの修理事業が実施された（施工：伸和建設）。外壁塗装は，今回の修理以前にはやや緑がかった水色となっていた（写真1）。昭和53年（1978）発行の絵葉書では外壁は白色に写っており（写真2），また，竣工時資料には「東山の緑翠に對せる灰白色」と記載されていることから[24]，外壁塗装修理に際して塗装色の変更を行なった（写真3）。

塗装色を決定するに際して数か所の外壁部分の部材にサンドペーパーをかけたところ，白色部分が確認されたが，明確に当初の塗装であるとの判断には至らな

かった。一方，２階鐘楼部分の内部に当初の塗装と考えられる白色部分が確認でき，塗装修理時の基準色とした。

修理以前には，西側正面及び南北側面の入口部分の柱は下見板と同色（水色）で塗装されていたが，竣工当初の写真（写真４）では白色塗装はなされておらず，木材の色が現れているものと判断された。今回の修理では塗料を完全に剥がして木の肌面を露出することが困難であったため，同部分は既存塗装の上に木調に見える茶色の塗装を施した（写真５）。同様に１階窓框下端部の装飾部分も，昭和初期頃と考えられる古写真（写真６）を参照し，木調に見える茶色の塗装を施した（写真７）。

以上の修理工事は，外壁塗装を主とした部分修理であるものの，資料や部材の痕跡など文化財的評価を行う上で重要なデータを得ることが出来た。外壁塗装については，現段階において入手可能な根拠による復原的な修理として，一定の評価を与えることができるのでないかと思われる。新出資料による建築経緯についての成果と合せ，京都ハリストス正教会生神女福音聖堂の文化財的評価を高めるものと期待したい。

謝　辞

建築調査や資料の提供・掲載について全面的にご協力頂いた京都ハリストス正教会のパウェル及川信　長司祭，「教会外観及び正面の設計図」を提供及び掲載の許可を頂いた現仙台ハリストス正教会のセラフィム辻永昇　大主教には大変お世話になりました。深くお礼を申し上げます。

註・参考引用文献

1）水場行楊　編『京都至聖生神女福音聖堂の記念畫帖』，1904年　には「聖堂建築の技師は松室氏」と記載されており，その後のパンフレット等にも松室重光の設計によるものと紹介されている。また松室の建築作品に関する論考として，石田潤一郎・中川理「松室重光の事績について」『日本建築学会学術講演梗概集』1984年10月，pp.2671-2672　等がある。

2）泉田英雄・伊藤晴康・西澤泰彦「豊橋ハリストス正教会の聖堂建築の研究　最近発見・発刊された資料による建設経緯と設計の分析」『日本建築学会計画系論文集』第654号，2010年8月，pp.1997-2005　では，豊橋ハリストス教会の建築経緯を考察する中で，同教会に残る立面図が，ニコライがロシアから持参した参考図集にあたるのではないかと推察されている。同様に，池田雅史『ユーラシアブックレット　ニコライ堂と日本の正教聖堂』，東洋書店，2012年，pp.20-21　は，ロシアの宗務院が作成した聖堂のモデル図面に，京都や豊橋の正教会聖堂に酷似したものがあり，ニコライがロシアから持参した図面には地方向けの雛形もあることを指摘している。また，赤浦真珠「京都ハリストス正教会の聖堂建築の基礎的研究」『日本建築学会東海支部研究報告集』第51号，2013年2月，pp.717-720　では，『宣教師ニコライの全日記』の分析から，京都聖堂の建設経緯が考察されている。

3）『宣教師ニコライの全日記』は，1979年にレニングラード（現サンクト・ペテルブルク）の中央国立図書館に保管されていたニコライの手書き日記現本を判読したものである。帝政ロシアではユリウス暦が用いられており，日記原本も同暦による日付が記載されている。刊行された『宣教師ニコライの全日記』ではグレゴリオ暦による日付を（　）内に補足しており，本稿にお

いてもこれを踏襲する。

中村健之介　監修『宣教師ニコライの全日記１　1870年～1880年（ロシア帰国時の日記）』凡例，教文館，2007年，pp.74-75。

4）中村健之介　監修『宣教師ニコライの全日記５　1897年7月～1899年6月』，教文館，2007年，p.178。

5）中村健之介　監修『宣教師ニコライの全日記６　1899年7月～1901年6月』，教文館，2007年，pp.149-150。

6）前掲4)，pp.150-151。

7）前掲4)，pp.154-155。

8）前掲4)，pp.167。

9）前掲4)，pp.181-182。

10）前掲4)，pp.212。

11）『正教新報488号』明治34年4月1日，pp.18-19。

12）中村健之介　監修『宣教師ニコライの全日記７　1901年7月～1903年』教文館，2007年，pp.64。

13）前掲10)，pp70。

14）前掲10)，pp.240-241。

15）前掲10）p.241。

16）前掲10）p.241。

17）前掲10）pp.241-242。

18）前掲10）pp.250。

19）前掲10）pp.261-265。

京都ハリストス正教会　編『京都ハリストス正教会　開教100周年記念誌1978』，1978年，p.21　においても同式が5月10日に執行されたことが確認される。

20）パンフレット

『初代聖堂焼失から二代目聖堂完成まで（1907～1916）　函館ハリストス正教会復活聖堂100年』，pp.15-17。

『函館ハリストス正教会史－亜使徒日本の大主教聖ニコライ渡来150年記念』函館ハリストス正教会史編集委員会，2011年。

から抜粋して作成。

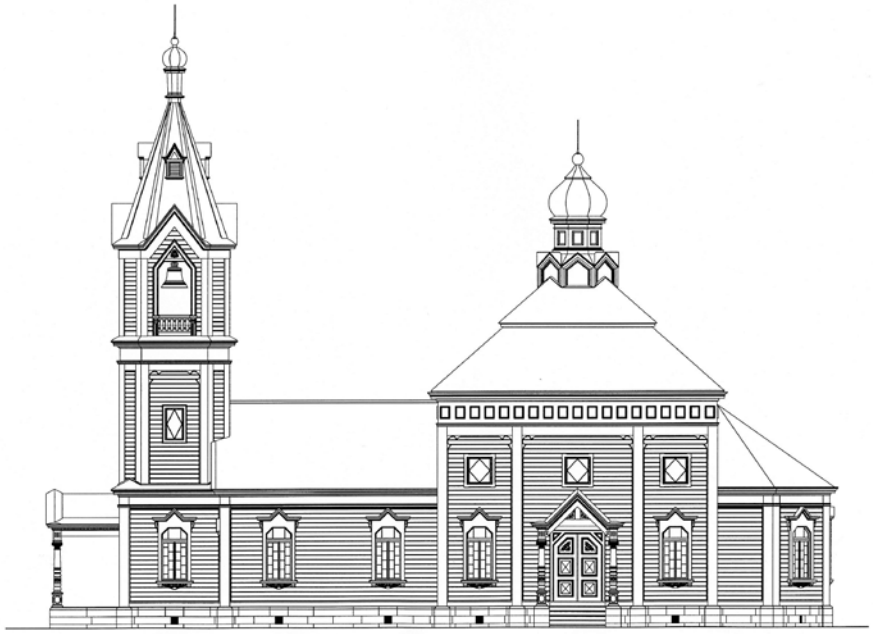
21）前掲16)，及びセラフィム辻永昇　大主教からの示唆による。

22）『正教新報493号』（明治34年6月15日）表紙裏挿図

23）前掲2）池田，pp.21-22　ほか。

24）水場行楊　編『京都至聖生神女福音聖堂の記念畫帖』，1904年，p.8。

石川（いしかわ）　祐一（ゆういち）（文化財保護課　主任（建造物担当））



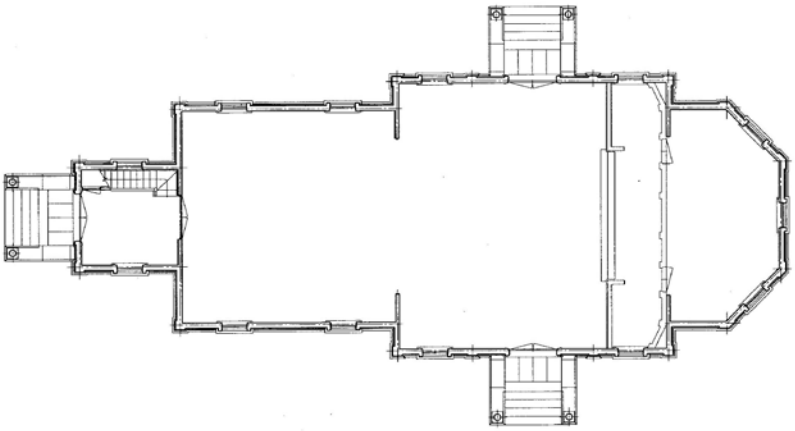


図１　京都ハリストス正教会生神女聖堂　現状立面図（上），現状平面図（下）
（いずれも伸和建設株式会社作成）

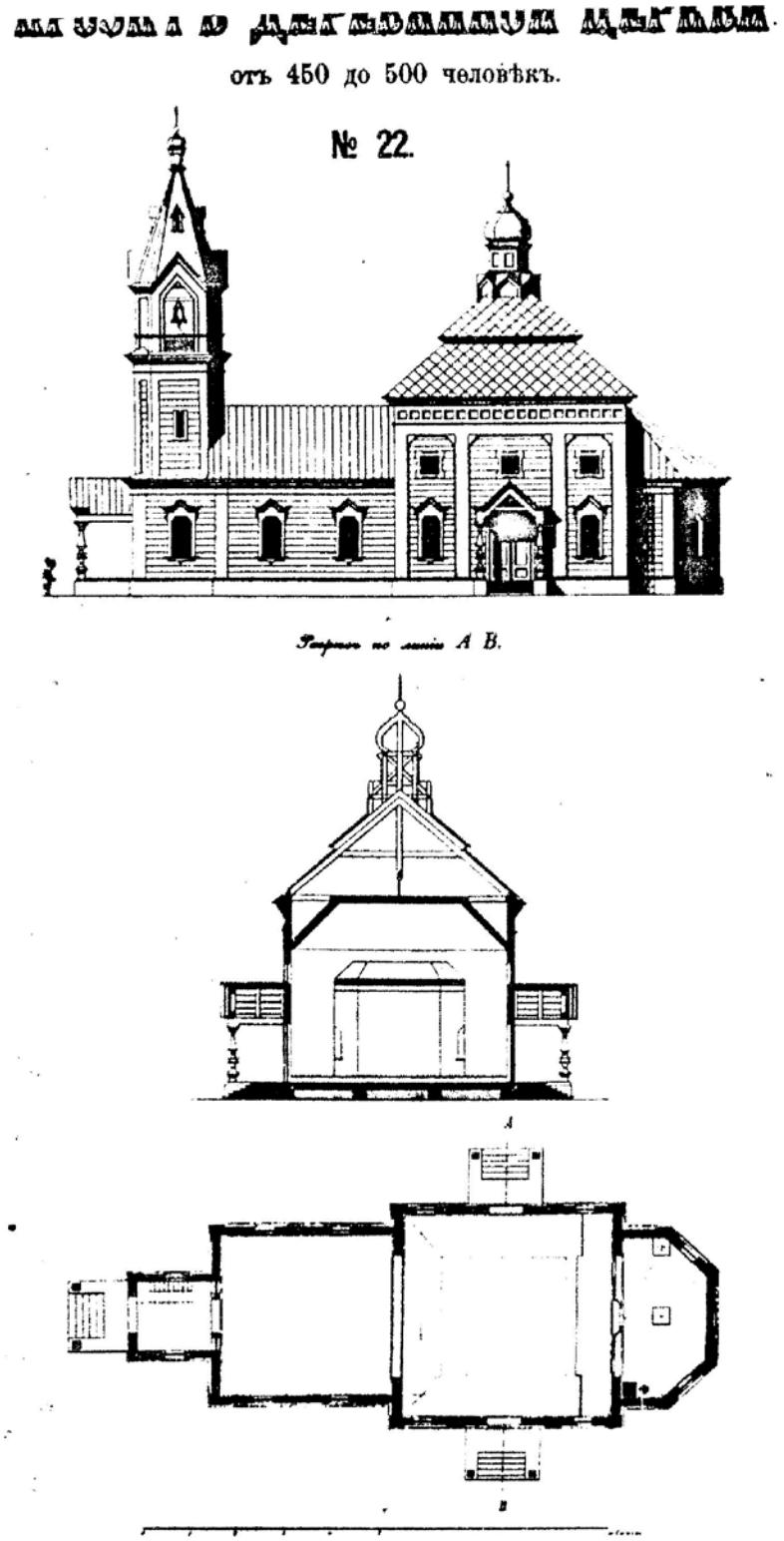


図２　「教会外観及び正面の設計図」№22

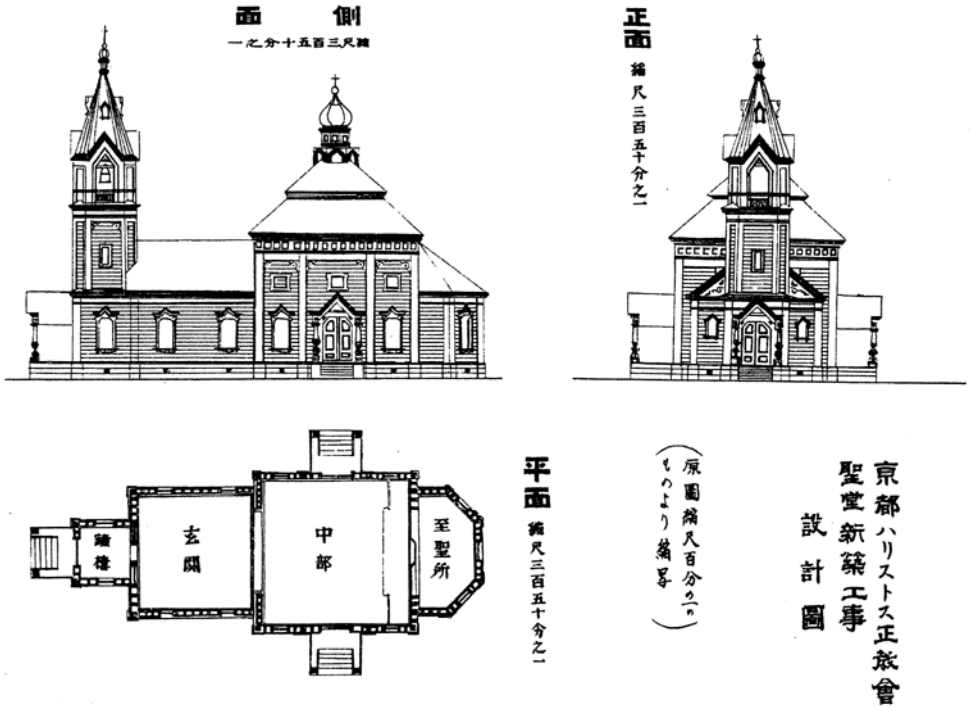


図３　「京都ハリストス正教会聖堂新築工事設計図」

写真１　修理前外観(2015年８月)

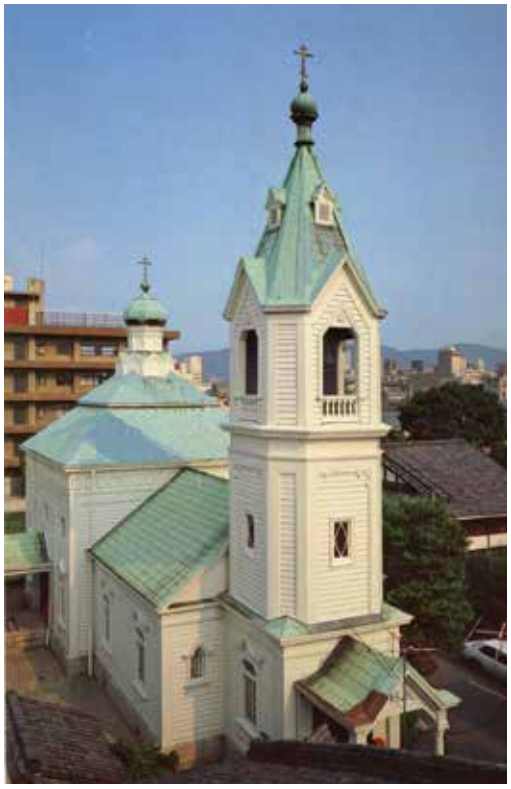


写真２　昭和53年（1978）頃の外観

写真３　塗装修理後外観（2018年１月）

写真５　入口柱部分塗装

写真６　昭和初期頃写真（京都ハリストス正教会所蔵）

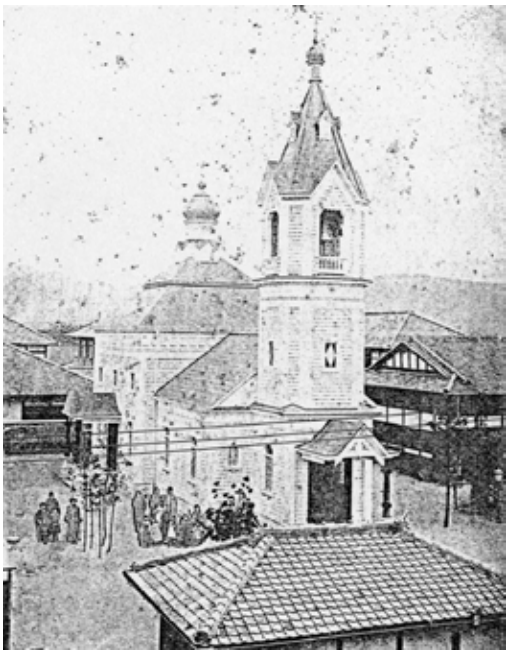


写真４　竣工当初外観
（『京都至聖生神女福音聖堂の記念畫帖』）

写真７　１階窓框下装飾塗装（修理後）→

建造物

白山神社所蔵史料
「元治元年　田貫村惣堂　御堂普請諸造用覚帳」について

原戸　喜代里

１．はじめに

京都市右京区京北田貫（たぬき）町に位置する白山（はくさん）神社は，田貫村の産土神（うぶすながみ）として，現在も住民の信仰を集めている。その本殿が，平成28年3月31日，京都市指定有形文化財として指定された。白山神社の建築を調査する過程で，文明2年（1470）～15年（1483）及び寛永年間の勤務表，御堂や拝殿，社務所に関わる普請文書，宮道具控等が神社に所蔵されていることがわかり，田貫村における近世の神社運営状況の一端を知ることが出来た。

ここで紹介する「御堂普請諸造用覚帳」も白山神社所蔵史料のひとつで，白山神社西方の高台に建つ「田貫村惣堂」の元治元年（1864）の普請に関わる文書である。

２．田貫村惣堂について

「田貫村惣堂」の「惣堂」とは，中世村落の自治組織である惣によって維持されてきた仏堂[1]で，宗派に属さず，住持職もいない「みんなのものでありながら，だれのものでもない，村人たちが「寄り合って建てた堂」のこと[2]」である。丹波地方には，このような「村持ちの堂」の存在が確認されている[3]。

元文５年（1740）の園部藩寺社奉行による「寺社類集」[4]によると，田貫村には龍泉寺と正法寺という寺の他に宗派に属さない「観音堂　五間ニ七間　建立年歴不

図１　白山神社及び観音堂　位置図

知」の記述があり，さらに「三十三所　観音堂　五尺一間　享保五年郷民安右衛門建立之　右在観音堂之内」とある。この観音堂が，「田貫村惣堂」である。

先行研究によると[5]，惣堂は，檀家寺や産土神とは独立して位置する村の重要な宗教施設のひとつであった。村人が維持し，信仰や祭，集会など多目的に利用された惣堂は，村内の小高い場所や主要道路に近接して建てられた。３～５間の規模を持ち，本尊を安置する内陣と広い下陣からなり，組物や虹梁，彫刻などの装飾的要素は少ない建築であるという共通した特徴を持つ。

京北田貫町檀町の観音堂は，「老朽化した観音堂を村人の浄財を集めて安永８年（1779）８月18日に再建した[6]」と伝えられており，その後，元治元年，昭和41年にも普請工事が行われた。

屋根形式は宝形造，杉皮葺きである。堂内は，三十三所観音を安置する内陣と土間空間の下陣からなる。正面の桟唐戸の両脇には火頭窓を配する。柱は彫刻の施された虹梁で繋ぎ，端部に木鼻が取り付く。虹梁の上部中央には蟇股を配する。惣堂としては，比較的装飾的な要素が多く，絵様や木材の状況からみて，後の改修によるものと見られる。

田貫では，毎年８月18日に村内安全と先祖供養のため「高張り」が行われる。白山神社から観音堂までの沿道には三十三所観世音提灯が灯され，村人は，高張提灯２張を高く掲げ，囃子を奏でながら，白山神社から観音堂まで巡行する。観音堂までの巡行が終わると公民館前の広場で盆踊りをするという。

写真１　京北田貫町　観音堂全景

写真２　観音堂正面

写真３　「高張り」巡行の様子（個人所蔵）

３.「元治元年　田貫村惣堂　御堂普請諸造用覚帳」について

「御堂普請諸造用覚帳」は，まず寄進等収入を示す「上り方覚」が記され，次に普請にかかる出費を記した「覚」，最後に普請の収支の集計が記されている。

「上り方覚」に記載されている寄進者を見てみると，田貫村の住民だけでなく，佐々江村，中佐々江等，田貫町の西，現在の南丹市日吉町佐々江の住人が寄進していることがわかる。また，白ヶ谷は，日吉町佐々江白賀谷とみられ，「白ヶ谷の嘉兵衛」も隣の佐々江村の住人であったと考えられる。

「宮の方木代」とあるが，この宮は白山神社を指すと考えられ，白山神社境内の木を売って得たお金を計上したと考えられる。

普請にかかる出費を記した「覚」では，物品の購入記録と，職人に対する人件費が分けて集計されている。

物品の購入記録には，日付と購入した物品が記される。これにより，手初め（工事の着手日），木切り（木材の刻み），大工初め，建前（上棟），石場付という普請の節目にあたる日には，酒や肴が振る舞われていたことがわかる。また，「さは（鯖）」「しらこ（白子）」「鰹」などを購入しており，若狭から旧高浜街道を通って運ばれてきた海産物が，田貫村で食されていた様子も見て取れる。

職人に対する人件費の記録では，観音堂の普請を手がけた職人の名前も記されている。

大工は，栄吉と豊吉で，この大工は，「上り方覚」にも「山の神森　六拾匁　大工　栄吉　豊吉」と名前が記されていることから，地元の大工である可能性が高い。白山神社本殿の附として指定された，天明元年（1781）及び２年（1782）の奉納木槌２丁には，「若州高濱大工江上傳次郎」と若狭大工の名前が見えるが，幕末の惣堂の建築には地元の大工が関わっていたと考えられる。

木引は，伐採した木を適当な長さに切って木材にする職人で，宇兵衛に賃金を支払っている。一方，杣日用の代金は70人に支払っているが，杣は伐採する者，日用（ひよう）は，切り出して集めた木材を運ぶ者をいう。木引，杣，日用と林業が分業化している様子が見られる。

また，釘屋，杉皮50束の代金を支払っていることから，元治元年当時の屋根も現在と同じ杉皮葺きであった事がわかる。

黒鍬（くろくわ）６人の黒鍬は，近世では土木作業を行う者を指す。家敷引，石場直しとあることから，曳家をして，基礎を修理したと考えられる。現在の観音堂の基礎はコンクリートで固められているが，柱は井桁に組んだ土台の上に立っており，当初はこの土台が礎石の上に載っていたため，比較的容易に土台を持ち上げて曳家をすることができたと思われる。

観音堂の地鎮祭は，「拾匁　中道寺　地祭礼」とあることから，中道寺が執り行っていたことがわかる。ここに記されている中道寺は，京北町上中の南光山中道寺のことである。白山神社の祈祷札に「別当 中道寺 多門院」とあり，中道寺は白山神社の別当寺であった。白山神社及び観音堂の維持

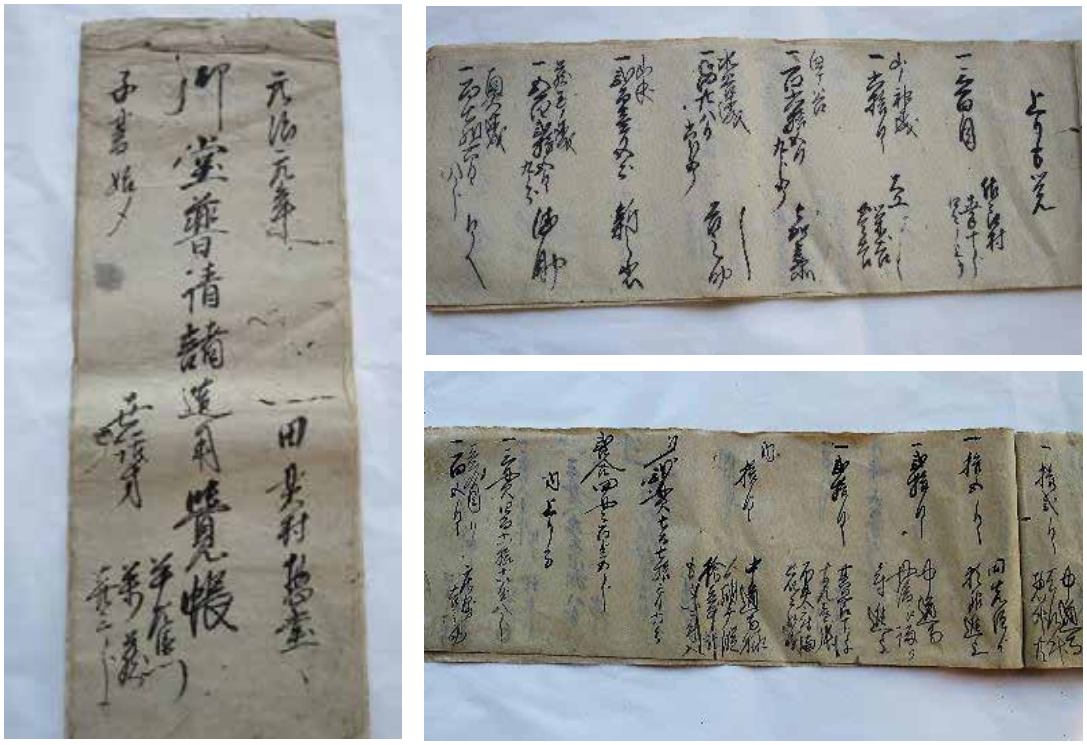


写真４「元治元年　田貫村惣堂　御堂普請諸造用覚帳」

管理や運営は村人が行っていたが，地鎮祭や護摩焚き等の宗教的な儀式は，中道寺の僧侶が行っていたことが史料より見て取れる。

元治元年に行われた田貫村惣堂の普請事業の集計を見てみると，支出「四貫百匁五分」に対し，収入は「三貫九百四拾八匁六厘」に「百目　木代入　山神の森」と山神の森の木を売った代金を加えたものとなり，最終的には「引残五拾弐匁四分四厘」と，支出が収入を上回ったことになる。集計は世話方の半左衛門が行った。

今回紹介した「御堂普請諸造用覚帳」から，田貫村における近世の惣堂の普請の様子を垣間見ることができた。今後は，白山神社に所蔵されている他の普請文書も合わせて調査し，近世の惣堂の普請状況を明らかにしていきたい。

謝　辞

本論の作成にあたり，白山神社総代（当時）前西氏に多大な協力を得ました。ここに記して感謝の意を表します。

註

1）森雄一「惣堂・村堂の存在形態－京都府和知町の事例を通じて－」『日本建築学会計画系論文集』第573号，2003年11月，141-146頁。

2）藤木久志『中世民衆の世界　－村の生活と掟』，岩波新書，2010年5月20日，68頁。

3）熊本達哉「丹波地方における「堂」について　－「村堂」に関する基礎的考察－」『日本建築学会大会学術講演梗概集』，1995年8月，135-136頁。

4）園部町教育委員会，『社寺類集』，1977年。

5）前掲1）及び3）

6）北桑田郡社会教育協会「高張りの由来」『北桑時報』第237号，2000年，34頁。

翻　刻

・丁替わりは「」で示した。

「元治元年　田貫村惣堂
御堂普請諸造用覚帳
子夏始メ　世話方　半左衛門
萬蔵
喜三郎　」

「　上り方覚

佐々江村
一三百目　幸十郎
口々之上り

山ノ神森　大工
一六拾匁　栄吉
豊吉

白ケ谷
一百六拾五匁九分五厘　嘉兵衛

水谷森
一百廿八匁六分五厘　吉之助

山本
一弐百壱匁五分　新之丞

蔵王ノ森
一五百弐拾五匁九分　徳助

奥森
一百七拾六匁八分　同人　」

「　柏弐本
一弐百拾弐匁五分　倉助
奥森　中佐々江
一四百目　小三郎
〆弐貫百七拾壱匁三分

子十月日
庄屋
一壱貫百三拾五匁　角左衛門
請取申候

庄屋
一百五匁　吉之助
喜三郎入

又　宮の方木代
一五拾匁五分　萬ヨリ貫

一五匁　同人
ゑめすの森

〆三貫四百六拾六匁八分　」

「　覚　入札造用
一六拾五匁八分五厘　佐々江小十郎
檜貫造用
書付別有

四月十九日
堂普請
一三拾弐匁八分　相続度々
造用〆高

廿四日
酒肴共
一七匁五分　役人惣代
造用〆高
手初造用
一拾三匁　酒弐升
肴いろいろ

五月十九日
一六匁五分　木切造用
酒壱升
肴共

廿日
一拾三匁五分　酒弐升
肴共

廿一日
一拾九匁　酒三升
肴共　」

「　五月廿一日
一三匁　なわ壱束

同日
一壱匁八分　半し弐

廿二日
一六匁五分　酒壱升
肴

廿三日
一拾三匁五分　酒弐升
さは三本
草さい

廿四日
一六匁五分　酒壱升
肴

廿五日
一六匁五分　酒壱升
肴

廿六日
一拾三匁五分　大工初
酒弐升
さは壱本
いろいろ

廿七日
一拾三匁五分　酒弐升
肴

廿八日
一三拾弐匁　酒八升　」

「　同日
一七匁五分　大豆壱升
肴いろいろ

廿九日
一百弐拾弐匁五分　酒三斗六合

同日
一九匁　いろいろ肴
五口〆

六月朔日
一百目　酒弐斗四升五合

同日
一拾匁　ふり焼
大弐本

同日
一八匁　しらこ一升
ろそく
しよやく
草さい

七月日
一拾五匁　半左衛門
堂願書
造用〆

同日
一拾壱匁　佐々江かじや
万力直し
ちん代　」

「十一月二日　立まく
一百六拾弐匁　酒弐斗七升

同日
一五匁　しよやく
いろいろ
ろそく

四日　石場ニ付前渡
一六拾匁　酒壱斗

同日
一拾弐匁　鰹大壱本

四月六日
一百八拾九匁　米六斗三升

六日　色々
一九拾三匁五分　酒壱斗七升

四月六日
一拾壱匁　□弐升

同日
一五匁　しよやく
いろいろ

同日
一弐匁　しようゆ
きわだ　」

「十一月八日
一四拾四匁八分　酒八升

同日
一六拾七匁弐分　酒壱斗弐升

同日
一八匁　肴三貫

同日
一九拾匁　米三斗

十日　後勘定
一拾三匁五分　酒壱升
肴半分

一三拾五匁五分　新之丞払

〆壱貫三百弐拾六匁四分五厘　」

「　大工　栄吉
一壱貫三百目　豊吉
木引　宇兵衛

一三百五拾匁　杣日用賃
七拾人ニ渡ス

一五百六拾五匁六分　釘屋治衛門へ渡ス
杣皮五拾束

一四百目　定助渡し
半左衛門渡し

鍬黒（黒鍬）六人
一七拾八匁　家鋪引
石場直し

一拾匁　中道寺
地祭礼

一弐匁　いろいろ備物

一六匁　酒壱升

一五匁　さいの者

一拾弐匁　中道寺
はん代
惣代共　」

「　一拾五匁　同先住ゟ
頼銀進上

一弐拾匁　中道寺
丹後江帰り
ニ付進上

一弐拾匁　其節ちよ
ちん壱張
不失ニ付備
を以ニ相成

内
拾匁　中道寺様
ゟ胡麻段
檜壱本代
もらいニ付人

引〆弐貫七百七拾三匁六分
弐口合四貫百匁五分

内上り方
一三貫四百六拾六匁八分

壱貫目　庄屋
一百五匁　吉之助　」

「　一六拾七匁八分弐厘　口々之上り
別紙有

一三百八匁四分四厘　半左衛門
借用分

〆三貫九百四拾八匁六厘

引〆百五拾弐匁四分四厘
半左衛門極

一百目　本代入
山神の森

引残五拾弐匁四分四厘　」

原戸（はらと）　喜代里（きより）（文化財保護課　文化財保護技師（建造物担当））

養源院客殿の仏壇羽目板（狩野山楽筆「唐獅子図」）の修理事業について

千木良礼子・安井　雅恵

１．はじめに

養源院客殿は昭和61年６月２日に「養源院本堂」として京都市指定有形文化財に指定された。本報告は，平成27年度京都市指定文化財修理事業として実施された工事内容の紹介である。この修理実施中，客殿を含む境内の主要な建造物が，平成28年２月９日付けで国の重要文化財に指定された。本報告での室名は，国指定時の名称で記述をする。

なお，挿図とは別に，修理前後写真については，文中に（写○）と示し，文末にまとめて掲載した。補修箇所調査図面・顔料写真についても文末に掲載した。

養源院は，現在浄土真宗の寺院であるが，昭和30年までは天台宗に属していた。文禄３年（1594），浅井長政の長女淀によって父の菩提を弔うために創建されたが，元和５年（1619）に焼失し，同７年に長政の三女，徳川秀忠室江によって再建された。

客殿は，元和７年の鬼瓦が残っている点や様式，手法からみて，元和再興時のものと考えられる。入母屋造，本瓦葺の大型の禅宗方丈型建築で，南面し，西面南寄りに軒唐破風付入母屋造，本瓦葺の奥玄関が付属する。平面は六間取形式で，中央は外陣とその奥に仏壇を備えた内陣とし，更に背面には槇之間が付き，両脇には各２室が配され，四周に広縁及び落縁がまわる。内陣の仏壇には本尊阿弥陀如来，浅井長政，歴代将軍の位牌が祀られている。また内陣襖の俵屋宗達筆「金地著色松図（きんじちゃくしょくまつず）」，広縁杉戸の宗達筆「表獅子裏波ニ麒麟図（おもてししうらなみ　きりんず）」および「表獅子裏白象図（おもてししうらはくぞうず）」は，重要文化財（美術工芸品）に指定されている。今回修理対象となった狩野山楽筆の唐獅子図（以下，本図とする）は，仏壇の羽目板に嵌められた３面の壁貼付絵である。（千木良・安井）

２．狩野山楽筆「唐獅子図」の概要

本図の作者については，作品中に落款はないものの，かねてから狩野山楽（1559～1635）筆とする見解が提示され[1]，それがひろく認められて今に至っている。

狩野山楽は，浅井家家臣の木村永光の子として生まれながら，絵を好み，狩野永徳を師として研鑽を積み，狩野姓を許されるまでに大成した。狩野家本流が，江戸幕府の開府に伴い，江戸に本拠地を移したのに対し，山楽は活動拠点を京に置き，京狩野の祖となったことでも知られている。代表作には，大覚寺障壁画（重要文化財）や「龍虎図屏風」（６曲１双，妙心寺蔵，重要文化財）などがあるが，いずれも永徳の画

風を受け継ぐ豪壮な作風を示す。本図の制作時期は養源院再建の元和７年頃と考えられ，山楽の晩年期の作品のひとつとなる。

本図の法量は，四分一を設置した状態で，東側本紙（写１～４）が縦45.1㎝，横199.0㎝，中央（写５～８）が縦45.0㎝，横198.8㎝，西側（写９～12）が縦45.2㎝，横199.0㎝である。

本図は紙本金地著色で，各面とも２頭の唐獅子を左右に配している。肥瘦のある描線は闊達で，唐獅子の動きを的確にとらえている。また，金泥の毛描きはしなやかに体全体を覆い，唐獅子の動勢を助長する。画面の制約から，金地の余白が少なく，やや窮屈な印象を与えるが，本図は，桃山から江戸初期にかけての狩野派の唐獅子図として，小品ながら優れた出来映えを示している。（安井）

３．損傷概要

本図に特徴的な損傷としては，後述する仏壇羽目板の特殊な構造と下貼り層の糊浮きなどにより，たわみや凹凸が生じており，これに起因する亀裂や欠損が画面下部に集中していたことが挙げられる（写13・15）。また，東側画面の向かって左の唐獅子には天地方向に亀裂痕があり，過去の修理において３㎜ほど図様がずれて接着されていた（写17・18）。

図1　合成樹脂によるテカリ

絵具層では，剥離・剥落が進行しており，特に白色顔料の剥落や緑青の粉状化が進行していた（写21）。背地の金箔についても，擦損や掻損による剥離・剥落が認められ，金箔の膠着力の低下が見られた（写23）。

本紙の欠損部分には，過去の修理による補修紙（金箔押し紙及び補彩された紙）が補填されていたが，表面の剥落や汚損が生じているため，鑑賞面で支障をきたしていた（写25）。

このほか，虫害などによる料紙の欠失（写27），付着物等による汚損（写29）などが見られ，加えて，表面には合成樹脂が塗布された形跡があり，樹脂の溜りやテカリ（図１）が生じていた。

本紙以外の損傷としては，漆塗縁（四分一）の欠損が確認された。（安井）

４．修理方針

上記のような状態を改善するため，本格的な解体修理を行った。修理は，株式会社坂田墨珠堂（滋賀県大津市小野）において行われた。

絵具層は膠の接着力が低下し，剥離・剥落・粉状化を起こしているため，膠による剥落止め処置を行う必要があった。裏打紙各層は経年劣化が見られたため，すべて除去し，新たな裏打ちを施すこととなった。

本紙には旧補修紙が多数使用されてお

り，特に東側画面，向かって右側の唐獅子は下半分の表現がなくなるほど，広範囲の金箔押し補修紙が使用されていた。旧補修紙の劣化状態，画面の色調等との馴染み具合，また除去後の画面全体への影響など，除去については慎重な検討を要した。本件に関しては，新たな補修紙に地色補彩を施すことで視覚的に改善が図れる箇所や，劣化の進行が著しく，再使用することで，本紙への悪影響が懸念される箇所を除去することとし，それ以外については再使用することとなった。

また養源院障壁画は昭和22年（1947）に合成樹脂（PVA，アクリル樹脂）で剥落止めが行われたと報告されている[2)]。本紙画面上でも塗布痕が複数箇所確認された。合成樹脂は水分を与えることにより，白濁等の変化を生じ，表現に影響を与える可能性があるため，修理に使用する水分を最小限に留めることが肝要となった。

特に問題となったのは，修理終了後の本紙を戻す方法である。本紙を修理前と同じやり方で仏壇羽目板に戻せば，近い将来，同様の損傷を生じることが予想された。一方で，養源院客殿は京都市指定文化財（当時）であり，可能な限り当初の建材は保全することが望ましかった。所有者，京都府・京都市文化財保護課の建造物・美術工芸品担当者，及び修理技術者が協議を重ねた結果，下地として使用されている板等が当初部材か疑わしく，かつ本紙の保存性が重要視されたため，修理後の本紙は新調した組子下地に貼り付けた状態に改装して嵌め戻すこととなった。

（安井）

5．修理工程

修理は以下の工程で行われた。

1　現地での調査

現地において，損傷状況を確認し，撮影を行った。

2　解体・搬出前の養生

現地での解体前に，本紙表面の汚れを柔らかい刷毛やピンセット等で除去した後，絵具層の剥離及び剥落が懸念される箇所に膠水溶液を塗布した。

3　解体

旧縁（四分一）を取り外し，彩色層保護のため，レーヨン紙とフノリを使用した養生を施した後，下地から本紙を取り外し（図2），仮貼に貼り込んで修理工房へ搬出した。

4　調査

画面の養生紙を除去し，料紙の特徴及び繊維組成検査（JIS-P8120），顔料調査，損傷図面の作製等を行い，撮影を行った。また，現地での解体後，初めて下地の特殊な

図2　本紙の取り外し

構造が明らかになったため，下地構造の調査は，修理技術者に府・市担当者も加え，複数回に亘って入念に行われた。

5　クリーニング

本紙表面の汚れを乾燥状態で除去した（写30）。

6　剥落止め

膠水溶液を使用し，剥落止めを行い，絵具層の接着を強化した。濃度の調整（1.5～3％重量濃度）及び塗布の回数は状態により適宜判断された。特に獅子の腹などに塗られている胡粉層の定着が弱く，剥落が著しかったため，現地解体前と工房搬入後に膠とフノリの混合水溶液（2～3％）の塗布を繰り返し，絵具層を安定させた（写22）。また，剥離面において加圧が必要な箇所には随時加圧を行った。金箔地においても同様に剥落，剥離が確認されたので，膠水溶液を塗布し，安定させた（写24）。再使用される金箔押しの補修紙にも同様の処置を行った。

7　旧裏打紙の除去

肌裏紙を残して，旧裏打紙を除去した。

8　クリーニング

本紙の金箔部分に濾過水を用いて湿りを与え，水溶性の汚れを吸水紙に吸着させて除去した。本紙には合成樹脂（PVA）による剥落止めが施されており，特に墨線や彩色部分で顕著に認められたため，当該箇所では，水を使用してのクリーニングは必要最小限に留めた。

9　剥落止め

膠水溶液を絵具層に塗布し，再度剥落止めを行った。

10　表打ち

画面表面に，常温抽出フノリを用いてレーヨン紙で表打ちを施した。ただし，水分を与えることにより合成樹脂の白濁が懸念されたので，特に彩色層が脆弱な部分や，本紙自体が脆弱な部分に選択的に表打ちを施した。

11　肌裏紙の除去

乾式肌上法で旧肌裏紙をすべて除去した（図3）。乾式肌上法はごく少量の水分を用いて肌裏紙の繊維をほぐし，少しずつ除去していく方法で，使用する水分を最小限に調節できるため，もろくなった本紙や脆弱な絵具層の保護に適している。今回の修理では合成樹脂による白濁を生じないように表打ちを施さない箇所があったため，そこでは特に本紙に水が回らないよう細心の注意を払いながら，肌裏紙の除去を行った。

12　旧補修紙の除去

協議結果に基づき，不具合な旧補修紙を

図3　肌裏除去

除去した。また，再使用する旧補修紙については，本紙と重なる部分が本紙に負担を与えないよう，最小限になるよう調整した。

13　補修紙の補填

本紙料紙の繊維組成検査に基づき，同組成の補修紙を作成し，本紙の欠失部に小麦澱粉糊で補填した（図4）。

14　表打ちの除去

表打ちのレーヨン紙とフノリを除去した。

15　新規の肌裏打ち（１層目）

小麦澱粉糊を使用し，楮紙で肌裏打ちを行った。新たな裏打紙は未染色のものを用いた（図5）。

16　亀裂の補強

本紙裏面の肌裏紙の上から，亀裂箇所の補強のために，薄楮紙の細い帯（約２～3cm幅）を接着した。

17　裏打ち（２層目）

本紙を弱アルカリ性に保ち，酸化を抑制するため，炭酸カルシウム入の楮紙を使用し，小麦澱粉糊で２度目の裏打ちを行った。２度目は，１度目の紙の向きに対して90度回転させて打っている。紙の繊維配列をクロスさせることで，本紙は縦横の伸縮に均等に耐え得る。

18　仮貼り

本紙を仮貼りし，乾燥させた。

19　補修紙の補彩

補修紙を補填した箇所に補彩を行った。加筆は行わず，基調色を絵具や金箔が剥落した料紙の色とした。いわゆる地色補彩であるが，本件の場合，金地ではあるものの，作品の戻される場所が光の当たらない暗所であることを考慮に入れ，補修紙が明るく浮き上がってしまわないよう，全体の調和を図って慎重に補彩を行った（写14・16・26・28）。

20　下地の下貼り

下地は杉白太材鬢留総枘組子下地を新調し，下地の両面に６種８層（骨縛り，胴張，３枚蓑掛け，蓑縛り，下浮け，上浮け）の下貼りを施した。下貼りには本修理の記録を墨書している。下貼り中に下地を現地に搬入，寸法確認し，微調整を行った。

図4　補修紙の補填

図5　裏打ち（1層目）

21　本紙の貼り込み

仮貼りからはずした本紙を，調整を終えた下地に貼り込み，十分に乾燥させた。

22　搬入，設置，修理後の記録

下地に貼り込んだ本紙を養源院に搬入し，仏壇羽目板に設置，新調した漆塗縁（四分一）を取り付けた。

設置後，記録のため撮影した。　（安井）

6．特記事項

（1）亀裂箇所の修正

東側画面，向かって左側の唐獅子には，過去の亀裂の修理により，図様のズレが生じていた。これを解消するため，当該部分の本紙や絵具層の状態を確認した上で，表打ちは施さず，肌裏紙除去後に，描線や断面を根拠に修正した（図6）。これにより，当初の筆線に近い状態に復することができた（写19・20）。　（安井）

（2）仏壇羽目板の唐獅子図の設置状況について

仏壇羽目板には，3面の唐獅子図が描かれるが，3面それぞれに亀裂が生じている部分があった。唐獅子図の描かれる本紙を外したところ，亀裂や破損の原因の一つに，本紙を貼り付ける下地板の構造に問題があることがわかった。下地板は，上框及び下框，左右の縦框に，木枠によって嵌められていた（図7・図8）。木枠1本の形状は断面がL字型をしており，この木枠に下地板を6～7枚並べて打ち付けていた（図9）。木枠と下地板には，10㎜程度の段差があり，段差を解消するように「浮け紙」が貼られた痕跡があり（図8拡大図），上に本紙が貼られ，四分一（15㎜角）で押さえられていた（図8）。四分一は，四辺とも框の見込み部分に釘で固定されていた。四分一は，現状の釘穴のほかにも前に使用したと思われる釘穴の痕跡がみられた。下地板は，1枚が高さ約41㎝，幅が30～42㎝，厚みが約20㎜の大きさで，それぞれに割れや反りがみられた。大きい反りでは6㎜あり，一列に並んだ下地板の面は揃わず，凹凸が生じていた。今回の修理では，本紙を貼付ける際に，この段差や反りが問題であった。木枠と下地板の段差と同様に，「浮け紙」を貼った痕跡がみられたが，「浮け紙」そのものは失われ，現状では本紙を安定して支えることができず，自重により亀裂が生じ，下地板から本紙が外れかけていた（図10）。また，下地板をとめる釘の錆により本紙の裏側にある補修紙にも腐食が確認された（図11）。

図6　亀裂の修正

今回の修理において，本紙そのものを修理しても，下地板と本紙との接触部分における段差や反りなどの構造上の問題を解消しない限り，同様の損傷が生じる可能性が大きいと考えられた。そこで，協議により，設置方法を変更して工事をすることに

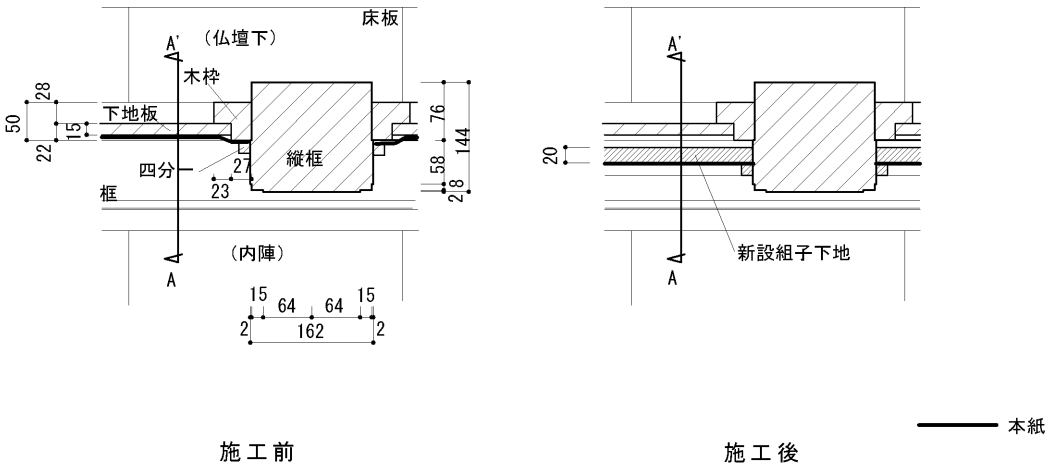


図７　羽目板（中央）東側　縦框廻り　平面図

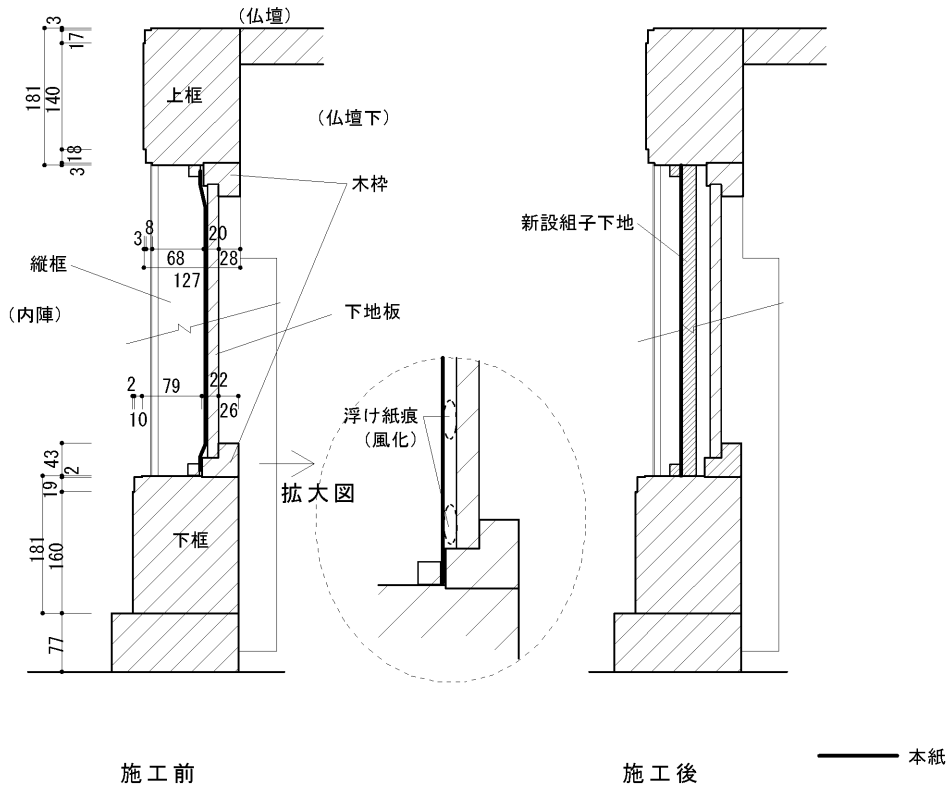


図８　羽目板（中央）　A-A'　断面図

した。

本紙の損傷の原因を解消するにあたり，本紙を貼付ける面が平らである必要があったが，下地板は割れや反りが大きく，再利用するには難しい状況で，下地板を新しくする必要があった。また木枠と下地板の段差も，それぞれの形状を変更しなければ，安定した面を作ることはできなかった。木枠そのものは，框に取付けられているため，木枠や下地板を変更するには，仏壇を含めた構造を再検討する必要があった。さらに，修理前の状況と同じように木枠と下地板に直接本紙を張り付けてしまうと，下地板の反りなどが再び起こる可能

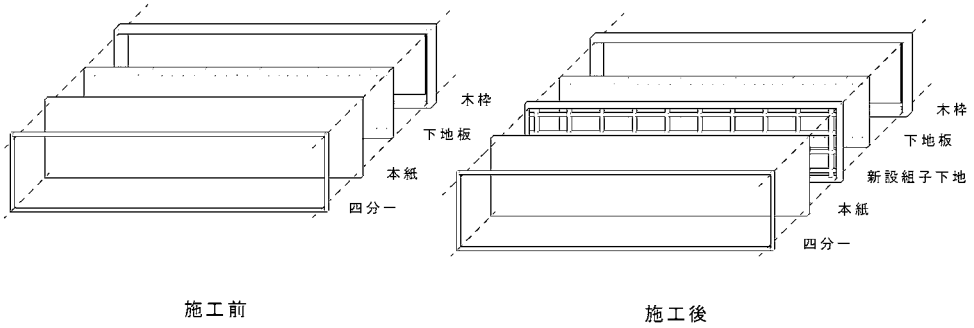


図９　羽目板構造　イメージ図

図10　取り外し前亀裂

図11　釘錆による腐食

図12　取り外し前亀裂

図13　本紙取外し後仏壇羽目板下地

性があり，本紙にとっても，現状は好ましい取り付け方法ではなかった。

本事業は本紙そのものを修復する内容で計画されており，上記のことから下地板を含めた工法を検討し直すと，工期や金額も含めて内容が大きく変更する可能性があったため，所有者や現場の状況を鑑み，木枠や下地板の構造を変更することは今回見送った。

今回の修理方法は，既存の下地板や木枠はそのまま残し，手前に新しい下地（組子下地）（図14）に本紙を貼り付けたものを置き，新しい四分一で固定した（図8）。組子下地の厚みは20㎜で，この下地を取付ける分だけ本紙が手前に出る形となった（図7）。四分一は15㎜角の断面のものを

図14　組子下地（杉白太材）

図15　骨縛り（組子下地に裏打紙を貼る）

図16　建て合せ（現地にて微調整）

図17　仏壇下（東をみる）右側面が下地板

図18　仏壇下(西をみる)左側面が下地板

新調した。四分一を框に固定する際に，四辺に固定すると框への釘穴数が多くなるため，上辺のみ四分一釘で四箇所固定し，左右と下辺の四分一は釘留めをせず，框に嵌めこむのみとした。既存の四分一は，仏壇床下に保管した（図18）。仏壇下へは北側縁側の床下より入ることができた。

施工前の状態は，建造物の一部である下地板の枠に本紙が直接貼り付けられており，通常ではみられない構造であった。この構造は，修理で取り外す際に本紙を傷める可能性があった。今回の設置方法は，上部の四分一のみを固定したため，専門の修理技術者によって取り外しが可能である。本施工後の状態を保持したまま，今後保存ができれば，本紙にとって望ましい環境といえる。（千木良）

7．おわりに

本図修理中に，養源院客殿等が国の重要文化財として指定された。修理後，本図は，国指定建造物の一部として，保存管理されることとなった。

また，本図は狩野山楽の障壁画の数少ない基準的作例のひとつである。そこで，建造物の一部ではあるが，作品の重要性を鑑み，美術工芸品（絵画）の京都市有形文化財として，平成29年3月31日付けで指定される運びとなった[3)]。

今回の修理では，関係者の協議により，修理前の構造に拘泥せず，障壁画をより良い形で将来に継承できる仕様に改めることができた。

将来行われる建造物の解体修理の際には，本図の修理・再設置について，建造物の一部であると同時に，美術工芸品の指定品として十分に協議が尽くされることを願い，稿を結ぶ。（安井）

謝　辞

本修理事業に際し，大阪大学奥平俊六教授，文化庁文化財部美術学芸課朝賀浩調査官に懇切な御指導・御教示をいただいた。また，本報告執筆にあたり，所有者はもとより，株式会社坂田墨珠堂には資料提供を含め，多大なる御協力をいただいた。末筆ながら記して深甚の謝意を表します。

註・参考文献

1）土居次義「狩野山楽と唐獅子図」『日本美術工芸』306号，1964年，16～24頁。
2）樋口清治「回顧：日本における文化財修理への合成樹脂利用のはじまり」，園田直子（編）『合成素材と博物館資料』，国立民族学博物館調査報告36，2003年，88頁。
3）指定名称は「紙本金地著色唐獅子図〈狩野山楽筆／仏壇羽目板壁貼付〉」3面。

掲載図版：図1は安井撮影，図7～9は千木良作図，図17・18は千木良撮影，その他は㈱坂田墨珠堂からご提供いただいた。

千木良礼子（ちぎられいこ）（文化財保護課　文化財保護技師（建造物担当））
安井　雅恵（やすい　まさえ）（文化財保護課　主任（美術工芸品担当））

修理前後写真

修理前後写真

東側画面

写１　修理前　全図（現地）

写２　修理前　仏壇羽目板より取り外した本紙全図

写３　修理後　下地貼り込み後の本紙全図

写４　修理後　全図（現地設置後）

中央画面

写５　修理前　全図（現地）

写６　修理前　仏壇羽目板より取り外した本紙全図

写７　修理後　下地貼り込み後の本紙全図

写８　修理後　全図（現地設置後）

修理前後写真

西側画面

写９　修理前　全図（現地）

写10　修理前　仏壇羽目板より取り外した本紙全図

写11　修理後　下地貼り込み後の本紙全図

写12　修理後　全図（現地設置後）

下地の構造に起因するたわみや亀裂

写13　修理前　西側　たわみと亀裂

写14　修理後　西側

修理前後写真

写15　修理前　中央　亀裂

写16　修理後　中央

亀裂による図様のずれの修正

写17　修理前　東側　亀裂に起因する図様のずれ

写18　修理前　東側　拡大

写19　修理後　東側

写20　修理後　東側　拡大

絵具の剥離・剥落

写21　修理前　中央　絵具層の剥落

写22　修理後　中央

写23　修理前　東側　金箔地の剥落

写24　修理後　東側

不具合な旧補修

写25　修理前　東側

写26　修理後　東側

欠失・破損

写27　修理前　東側

写28　修理後　東側

付着物・染みなどによる汚損

写29　修理前　東側

写30　修理後　東側

補 修 箇 所 調 査 図 面

（株式会社坂田墨珠堂作成修理報告より転載）

補修箇所調査図面

東側画面

修理前　仏壇羽目板より取り外した本紙全図

図面　■再使用した旧補修紙　　■新たに補填した補修紙

修理後　杉白太材鬢留総枘組子下地貼り込み後本紙全図

中央画面

修理前　仏壇羽目板より取り外した本紙全図

図面　■再使用した旧補修紙　　■新たに補填した補修紙

修理後　杉白太材鬢留総枘組子下地貼り込み後本紙全図

補修箇所調査図面

西側画面

修理前　仏壇羽目板より取り外した本紙全図

図面　■再使用した旧補修紙　　■新たに補填した補修紙

修理後　杉白太材鬢留総枘組子下地貼り込み後本紙全図

顔　料　写　真

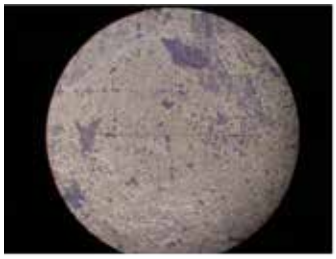
（株式会社坂田墨珠堂作成修理報告より転載）

顔料写真

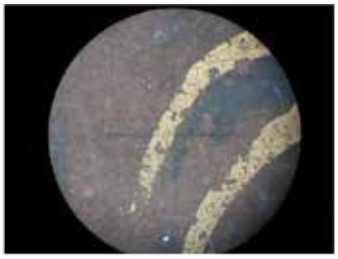
顔料写真　表面

※番号は撮影ポイントを指す

（×20倍）



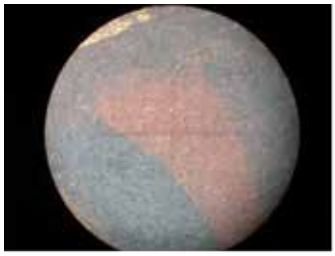
1



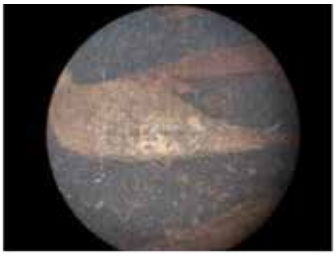
2

3

（×20倍）

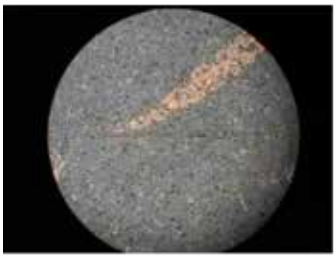


4

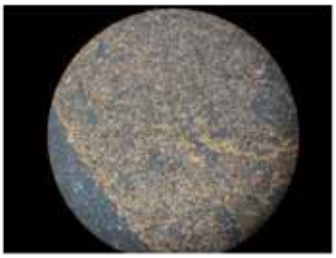


5

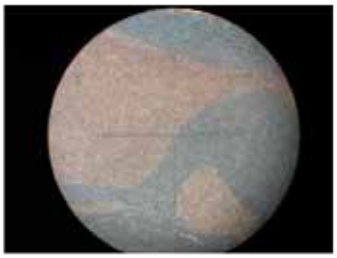
6



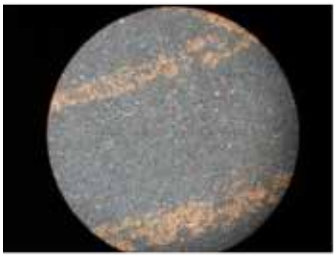
7



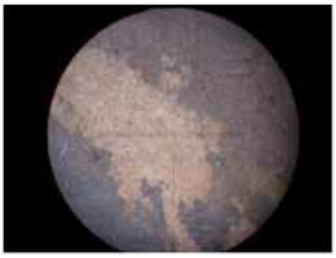
8



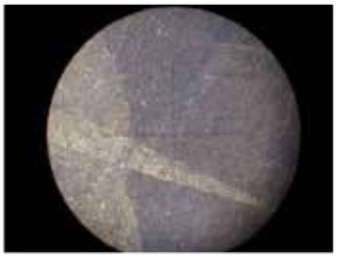
9



10

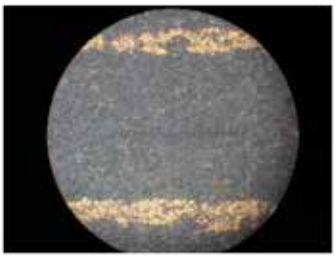


11

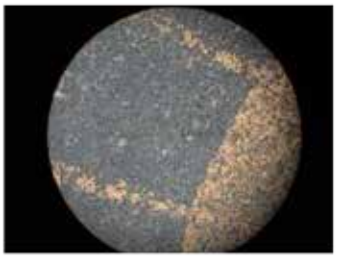


12

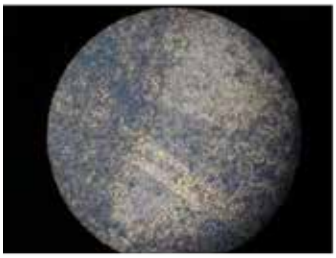
13



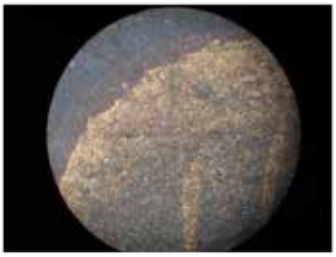
14



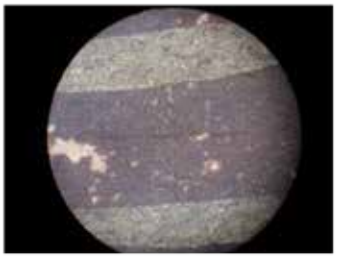
15



16



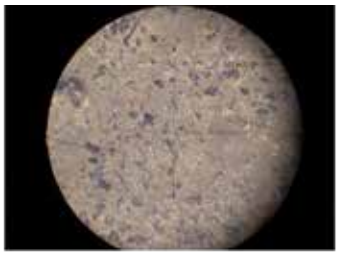
17



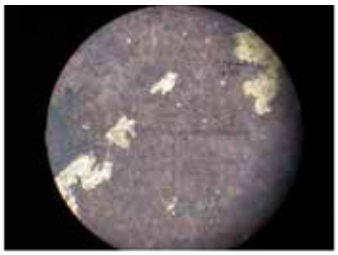
18

顔料写真

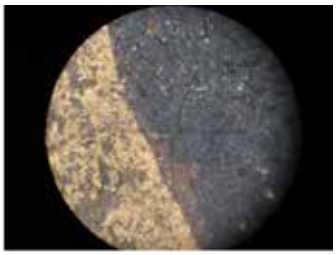
（×100倍）



1

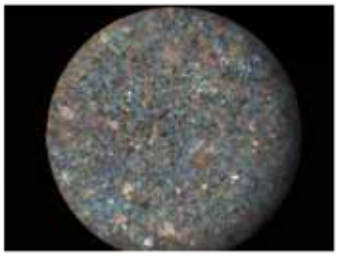


2

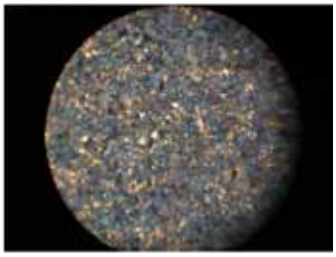


3

4

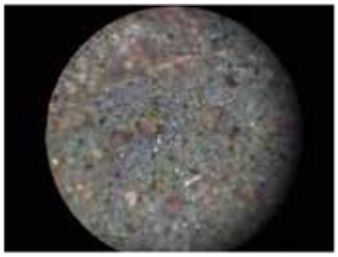


7

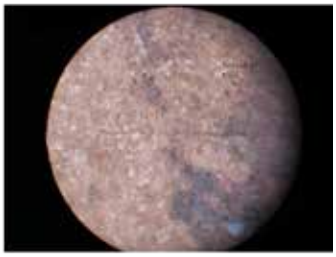


8

9

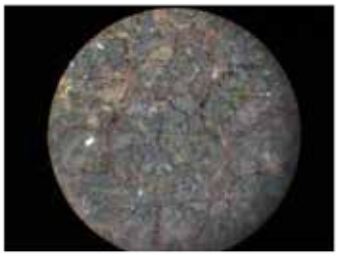


10

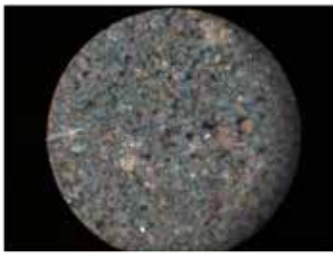


11

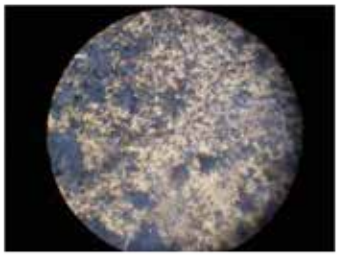
12



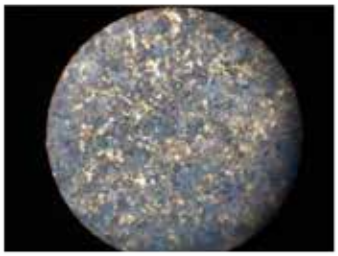
14



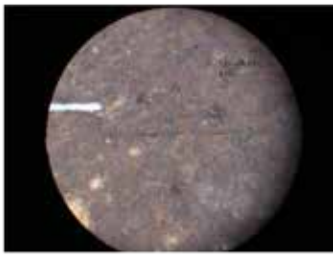
15



16



17



18

美術工芸品

曽我蕭白筆「雲龍図」襖（十念寺蔵）について

安井　雅恵

１．はじめに

上京区の十念寺に所蔵される曽我蕭白筆の襖絵「雲龍図」４面（図１，以下「本図」とする）が，平成28年４月１日付で京都市の有形文化財（美術工芸品）として指定された[1)]。

曽我蕭白（1730～1781）は18世紀後半に活躍した京都出身の絵師であるが，今日知られる代表的な作品－とりわけ障壁画の大半は京都市外に伝来している。これは，絵師として最も脂が乗った30代の時期に，もっぱら伊勢や播磨といった京都以外の地域で活動しており，京都定住は40歳頃から亡くなるまでの10年にも満たないためであろうが，現存作の分布という観点からすれば，本図は京都市内に残る貴重な蕭白の障壁画と言える。しかし，本図は，従来の蕭白研究において，ほとんど言及されたことがない。そこで小稿では，指定に関わる調査で得られた新史料などを合わせ，改めて本図を紹介したい。

２．先行研究

まず，先行研究を確認しておきたい。前述の通り，本図についてまとまった論考は存在しない。

本図を最初に紹介したのは，宮島新一氏で，「市中には珍しい曽我蕭白の雲龍図の断片が現存する」とし，落款の「震えたよ

図１　曽我蕭白筆「雲龍図」４面（十念寺蔵）　※非公開

うな書体」から晩年の作と推測している[2]。

佐藤康宏氏は「蕭白新論」[3]において，40歳代の蕭白に対して，京都でも支持層があった例証のひとつとして本図をあげるが，一方で，「ボストン美術館の『雲龍図』と十念寺の『雲龍図襖』を比較すれば，後者の萎縮ぶりは無残といいたいほどだ」とも述べている。

小嵜善通氏は，作品解説[4]で，本図と同図様の雲龍図が桃山時代後期に流行を見ており，そうした先行作に触発された可能性を示唆しつつ，「蕭白独自の個性に彩られて見るものを圧倒する」と述べる。

以上が本図に言及した先行研究の全てである。制作年代については，宮島・佐藤両氏が蕭白40歳代以降という点で一致を見ている。注目したいのは，宮島氏が本図を「断片」とする点である。つまり，本来１室分，あるいはそれ以上の面数の蕭白の障壁画が制作されており，本図はその一部のみが残ったとの解釈である。この見解には，残片である障壁画が，当初から，現有する所蔵者のために制作された作品か否か，という疑問も含まれるだろう。確かに，当初の建物から移される際，新たな建物に合わせるため，面数を減らし，切り縮められて，現在まで伝えられた障壁画は多い。この点については後述することとする。

言説の少なさに比例してか，展覧会への出品履歴はない。十念寺でも公開しておらず，通常は保存のために収納されている。このため研究者でもほとんど実見する機会はなく，京都市内に伝存する数少ない蕭白の障壁画ながら，ほぼ等閑視されていたと言える。

３．作品の概要

それでは，作品の現状について見ていこう。

本図は襖４面からなり，絵は片面のみに描かれている。

一般的に寺院の襖の場合，通常，縦方向に５枚の紙を継ぐものが多いが，本図は縦35㎝ほどの紙を６枚継いでおり，高さが2mを越える大型の襖となっている。向かって右から３面目の上部に，龍の顔が見える。瞳はやや上方に点じられており，襖絵を見る者を絵の中から見返すかのようである。龍の頭の上に体部が続き，頭部上方に大きな爪，そのすぐ右側に尾の先が並

図２　「雲龍図」落款

ぶ。角も髭も，右側しか描かれていない。髭は長く，画面の下部を横断する。

龍の周辺はむらむらとした墨で塗り込められている。向かって右から１・２面目の中ほどには黒々とした渦が描かれている。蕭白の代表作「群仙図屏風」（文化庁蔵）や「風仙図屏風」（ボストン美術館蔵）などにも同様の渦が描かれ，観者に強烈な印象を与える。前者では龍の出現で巻き起こった風と考えられ，後者では陳楠とされる仙人が召喚した龍そのものと解釈されているが[5]，ここでは「群仙図屏風」と同じく，龍の出現に伴う風と見なせよう。また２面目の下部の薄墨による円弧は「群仙図屏風」や「龍図」（石山寺蔵）に取り合わせられたモティーフや，「獅子虎図屏風」（千葉市美術館蔵）や「柳に亀図」（個人蔵）の水流を参考にすると，波濤と思われる。

４面目の中ほどに「曽我輝鷹図」の署名があり，「蕭白」（朱文壺形印）「師龍」（白文円印）２顆を押す（図2）。「蕭白」印は安永７年（1778）春の年紀がある「蘭亭曲水図」（個人蔵）より，やや欠損が進んでいるので，本図はそれ以降の制作と考えられる。

４．『十念寺大年譜』

本図を所蔵する十念寺は華宮山と号する，西山浄土宗の寺院である。寺伝では，永享３年（1431），後亀山天皇の皇子，真阿に帰依した足利義教が誓願寺中に一宇を建立したのが始まりとされ，豊臣秀吉の都市整備に伴い，天正19年（1591）に現在地に移ったとされる。江戸時代に入り，延宝の大火（延宝３年（1676））で総門と鐘楼以外の建物すべてを，天明の大火（天明８年（1788））で書院，庫裏，本堂を焼亡した。現在の客殿は天明の大火後，檀家である三代目丹波屋源助の多大な寄付により再建された。再建年代は不明であるが，過去帳によれば，丹波屋源助は文政７年に亡くなっているので，それ以前に再建事業が開始されたと考えられよう。

本図は現客殿の書院と仏間の境の襖であるが，制作は蕭白の没年である安永10年（1781）以前であり，どの建物のために誂えられたのかは不明であった。かつ十念寺には，本図の他に蕭白の襖絵は伝存していない。このため，当初の員数は何面であったのか，そもそも十念寺のために制作されたものであったのか，不明な点が多かった。宮島氏が本図を「断片」とされたのも，このあたりに要因があると思われる。

ところが，この度の指定に関わる調査で，新たな史料が見出だされた。

『十念寺大年譜』は十念寺に伝来した年譜で，第22世住持の洗空が編纂したものである。その「戊戌七」（安永７年）の項

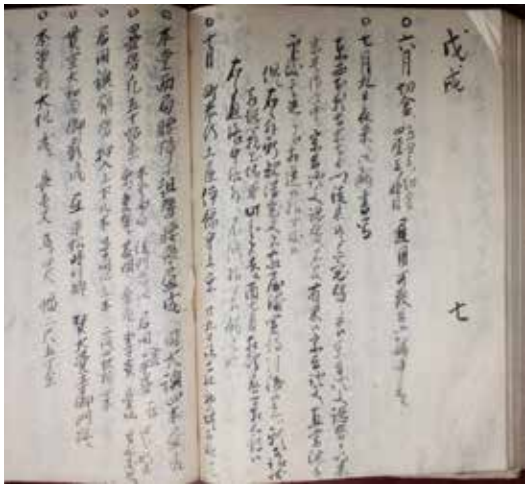


図３　『十念寺大年譜』（十念寺蔵）

に，以下の記述がある（図3）。

本堂両局腰障子組替，腰張画成，同大襖四本画成（読点は筆者）

この記事は，安永7年中に本堂の大襖の絵が制作されたことを示している。絵師に関しての言及はないものの，落款から判断される制作時期及び「大襖四本」という特長が本図と一致しており，この記述が本図に該当する可能性が高いと思われる。10月29日の記事に次いで記されるので，それ以降の出来事とも考えられるが，記事の時期が前後する場合も見受けられるので，断定は避けておきたい。

過去帳によれば，洗空普明は，延享3年（1746）3月から天明3年（1783）8月に63歳で示寂するまで，38年間十念寺に在住している。『十念寺大年譜』は，日記等の一次史料ではないが，当該記事は，まさに住持として洗空自身が経験した出来事であるので，史料としての信憑性は高いと思われる。

すなわち，本図は安永7年に十念寺本堂の障壁画として制作されたもので，制作当初から大襖4面であったと推定される。同時に腰障子の貼付画も制作されたようであり，波濤などで図様が連続した可能性もあるが，少なくとも龍を描いた大画面としては4面で完結したと見て大過ないだろう。当初，本堂の障壁画として制作された本図は，天明の大火から運良く助け出され，客殿再建に際して再利用されたと考えられる。

過去帳によれば，天明の大火で焼亡した書院の障壁画を制作したのは，海北派の4代目海北友泉である。友泉の障壁画は現存しないが，十念寺は海北家の菩提寺であり，友泉筆の「西山上人像」や3代目友竹筆「達磨図」なども所蔵されている。海北家の菩提寺に，蕭白の襖絵が描かれることになった経緯は不明ながら，近年まで，同寺には，蕭白筆「七福神扁額」が所蔵されており，先々代の住職の時代まで書院に掛

図4 「雲龍図」部分

けられていたという[6]。現在は所在不明となってしまったようであるが，複数の遺作の存在は，一時期，十念寺と蕭白の交遊があったことを想像させ，興味深い[7]。

5．おわりに

本図が制作された安永7年は蕭白49歳にあたる。この時期は，30代の蕭白の代表作に見られたエネルギッシュかつ奇々怪々な作風が影をひそめ，比較的穏当な作品が多く制作され，中でも高度の筆技が如実にわかる水墨の風景画が高く評価されるようになる。

そうした京都時代の作品群において，本図は，小嵜氏が指摘されるように，先行作品の構図に学びながら，襖4面を危なげなくまとめている。この「無難さ」により，「雲龍図」襖（ボストン美術館蔵）や，「群仙図屏風」（文化庁蔵）など，蕭白風が横溢する作品と比較すると，見劣りがしてしまうのは否めない。しかし，2メートルを越える大きさの襖は，実見すれば迫力があり，飄逸な龍の表情（図4）も壮年期の作品に共通する趣を感じさせるものである。

また，すでに佐藤氏が指摘されるように，本図は京都での需要者層の広がりを示すが，史料の存在により，本図の制作年と伝来の経緯が明らかになったことで，十念寺との関わりを再確認できた。これまで，京都での蕭白の交遊は禅僧を中心に語られることが多かったが，本図は宗派の別なく蕭白画が求められたことを示す好例と言えよう。

註・参考引用文献

1）指定名称は「客殿障壁画〈曽我蕭白筆／〉」。紙本墨画。4面。法量は各面縦206.8cm，横92.2cm。

2）宮島新一「（作品解説）紙本墨画雲龍図」（京都府文化財保護基金（編）『京都の江戸時代障壁画』，1978年，22～23頁）

3）佐藤康宏『新編名宝日本の美術 27 若冲・蕭白』（小学館，1991年）所収，103～145頁。引用箇所は142頁。

4）小嵜善通「（作品解説）雲龍図障壁画」（京都市文化財保護課（編）『京都市文化財ブックス第7集 近世の京都画壇 画家と作品』，1992年，41頁）

5）狩野博幸「（作品解説）風仙図屏風」（『もっと知りたい曽我蕭白 生涯と作品』，東京美術，2008年，44頁）

6）味方健『十念寺の六百年』（十念寺，2013年，82～84頁）及び同氏の談話による。

7）これに関連して記憶しておきたいのは，十念寺に所蔵される「仏鬼軍絵巻」が，江戸時代には一休宗純の自画作とされていた点である。元禄10年（1697）「仏鬼軍絵巻」を元にした版本が刊行されており，十念寺18世住持沢了による跋には，一休宗純の自画作と記されている。これは広く知られたようで，『都名所図会拾遺』の十念寺の項にも「『仏鬼軍図』一休和尚の筆なり。（中略）当寺什宝とす」とある（本井牧子「室町時代物語『仏鬼軍』について－新出本の紹介をかねて－」『京都大学國文学論叢』5号，2000年，1～19頁）。蕭白が禅僧とつながりがあったこと，自身「曽我」姓を名乗っていたこと，絵入版本を参照して作画を行っていたことなど，十念寺との接点は様々な側面から推測できるように思える。

掲載写真：図1は三原昇氏，図2・4は安永拓世氏，図3は筆者による撮影。

安井（やすい）　雅恵（まさえ）（文化財保護課　主任（美術工芸品担当））

祇園祭・八幡山の鶴形欄縁金具修理における蛍光エックス線分析調査と復元製作について

山下　絵美

１．はじめに

京都・祇園祭において，山鉾を鮮烈に彩る装飾品は，ハイライトである巡行を終えると，各町内の蔵に納められ，翌年まで休みにつく。しかしながら，それらは梅雨時の悪天候や，巡行時の振動と衝撃により少なからずダメージを受け，そのたびに修理や新調が繰り返されてきた。オフシーズンにこのようなメンテナンスが行われていることは，祇園祭の知られざる一面であるかもしれない。

なかでも錺金具（かざりかなぐ）は，もともと堅牢な材質ではあるものの，とくに繊細な細工部分や，衝撃の加わりやすい部分は，錆びや変形，折損，脱落などが生じる。修理や復元にあたっては，本来の姿を保持するために，その材質や製作技法を見極め，修理方針を立てる必要から，科学的な分析が行われることがある。近年では，蛍光エックス線による金属の非破壊分析調査が行われるようになり，製作当初により近い姿での修理・復元を目指すことが可能となった。

本稿では，平成27年度に実施された，八幡山（はちまんやま）の欄縁（らんぶち）金具の欠失部分の復元製作事業[1]において，蛍光エックス線分析による調査を行った結果を報告するとともに，得られたデータをもとに行われた復元製作について紹介する。

２．祇園祭の装飾品の現状

山鉾は，骨格となる木部と，それを飾る装飾品とで大きく構成される。装飾品は染織品・金工品・木彫品等に分けられるが，それぞれ京都の工芸技術の粋を凝縮した見事な品々が各町に伝来する。これらは近年，現状把握や保護・保存の必要から，詳細な調査が行われ，染織品においては『祇園祭山鉾懸装品調査報告書』が刊行され[2]，

図１　巡行時の八幡山（平成25年）

また金工品においては『祇園祭山鉾鍄金具調査報告書』として，15年にわたる調査成果が報告され[3]，各山鉾町に伝来する鍄金具の詳細が明らかにされつつある。

３．八幡山と その装飾品・所蔵品について

八幡山は中京区新町通三条下ル三条町を本拠とし，公益財団法人八幡山保存会により運営・維持がはかられている。応仁の乱以前よりその名が見られ[4]，現在は７月24日の後祭に巡行する舁山（かきやま）である（図１）。御神体である八幡神を祀る祠を山に勧請し，「八幡宮」の扁額を掛けた鳥居の上部に配した，向かい合う１対の鳩が山の姿を特徴づけている。

八幡山の所有する装飾品は，染織品においては，元禄３年（1690）寄進の墨書がのこる「慶寿詩見送」（清時代／17世紀後半）[5]や，工芸品においては，元禄17年（1704）の銘のある鬮箱（くじぼこ）など，宝永の大火（宝永５年（1708））以前の品々がのこるほか，各時代に新調された装飾品が伝わる。金工品においては，本稿で取り上げる鶴形欄縁金具をはじめ，雲形欄縁金具・桐文透幣串金具・葵文透幣飾台金具・雲文見送掛鳥居金具・見送房掛金具・霊芝形見送裾房掛金具・松菱形角房掛金具・東大寺蛮絵獅子熊文角房掛金具・岩形角房掛金具・魚々子文轅先金具・笹文轅先金具・鈴等が伝来しており，このうち多くの下絵を，町内の住人であった四条派の画家・八木奇峰（文化元-明治９年（1804-1876））が手がけていることが知られる[6]。

また，「祇園祭礼図」（紙本著色・６曲１隻／江戸時代・17世紀）〈京都市指定文化財〉は，海北友雪（慶長３-延宝５／1598-1677）の筆であり，江戸時代前期の山鉾巡行や，屏風飾りの様相を知るうえで貴重な資料である。

４．鶴形金具について

今回，復元新調を要する箇所は，山の四方を囲む欄縁に取り付けられる，鶴形金具の一部である。鶴形金具は７点あり，合計８羽の鶴が飛翔する姿を象ったもので，ひとつとして同じ姿はなく，躍動感と変化に富むものである（図２）。対象となる金具は，山の正面に取り付けられる，二羽が連なる姿の金具で，高さ12.0㎝，幅52.0㎝を測る[7]。向かって右に配される鶴の片足が欠失しており，それを補うことが本事業の主たる目的である[8]（図３）。

本品は鍛造鍍金で，銅板を高肉に打ち出す。嘴（くちばし）から翼までの体部と，尾羽・足を別造し，さらに裏面に取り付け金具を併せた二重構造である。瞳は別材を象嵌する。脚部・体部を鍍金，尾羽・嘴を煮色法により黒色に仕上げる。足は赤茶色（赤味が強く艶のある質感）と，茶褐色（茶色く艶消しの質感）の２種が認められ，尾羽の部分に裏から接着されている。羽の外郭は鋤彫（すきぼり），羽の毛筋や面部から頸部にかけての毛並みは毛彫であらわし，頭部は石目鏨（たがね）・点鏨，腹部は涙形の鏨，脚部も石目鏨など，数種の鏨づかいで肌をつける。鍍金は翼の裏面にまで及ぶ。

象嵌や着色，鏨の種類を多くすること

図２　鶴形欄縁金具

図３　鶴形欄縁金具　４（A）・５（B）

図４　刻銘（５（B）の左翼裏）

で，金属の多様な表情が引き出されており，町内の錺金具への意識の高さと，高水準の金工技術を窺うことができる。

翼裏面・腹部側面には刻銘があり，以下の通りである（／は改行）。（図４）

（翼裏面）
天保七丙申暦／八幡山／御再建ニ付／
奉寄進／彫鶴／八箇／乾／助次郎／
憲之
（腹部側面）
秀興作

これにより，天保７年（1836），八幡山の再建に際し，乾助次(治)郎なる人物が，秀興の製作した彫鶴を８箇（８羽）寄進したことがわかる[9]。

本品については，八幡山保存会が所有する資料群「三条町文書」の一資料からも裏付けることができる。「八幡山由緒書」[10]と題される資料で，天保９年時点での新古装飾品が冒頭に記される。冒頭には「八幡山飾物入記」，「新調物假控」，「寄進物調方控」の主な３項目があり[11]，天保７年から９年にかけての修復や再建，新調品についての詳細が記され，鶴形金具もその一連であることがわかる。

図５　「八幡山由緒書」

鶴形金具に関連する記載箇所を以下に挙げる。

①「新調物假控」より
四拾五番　幕縁
鶴之金物
此箱之内占　八箇但し七ツ
四拾弐番之箱と合セ之　〆色織包七ツ

右
奉納之　乾氏

②「寄進物調方控」より
乾助次郎
一　同（幕縁）金物鶴一式
但し八箇七ツ
代金六拾九両也
油小路御池上ル町
受負人　吉田多蔵

一　金壱両三歩五匁　右下画料
八木寄峰
細工人　釜座御池上ル町
河原林秀興
錺師　御幸町姉小路上ル町
錺屋嘉兵衛
滅金師　油小路二条下ル町
近江屋茂兵衛
彫物師　押小路東洞院東江入
彦七

本品本体に彫られた秀興なる人物は，細工人の河原林秀興であり，八木奇峰が下絵を手がけ，ほかにも多数の人物が携わったことがわかる。これらの記録は，錺金具の来歴がわかるだけでなく，錺金具の受発注の形態を知るうえでも興味深い資料である。

５．蛍光エックス線分析調査

本調査は，復元する足の地金の材質，および着色方法の検討のために実施された。鶴の足は前述の通り，赤茶色（赤味が強く艶のある質感：以下タイプＡとする）と，茶褐色（茶色く艶消しの質感：以下タイプＢとする）のものが各４羽ずつ見られる。図２にそれを示し，鶴１～８の番号を付した。今回，復元製作するのは鶴５に取り付くタイプＢの足である。欠失した足は付け根から折れ，ハンダ付けされた根本部分のみが残っていた。その残片を本体から取り離し，付着したハンダを除去した後，Ｕ字状であった形状を平坦に打ち広げて計測することとなった。

調査は地方独立行政法人京都市産業技術研究所の協力のもと，同所設置の蛍光エックス線分析装置で実施した。機種は，株式会社島津製作所製のエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置ＥＤＸ－800ＨＳである。

計測できたのは４箇所で（図６），その結果は以下の通りである。いずれもＦＰ法による半定量分析値を参考にし，評価したものである[12)]。分析データは[別添]として本稿末尾に添付する。

計測１では，鶴の足の残片の裏面，つまり着色の施されていない地金部分を計測した。結果，銅68.0％，銀30.6％，ほか少量の亜鉛・鉛が検出された。微量成分については，ハンダ成分の残存かと思われた。

計測２でも同じく，残片の裏面，地金部分の他の箇所を計測した。銅80.8％，銀19.2％が検出された。以上１・２回目の結果からは，地金は銅と銀の合金である四分一（しぶいち）であることが示された。

計測３では，残片の表面，つまり着色がほどこされた部分の計測を行った。銀58.9％，銅39.8％，硫黄1.3％が検出された。硫黄分が検出されたことにより，硫酸銅と緑青による煮色法での着色である可能性が示された。

計測４では，足の接着方法を検討する必要から，足の取り付け先である鶴本体の黒色に着色された尾羽の部分についての分析を行った。計測は鶴２を用いて行った結果，おもに銅96.3％，金1.6％が検出されたため，地金は赤銅（しゃくどう）である可能性が示され

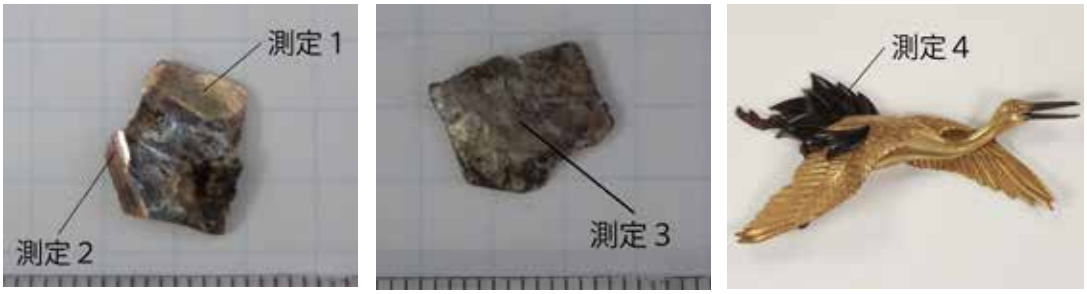


図６　測定箇所

た。黒色の着色に関しては，煮色法あるいは漆による着色と思われるが，目視による観察によれば，前者であると思われた。

以上の結果により，地金の材質は四分一，着色は煮色法で行うこと，また取り付け先の尾羽の変色を避けるため，蠟付けよりも低温で接着が可能なハンダにより取り付け，補強のために，留め針でかしめることで修理方針を決定した。

６．復元製作作業

前述の分析結果をうけ，いよいよ復元製作が進められた。工程はおおよそ以下の通りである。

①下絵

他に取り付く足をもとに，下絵を起こす。

②打ち出しによる形成

銅77％・銀23％の割合でつくられた，厚み1.2㎜の四分一地金を切り出し，焼きなましを行いながら，鎚起して立体形成する。四分一は銅よりも加工が難しく，また地金が薄いため，足先の爪や指の重なる部分など，より高く打ち延ばす部分は，地金が破けやすくなるため，焼きなましも最低限にとどめ，慎重に作業を進める。

③研磨（図７）

着色に備え，色乗りの妨げとなる酸化皮膜を除去するため，表面を炭や砥石で研磨する。

④彫金・鏨打ちによる表面の加工（図８）

鏨で表面に肌をほどこす。ウロコを表現する区画は，丸鋤鏨で表面を鋤きとって溝をつくり，滑刳鏨でなぞって質感を整える。ザラザラとした肌は石目鏨を打ち詰め，坊主鏨でウロコのゴツゴツとした面的な凹凸を表すなど，数種の鏨を用いて表情をつける。

⑤着色

重層等で洗浄して表面の脂肪分を除去した後，硫酸銅と緑青の混合液で煮沸する。

⑥接着と固定

足を本体に接着，固定する。取り付け先は，赤銅の地金に黒色がほどこされた鶴の尾羽部分である。加熱による尾羽の変色の危険を避けるため，蠟付（ろうづ）けによる接着は行わず，比べて低温で接着が可能なハンダによる接着を行う。ただし，接着力の耐久性・持久性に不安があるため，尾羽の２箇所に微小の孔をあけ，直径1.2～1.4mm程度の銅製留め針を作成のうえ，かしめる。

図７　彫刻前（表と裏）

図８　彫刻後

図９－１　完成（表面）手前の足が復元箇所

図９－２　完成（裏面）上の足が復元箇所

表出した留め針の頭部は，潰して表出面をフラットに整え，目立たぬようにする。漆で着色し，尾羽の黒色との調和をはかった。

以上の工程を経て，復元作業が終了した（図９）。

７．おわりに

近世の錺金具は，技術や表現も多様になり，それを熟知したうえで修復することが当然必要になる。また，特に祭においては，錺金具は常に輝かしいことが理想とされるなか，製作からおよそ200年が経とうとする多くの金具類を，いかに保存・維持していくべきかについては，様々な意見が聞かれる。高水準の金工技術で作られた当初の姿を傷めることなく修復し，以後も保全をはかりつつ取り扱うためには，所有者はじめ，監修者・修理施工者・文化財保護行政関係者等の共通理解が必要である。その意味でも，今回の調査と，それにもとづいた復元製作は，錺金具修復のひとつのモデルケースとなりうる。今後も慎重に修理事例を重ねていけるよう努めたい。

謝　辞

本稿を執筆するにあたり，公益財団法人八幡山保存会理事長・後藤正雄氏はじめ保存会の皆様，公益財団法人祇園祭山鉾連合会，地方独立行政法人京都市産業技術研究所・田口肇氏，久保智康先生，竹中友里代先生，京都市歴史資料館・井上幸治氏，同・野地秀俊氏に多大なるご協力・ご指導をいただいた。記して御礼を申し上げます。

註

１）本事業は祇園祭山鉾小口修理事業の一環であり，事業体制および経過は下記の通り。

事業名　平成27年度祇園祭山鉾小口修理事業

対象文化財　重要有形民俗文化財「祇園祭山鉾」（昭和37年5月23日指定）のうち八幡山

所有者　公益財団法人八幡山保存会

事務局　公益財団法人祇園祭山鉾連合会

監修　久保智康氏（公益財団法人祇園祭山鉾連合会専門委員）

修理検討会構成員　公益財団法人八幡山保存会・公益財団法人祇園祭山鉾連合会・久保智康氏・京都府文化政策課・公益財団法人京都市文化観光資源保護財団・京都府文化財保護

課・京都市文化財保護課・後藤社寺錺金具製作所

修理施工業者　後藤社寺錺金具製作所

工期　８ヶ月

総事業費　1,754,760円（鶴形欄縁金具２点のほか，前懸・飾房修理を含む）

適用補助金・助成金　平成27年度 京都府社寺等文化資料保全補助金（京都府文化政策課）543,000円

平成27年度文化観光資源保護事業助成金（公益財団法人京都市文化観光資源保護財団）580,000円

経過　平成26年，山鉾巡行終了後，公益財団法人祇園祭山鉾連合会が各山鉾町の修理希望をとりまとめ，平成27年，山鉾町巡回調査にて現状確認。八幡山における修理の実施を決定。８月18日の協議を経て，同26日，地方独立行政法人京都市産業技術研究所にて蛍光エックス線分析調査を実施。調査結果をうけ，地金からの製作を開始。製作期間中，彫金の仕上がりと着色方法の確認のための検討会を開催し，その後完成に至る。

２）祇園祭山鉾連合会『祇園祭山鉾懸装品調査報告書 渡来染織品の部』，2012年，『京都近郊の祭礼幕調査報告書』，2013年，『祇園祭山鉾懸装品調査報告書 国内染織品の部』，2014年。

３）祇園祭山鉾錺金具調査は，公益財団法人祇園祭山鉾連合会が，平成13年から同27年にかけて実施したもので，その成果として，公益財団法人祇園祭山鉾連合会『祇園祭山鉾錺金具調査報告書Ⅰ』2016年，『祇園祭山鉾錺金具調査報告書Ⅱ』2017年，が刊行された。八幡山の錺金具については，同書Ⅲ（同，2018年３月31刊行予定）で詳細が報告される。

４）「祇園会山鉾事」（『祇園社記』一五）の，十四日「応仁乱前分」の項に「八幡山　三条町と六角間」とある。八坂神社文書編纂委員会『新編八坂神社記録』2016年。

５）註２）『祇園祭山鉾懸装品調査報告書　渡来染織品の部』，134頁。

６）八幡山と八木奇峰の関わりについては，小嵜善通「八木奇峰と祇園祭八幡山」（『成安造形大学附属近江学研究所紀要』第４号，2015年）に詳しい。『平安人物誌』の記述から，奇峰はすでに嘉永５年（1852）には三条町に居住している。小嵜氏は，「八幡山由緒書」（本文後述）では，製作に関わった職人それぞれに住所の記載があるなか，奇峰には記載がないことから，同帳が成立した天保９年（1838）には，既に町内に居住していた可能性を指摘している。なお，八木奇峰が下絵を手がける装飾品は，「八幡山由緒書」によれば以下の通り（呼称は筆者による）。

１）鶴形欄縁金具

２）桐文透幣串金具

３）葵文透金幣飾台金具

（表面の双鳩図，裏面の鮎図も奇峰画）

４）霊芝形見送裾房掛金具

５）松菱形角房掛金具

６）魚々子文轅先金具

７）笹文轅先金具

７）その他の鶴形金具の法量は，全体に縦9.0～20.5㎝，幅27.5～33.0㎝を測る。法量については，平成26年に実施された，祇園祭山鉾錺金具調査での測定値を参考にさせていただいた。詳細は公益財団法人祇園祭山鉾連合会『祇園祭山鉾錺金具調査報告書Ⅲ』（2018年３月31日刊行予定）に掲載予定。

８）本事業では，欠失した鶴足の復元製作のほか，足の根元が折れ曲がった金具（［図２］のうち２（A））についても修理が行われた。

９）刻銘には「八箇」とあるが，伝来する鶴形金具は全７点である。これは「八幡山由緒書」で，鶴金具を「八箇但し七ツ」とも表記するように，鶴の個体数としては８羽であるが，２羽連なる金具が１点あるため，金具の個体数としては７点であることの意と思われる。

10）京都市歴史資料館蔵，N17，資料番号35。『史料京都の歴史 第９巻 中京区』，平凡社，1985年の

「中京区関係文書目録」では，文書名を「八幡山諸道具等覚帳」としている。

11)「八幡山飾物入記」には，古帳の写しとして，冒頭には「御寶殿」（番外）と，壱番から四拾弐番までの装飾品が記される。「新調物假控」には，天保九年戌六月に修復された「御寶殿」，同年に再建された「山木柄」と「長柄」（いずれも番外），そして四拾三番から六拾三番までの新調の装飾品が記される。「寄進物調方控」には，天保七年冬に武内弥右衛門なる人物が寄進した「幕縁木地并塗共」をはじめ，そこまでに記された各装飾品の寄進者や製作者，代金などが明記されている。

12）蛍光エックス線分析により得られたエックス線エネルギー値からは元素を特定でき（定性分析），エネルギー強度からは元素の含有量を算出することができる（定量分析）。ＦＰ法（ファンダメンタルパラメータ法）とは，検量線法のように標準資料を必要とせず，定性分析で検出された元素の合計量を100％として，理論的に含有量を算出する方法である。

引用

図２・３・４の写真は，公益財団法人祇園祭山鉾連合会（撮影：井上成哉）から提供いただいた。

別添の蛍光エックス線分析データは，地方独立行政法人京都市産業技術研究所から提供いただいた。

参考文献

八坂神社『祇園祭山鉾大鑑』，1979年。

京を語る会『祇園祭細見』平成２年３版，1990年。

京都市観光協会・祇園祭山鉾連合会『祇園祭2016』，2016年。

公益財団法人八幡山保存会ホームページ「はちまんさんのかわら板」（www.hachimansan.com）2015年８月21日閲覧。

山下（やました）　絵美（えみ）（文化財保護課　文化財保護技師　（美術工芸品担当））

別添

八幡山・鶴形欄縁金具の蛍光エックス線分析調査

測定日：平成 27 年８月 26 日
装置：エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置ＥＤＸ－８００ＨＳ（株式会社島津製作所製）
場所：地方独立行政法人京都市産業技術研究所
測定条件：表１ならびに各測定データの通り
測定箇所：図５ならびに各測定データの通り
結果：表２ならびに各測定データの通り

表１　測定条件

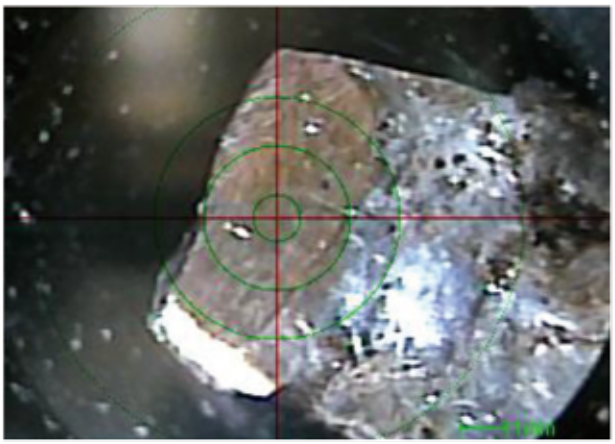
管球ターゲット元素	Rh	
コリメータ	⌀1mm	
フィルター	なし	
雰囲気	大気	
励起電圧(kV)	50	15
管電流(μA)	自動設定	自動設定
測定時間(秒)	60	60
定性元素	Ti-U	C-Sc

表２　分析結果

	S	Cu	Zn	Ag	Au	Pb	Ba	Ca	Rb	total
測定1		68.0	1.2	30.6		0.2				100.0
測定2		80.8		19.2						100.0
測定3	1.3	39.8		58.9						100.0
測定4		96.3		0.7	1.6		1.0	0.4	0.1	100.1

※本表は，地方独立行政法人京都市産業技術研究所から提供をうけ，筆者が一部書式を改めた。

測定 1



測定日時　　：2015-08-26 14:11:44

測定条件

装置名：EDX-800HS　雰囲気：大気　コリメータ：1(mm)

分析対象	TG kV	uA	FI	取込(keV)	解析(keV)	Time(sec)	DT(%)
Ti-U	Rh 50	202-Auto	----	0 - 40	0.00-40.00	Live- 60	27
C-Sc	Rh 15	1000-Auto	----	0 - 20	0.00- 4.40	Live- 60	9

定性分析結果

元素：Ag, Cd, Cu, Zn, Pb, As, Rh

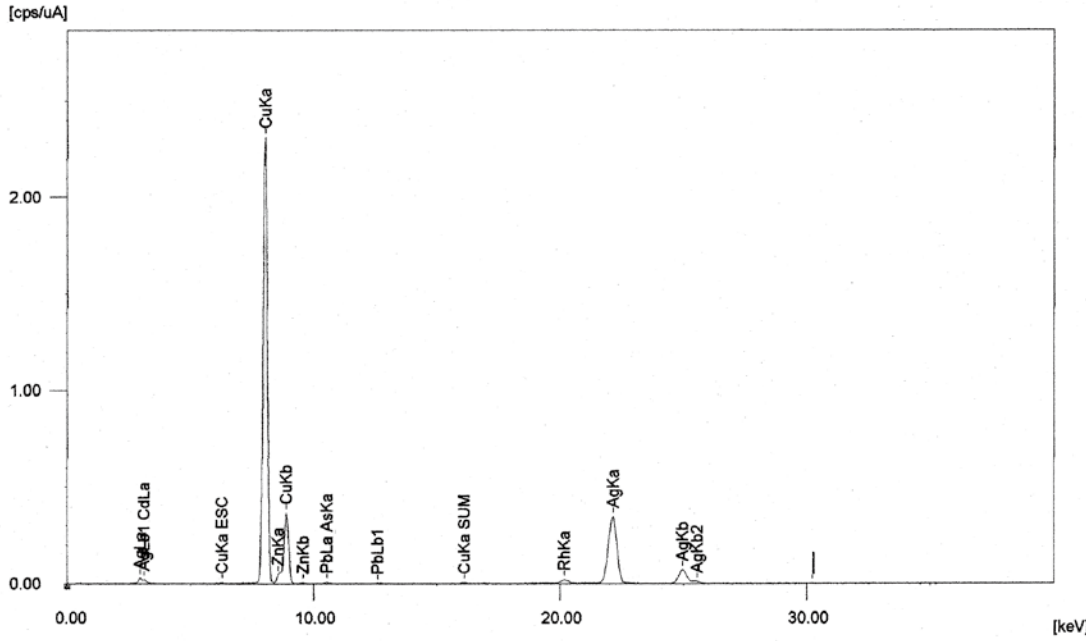
ピークリスト

チャンネル名	Line	keV	Net強度(cps/uA)	
Ti-U	AgLa	2.98	0.2106	
	AgLb1	3.14	0.1032	
	CdLa	3.14	0.0415	
	CuKaESC	6.30	0.0493	
	CuKa	8.04	23.5156	QF
	ZnKa	8.58	0.5035	QF
	CuKb	8.90	3.6401	
	ZnKb	9.58	0.0714	
	PbLa	10.54	0.0679	
	AsKa	10.54	0.0368	
	PbLbI	12.60	0.0335	QF
	CuKaSUM	16.12	0.0588	
	RhKa	20.18	0.2483	
	AgKa	22.16	6.3192	QF
	AgKb	24.96	1.1375	
	AgKb2	25.56	0.1458	
	----	30.22	0.0332	
C-Sc	AgLa	2.99	0.0825	
	AgLb1	3.16	0.0396	
	CdLa	3.16	0.0046	

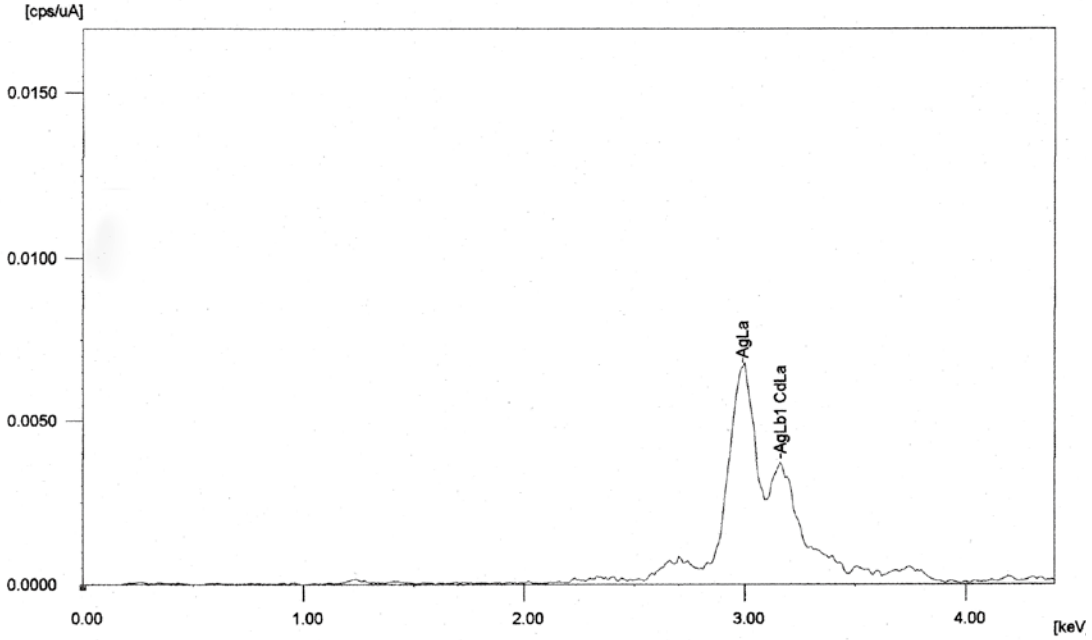
定量分析結果

分析対象	分析結果	[3σ]	処理-計算	分析線	強度(cps/uA)
Cu	68.001 %	[0.386]	定量-FP	CuKa	23.5156
Ag	30.618 %	[0.324]	定量-FP	AgKa	6.3192
Zn	1.193 %	[0.028]	定量-FP	ZnKa	0.5035
Pb	0.187 %	[0.040]	定量-FP	PbLb1	0.0335

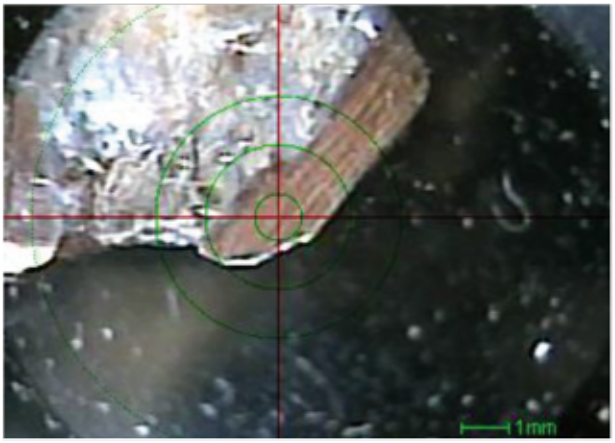
Ti-U


[cps/uA]
2.00
1.00
0.00
CuKa
AgLb1 CdLa
CuKa ESC
CuKb
ZnKa
ZnKb
PbLa AsKa
PbLb1
CuKa SUM
RhKa
AgKa
AgKb
AgKb2
0.00
10.00
20.00
30.00
[keV]

C-Sc


[cps/uA]
0.0150
0.0100
0.0050
0.0000
AgLa
AgLb1 CdLa
0.00
1.00
2.00
3.00
4.00
[keV]

測定２



測定日時　　：2015-08-26 14:21:42

測定条件

装置名：EDX-800HS　雰囲気：大気　コリメータ：1(mm)

分析対象	TG kV	uA	FI	取込(keV)	解析(keV)	Time(sec)	DT(%)
Ti-U	Rh 50	187-Auto	----	0 - 40	0.00-40.00	Live- 60	24
C-Sc	Rh 15	1000-Auto	----	0 - 20	0.00- 4.40	Live- 60	10

定性分析結果

元素：Rh, Ag, Cd, Cu, Pb

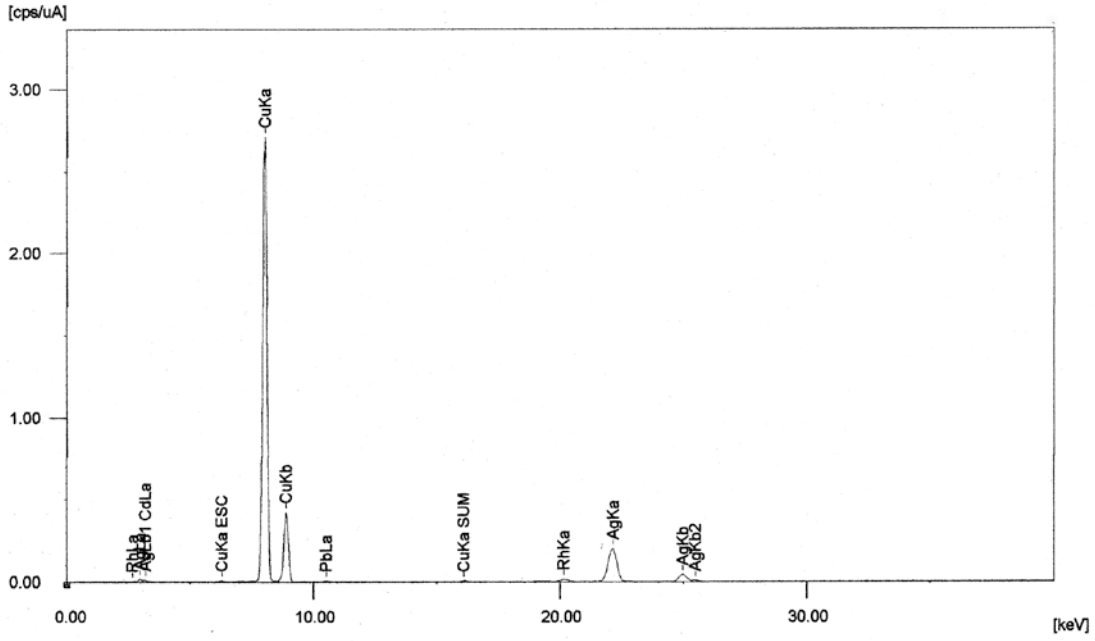
ピークリスト

チャンネル名	Line	keV	Net強度(cps/uA)	
Ti-U	RhLa	2.68	0.0162	
	AgLa	2.98	0.1417	
	AgLb1	3.20	0.0694	
	CdLa	3.20	0.0084	
	CuKaESC	6.30	0.0550	
	CuKa	8.04	27.4287	QF
	CuKb	8.90	4.2591	
	PbLa	10.52	0.0564	
	CuKaSUM	16.10	0.0723	
	RhKa	20.16	0.1955	
	AgKa	22.16	3.6942	QF
	AgKb	24.98	0.6650	
	AgKb2	25.48	0.1358	
C-Sc	RhLa	2.69	0.0067	
	AgLa	2.99	0.0505	
	AgLb1	3.16	0.0242	
	CdLa	3.16	0.0053	

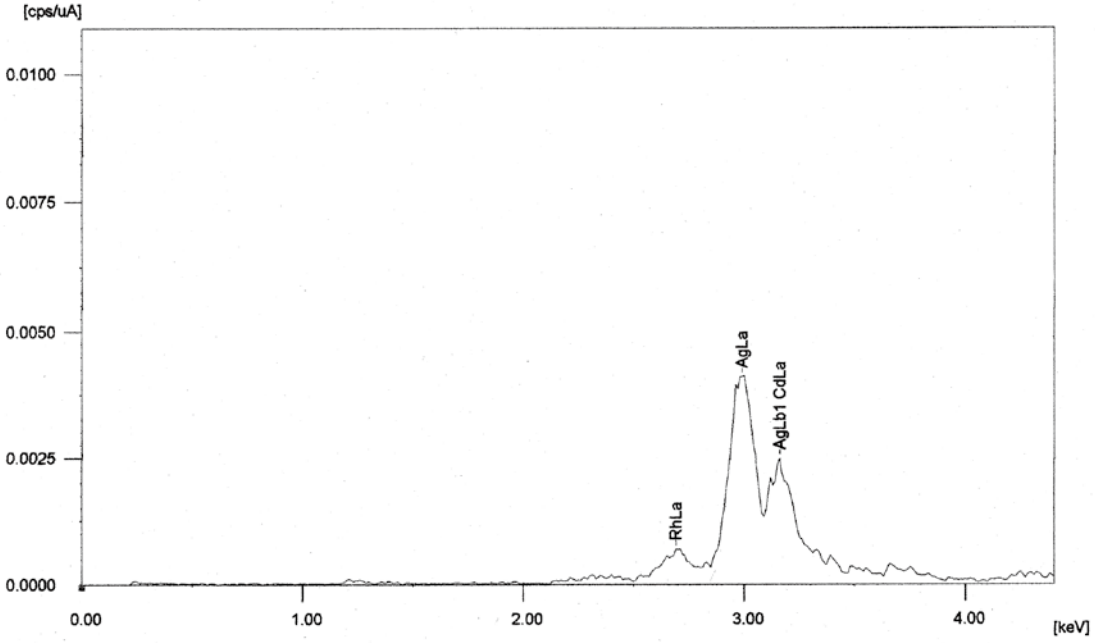
定量分析結果

分析対象	分析結果	[3σ]	処理-計算	分析線	強度(cps/uA)
Cu	80.761 %	[0.441]	定量-FP	CuKa	27.4287
Ag	19.239 %	[0.275]	定量-FP	AgKa	3.6942

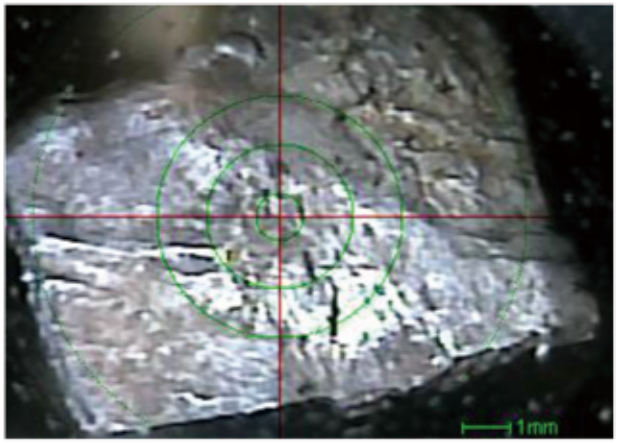
Ti-U


[cps/uA]
3.00
2.00
1.00
0.00
CuKa
CuKb
AgLb1 CdLa
CuKa ESC
PbLa
CuKa SUM
RhKa
AgKa
AgKb
AgKb2
0.00
10.00
20.00
30.00
[keV]

C-Sc


[cps/uA]
0.0100
0.0075
0.0050
0.0025
0.0000
AgLa
AgLb1 CdLa
RhLa
0.00
1.00
2.00
3.00
4.00
[keV]

測定３



測定日時　　：2015-08-26 14:30:08

測定条件

装置名：EDX-800HS　雰囲気：大気　コリメータ：1(mm)

分析対象	TG kV	uA	FI	取込(keV)	解析(keV)	Time(sec)	DT(%)
Ti-U	Rh 50	272-Auto	----	0 - 40	0.00-40.00	Live- 60	24
C-Sc	Rh 15	1000-Auto	----	0 - 20	0.00- 4.40	Live- 60	4

定性分析結果

元素：Rh, Ag, Cd, Cu, S , Cr, Fe

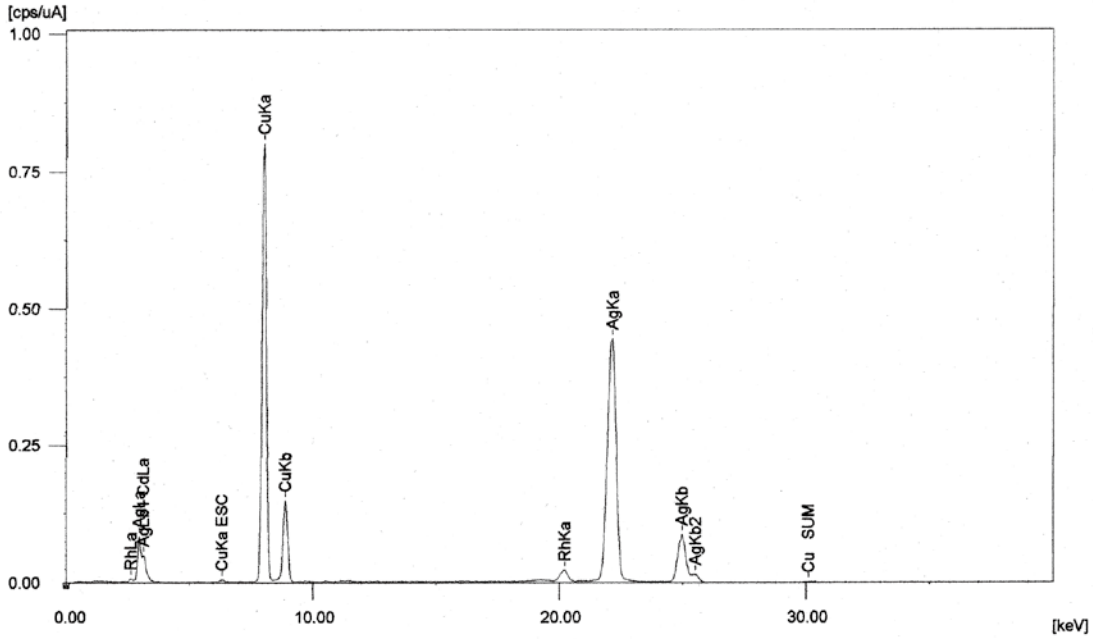
ピークリスト

チャンネル名	Line	keV	Net強度(cps/uA)	
Ti-U	RhLa	2.64	0.0376	
	AgLa	2.98	0.5962	
	AgLb1	3.16	0.2922	
	CdLa	3.16	0.0655	
	CuKaESC	6.34	0.0432	
	CuKa	8.04	8.3333	QF
	CuKb	8.90	1.2974	
	RhKa	20.22	0.2820	
	AgKa	22.16	8.2850	QF
	AgKb	24.98	1.4913	
	AgKb2	25.52	0.2207	
	Cu SUM	30.10	0.0218	
C-Sc	AgLaESC	1.24	0.0029	
	S Ka	2.36	0.0038	QF
	RhLa	2.63	0.0146	
	AgLa	2.98	0.2056	
	AgLb1	3.16	0.0986	
	CdLa	3.16	0.0207	
	CdLb1	3.32	0.0038	
	AgLb2	3.35	0.0272	

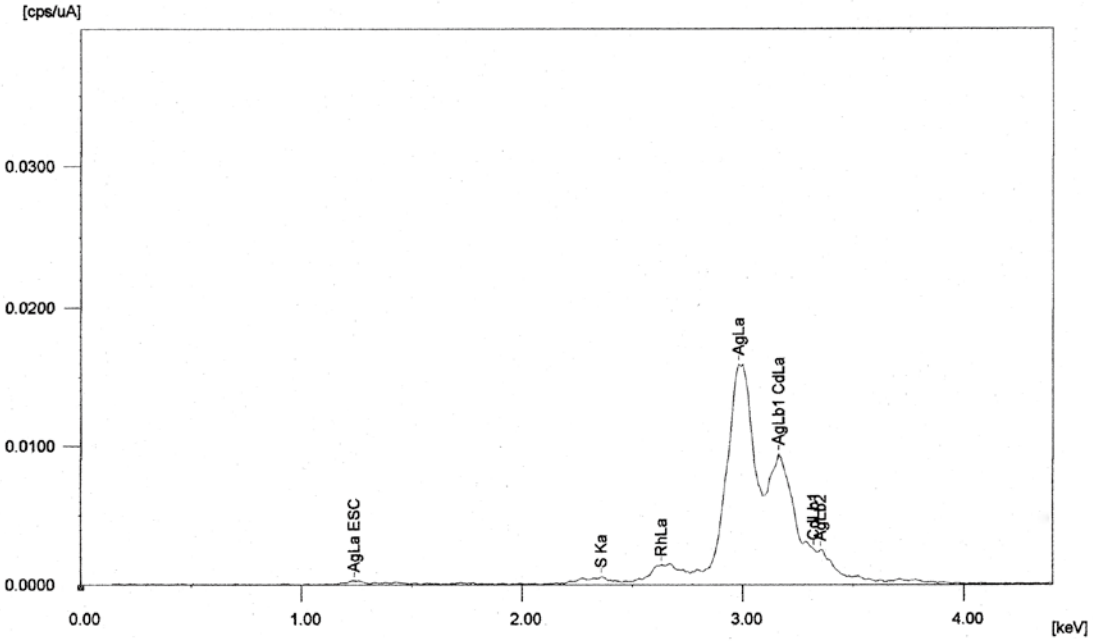
定量分析結果

分析対象	分析結果	[3σ]	処理-計算	分析線	強度(cps/uA)
Ag	58.883 %	[0.468]	定量-FP	AgKa	8.2850
Cu	39.795 %	[0.329]	定量-FP	CuKa	8.3333
S	1.321 %	[0.409]	定量-FP	S Ka	0.0038

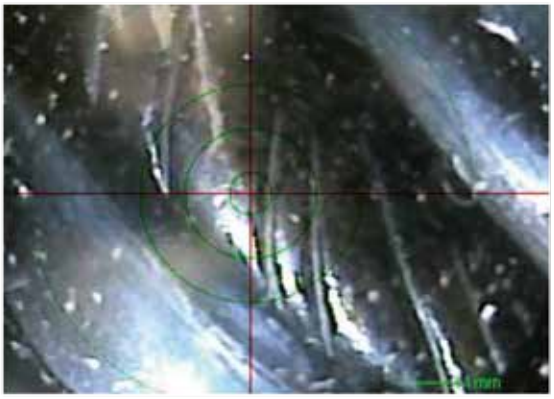
Ti-U


[cps/uA]
1.00
0.75
0.50
0.25
0.00
CuKa
AgKa
CuKb
CuKa ESC
RhKa
AgKb
AgKb2
Cu SUM
0.00
10.00
20.00
30.00
[keV]

C-Sc


[cps/uA]
0.0300
0.0200
0.0100
0.0000
AgLa
AgLb1 CdLa
AgLa ESC
S Ka
RhLa
0.00
1.00
2.00
3.00
4.00
[keV]

測定４



測定日時　　：2015-08-26 15:01:40

測定条件

装置名：EDX-800HS　雰囲気：大気　コリメータ：1(mm)

分析対象	TG kV	uA	FI	取込(keV)	解析(keV)	Time(sec)	DT(%)
Ti-U	Rh 50	157-Auto	----	0 - 40	0.00-40.00	Live- 60	24
C-Sc	Rh 15	1000-Auto	----	0 - 20	0.00- 4.40	Live- 60	12

定性分析結果

元素：Rh, Cu, Au, As, Rb, Ag, Ca, Ba

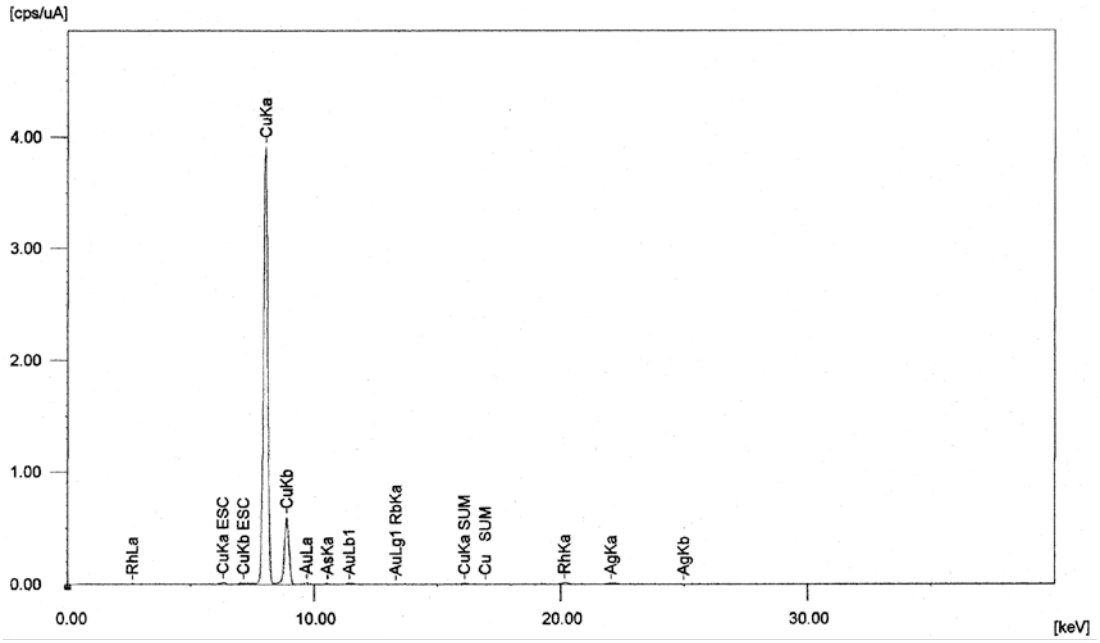
ピークリスト

チャンネル名	Line	keV	Net強度(cps/uA)	
Ti-U	RhLa	2.64	0.0297	
	CuKaESC	6.32	0.1236	
	CuKbESC	7.16	0.0505	
	CuKa	8.04	39.0098	QF
	CuKb	8.90	6.0587	
	AuLa	9.70	0.1472	QF
	AsKa	10.54	0.0876	
	AuLb1	11.44	0.0828	
	AuLg1	13.32	0.0075	
	RbKa	13.32	0.0190	QF
	CuKaSUM	16.10	0.1235	
	Cu SUM	16.96	0.0462	
	RhKa	20.16	0.1589	
	AgKa	22.04	0.1359	QF
	AgKb	24.98	0.0245	
C-Sc	RhLa	2.65	0.0117	
	RhLb2	2.96	0.0053	
	CaKa	3.73	0.0066	QF
	----	4.28	0.0075	
	BaLa	4.40	0.0089	qf

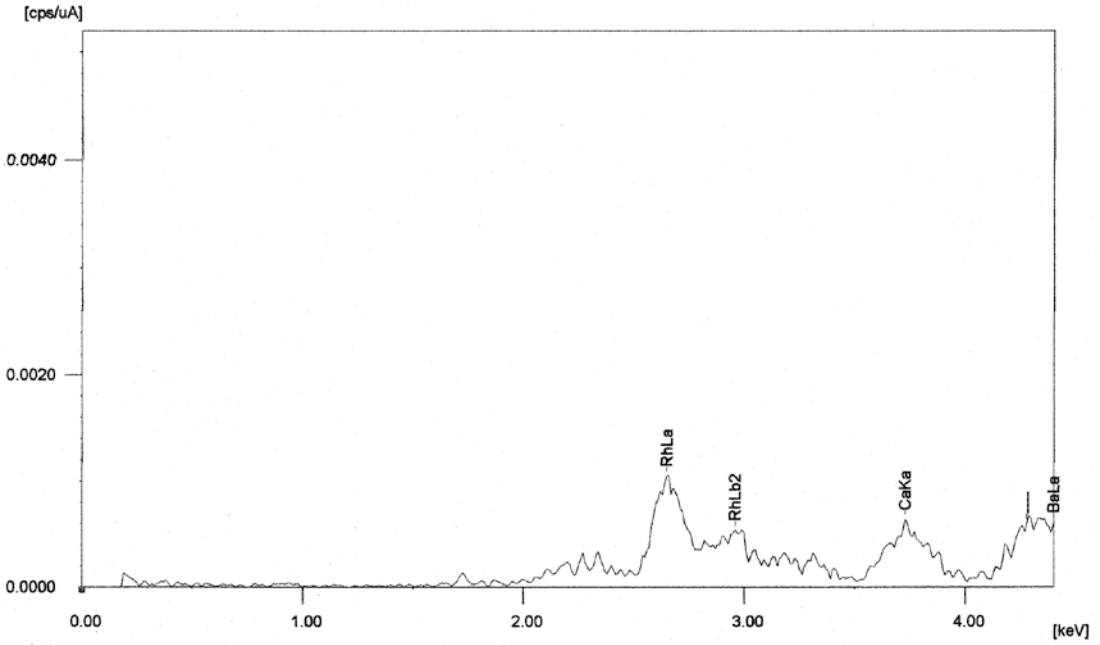
定量分析結果

分析対象	分析結果	[3σ]	処理-計算	分析線	強度(cps/uA)
Cu	96.335 %	[0.480]	定量-FP	CuKa	39.0098
Au	1.585 %	[0.123]	定量-FP	AuLa	0.1472
Ba	0.953 %	[0.092]	定量-FP	BaLa	0.0089
Ag	0.656 %	[0.043]	定量-FP	AgKa	0.1359
Ca	0.421 %	[0.047]	定量-FP	CaKa	0.0066
Rb	0.050 %	[0.017]	定量-FP	RbKa	0.0190

Ti-U


[cps/uA]
4.00
3.00
2.00
1.00
0.00
RhLa
CuKa ESC
CuKb ESC
CuKa
CuKb
AuLa
AsKa
AuLb1
AuLg1 RbKa
CuKa SUM
Cu SUM
RhKa
AgKa
AgKb
0.00
10.00
20.00
30.00
[keV]

C-Sc


[cps/uA]
0.0040
0.0020
0.0000
RhLa
RhLb2
CaKa
BaLa
0.00
1.00
2.00
3.00
4.00
[keV]

名勝

山県有朋と無隣庵保存会における無隣庵の築造と継承の意志の解明

今江　秀史

１．研究の目的と展望

京都市左京区南禅寺草川町に所在する無隣庵の庭は，明治27年から29年（1894-96）にかけて，明治の元勲・山県有朋（1838-1922，写真１）の別荘内に設けられた（図１，写真2)。昭和16年（1941）には財団法人無隣庵保存会から京都市へ寄贈され，昭和26年には国の名勝に指定された[1)]。平成28年（2016)，その運営と保存管理は，無隣庵と同じく京都市が所管する国の史跡・岩倉具視幽棲旧宅（京都市左京区岩倉上蔵町）と共に指定管理者制度[2)]へ移行した。京都市において無隣庵を所管する文化市民局では，この制度移行を契機として，無隣庵の適切かつ効果的な保存管理の実現を目指して，平成27年３月に＜名勝無鄰庵庭園＞の保存管理指針を策定した。本研究は，この保存管理指針の策定に伴う資料，現地調査を敷衍したものであり，山県有朋が無隣庵を築造，利用した経緯と無隣庵保存会による同所の継承の経緯を資料に基づいて分析し，双方による築造と継承の動機，意志の解明を目指すものである。その結果は，将来に向けて本市が無隣庵を継承し続けていく上での具体的な指標となる。

写真１　山県有朋 肖像

研究の展望は以下の通りである。従来の庭の研究では，資料から庭に関する箇所だけを抽出し演繹的にその意味づけを行ってきた。本研究では，庭を包含する邸宅・無隣庵の築造と利用形態を，その創設者である山県有朋の社会活動と対人関係に求め，無隣庵の成立と継承の動機をその築造から無隣庵保存会の解散までの経緯に基づいて探求する。

最初に，無隣庵の築造時に山県が置かれていた状況と，要職を歴任しながら利用され続けた無隣庵の利用形態を幅広い資料に基づいて分析する。次に山県が生前に創立し，その孫・有道らによって解散された無隣庵保存会の活動と元来の無隣庵の継承の意味を，主として「無隣庵重要書類（昭和15年)」に基づいて分析する。それら分析結果に即して，無隣庵が山県によって築造され，無隣庵保存会を通じて京都市

へと継承されてきた意味を解明する。

なお＜むりんあん＞の表記は，京都市の条例[3]に基づけば＜無鄰菴＞，文化財名称は＜無鄰庵庭園＞である。本文中では通称の＜無隣庵＞の表記を用いる。敷地内の呼称は，原則として形態概念図（図２）と形態ツリー図（図３）に基づくものとする[4]。

２．無隣庵の築造時において山県有朋が置かれていた状況

山県有朋は，生涯において無隣庵と呼ばれる邸宅を全３箇所設けた。第１番目は，慶応3年（1867），山県の故郷である長州（現在の山口県吉田の清水山山麓）に結んだ草庵であった。第２番目は京都市中京区木屋町二条下ル東生洲町に営まれた別荘であった。左京区南禅寺草川町に現存する邸宅は，第３番目の無隣庵に当たり，山県にとって２番目の京都別荘であった。第２番目の無隣庵の築造から譲渡と第３番目の無隣庵の土地取得については，善太郎『近代京都の東山地域における別邸・別宅群の形成と数寄空間に関する研究』において詳らかにされている[5]。

第２番目の無隣庵は，山県が第１次内閣を辞職した明治24年（1891），木屋町二条の角倉別邸跡に築造された。その普請内容は詳らかではない。その翌年に山県は，同邸宅の管理人であった下村一貫を通じ，隣接地の借入を京都府に出願するが認可されなかった。明治25年11月，１年４ヶ月あまりの短期間をもって木屋町二条の土地は手放された。矢ヶ崎は，同年６月17日から２週間ほど，山県が第２番目の無隣庵に滞在したことを伝える「日出新聞」の記事を引いて，その滞在中に第５代京都府知事を務めた中井弘や実業家の久原庄三郎と会合した出来事について，以下のように述べる。

> 売却直前の第二無隣庵で，山縣と久原や中井との間で何が話し合われていたのか，今それを知る資料はない。しかし，山縣の有力者との同行が報道され，その後に山縣が第二次無隣庵を売却し東山南禅寺の近傍に第三次無隣庵を造営する事実を勘案すると，山縣の第二次無隣庵売却と南禅寺近傍での第三次無隣庵の建設に，久原や中井が何らかの関わりをもっていたとする仮定も成立しよう[6]。

日清戦争が勃発した翌年の明治28年，山県は56歳の高齢にもかかわらず，第一軍司令官として朝鮮半島へ渡った。しかし元より身体が弱かった山県は，海外の過酷な環境の影響もあって病を患い，勅語により帰国することになった[7]。同29年に山県は,病気の悪化を理由に軍務を退く事態となった。山県は，天皇の信頼が厚かった一方で，伊藤博文ら文官との関係の緊張，若い軍人の台頭などにより，引退を意識せざるを得ない状況に追い込まれていた。この山県にとって抜き差しならぬ状況で，無隣庵の築造は始まった。

なお，この時期の日本は産業革命の只中にあった。明治27年の京都では，当時の京都府第２の都市であった舞鶴と京都をつなぐ京鶴鉄道の議案が通過し，翌年の第４回内国勧業博覧会と平安奠都千百年記念祭，平安神宮創建の準備が行われている最中であった。それらの準備は，戦時下でも予定どおり進められていた[8]。

無隣庵の土地所有の経緯を辿ると，「山縣は一部については明治29年まで，大部分は同35年まで，久原庄三郎あるいは京都市の所有地で別邸を造営，庭園をつくり完成させ，後に譲ってもらっていたことになる」[9]。なお『京都坊目誌』によると[10]，無隣庵の敷地の前身は，近世には瓢亭と並んで著名であった「丹後屋」[11]と推定されている。また『新撰花洛名勝図会』には，現在の位置に移設される前の南禅寺の惣門と丹後屋，瓢亭が東西に並立した情景が描かれている[12]。

無隣庵築造の着手時期は，現在の京都新聞の前身に当たる「日出新聞」の元記者で『江湖快心録』３部作を著した黒田天外（譲）が明治33年に山県に聴取したところによれば，同27年である[13]。同書によると山県は，日清戦争への出征中，実業家・久原庄三郎（1840-1908）に庭の築造を託していたが，翌年の病による召還の閑暇をきっかけとして，無隣庵の敷地拡張を企図することになった。なお佐藤信は，同26年に山県が当時の学習院の院長・田中光顕[14]に宛てた書簡（「田中宛山県書簡」）を引いて，「邸宅について山県の全幅の信頼を得ていた田中光顕は，地所の選定から第三次無隣庵増築に関わることに」なり，「久原庄三郎とも直接連絡を取りながら，山県にも図面や計算書を送付するなど，すべての「指揮」を担当した」と指摘する[15]。同28年には工事が本格化し，無隣庵への鉄管の敷設と引水の工事が京都市水利事務所によって行われた。山県は，同年３月に陸相へ就任し実質的に軍務に復したが，５月には早くも辞任し，戦争の恩賞として功２級金鵄勲章と年金１千円（現在の約２千万円）を授かった。また山県は伯爵から侯爵となり，天皇からの特旨で３万円（現在の６億円以上）を与えられた[16]。

無隣庵には，琵琶湖疏水の水が引き入れられた。山県は，明治23年の首相を務めていた当時，明治天皇のお供としてその竣工式典に出席していた[17]。同疏水は，天皇東幸後の「京都策」２期目の中心的な施策として，主に工業の近代化に資する目的で引かれ，土木技術者・田辺朔郎（1861-1944）の発案により水力，運河の開発，さらには上下水道・灌漑用水・電力の利用が付加されることになった[18]。元来，庭への引水はそれらの副産物であった。

無隣庵の拡張工事は同29年まで続き，翌年一応の完成に至った。その時期は，日清戦争の勝利後，日清通商航海条約に調印された年に当たる。その間，京都は博覧会や先勝祝賀会の高揚の中にあったが，政府は早くも次の戦争の準備に取り掛かっており，露仏独の三国干渉による対外的緊張状態にあった。このように無隣庵は，激動の時代の渦中で政府の重責を担っていた人物を施主として成立したことになる。

３．山県有朋における無隣庵の利用形態

山県の自宅は，椿山荘（東京都文京区）や古稀庵（神奈川県小田原市）であり，結果的に無隣庵はこれらの自邸に伴う別荘となった。実業家で数寄者・高橋義雄（箒庵，1861-1937）は，「是れ（無隣庵）が公の大規模なる庭園の処女作である」[19]と述べたが，明治10年（1877）の西南戦争後に造営された椿山荘には，本格的な庭

が設けられていた[20]。

同36年４月には，無隣庵の洋館において，山県と伊藤博文，桂太郎，小村寿太郎による会議（無隣庵会議）が行われ，日露開戦が決定される場となった。その出来事について，桂太郎は自叙伝において以下のように述懐している[21]。

> 当時，西京の山縣候別邸に，藤候，外相，予と会談の事を藤候に謀りしに，候之に同意し，21日午後，３人相前後して，西京山縣候の邸に至り，前述の主意に於て謀議せしに，事の止む可らざるを認め，此基礎の上に，露国と談判を開始する事を決議せり。

京都市土木局庶務課が編纂した『無隣庵』によると，「畏くも明治31年10月24日には，皇太子殿下の行啓を忝うし，また大正11年11月12日には，皇后陛下の御立寄の光栄に浴してゐる」と記述されている[22]。さらに大正10年の松風嘉定を発起人として結成された洛陶会が主催した東山大茶会では，無隣庵が煎茶席として用いられた[23]。

このように無隣庵は，歴史的な出来事として文献に登場する一方で，山県による個人的な利用等についての記録が残っている。本章では，主として黒田天外著『続江湖快心録』や無隣庵内に建てられている石碑「御賜稚松の記」の記述などに基づいて，山県による無隣庵の利用形態を分析する。引用箇所の最後に記載した括弧内の数字は，同書の該当ページ数である。

（１）無隣庵における黒田天外の体験

黒田天外は，明治33年に無隣庵現地で山県と談話をした時のことを『続江湖快心録』において詳述している。その記述によると，当時山県は以下の順路に従って無隣庵内を案内したことが知られる。庭内へは，座敷から入場する。園路を通じて東進し，北側から南西に流れる流路内に打たれた沢飛び石を渡り，さらに東側に進路を進めると，園池北側の大石の前方に至る。そのまま道なりに進むと，斑入りの笹がみられ，３段の滝の前方に至る。そこから進路を南に向け道なりに西進すると，恩賜松の碑，茶室を横切り，座敷へと戻る。

それでは，同書を一部引用し，現状の無隣庵の様子と照合しながら，山県における無隣庵の利用形態の分析を試みたい。

> 庭下駄を穿ち，　々と清韵を鳴し去る清流を過れば，左方は樅の木二三十本，針様の葉疎々として流れを挾み林をなし，前には大佛の石垣かとも思はれ而も皴劈面白き巨石は屹然として峙だちぬ。（p.2）

主屋の座敷の北側には，20～30本のモミが林立し，大佛殿の石垣から移設されたと思われるほど大きく特徴的な皺をもった巨石が据えられていた。この箇所は，現在の〈⑤池―ｅ芝地周辺・西側〉に該当する。座敷西側のモミの群植は，本数が減っている可能性はあるが現存している。先述の「大佛殿」とは，かつて豊臣秀吉が造立した大仏を安置した方広寺を指しており[24]，残存する同寺の石塁[25]のことが語られている。この巨石について山県は，「それで此石は親ら醍醐の山へ行て切出さしたのであるが，豊公が庭を作る時に切出そうとして，遣ひ残りになつた石がそこここに

磊々してゐて，中には其刄跡が残つてあるものがある，妙ぢゃないか喃。」と言ったという[26]。

なお高橋義雄は，「此の大石は無隣庵庭前の主人公とも見るべきもので，之を此庭前に拉致するに就て一場の物語りがある，初め山縣公の無隣庵を築造せらるゝや，一日豊太閤の経営に係る大佛殿の石垣を見て，其大石は何処から運ばれた物かと問ひ質された処が，是は其当時醍醐の山奥より引かれた者で，山科の谷間には今でも其取残しの大石があると言ふ事を聞かれて公は俄に興味を催し，実地検分の上遂に此石に着目せられたが，固より非常の大石なれば牛二十四頭を以て牽き来るに，道路がメリ込て運搬非常に困難を感ぜしも，今日と違ひ其頃は道路に障害物が少かつたので，首尾克く庭前に引入るる事ができたさうである」と述べている[27]。

> 左方の小徑を繞り，杉樹の蔭を過ぎて巨石の裏手に出れば，こゝは鬼芝を細かく苅こみたるやゝ平坦の小丘にして，左方は杉樹矗々とし，右方は清流の上にしてやゝ廣く池の如くひろがれるが，其底はいと淺くして尚ほ川の趣致を失はず，打杭ありて一段をなし水落て淙然たり。（p.2-3）

周囲に杉が植わる巨石付近の園路を西奥に進むと，芝生が細かく刈り込まれた平坦な小丘に至る。その北東側には杉がそびえ立ち，南西側にはやや池のように幅の広がった流れが広がる。流れ底はとても浅く，打杭によって落差が一段築かれていたことが述べられている。この箇所は，現在の〈⑤池―ｅ芝地周辺・東側〉であり，現状との大きな違いはみられない。

> 川に沿ひ斑入笹の茂れる小徑を横ぎりし時，取次の人は後ろを顧りみ曰く，アヽ，侯爵が見江ました，左様ならばと，流れを渡り前方に向ひ辭し去る。（p.3）

流れに沿ってある園路の傍らには，斑入りの笹が植わっていた。この箇所は，現在の〈⑤池―ｅ芝地周辺・北東側〉に該当し，現状との大きな違いはみられない。この斑入りの笹は現在も同箇所で生育している。

> 再び斑入笹の茂れる小徑を過ぎ，川べりに出で前方を見れば，杉樹楓樹など錯出掩映して稍暗き處，白玉簾の如き大瀑懸り，突然偃蹇せる怪石巨巖に觸れて三段となり，其聲轟々淙々とし，兩岸の樹木小草また氣勢を生ずる如く覺へぬ。（p.3-4）

前述の斑入りの笹が植わった箇所から南進し，沢飛び石の打たれた流れに至り東側を見ると，杉や紅葉が林立する暗がりの中に，玉簾の白滝のような滝が，突如として高く聳えている。それは，特徴的な巨石によって３段に組まれており，大きな音を立てて澱みなく流れていた。この箇所は，現在の〈⑤池―ｈ滝口周辺〉に該当する。山県は，この滝に関して「…此前東京から連て来た槖駝師は，あの石の畔にずーつと前へ向て枝の垂れ走つてゐる松を栽るとよいといふたが，どうも此地には夫に適当したよい松がないからいかん，それで其槖駝師は，ここに坐つて三日考へておつたか，夫まで瀧壺がなかつたのをこしらへる

ことと，外一二注意して，もう外には何にも申上ることがないと云ふて帰りおつた」と述懐している[28]。この東京の稾駝師とは，山県が好んで使った「（岩本）勝五郎」という庭師であったとみられる[29]。

歎賞之を久ふし川を渡りしが，前岸は緑樹葱々とし，其奥に八九輪ほどの石塔を安んず。こゝを過て岸邊は青氈の如き芝艸いと淨く，楓樹並に岩石の配置また面白し。（p.4）

黒田がつくづく感心しながら流れを渡ると，前方南側の岸辺には樹木が生い茂り，８・９重の石塔が据えられていた。その辺りを過ぎて岸辺に至ると，青い毛氈のように清らかな芝地があり，紅葉が並び立つ中に景石が据えられていたことが述べられている。この箇所は，現在の〈⑤池―ｇイロハモミジ周辺〉であり，紅葉林と景石との関係性に関心が持たれていたことが言及されている。前述の８・９重の石塔は現存しない。

（２）黒田天外が聞き書きした山県有朋の言述

黒田天外は，自身の体験談に加えて，山県の言述についても記録している。以下，その箇所を抜粋し現状の無隣庵の様子と併せて分析する。

候曰く，この石の据へ方などなかゝゝ苦しんだじや。と，眞に然らむ。（p.4）

ここでは，（⑤池―ｇイロハモミジ周辺の）景石の据え方がとても困難であったことが述べられている。

侯は一の平面石の苔の下低く歿せるを指ざし，曰く，之は据ゑた時はよかつたが，苔が上りをつて低くなつたから困つてゐるのだ。と，（ｐ.4）

山県は，苔の下が低く沈んだ平坦な石の一つを指さし，苔が盛り上がり次第に低くなって困っていたことが述べられている。この記述からだけでは，当該の箇所と現状との照合が困難である。

左手なる小徑を過れば，一棟の茶室あり。侯曰く，これは元岡本某とかいふ國學もあり且つ茶の好な者が建たもので，以前は彼方にあつたのをこゝへ引かせたのだ。（p.4）

敷地南側の園路を進めば一棟の茶室がある。山県いわく，元々これは国学者で茶の湯を好んだ岡本某が建てたものであり，以前は別所にあったものを無隣庵に移築したという。この箇所は，現在の〈②露地―ａ建物周辺〉に該当する。この岡本某という人物について，具体的な説明はないが，同時代に活躍した国学者として岡本保孝（1797～1878）がいる[30]。一方，高橋義雄はこの茶室の由来を「珠光の好みで藪内紹智の家に在る燕庵を写されたるもので，是は丹波の古望某氏方にあつた古席を蹲踞石，石燈籠諸共に当初に移されたと云う事である」[31]と述べているが，前述の山県の証言とは一致しない。また高橋は，この茶室の利用について「明治29年京都南禅寺畔に無隣庵を経営せられたときには庭隅に三畳台目の茶席を造り京都の道具商で松岡嘉兵衛と云つた老人を招いで点茶手前を稽古し，又茶客を招ぐに必要な道

具を取揃へ，自ら主人と為つて当地の茶人伊集院兼常望月宗匠などを呼ばれた事があつた」[32] と述べ，山県が松岡嘉兵衛[33]という道具商から茶の湯の手前を習った可能性を示している。

侯は其西手勾欄のつきたる椽端を指ざして曰く，こゝは元利休が祭つてあつたのを取拂つたので，叡山など能く見へ眺望がよいから出て見玉へ。と，余は乃ち出て欄に凭りしが，此日は天氣いと清和なるも，薄き靄立罩めて叡山はよく見へず，前なる東山は藹々として，尚ほ一重の薄絹を隔つるが如く，風趣殊に佳絶なり。侯曰く，ムゝ，今日は靄でよく見へんな。（p.5）

山県は，茶室北西の勾欄が付いた縁の端を指さして，その部分には元々利休像が祀ってあったが取り払ったと述べ。そこからは，比叡山がよく見えて眺望がよかったという。現状の茶室も，北西角には勾欄が付き外が眺められるようになっていた。また茶室西角に利休像が祀られていたということは，その箇所が祖堂（利休堂）であったことを意味する。

悉く見終り侯に從つて出しが，余は此茶室は何といふ御名でムいますかと問へば。侯は答へて，ムゝ，まづ草川廬とでもしようかと思ふので，夫は此前の小川は草川といひ，昔からの名所であるといふのから。と，語られぬ。（p.5）

黒田が茶室の名称を訪ねた所，山県は，そもそもこの（敷地の前を流れる）小川は草川と言い，昔から知られる名所なので，茶室の名称は「草川庵」とでもしようかと言った。『京都坊目誌』によると草川は，「水源駒が瀧に発し。末は白川に合す」[34] とあり，南禅寺境内の東側山奥に現存する駒ヶ滝を源流とする自然河川であったが，すでに絶えたものと考えられる[35]。前述の『新撰花洛名勝図会』の挿図では，丹後屋と瓢亭の北側に一筋の流れが東西に流れていた様子を確認できる[36]。江戸期の丹後屋と瓢亭は，「古今の名物両店の繁盛ハこれも花洛の一奇といふべし」といわれた[37]。さらに『都林泉名勝図会』には，「名物南禅寺湯豆腐店」として，丹後屋の店先の様子を描いた挿図があり，店内には水流上に橋が架かった様子が描かれている。『新撰花洛名勝図会』と『都林泉名勝図会』の挿図を照合すれば，その水流は，暗渠を潜って瓢亭に通じていた可能性がある[38]。

また進む數歩，侯は瀑布の下流と草川と合流する畔に佇立し，南手なる西洋造の二層樓を顧りみて曰く，どうもこんな建築は妙でないが，物を藏れる倉庫がないからそれで造つたのだ。ヲゝ，いづれ繁鬱した樹木などで此方は遮蓋すつもりぢやが。と，小石橋を渡り，從ひて書院に歸りぬ。（p.5-6）

山県は，琵琶湖疏水から引水した滝から西側の流れと草川が合流する地点に立ち，南方にある２階建ての洋風建築は，収蔵する倉庫がないので造ったものであり，いずれ樹木で鬱蒼とさせて遮蔽するつもりと言った。その後，山県と黒田は小さな石橋を渡って書院に帰った。この箇所は，現在の〈④流れ―ｄコケ地周辺〉に該当する。この洋館について，高橋は「西洋館は老公

の防寒室とも云うべき物である」と述べている[39]。

それで此地の槀駝師などは，瀑布の岩石の間に歯朶を栽るといへば不思議に思ふ。樅の樹もここに三十本程栽たが，常時は樅樹といへば槀駝師の畝に僅か一二本よりなかつて一向使はんものと見へたが，今では何十本でも持てゐる。（p.9）

黒田を引き連れて書院に戻った山県は，滝石組みの間に生えるシダ〈⑤池―ｈ滝口周辺〉やモミ〈⑥外縁・北西端〉は自身が意識的に植えたものであり，無隣庵の築造当時そのような植栽の仕方は一般的ではなかったと述べた。

また此川の畔に，野によく咲てある，アアそれ，ヲヲ木瓜，木瓜を栽さしたが，三年かかつてもどうもつかん，其癖野では踏だり何かしてよく咲てゐるが喃。そうしれ尚ほ川畔には，岩に附着たように低く躑躅を作るつもりで，槀駝師に刈込を命じてゐるのだ。（p.9-10）

〈④流れ―ｄコケ地周辺，ｅ芝地周辺・東側〉の園路際に植えられたクサボケ（草木瓜）は，山県が意識的に植えたものであった。〈④流れ―ｄコケ地周辺，ｅ芝地周辺・西側〉の景石周りに植えられたサツキ（躑躅）は，山県自身が岩に附着したように低く刈り込むように京都の槀駝師（たくだし）（庭師）に指示したものであった。

それから京都の庭には苔の寂を重んじて芝などといふものは殆ど使はんが，この庭園一面に苔をつけるといふとは大変でもあるし，また苔によつては面白くないから，私は断じて芝を栽ることにした。尤も川の此方は先の久原が栽て置いたので，被方は鬼芝を栽てそれで時々刈せる，費用はなかなか多くかかるが此方がよいようじや。夫でこの庭園の樹木は重に杉樹と，楓樹と，そして葉桜三本とでもたすといふ自分の心算であるがどうか。また水といふことについて，従来の人は重に池をこしらへたが，自分は夫より川の方が趣致があるやうに思ふ。よく山村などへ行くと，此前のような清川が潺々と繞（めぐ）つて流れてゐるが，あの方が面白いからここでは川にしたので。（p.10）

山県は，園内の地被植栽を苔ではなく「芝」にすることを意識していた。しかし一部は既に庭造りを任せていた久原が植栽していたため，その他の範囲はオニシバを植えた[40]。ここで久原が植栽した地被植物の種類と位置については記述されていない。山県は，無隣庵の主な植栽構成を杉と紅葉，ヤマザクラ（葉桜）とすることを意識していた。このヤマザクラ３本は現存しない。また山県は，無隣庵の園池を，従来の庭造りにおいて好まれてきた溜まり池状ではなく，山村を流れる清らかな川のような流水状とすることを意識していた。

（３）石碑〈御賜稚松の記〉にみる山県有朋の無隣庵に対する関心

山県は，明治34年（1901）に明治天皇から御所の稚松２株が下賜され，それらを無隣庵に植えたことを記念して，同年11月に〈御賜稚松の記〉と題した石碑を園内に建立した。それは〈⑤池―ｄコケ地周

辺〉に現存している。その文面[41]には，山県の無隣庵に向けられた意志を示す記述がある。この出来事について高橋は，「然るに明治天皇陛下此事を聞し召れ，京都宮廷の稚松２株を賜はつたので，公は之を庭前に植ゑ，程経て其松の写真を天覧に供するや，陛下より有り難き御製を賜はつたので，公は恩賜稚松の記の石碑を建て（後略）」たと述べている[42]。なおこの松は，平成18年（2006）10月に松くい虫被害により枯れて伐採された。（写真３）

自然の風致には富たれとなかれのほそきかいささか物たらぬ心地すれは琵琶湖の疏水を松杉深きあたりに引入れしに落る瀑の音のはけしくみやまのおくもかくこそあらめと思ふはかりなり又なかれのゆるやかなるは沙（砂）白く底すみて魚のひれふるさまなと見ゆ

元より無隣庵の立地は自然の風趣に恵まれていたが，山県は，草川の水量に物足りなさを感じていた。そこで無隣庵の敷地東側から琵琶湖疏水を引水し，周囲に松と杉を植えたところ，激しい水音が響く深山の奥といった様相になったという。またその後，流れとなった水流は緩やかで，池底の白砂が魚の動きを通して透けて見えた。

ここから，〈⑤池―ｈ滝口周辺〉の松と杉は，山県が意識して植えたこと，琵琶湖疏水の豊富な水量と清浄さが重要視されていたことが読みとれる。水流は，滝口の流れが激しい一方で，流路になると穏やかであった。なお，山県は，無隣庵への疏水の引水に当たって，琵琶湖疏水の設計に携わった田辺朔郎に手紙を送っている（「山県有朋書簡」）[43]。

又ふたつみつかさなりたるもおかし苔の青みたる中に名もしらぬ草の花咲出たるもめつらし

また，趣のある２・３種類の苔の青味の中に，名も知らぬ花が咲き出るのも賞美すべきである。ここから，山県が園内の多様な苔に趣を意識し，さらにその中に野草が生える様を評価していたことが分かる。

秋は夕日のはなやかにさして紅葉のにほひたる冬は雪をいたたける比叡の嶽の窓におちくるここちして折折のなかめいはむかたなし

春夏秋冬の景観の趣が述べられる中で，秋は，明るく人目を引きつける夕日に映えて紅葉が美しかった。冬については，比叡山の頂に抱かれる雪が窓に落ちてくる気分がする。四季折々の眺めは何とも言いようがない。ここから，紅葉と主屋内からの比叡山への眺めが意識されていたことが知られる。

晨には文をよみ夕には歌を詠しあるは茶を品し碁を圍み又は酒をくみ時に今古を談論するなとたたに世の塵を洗ふのみかはさるに此草廬の成りたることおもほゑすもかしこき

朝には文章を読み，夕方には歌を詠む。また茶を嗜み，碁を打ち，酒を飲むときに，古今について話し合う。単に世の中の煩わしい雑事から逃れるだけのやりとり

のために，無隣庵は成り立っていると感じる。

山県にとって無隣庵は，政治的に利用されることはあっても，主として世塵から逃れ，親しい人と交わり，文芸や飲食を楽しむための場所であることが意識されていた。

（4）山県とその周囲の人々における無隣庵への関心

『続江湖快心録』では，黒田天外に対する山県の語りとして，無隣庵の庭の築造における意志が以下のように記述されている。

> そこでいよいよ庭園をやりかけることになつたが，京都に於る庭園は幽邃といふことを重にして，豪壮だとか，雄大だとかいふ趣致が少しもない。いや誰の作だの，小堀遠州じやのといふた處で，多くは規模の小さい，茶人風の庭であつて面白くないから，己は己流儀の庭園を作ることに決した。（p.6-7）

山県は，旧来の京都で築造されてきた狭小な「茶人風の庭」ではなく，独自の考えに基づいた庭造りを意識しており，その築造の結果として伊集院兼常（1836-1909）から以下のような評価を得たと述べ，非常に喜んだ。

> なかなか園藝について邃い男じやが，此庭園を見せてどうかと云うたら。実に結構だよく出来た。若し私にどうかと仰しやれば，そりや私は私の考へもあるが，そうすれば一々處をどうといふわけにいかず，皆變てかからねばならんが，然し之で結構で，実に名作ですと，伊集院から園藝博士の号を贈りおつたじや。アハハハハ，どうか。（p.9）

そもそも黒田天外が無隣庵を訪れた契機は，『続江湖快心録』の前作に当たる『江湖快心録』において，伊集院兼常より「…ハア，山縣候の無隣庵の庭ですか，あれは全く伯自身で造られたので，お素人としては感服の外ムいません。」[44] と聞いたことであった。『続江湖快心録』の冒頭において黒田は，無隣庵訪問の動機を以下のように記述している。

> 同庭園（無隣庵）につきては曾て伊集院兼常氏より，其経営配置一に候の匠心獨運に出で，而も豪壮雄興広にして一種の面目を具へ，小堀遠州以外新に一識を建たるの作にして，実に賞嘆すべきものなりと聞き（後略）。（p.1）

次に晩年の山県の側近を務めた入江貫一は，大正11年刊行『山県公のおもかげ』（昭和５年増補再販『山県公のおもかげ附追憶百話』[45]）において，山県の幅広い公私に関する出来事を記載し，その中には無隣庵についての言及がある。

> 築庭は公の唯一の道楽であつた，平生誠に質素倹約的な公も苑庭の為めには数千円時としては万円を擲つを辞せなかつた。公の築庭法は独特の妙味を具へ，自然を利用し，自然を模倣し且自然を作出するように務められた。京都の無隣庵は東山の翠巒を取り入れ，庭の一隅には松杉の類を植えて麓と為し，清泉を穿ち山紅葉と山躑躅とを配して，並に東山の峯より落つる渓流を作つたのである。朝

夕の景色は常に東山を回る雲霧の去来に従つて千態万様の変化を興へる。（p.71-2）

京都の無隣庵も庭はよいが家屋は誠に手ぜまである。秘書官や副官が随行して滞留する時は，八畳と四畳の二間続きの二階を占領する外に居場所がない，而して其直下は即公の居室兼寝室である。其外には客間と西洋間とが一づつあるのみで，他は玄関勝手といふ次第である。がそれが為め私共の京都滞在は昼も夜もずいぶん窮屈なもので，高笑ひをすれば下に聞こえ，うつかり尻もちをつけばすぐ下に響く，誠に始末の悪い次第であつた。（p.90-91）

山県が質素な生活を送ったことは，同時代の多くの人々が認めるところであったが，庭造りに関しては例外的に山県が私財をはたいていたことを，入江は指摘している。後述するように，入江が無隣庵の朝夕の光景について言及できたのは，彼が枢密院議長秘書官として山県と共に無隣庵で宿泊していたからであった。

自然の風光も公に取りては楽しみの一つであつた。東山の春の曙，西山の秋の夕は晩年まで公を京都に惹付けた。公が八十以上の高齢に達し著しく健康を損ぜらるゝに至る前は，公務の余暇必ず毎年京都を訪ふ事を欠かされた事は無い，京都は実に公の欠く可からざる悠游の地であつた。（p.75）

晩年の山県は，公務の余暇ができるとその風光にひきつけられて毎年京都を訪れていた。彼にとって，ゆったりと落ち着いた時間を過ごすことのできる京都は欠かせないものとなっていた。

宮中顧問官御歌所寄人を務めた井上通泰は，山県の京都における人間関係について記述している。

入江貫一君の「山県公のおもかげ」中に挙げられた歌道の友の中に，京都の須川信行翁がおちてゐたやうである。此翁は渡忠秋の没後小出（粲）翁の門に入られ小生にも疑を正された人であるが，公が京都の無隣庵に居らるゝ間は終始歌の友とせられた。公は此人を斯道の先輩として尊敬して居られたから。（p.244）

最後に，大正11年の山県の危篤時，鳩居堂の主人を務めていた熊谷直之は，「京都日出新聞」の取材に答えて，山県における無隣庵の築造の動機が，「京都を終焉の地としたい」ことにあったと話した[46]。またこの記事からは，山県が『都林泉名勝図会』に「名物南禅寺湯豆腐店」として紹介された丹後屋を買収して無隣庵を築造したことが分かる。

（5）小結

『続江湖快心録』や「御賜稚松の記」などの無隣庵に関する記述と現行の無隣庵の状態を照合すれば，山県の存命中の形態をよく残していることが明らかとなった。目立った変化としては，サクラと恩賜稚松の枯失，８・９重の塔の亡失，比叡山への眺望の遮蔽がある。また黒田が無隣庵に対する感想の中で，「何れも候が心匠のかかる余事にまで明瓏秀絶なるを」[47]と述べているように，無隣庵の築造は彼自身の強い意志が働いており，活発な利用をしていた

ことが明確である。その意志は，漠然とした空想のようなものではなく，詳細にわたって具体的なものであり，無隣庵は，周囲の人々の意見を受け入れながら幾度かの改修の手を加えて完成に導かれていった。とくに注目されるのは，信頼を置いていたという庭師・岩本勝五郎に相談しながらも，庭造りを託さなかったことにある。それは，無隣庵の築造に対する山県の強い自意識の表れにほかならない。

そこで着目に値するのが山県と伊集院兼常との対人関係，そして熊谷直之の言述である。

山県は，無隣庵の庭造りにおいて，伊集院の存在を強く意識していた。それは，山県が伊集院から無隣庵に対する大きな評価を得て，大きく喜んだ様子から窺い知れる。伊集院は，鹿児島の門閥の出身で，薩摩藩の営繕関係の仕事を手掛けた後，明治維新政府の官僚や軍人を経て実業家として活躍した。宮家の御殿などの建築に携わったことでも知られる[48]。現在臨済宗の寺院となっている廣誠院（京都市中京区）と對龍山荘（同左京区）の前身は[49]，かつて伊集院自身が手掛けた別荘であった。山県と伊集院の京都における普請活動は，以下のように示される。

明治24年（1891）　東生洲町無隣庵
明治25年（1892）　一之船入町伊集院別邸（現・廣誠院）
明治29年（1896）　南禅寺福地町伊集院別邸（現・對龍山荘）[50]
明治30年（1897）　南禅寺草川町無隣庵

日常生活の中で手を加えられ続ける個人の庭・建物は，完成時期を定めることが難しいため，上記の竣工時期は前後することが前提であるが，山県と伊集院が隣接地において相次いで普請活動を行っていることは明らかである。元老と呼ばれる地位にあり，庭造りが趣味であることを世間に知られた山県が「園藝について邃い男」と言ったのは，庭造りの専門家として伊集院に一目を置いていたからである。生涯にわたり戦争と政争に関わり続けた山県に対して，伊集院は若くして庭造りと普請に親しみ，薩摩藩，明治政府，日本土木会社において長年実務に携わり（表１），さらに「自宅のみで十三ケ所，妾宅を五ヶ所造った」[51] いわば達人である。「素人」[52] である山県には，その専門家に認められる庭を築造することを意識し，その結果として生まれたのが無隣庵であった。普請の実績としては，伊集院に一日の長があるのは当然だが，この時期に両者は競い合って普請活動を行っていた。山県における無隣庵築造の動機の一つには，「園藝について邃い男」であり，いわば憧憬の対象であった伊集院に自身の庭造りを認めさせたいという意識が働いていたと推察される。つまり無隣庵の庭造りは，伊集院との切磋琢磨を通して，山県自身の強い意志に基づいて行われたことに根本的な意味がある[53]。

次に，山県における無隣庵の築造の動機が，京都で人生の最後を終えたいという意志に基づいていたという指摘は，管見によると熊谷直之だけによるものである。『続江湖快心録』では，「鳩居堂の二逸」と題し，黒田が熊谷らに対して行った鳩居堂の６代直恭と７代直孝の足跡についての聞

き取りが記述されている[54]。それによると７代直孝は，勤王の志士の為に尽力した人物であり，逝去後の明治36年に当時宮内大臣であった田中光顕より従五位を贈られた。熊谷直之は，「鳩居堂薫香筆墨文房具製造業」の９代目主人であり，陸軍において大尉を務めた[55]。後述するように熊谷直之は，無隣庵保存会の理事を務めており，山県との接点は先代からの出入り業者という関係であった。京都日出新聞が山県の危篤と聞きつけて一番に熊谷の元を訪問していることからすれば，両者の付き合いは親密であったと推察される。よって，熊谷の言述の信憑性は高いと考えられる。

先述のように，無隣庵の築造を計画した時，山県は政界と軍部との双方において困難な立場に置かれており，体調不良でもあった。死の直前まで権力に執着し，掌握し続けた山県の生涯を知る後世のわれわれにとって，にわかに信じがたいが，京都に邸宅を築造し人生の最後を終えたいという意志があったということは，日清戦争の前後において彼が引退を覚悟していた可能性を示している。そうなれば，東京の椿山荘も同時に引き払うことになっていたであろう。結果的に引退を免れた山県は無隣庵を別荘として利用し続けるが，その築造の計画段階において無隣庵は終の棲家あるいは隠居所，つまりは本宅が想定されていた可能性がある。

山県にとって無隣庵の利用形態は，複雑な対人関係に巻き込まれた彼自身の状況に応じて変化をしながら，公私の両面にわたりその人生を充実させるものであった。それは，山県有朋の娘婿で，有朋の養嗣子（ようしし）である有光の実父・船越光之丞（貴族院議員，男爵）による，山県の日常生活への言及からも窺い知れる。

> 公の健康に留意されたことは非常なもので，公が築庭に非常な趣味を有たれて居たことは，世間に知られて居ることであるが，或る日私に向ひ，おれは庭を作るのでこんなに長壽を保つて居るのではないかと話されたことがある[56]。

５．無隣庵保存会の設立・解散と京都市への寄付

無隣庵の京都市への寄付を記念して編集された『無隣庵』は，山県の晩年から無隣庵が京都市へ寄付されるまでの経緯を，以下のように記している。

> 本庵は公の晩年，その百歳の後の保全を慮られ側近の士と諮られた上，大正９年６月財団法人無隣庵保存会を設立せられ土地建物其の他を寄付，その永き保存を図られることとなつた。其の後間もなく大正11年含雪公には85歳の高齢を以って薨去せられたが，幸ひ本菴は山縣家並びに保存会関係者の厚き庇護の下に恩賜の松の緑愈々濃く，一石一草すべて公在世当時の面影を其儘に存して今日に至つた。然るに山縣家並に保存会に於ては此の名園を永く世に伝ふるためには地元たる京都市に寄付することを以て最も適当と認められ，右法人を解散の上関係財産一切を京都市に寄付したき旨の申し出があつた。市に於ては喜んでその厚意を受けることとなり，諸般の手続をとり，昭和16年６月正式にその引渡を受けたので，この由緒ある名園を永く保持伝存すると共に適当に公開を

なし公の遺風を偲ぶこととなつたものである[57]。

山県の晩年，無隣庵の保全に関する話し合いが持たれ，山県家より土地建物その他が寄付されて，大正９年（1920）６月に保存会が設立された。なお同年３月には，第一次世界大戦（大正３～７年）後の株式市場の崩壊に始まる＜反動恐慌＞が生じていた[58]。保存会の設立には行政手続きが必要であるため，その準備は第一次世界大戦の開戦頃から進められていた可能性がある。この保存会設立に当たっての山県の動機について，入江貫一は『山県公のおもかげ』において以下のように記述している。

京都の無隣庵には，先帝御下賜の稚松二本が今は数丈の大木になつてゐる。公は其の歿後万一にも之れが心なき人の手に渡る事あるを虞れ，財団法人を設立して之を永久に保存する事と定め，先年既に法人設立の手続きをも済まされた[59]。

大正11年，山県は85歳で逝去し，国葬として小石川護国寺へ葬られた[60]。山県家及び保存会では，無隣庵を永く世に伝えるためにはそれが立地する京都市へ寄付することが最も適当と判断された。そして山県が逝去した19年後の昭和16年（1941），京都市へ寄付されることになった。この寄付行為に当たって取り交わされた書類のマイクロフィルムが，京都市に「無隣庵重要書類（昭和15年）」として保存されている。表２は，その際の書類のやり取りの時系列を整理したものである。また，財産目録と昭和14年度の収支決算書は表３，４の通りである。以下，同書類に基づいて保存会解散の経緯を分析する。

「無隣庵重要書類」における「解散許可申請書」によると，保存会の解散と無隣庵の寄付行為の手続きを行った昭和15年当時の理事は，山県有道，三井高広，馬淵鋭太郎，熊谷直之の４名，監事は田中文蔵と入江貫一の２名であった。山県有道（1888-1945）は，有朋の養嗣子・伊三郎の長男であり，貴族院議員，侍従兼式部官を歴任した。三井高公（1895-1992）は三井家第11代当主であり[61]，その先代に当たる高棟が明治42年に有朋から小淘庵（こゆるぎあん）を購入した[62]。馬淵鋭太郎（1867-1943）は[63]，山口県知事をはじめ京都府知事や京都市長などを歴任した人物である。田中文蔵は三井物産取締役を務めた人物であり，熊谷直之と入江貫一については，既述の通りである。それら理事のうち，京都市在住の熊谷以外は東京在住であったことからみて，京都府庁・京都市役所との書類のやり取りは，保存会の収支決算書の署名人も務めた熊谷の尽力が大きかったものと推察される。

次に「解散許可申請書」における保存会を「解散セントスル理由並びに顛末」と「現行財団法人無隣庵保存会寄付行為写」の一部を抜粋する。

一、解散セントスル理由並ニ顛末

当法人ハ寄付行為第三条及第四条ニ示スカ如ク無隣庵ヲ保持シテ其ノ名勝ヲ伝存スルト共ニ適宜之ヲ公開シテ其ノ縦覧ニ供スルヲ以テ目的ト為ス従テ之カ目的ヲ達成センカ為ニハ常ニ適当ナル管理経営ヲ必要トス

然ルニ近時ノ世態ニ在リテ庭園技術者ノ如キモ其ノ手練家ヲ求ムコトヲ頗ル困難ニシテ為ニ兎角名園モ充分ノ手入ヲ為スコト能ハサル□アリ又其ノ経営取締ニ付テモ本会ノミヲ以テシテハ未タ容易ナラサルモノアリテ為ニ之ヲ市巷ニ埋没セシムルノ虞ナシトセス

即チ茲ニ無隣庵ノ所在地ニシテ且当法人設立者山縣有朋由縁ノ地タル京都市ニ之ヲ寄付スルニ於テハ同市ニ於テ庭園ノ管理ニ付テモ其ノ専門技術者ヲ充分ニ用ヒ得ヘク公開等ニ付テモ極メテ機宜ノ措置ヲ講シ得ヘク即チ之ヲ永ク保持伝存シ得テ当法人設立者の真意を具現スルニ遺憾ナキヲ期シ得ヘキモノト認ムルニ依リ茲ニ当法人ヲ解散セントス

現行財団法人無隣庵保存会寄付行為写

第三条　本会ハ無隣庵ヲ保持シ其ノ名勝ヲ保存スルヲ以テ目的ト為ス

第四条　無隣庵ノ庭園、邸宅及財物ハ別に定ムル所ニ依リ公開シテ其縦覧ヲ許スコトアルヘシ

保存会は無隣庵の名勝的価値の保持を主旨とし，寄付金を運営資金として，庭・建物や所蔵物の公開事業を行っていた。その実情は，大正9年（1920）に高橋義雄が植治を伴って公開中の無隣庵へ訪れた記述から窺い知ることができる。

老公は（中略），遂に当園保存の財団法人を組織して之を永遠に保存すると同時に，或る方法を定めて或る程度まで風流雅客の縦覧を許さるる都合であると聞及んだ，然るに余は十一月十一日午前偶々三條通り白河筋の稾駝師小川治兵衛通称植治方へ赴き，庭石を見聞する序があつたので，植治めを伴ひ久方振にて無隣庵を訪れた處が，当庵築造時より庵守を勤め居る瀧本増蔵と云ふ老人が余等を迎へて，先づ玄関の方より案内して呉れたが（後略）[64]。

以上のように，京都市への寄付というかたちで無隣庵を将来に継承しようとする取り組みは，太平洋戦争の直前，山県家あるいは晩年の有朋と親密にしていた政財界人と行政機関の協力・連携によって成就した。

記録に基づく限り，山県が存命中に保存会を創設し無隣庵を譲渡する上で直接的に意識されていたのは，庭の形態の保持，公開，恩賜稚松の継承であった。ただし「京都日出新聞」に大正11年（1922）2月3，4日の両日に渡って掲載された特集記事「無隣庵と含雪公」の副題である「お気に入りの林泉―御下賜の松，お相手は閑人連―南禅寺畔の散歩―清風荘の西候との往来―」を前章までの資料を照合とすれば，無隣庵の譲渡は，伊集院兼常に評価を受けた自らの庭造り，公務の余暇における生活，京都の自然の風光に対する愛着，西園寺公望との交流関係などを記念する山県の意志が働いていた可能性もある。

そして保存会の解散と京都市への寄付は，「この由緒ある名園を永く保持伝存すると共に適当に公開をなし公の遺風を偲ぶこと」，すなわち山県の意志を恒久的に継承することが意識されていた。結果的にそれは，山県個人の意志を引き継ぐことに限定される訳ではなく，無隣庵の庭・建物の継承を通じて，山県と共に激動の時代を

生き抜いた数多くの人々の意志を後世へ伝える意義が認められる。そのようにみれば，無隣庵には近代の史跡としての意味合いが色濃く具えられている。

6．結論

山県有朋による無隣庵の築造の動機は，自身の終焉の地として選んだ京都における，邸宅の確保であったとみられる。その要因は，無隣庵の築造が始まった日清戦争中，山県が軍事・政治の双方において窮地に立たされ，さらに身体の調子を崩していたことにより，進退去就を意識していたことにあると推察される。明治30年に無隣庵が一応竣工した後，その窮地を脱した山県が本宅を引き続き東京の椿山荘としたことによって，結果的に無隣庵は彼の別荘となった。

山県は，東京の自邸の庭造りを庭師・岩本勝五郎に託していた一方で，無隣庵の庭の築造は，「己は己流儀の庭園を作ることに決し」周囲の人々の助言を受けながら，自ら指揮して行われた。その結果，素人とはいえ政財界において庭の築造が趣味であることが周知されていた山県が，「園藝について邃い男」と認めていた専門家・伊集院兼常より「園藝博士の号を贈」られることになり，それは当時の山県にとって大変名誉なことであった。伊集院は，黒田天外に対して無隣庵を「其経営配置一に候の匠心獨運に出で，而も豪壮雄興広にして一種の面目を具へ，小堀遠州以外新に一識を建たるの作にして，実に賞嘆すべきものなり」と語っているように，従来の京都の定石を逸した「素人」の庭造りが，専門家を認めさせるほど革新的であったことと，当時の人々へ与えた影響の大きさを物語っている。その無隣庵が，保存会の創設によって公開され，後に京都市へ寄付され形態を保持し続けていることによって，近代京都の庭造りのメルクマール（Merkmal／指標）として周知されることになった。

保存会開設以前の無隣庵は，その洋館で日露開戦についての会議がなされるなど公（政治）的利用をしつつ，公務から離れて京都の自然を体感し，趣味である歌などを楽しみ，親しい知人と会合するなど，山県の心身にわたるセーフティネット（safety net／安全網）として機能した。

無隣庵の築造から継承にかけての経緯を振り返ると，明治維新後の度重なる戦争がその存続にかけての契機となっている可能性が知られる。無隣庵の築造は日清戦争中に始まり，先述のように日露開戦に関する会議が行われ，第一次世界大戦後に保存会に移管され，太平洋戦争の直前に京都市へ寄付された。記録がないため，それぞれの経緯が直接戦争と関係していたとはいえないが，戦争による経済状況の変化が無隣庵の継承のあり方に影響を及ぼしたことは想像に難くない。

こうしてみると無隣庵は，山県の生涯にわたる公私（軍事・政治・趣味）の足跡が象徴されており，彼の存命中の形態を色濃く残すその土地の存在をもって，彼と同時代の人々の交流とその周囲で生じた数多くの出来事，さらには近代の庭園文化の画期を記念している。

謝　辞

本稿の執筆においては，数多くの方々の

協力を賜った。京都工芸繊維大学の矢ケ崎善太郎先生に貴重な資料を貸与頂いたことは特筆しなければならない。この場を借りて皆様に感謝と御礼を申し上げます。

注・参考引用文献

1）「名勝無鄰庵庭園」の名勝指定の理由は，以下の通りである。

無隣庵は，明治27・28年（1894・1985）頃山県有朋の別邸として築造されたものである。東部に三段より成る滝を落し，渓流を作り，沢渡をおき，やがて渓流を広くして池の趣を現わし，再び水流となし，池の流れと合して西に導く。水は常に浅くゆたかに波を打って美しく流れ，２，３箇所に落水を作っている。

水辺の芝生は広い水面と共に明るい近代的庭景を与えるのに役立っている。樹林を越えて東山の諸峯は借景となる。

明治時代における優秀な庭園である。

2）平成15年９月２日の地方自治法の改正に伴って創設された制度である。旧来，公の施設管理は，公共団体・公共的団体等に限定されてきたが，指定管理者制度により，公共的団体に加え民間事業者も公の施設管理を受託できるようになった。指定管理者は，公の施設の管理の権限を受託し，使用許可等も行うことができる。（成田頼明　監修『指定管理者制度のすべて　制度詳解と実務の手引き【改訂版】』，第一法規，2009年。）

3）「京都市無鄰菴及び岩倉具視幽棲旧宅条例」（昭和16年７月１日条例第19号，平成27年11月５日施行）。

4）形態概念図と形態ツリー図とは，元々，文化財庭園の保存管理の実践において考案された図式であり，『京都市指定名勝立本寺庭園 平成期定期修理報告書』（日蓮宗本山立本寺，平成23年）で実用化された呼称である。形態概念図は，庭内を機能・利用形態に基づいて分節し呼称を付与した平面図であり，形態ツリー図は，庭の形態構造をツリー図で示したものである。

5）矢ケ崎善太郎『近代京都の東山地域における別邸・別宅群の形成と数寄空間に関する研究』，1998年，p.34-45。

6）矢ケ崎善太郎，前掲書，p.15。

7）国史大辞典編集委員会　編『国史大辞典』第14巻，吉川弘文館，1993年，p.117-8。

8）京都市『京都の歴史８　古都の近代』，学芸書林，1975年，p.85,88。

9）矢ケ崎善太郎　前掲書，p.42。

10）『新修京都叢書第19　京都坊目誌３』，林泉書店，1968年，p.543。

11）京都市『史料京都の歴史　第８巻　左京区』，p.161。

12）木村明啓編『新撰花洛名勝図会　第２巻』，林芳兵衛，1864年。

13）黒田天外『続江湖快心録』1907年，p.6。

14）田中光顕は，明治期の宮邸政治家として知られ，明治７年に陸軍会計監督に就任して以来，山県の知遇を得た。（安岡昭男「明治期田中光顕の周辺」『法政史学』37号，1985年，p.11-17）。また田中は，自著『維新風雲回顧録』（大日本雄弁会講談社，1928年，p.354）において，第２次長州戦争後の慶応２年（1866）３月頃に京都の薩摩屋敷で共に潜伏したと記している。

15）佐藤信「山県有朋とその庭」『日本研究』第51集，国際日本文化研究センター，2015年，p.67-68。

16）伊藤之雄『文春新書684　山縣有朋　愚直な権力者の生涯』，2009年，p.285-6。

17）伊藤之雄　前掲書，p.291。

18）京都市：史料京都の歴史 第８巻 左京区：1985，p.52。

19）高橋義雄『山公遺烈』，慶文堂書店，1925年，p.277。

20）古稀庵記録保存調査団　編著『山縣有朋旧邸小田原古稀庵調査報告書』，千代田火災海上保険株式会社，1982年。

21）徳富猪一郎　編『公爵山県有朋傳　下巻』1933年，p.542-3。
22）京都市土木局庶務課『無隣庵』，京都市役所，1941年，p.3。
23）矢ケ崎善太郎，前掲書，p.117-9。
24）大仏殿は，文禄２年（1593）に上棟，同４年にほぼ完成した。昭和48年（1973）の火事により焼亡した。
平凡社地方資料センター　編『京都・山城寺院神社大辞典』，平凡社，1997年，p.608。
25）国の史跡「方広寺石塁および石塔」（京都市東山区茶屋町）
26）黒田天外，前掲書，p.６。
27）高橋義雄，前掲書，p.280。
28）黒田天外，前掲書，p.８-9。
29）高橋義男『目白椿山荘講評　箒のあと』，秋豊園出版部，1936年。
30）江戸後期から明治前期の国学者で，明治政府では大学中博士となった。明治11年小石川柳町の家に没す。
国史大辞典編集委員会『国史大辞典』第２巻，吉川弘文館，p.758。
31）高橋義雄，前掲書，p.34。
32）高橋義雄，前掲書，p.286-8。
33）松岡嘉兵衛については，詳らかではないが，『新撰京都叢書第９集』所収の『西京人物誌』（p.425）には，「上京区第二十三組新町夷川北」で道具商を営んでいた松岡嘉右衛門の名がみえる。「春海懐古録」（「淡交」17巻８号～14号：1963）によると，松岡嘉右衛門は，道具商として三井家に出入りしていたことが知られる。
34）『新修京都叢書第19　京都坊目誌三』，臨川書店，1968年，p.542。
35）駒ヶ滝は，現在も水流が活きており，南禅寺参道の南側を流れる南禅寺川に通じている。
36）木村明啓編，前掲書。
37）秋里籬島『都林泉名勝図会　２之巻』，1799年，心斎橋通北久田老町　河内屋喜兵衛
38）矢ケ崎善太郎，前掲書，p.42-5。
39）高橋義雄，前掲書，p.278。
40）山県が植栽したという鬼芝は，植物学的にいえばオニシバ（学名：Zoysia macrostachya）であり，現存するシバ・野芝（Z. japonica Steud）とは，別種である。
41）湯本文彦編『京華林泉帖』，京都府庁，1906年。
42）高橋義雄，前掲書，p.23-4。
43）『史料京都の歴史　第８巻　左京区』，p.165。
44）黒田天外『江湖快心録』，1901年，p.28。
45）入江貫一『山県公のおもかげ附追憶百話』，偕行社編纂部，1930年。
46）「京都を終焉の地としたい」，京都日出新聞，1922年１月31日。
「愛荘無隣庵買入の一條　山縣公危篤の報を聞して鳩居堂主人熊谷直之氏を訪へば，事実ですか，今朝先方から手紙が来て安心しろとの事で実は喜んで居た処ですがとて長い大息した後徐に思ひ出を語つた，私の先代は山縣公が国を出て長州屋敷に入られて以来の御出入りで，私は父の没後明治四十年から御伺ひして居る次第ですが厳格を以て聞えた公の事ですから中々人に恐がられたものですが唯元気に任せた一時的の突発した怒りですから根もない程アッサリしたものでした。公の生命は軍事よりは政治にあつた様ですが其の傍閑日月ありて常に庭園の造作に趣味を持たれ二十七八年戦役頃木屋町吉富に永らく当時樋口の別荘を故日銀総裁の川田小一郎氏に売つて三萬円を持って居られたので滋賀縣知事中井弘などを同伴者に引き具し自分は京都を終焉の地に仕度いから何処か其居地を求め度いとて散歩の折南禅寺畔で豆腐屋を見付け小憩の際此の小川が面白いとて例の所持金三萬で買う事を決心して藤田に下相談をした処今は博覧会当時で坪五円位だが，も少し待つたら坪一円位には下落仕様と云つたが公は俺も六十歳だから五園位で考へる歳でもあるまいと断然として求め庭の造作に掛り石などは醍醐から引いたもので植治事小川治兵衛に命令したが石が大きいので甚だ当惑の旨を公に伝へて一鳴を食ひ牛

車数両を用意して漸く御意にかなへた，其の後豆腐屋で面白いと云つた名も無い小川は南禅寺草川と云ふのだと聞いて非常に面白がつた，遠景を我物に取り入れるのに妙を得て居て小田原の別荘も頗る見事に其の技巧が出来て居る，小田原と云へば原首相暗殺当時私は公を同地に訪ねて居たが兇変を聞いて公に大変なことがありましたなと云つた所公は唯ウンと云はれたのみで七度八分の熱であつたが机に寄つて居られた此辺でも公の剛腹は伺はれます。八十五歳は歳に於ては惜い事はないが何やかやと感慨無量で何から申して良いか解りませんと涙ぐんだ。」

47）黒田天外『続江湖快心録』，p.13。

48）黒田天外「南禅寺の松籟」『江湖快心録』，1901年，p.18-34。

49）京都市文化観光局文化観光部文化財保護課編集・発行『京都市の文化財　第４集』，1982年，p.53-54。

50）仲隆裕「對龍山荘庭園」尼崎博正　編『植治の庭』，淡交社，1990年，p.66-p.71。

51）黒田天外『江湖快心録』，1901年，p.26。

52）伊集院兼常は，庭造りに「精しき」者と「素人」との違いについて言及している。前者は，「庭造りの儀礼作法を」大成した「相阿弥，能阿弥，それに小堀遠州，金森宗和，細川三齋，この六人等」のやり方を模倣し，「真行草と，主位と客位が大切で，一つの樹，一つの石としてみなそれぞれ約束がある」ことを守り，「ただ石を然るべく置て，そしてそこに水を落とすばかり」であった。それに対して「……素人のはそうじゃない，こゝへ水をこう落そうと種々に作る，そこで天趣といふものをなくするのです」という。黒田天外『江湖快心録』，1901年，p.26-27,32。

53）無隣庵の庭造りに関する見方は，山県の生前とその後で変化している。生前の山県は，無隣庵の庭造りについて議論した人物として伊集院兼常と「東京から連て来た橐駝師」を挙げ，京都市土木局庶務課『無鄰菴』（p.3）では対談相手として「「植治」の友次郎老人」に言及されているが，庭造りを特定の人物に託したとは一切語っていない。一方，無隣庵に植治が係ったことを示す資料としては，黒田天外『続々江湖快心録』（1913）に掲載された「園藝の名家」がある。大正２年以前に行われた黒田の取材に対して７代目小川治兵衛は，「處が山縣さんが無隣庵をお作りになることとなり，五尺くらゐの樅を五十本栽へろといふ仰せつけでしたが，其頃樅などといふものは庭木につかいませんので一向なく，漸やく方々から集めて調へましたが，只今では何處の庭園でも樅を多く用ひ，またどうだん，柊，南天などを使ひますのも，山縣さんが嚆矢でムいます。その後平安神宮の神園を作るにつき，山縣さんへ行て居る植木屋を呼べとのことで私が命ぜられましたが」と，無隣庵に樅を植えたのが自身であるとした。この時点では，自らが庭の築造を手掛けたとは述べていない。山県逝去の直後，同11（1922）年２月５日の「日出新聞」の記事において小川は，「無隣庵を造るにも私は常に呼ばれて意見を戦はしながらあれ迄に仕上げた」と述べた。さらに同大正14年に刊行された『山公遺烈』において高橋義雄は，「山縣老公は，（中略）南禅寺門前通りの北側に新に無隣庵を経営せられたが，縄張は一切老公自身の指図で，その指図に従つて築庭の事に当つたのは今日余が同伴したる植治である（p.279）」と記述している。この一文が，後に無隣庵の築造を手掛けたのが植治とする有力な根拠となっている。高橋は栂ノ尾高山寺（京都市右京区）の遺香庵※の庭造りを小川に任せるなど，両者は親密な関係にあった。高橋が晩年の山県の知遇を得ていたことは，確実視されるが（内藤一成「もうひとつの山県人脈―山県有朋と高橋箒庵―」伊藤隆　編『山県有朋と近代日本』，吉川弘文館，2008年。）しかし益田孝（鈍翁）が述懐した所では，山県「公は庭の事が最も御自慢で，私の直ぐ下の弟益田克徳には許して居られたが，益田孝だの高橋義雄だのは庭の事は駄目だから，君等は庭の事なぞはまあ云は

ぬ方がよかろうと云うやうな調子であつた。或時高橋が，目白の椿山荘の庭に，柿の木は取り除いた方がよいと云ふたことがあるが，後で公は，高橋は庭の事はわからぬなあと云ふて居られた」（長井実『自叙益田孝翁傳』，1939年）という。なお，黒田が對龍山荘を訪れた際は直接小川が案内したのに対して（『続江湖快心録』），高橋が無隣庵を訪れた際は小川を伴っていたものの管理人が案内した（『山公遺烈』）。

※遺香庵は，昭和６年（1931）に明恵上人の700年遠忌を記念して築造された露地。高橋義雄の指導により，７代目小川治兵衛が庭造り，３代目木村清兵衛が茶室の建築を担当した。京都市指定名勝。

54）黒田天外，前掲書，p.119-131。

55）谷元二著『大衆人事録　近畿編』第13版，帝国秘密探偵社・国勢協会，1940年。

56）入江貫一，前掲書，p.240-241。

57）京都市土木局庶務課，前掲書，p.3。

58）国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』第４巻，吉川弘文館，1984年，p.295-7。

59）入江貫一，前掲書，p.93-4。

60）国史大辞典編纂委員会，前掲書，p.118。

61）財団法人三井文庫編集・発行『三井家文化人名録』2002年。

62）前山茂　編著『歴史の町大磯』（第３回修正），2015年。

63）歴代知事編纂会会長小川省吾編集・発行『日本の歴代市長』第２巻，1984年。

64）高橋義雄，前掲書，p.278。

今江（いまえ）　秀史（ひでふみ）（文化財保護課　主任（名勝担当））

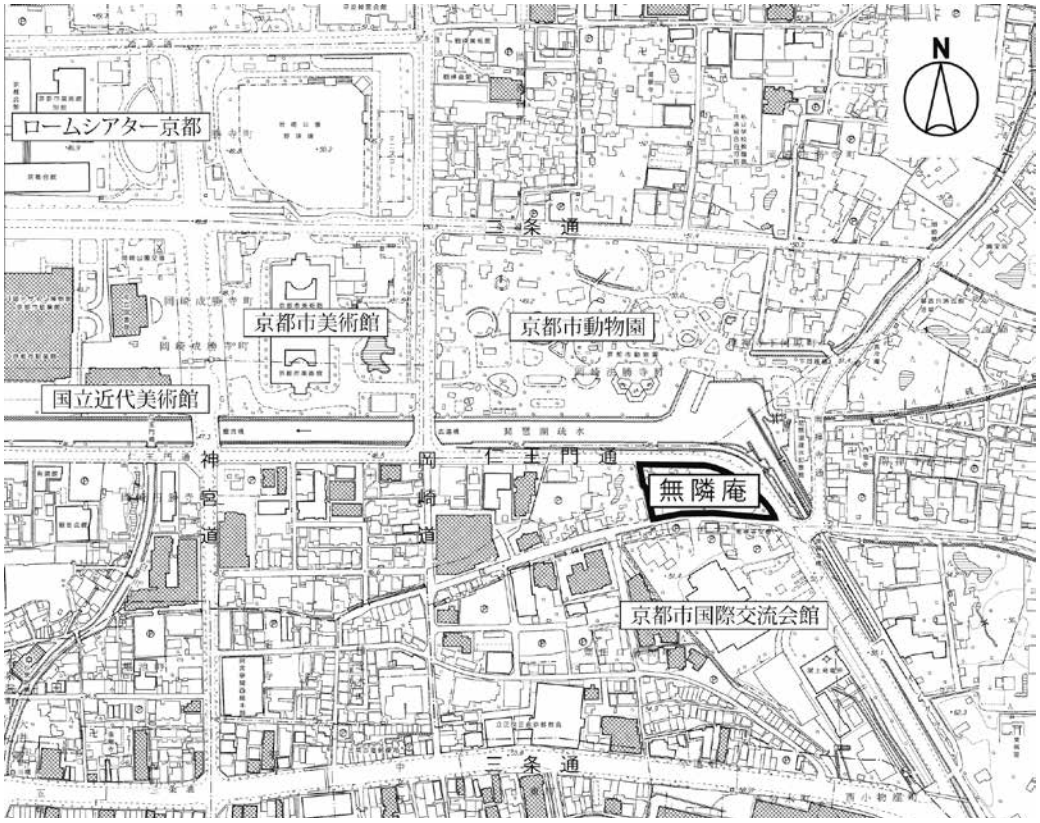


図１　位置図

写真２　無隣庵の庭

【解説】

写真中央の直立した樹木が「恩賜稚松」である。その左下に写っているマツの低木の葉の濃度と比べれば，「恩賜稚松」の葉の濃度が薄い。これは本来は緑色の葉が，枯れて茶色になっている状態を示している。この後，松くい被害の拡大を防ぐために伐採された。

写真３　枯損した恩賜稚松（平成18年10月20日）

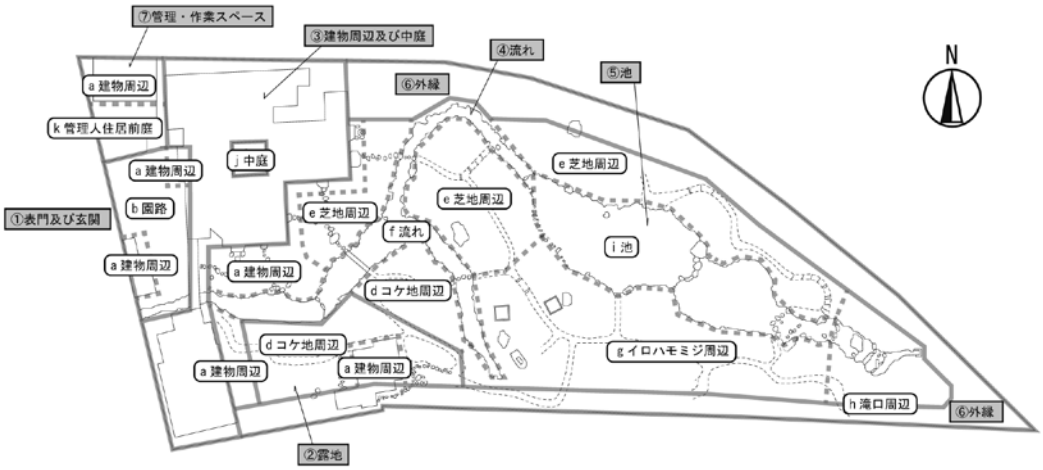


図２　形態概念図

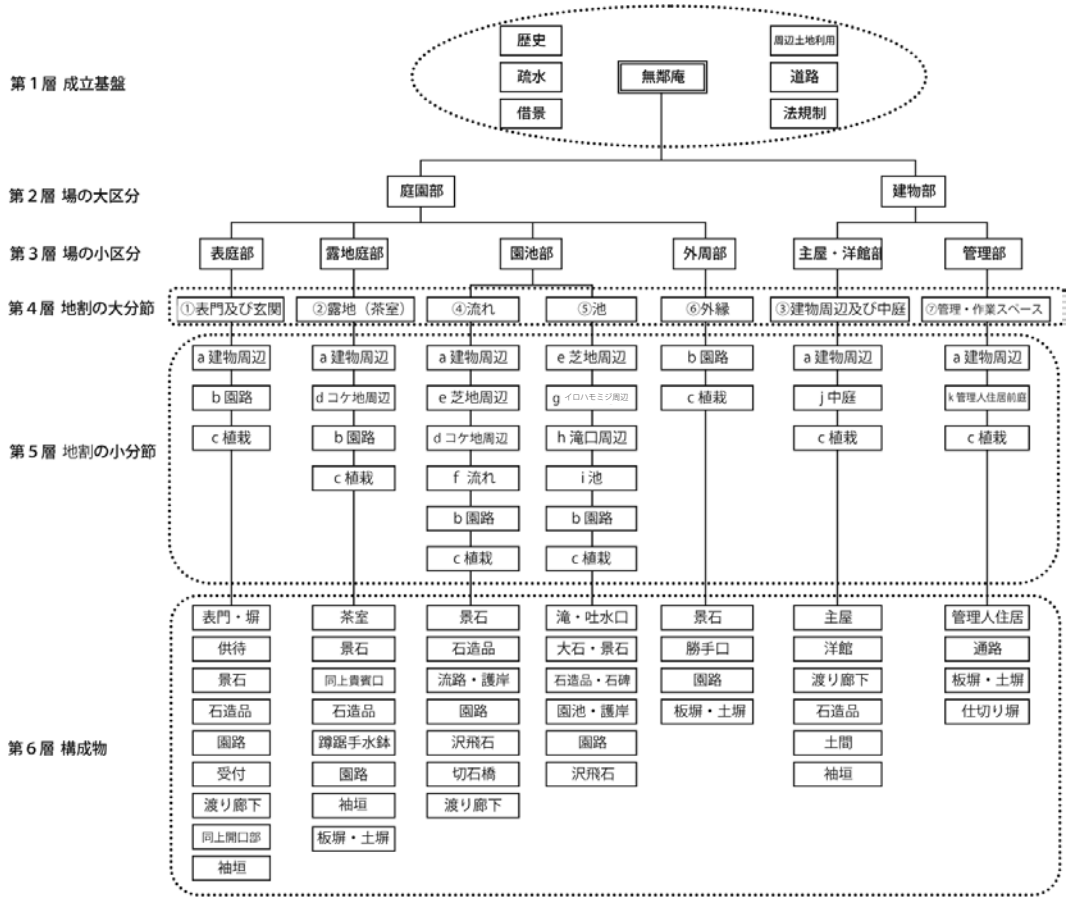


図３　形態ツリー図

表１　伊集院兼常と山形有朋の略歴

伊集院兼常			
元号	西暦	年齢	出来事
天保７年	1836	—	鹿児島藩の門閥家に生まれる。
嘉永６年	1853	17歳	江戸鹿児島藩邸の地震室（西洋建築）の普請を担当。
万延元年	1860	24歳	江戸（芝）鹿児島藩本邸の普請を担当，同邸は建築中に焼亡した。
不明	ー	ー	江戸（芝）鹿児島藩本邸の再普請を担当。 江戸（芝）鹿児島藩本邸を京都（相国寺畔）への移築を担当。 横浜府の判事を務める。
明治元年	1868	32歳	９月：東海道御道調御用係を務める。
不明	ー	ー	宮内省工匠寮へ出仕，「御学問所で，外国人の謁見所に充させらるる御建築を」担当。
不明	ー	ー	海軍省の営繕局長を務める。
明治20年	1886	50歳	東京の御所の地質調査を担当。 ３月：藤田伝三郎，大倉喜八郎，渋沢栄一，久原庄三郎らと日本土木会社を設立。東京駐在会計役を務める。同社では，有栖川宮邸，北白川宮邸，白河宮三殿下の御殿，上野博物館の全体（明治22年），議事堂（明治22年），各師団などの普請を担当。
明治25年	1891	55歳	10月：日本土木会社解散。
			一之舟入町の別邸（現・廣誠院）が竣工（後に売却）。
明治29年	1896	60歳	南禅寺福地町の別邸（現・對龍山荘）が竣工（後に売却）。
明治32年	1899	63歳	南禅寺邸へ黒田譲が訪問。
明治42年	1909	74歳	６月20日：死去。

※『江湖快心録』と日本土木会社の研究（島田裕司：駒澤大学研究紀要21：2014：駒沢女子大学・駒沢女子短期大学図書館：p.201-218）を参照して作成

山県有朋			
元号	西暦	年齢	出来事
天保９年	1838	ー	閏４月22日：長州藩の下級武士の家に生まれる。
安政５年	1855	17歳	京都へ派遣される。
文久２年	1862	24歳	藩命で江戸に赴任，翌年帰藩した後，奇兵隊に参加し，軍監を務める。
慶応２年	1866	28歳	江戸幕府による長州藩再征において，奇兵隊を率い，九州方面で戦闘後，藩命で京都へ赴く。同年に大政奉還が行われる。
明治元年	1868	30歳	江戸城明け渡し後の江戸に入る。４月に北陸道鎮撫総督兼会津征伐総督の参謀に任ぜられ，越後から会津に転戦する。
明治２年	1869	31歳	藩主からの命を受けてヨーロッパを外遊。
明治４年	1871	33歳	政府の直轄陸軍を建設し，兵部大輔を務める。
明治６年	1873	35歳	初代の陸軍卿に就任。
明治11年	1878	40歳	参謀本部長に就任。
明治15年	1882	44歳	参議院議長に就任。
明治16年	1883	45歳	華族制度の成立と同時に伯爵となる。
明治21年	1888	50歳	渡欧し視察，翌年帰国。
明治22年	1889	51歳	12月:内郭総理大臣に任ぜられ，第１次内閣を組織。24年４月に辞職。
明治24年	1891	53歳	東生州町の無隣庵が竣工（後に売却）。
明治27年	1894	56歳	日清戦争へ第一軍司令官として出征。
明治29年	1896	58歳	ロシア新皇帝の戴冠式へ出席。
明治30年	1897	59歳	南禅寺草川町の無隣庵が竣工。
明治31年	1898	60歳	大命を受け，第２次内閣を組織。
明治33年	1900	62歳	９月：辞職。元老として（政治・軍事に影響を持続しつつ）表舞台から身を引く。
明治37年	1904	66歳	参謀総長として日露戦争を総指揮。
明治38年	1905	67歳	枢密院議長の職を死の年まで務める。
大正11年	1922	85歳	11月１日：病没。

※『国史大事典』を参照して作成

表２　保存会解散に係る時系列

年月日			出来事
昭和15年	５月	20日	財団法人無隣庵保存会が京都市長宛へ「寄付行為変更認可申請書」を提出され収受
		21日	京都市企画部企画庶務課が京都府知事宛に「寄付行為変更認可申請書」を進達
	８月	２日	京都府学務部が京都市長宛に「寄付行為変更ノ件」について「御申出相成る候所最近現在ノ財産目録必要二□付至急御送付御取計相煩度候」と通知
	10月	９日	京都府学務部が京都市長宛に「寄付行為変更ノ件」について「別記事項整備ノ上改メテ提出方御取計相成度一件書類一応右帰戻候也」と通知
昭和16年	１月	13日	財団法人無隣庵保存会が京都市長宛に「寄付行為変更認可申請書並ニ解散許可申請」を提出
	１月	16日	京都市企画部企画庶務課が京都府学務部長宛へ「寄付行為変更認可申請書並ニ解散許可申請」を進達
	２月	18日	財団法人無隣庵保存会が京都市長宛に「解散許可申請」へ提出され収受
		24日	京都府学務部が京都市長宛に「寄付行為変更認可件」について通知
	３月	５日	京都市企画部企画庶務課が昭和16年２月17日付で文部科学大臣より認可された「寄付行為中変更ノ件」を財団法人無隣庵保存会へ通知
		７日	京都府学務部が京都市長宛に「解散ニ関スル件」について通知
		10日	京都市企画部企画庶務課が昭和16年２月28日付で文部科学大臣より許可された「解散ノ件」を財団法人無隣庵保存会へ通知
		12日	山縣有道氏から京都市長宛に礼状が届く
	３月	14日	財団法人無隣庵保存会が京都市長宛に「解散届出書」を提出され収受
	７月	31日	財団法人無隣庵保存会が京都市長宛に「清算終了届」を提出され収受
	７月		山縣有朋公記念会会長　伯爵　清浦奎吾が金一万円の下付を申し出
	９月		山縣有朋公記念会が京都市長宛に金一万円の領収書を提出

表３　財産目録

昭和十五年十二月一日現在

財産目録

財団法人　無隣庵保存会

一　資産　合計金二十二万八千五十七円八十銭也
　　内　基本財産計金二十二万七千四百二十七円八十銭也
　　普通財産計金六百三十円也

（一）土地

資産種別	用途	位置	坪数	取得年月日	記帳価格　円	備考
基本財産	庭園敷地	京都市左京区南禅寺草川町三十番地ノ六	六六．五八	大正九年六月十六日	七、九八九．六〇	
同	同	同町三十一番地	七二八．六六	同	八七、四三九．二〇	
同	建物敷地	同町四十八番地	一四四．〇〇	同	一七、二八〇．〇〇	
同	庭園敷地	同町四十八番地ノ一	二八．〇〇	同	三、三六〇．〇〇	
同	同	同町四十八番地ノ三	二．〇〇	同	二四〇．〇〇	
計			九六九．二四		一一六、三〇八．八〇	

（二）建物

資産種別	用途	位置	構造	建坪及述坪	建築又ハ取得年月日	記帳価格　円	備考
基本財産	住宅	前掲土地上ニ建設	木造平屋建瓦葺	八〇．七	大正九年六月十六日	九、二六九．〇〇	
同	同		木造二階建瓦葺	一六．七	同	四、〇〇八．〇〇	
同	渡廊下		木造平屋建柿板葺	七．〇	同	五六〇．〇〇	
同	洋室　階段室		木造二階建瓦葺	五．四	同	二、四三〇．〇〇	
同	土蔵及　洋室		煉瓦造二階建瓦葺	一八．一	同	一〇、八六〇．〇〇	
同	茶室		木造平屋建瓦葺	一一．七	同	一、九八九．〇〇	
同	番人　詰所		木造平屋建瓦葺	一〇．六	同	一、一六六．〇〇	
同	便所		木造平屋建瓦葺	．六	同	一六八．〇〇	
同	同		木造平屋建瓦葺	．五	同	一四〇．〇〇	
同	物置		木造平屋建瓦葺	三．一	同	二四八．〇〇	
同	門		木造平屋建瓦葺	一．〇	同	三六〇．〇〇	
同	供待		木造平屋建瓦葺	一．一	同	七七．〇〇	
同	塀			一五六．四間	同	三一、二七五．〇〇	
同	練塀			四七間	同	二、八二〇．〇〇	
計						三七、二四五．〇〇	

（三）水道、瓦斯設備

資産種別	種類	数量	記帳価格　円	備考
基本財産	五寸鉄管	二九九．四	五、九八八．〇〇	
同	瓦斯管	三八．六	三八六．〇〇	
同	制水鞭	五個	一〇〇．〇〇	
同	異形管	一八本	二一六．〇〇	
計			六、六九〇．〇〇	

（四）庭園設備

資産種別	種類	数量	記帳価格　円	備考
基本財産	松（大）	一六本	一、六〇〇．〇〇	
同	松（小）	一三	一三〇．〇〇	
同	檜（大）	一五	三〇〇．〇〇	
同	檜（小）	三	一五．〇〇	
同	杉（大）	八	一六〇．〇〇	
同	杉（小）	六〇	三〇〇．〇〇	
同	樅	三三	八二五．〇〇	
同	楠	二	四〇〇．〇〇	
同	椎	一三	一九五．〇〇	
同	樫	五三	四二四．〇〇	
同	山桃	二	一〇〇．〇〇	
同	梧桐	六	九〇．〇〇	
同	楓	一六〇	二、四〇〇．〇〇	
同	青木	一八〇	一八〇．〇〇	
同	雑	一、九〇〇	九五〇．〇〇	
同	庭石（大）	二〇個	五、〇〇〇．〇〇	
同	庭石（中）	三〇	一、五〇〇．〇〇	
同	庭石（小）	八二〇	一、六四〇．〇〇	
同	飛石	一一〇	三三〇．〇〇	
同	手洗水石	五	七五．〇〇	
同	石橋	一	二〇．〇〇	
同	石垣	二	四〇〇．〇〇	
同	石燈籠	六	一五〇．〇〇	
計			一七、一八四．〇〇	

（五）備品

資産種別	種類	数量	記帳価格　円	備考
普通財産	和額	一面	一〇〇．〇〇	題字「無隣庵」
同	軸物	一本	五〇．〇〇	石標「恩賜稚松乃記」
同	飾棚	一個	五〇．〇〇	三角棚
同	ストーブ	一基	三〇．〇〇	
同	卓子	二個	一〇．〇〇	檜製
同	椅子（大）	二脚	七〇．〇〇	ビロード張
同	椅子（小）	三脚	三〇．〇〇	同
同	長椅子	一脚	六〇．〇〇	同
同	読書椅子	一脚	三〇．〇〇	皮張
同	ジュータン	一枚	四〇．〇〇	六畳敷
同	緞張	八枚	一六〇．〇〇	
同	金庫	一個		
計			六三〇．〇〇	

（六）預金

資産種別	種類	預入先	券面額	利率	備考
基本財産	金銭	東京市日本橋区室町二丁目一番地	円		
	長期信託	三井信託株式会社	五〇、〇〇〇．〇〇	年三分八厘	
計			五〇、〇〇〇．〇〇		

（七）現金

ナシ

二　負債合計金　ナシ

以上

表４　昭和14年度収支決算書

昭和十四年度収支決算書

歳入
　金二千六百六十八円四十二銭

歳出
　金二千六百五十四円二十五銭
歳入歳出差引
　残金十四円十七銭　昭和十五年度へ繰越

昭和十四年度収支決算（自昭和十四年一月一日　至同年十二月三十一日）

歳入

科目	予算額	決算額	比較増△減	摘要
	円	円	円	
一、基金利子	一、八二四、〇〇	一、八二四、〇〇	〇	基本金五〇、〇〇〇円に対スル利子
二、使用料	二三三、六九	一九〇、〇〇	△四三、六九	無隣庵ノ使用少ナカリシニ依ル
三、前年度繰越金	一二、三一	一二、三一	〇	
四、寄付金	二五〇、〇〇	六四二、一一	三九二、一一	
歳入合計	二、三二〇、〇〇	二、六六八、四二	三四八、四二	

歳出

科目	予算額	決算額	比較増△減	摘要
	円	円	円	
一、諸税	一、〇〇〇、〇〇	九五九、六四	△四〇、三六	家屋税五五五円九十銭　地租及同付加税四〇三円七四銭
二、諸給与	四七五、〇〇	四七五、〇〇	〇	管理人給料三二五円　同手当一五〇円
三、庭園費	四五〇、〇〇	七五六、五三	三〇六、五三	水力使用料三四五円　樹木手入費三一九円三銭　除草其ノ他掃除人夫費九二円五〇銭
四、諸修繕費	一、五〇、〇〇	二〇二、〇一	一五二、〇一	茶室修繕二五五円二〇銭　高□修繕二四円二五銭　畳其他修繕一九円二五銭
五、道路工事費 特別負換金	一七〇、〇〇	一六九、四二	△、五八	第三区分八四円七一銭　第四区分八四円七一銭
六、雑費	七五、〇〇	九一、六五	一六、六五	電灯使用量四一円六九銭　上下水使用料七円九二銭　町費二一円八〇銭　其ノ他雑費二〇円二四銭
歳出合計	二、三二〇、〇〇	二、六五四、二五	三三四、二五	

右ノ通相違無之候也
昭和十六年一月十日
京都府京都市左京区南禅寺草川町四十八番地無隣庵内
財団法人無隣庵保存会
京都市中京区寺町通姉小路上ル下本能寺前町五百二十番地
右理事　熊谷直之

民俗文化財

「地蔵盆」に関するアンケート調査結果

村上　忠喜

１．はじめに

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以後京都市文化財保護課という）では，平成25年９月から同年12月にかけて，地蔵盆に関するアンケート調査を実施した。その結果に関してはすでにＨＰにおいて概要を紹介し[1]，「京の地蔵盆～地域と世代をつなぐまちの伝統行事～」というリーフレットにまとめて無償配布している[2]。しかしながら，設問の意図についてはこれまできちんとした説明をしていなかったとともに，分析についても，区ごとの集計のみであったので，この機会にあらためて調査の意図を含めて紹介しておきたい。

本アンケートは，「京都をつなぐ無形文化遺産制度」の第３号として選定された，「京の地蔵盆－地域と世代をつなぐまちの伝統行事」（選定日は平成26年11月20日）の選定文書作成を第一義的な目的としておこなった基礎調査のひとつである。

「京都をつなぐ無形文化遺産制度」は，平成25年12月，ユネスコの無形文化遺産に「和食」が登録（代表一覧表への記載）される動きの中で，京都市文化財保護課が立ち上げた制度である。本制度は，これまでのような文化財の指定や登録といった保護手法とは異なり，一般市民からの公募により，市民が大事に思う無形の文化遺産を対象化し，それを顕彰，啓発していくことで，京都にとって大切な無形文化遺産の保護の機運を盛り上げて，市民生活の成熟化や，活性化に資するというねらいをもった制度である。

本制度の最大の特色は，①対象となる無形の文化が市民公募により選ばれたものであること。②その魅力を発信することに重きを置く制度であること。そして③これまでの文化財のように所有者を特定しない，換言すれば所有者を特定できないような，市民の日常生活の中で伝承されてきた慣習などを無形文化として対象化することにある。

第１号は「京の食文化－大切にしたい心，受け継ぎたい知恵と味」（平成25年10月８日），第２号は「京・花街の文化－いまも息づく伝統伎芸とおもてなし」（平成26年３月19日），そして第３号が「京の地蔵盆－地域と世代をつなぐまちの伝統行事」である。

地蔵盆の選定にあたっては，市域における地蔵盆の実施状況の実態を知る必要があったため，地蔵盆の実施主体であると想定できた自治会や町内会に対して，アンケート調査を実施した。本稿はその調査のまとめである。

筆者は，同制度の直接の担当ではなかっ

たが、民俗担当技師として同アンケート調査の立案、入力作業指導及び解析について全面的に関わった。なお実務作業については、株式会社シー・ディー・アイの全面的な協力を得たこと、特に研究員の箕輪真紀氏と、当時アルバイトで入力作業していただいた寺村恵理子氏には大変お世話になった。冒頭に謝意を表したい。

さて、アンケートの解説に移る前に、京都市の「京都をつなぐ無形文化遺産制度」において地蔵盆を取り上げるにいたった、社会的な背景について簡単に触れておきたい[3)]。

近年京都では、地蔵盆がまちづくり関係に携わる方々の注目を集めている。研究論文も相当数にのぼっている。市域の地蔵や地蔵堂の圧倒的な分布量、近年縮小傾向にあるとはいえ地蔵盆のもつ「伝統的な」催事としてのスタンダード性、そしてなによりも行事主体が「対面接触可能範囲の地域社会」で行われてきた点が評価され、コミュニティー活性化の文化資源として、また新たなコミュニティー創成のツールとして注目されているのである。その背景には、阪神淡路大震災や東日本大震災発生時の対応や復興の過程において、コミュニティーをはじめとする地域社会が果たした役割の高さを認識した、人々の「学び」があると思われる。「京都をつなぐ無形文化遺産制度」において地蔵盆が選ばれたのも、こうした社会背景があったと筆者は考えている。

一般的に町内会（あるいは部落会）は、昭和15年の大政翼賛会成立とともにその末端組織として位置付けられ、その結果、アジア太平洋戦争後の戦後民主主義の風潮の中で、戦争協力機関として、封建遺制を色濃く残すものとして、一般社会からも強いバッシングを受けた。そのため戦後新たに開発された住宅地などでは、町内会の流れを汲むとみなされる自治会の設立にアレルギー反応をもち、自治会をつくらないという結論を出した地域も少なくない[4)]。基本的に町内会が主催単位となっていた地蔵盆は、そういった意味でもすでに維持継承が難しい時代を経てきているのである。

こうした歴史経過は京都も同様ではあるものの、町内会に対する評価はいささか複雑である。京都の都心部においては、明治以来の公同組合の組織が連合町内会へと移管されたこともあり、押しつけではない自治の伝統が町内会に継承されているという歴史認識は住民の中に共有されているという面もある。

また、地蔵盆は宗教行事であるか否かという議論と併行して、地蔵盆が自治会主催であることで、結果的に地蔵盆への参加強要を招来し、信教の自由を侵害しているといった認識も根強くあった。いやあるというべきかも知れない[5)]。日本の自治会組織は、〈多様な目的と機能を包括的に有する〉という意味での「ぐるみ的」性格を特徴とするが、信教の自由の権利意識の浸透により、地蔵盆執行に自治会費を拠出する妥当性の是非が常に問われることになった。現在ではほとんどすべての自治会では、自治会費とは別に地蔵盆の費用を捻出しているし、組織的にも自治会と分けて、奉賛会組織等を作っているところも多い。また特に都市においては、地蔵堂の占有地の確保

に苦慮しているところであるが、公有地を貸借して地蔵堂を設置している場合がある。そうした事例について、政教分離の原則に違反しているのではないかという違憲訴訟も起こっており、最高裁の判決を見たとはいえ、この問題は今後も議論され続けていくことであるに違いない。

そうした問題を内包しつつも、経済優先型の社会から脱皮し成熟度を増しつつある日本社会が、高度経済成長期以降失いつつあったコミュニティー再編の救世主として、特に都市、なかんずく京都において地蔵盆が注目されてきているのである。

以上が、筆者が考える「京都をつなぐ無形文化遺産制度」の第３号として、「京の地蔵盆－地域と世代をつなぐまちの伝統行事」が選定された社会的背景である。

２．アンケートの手法と設問項目，及びその意図

アンケートは，配布と回答を円滑に行うという現実的な要請上，A4片面１枚に収める必要があった。よって，基本的な事項のみの設問となっている。内容の詳細よりも，市域における現在の地蔵盆の開催実態を広く知ることを目的の第一義としたためである。

アンケートは，市域の全自治会長・町内会長（6,627件）に対して配布，記入を依頼し，3,684件の有効回収を得た。有効回収率は55.6パーセントである。

設問は，大きく下記の６点である。

①回答団体の所在地等
②お地蔵さんの有無／箇所数と個体数
③平成25年度の地蔵盆実施の有無／開催日
④地蔵盆の開催場所／移動したかどうか
⑤地蔵盆の実施主体
⑥地蔵盆で行った行事内容

では，逐一，設問の意図とその結果をみていこう。

①　回答団体の所在地等

ここでは，名称／所在地（区と学区）を尋ねている。本アンケート分析のための最も基本的な情報となるところである。多くは町名や，自治会名の記載であるが，なかにはマンションの管理団体の名前も見られる。本データが，回答に対する，歴史的背景等を知る唯一の手がかりであり，分析の要とする情報である。

本アンケートは自治会長・町内会長さんに対して回答をお願いした。地蔵盆の実施主体のほとんどが自治会・町内会であり，多くの自治会長・町内会長さんが地蔵盆実施の中心におられることは間違いのないことであるが，地蔵盆が自治会や町内会の下部組織で行われているというケースもまま存在する。たとえば，路地に面した家々のみで地蔵を祀り，地蔵盆を奉斎するような場合もあるのである。そうした地蔵盆は，自治会や町内会が行うそれとは別に執行される例も予測された。このような事例を掬い取るという意味も込めて，設問②を設けた。

②　お地蔵さんの有無／箇所数と個体数

地蔵が町内に何カ所祀られているのか，またその個体数を問うた設問である。その

【資料】調査票

「地蔵盆」に関するアンケート

京都市は，「市民が残したい“京都をつなぐ無形文化遺産”制度」を創設し，世代を越えて伝えられてきた無形文化遺産を大切に引き継いでいくための取組を進めています。
この度，京都の大切な宝である「地蔵盆」の実施状況等を調査するため，以下のアンケートを実施いたしますので，ご協力のほど，よろしくお願い申し上げます。

※　選択式の設問は，該当する項目の□に印（☑）を入れて下さい。
※　「大日盆」などの盆行事も広く「地蔵盆」に含めてご回答をお願いします。

（問１）貴会（自治会・町内会）について，お教えください。
名称 ＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿ 所在地（住所）＿＿＿＿区 ＿＿＿＿＿学区

（問２）貴会の区域内にお地蔵さんはありますか。
□① ある
└→ 何か所に何体ありますか。　（　　）か所に　計（　　）体
□② ない
└→ 地蔵盆の時はお地蔵さんを　□(a) 借りてくる　□(b) 仏画を使用する
□(c) その他（　　）

（問３）貴会では今年，地蔵盆を行いましたか。
□① 行った。
└→ 開催日　＿＿月　＿＿日　～　＿＿月　＿＿日
名　称　□(a) 地蔵盆　□(b) 大日盆　□(c) その他（　　）
□② 行わなかった。
├→ 過去に行っていた場合，何年まで行っていましたか。(昭和・平成・西暦　　）年まで
├→ 地蔵盆の代わりに行っている行事がありましたらお教えください。
（　　）
└→ 過去に行った地蔵盆についてわかる範囲で，以下の質問にお答えください。

（問４）地蔵盆を行った場所はどこですか。
□① 地蔵堂の前
□② その他
├→ □(a) 個人宅　□(b) ガレージ等の空地　□(c) 道路上
□(d) その他（　　）
└→ その際，お地蔵さんを移動しましたか。　□(a) はい　□(b) いいえ

（問５）地蔵盆の実施主体はどこですか。
□① 自治会・町内会　□② 町内の隣組　□③ 町内の有志
□④ 複数の自治会・町内会が共同して　□⑤ 町内の子供会
□⑥ マンションの管理組合　□⑦ その他（　　）

（問６）地蔵盆で行った行事について，すべてお教えください。
□① 僧侶の読経　□② 数珠回し　□③ ご詠歌　□④ お地蔵さんのお化粧
□⑤ お菓子配り　□⑥ 福引　□⑦ ふごおろし　□⑧ 盆踊り
□⑨ 一式飾り　□⑩ その他（　　）

◆ご記入いただいた方のお名前，ご連絡先を差し支えなければご記入ください
（お名前）＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿（電話番号）＿＿＿＿－＿＿＿＿－＿＿＿＿

質問は以上です。ご協力誠にありがとうございました。
このアンケートは，自治会・町内会アンケートといっしょに返信用封筒に入れて，ご返送ください。

【このアンケートに関するお問合せ先】
京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課　担当：伊藤，村上，平井
電　話：０７５－３６６－１４９８／ＦＡＸ：０７５－２１３－３３６６

意図するところは，先述の通りである。すなわち、旧都心部の場合は、表通りの家々とは別に路地や辻子で祀られているという実態が想定され，そうした事例を掬い取ろうとしたのである。但し，この設問も，解析はそう単純ではないことは当初からわかっていた。

というのも，かつての郡部であり明治期以降に市街化していった地域は，都心部の両側町を基本にした個別町とは違い，一町内の面積が広いのが通常である。そうした地域では，かつての村組などの近隣組織が班となっているところが多数確認でき，そうしたところでは村組などの系譜をひく地縁組織が地蔵盆の開催主体となっていることも想定できたのである。よって，本設問は，全体的な傾向を知る際の参考数値以上のものにはならないと想定していた。

③　平成25年度の地蔵盆実施の有無／開催日

ここからが地蔵盆に関する設問となる。

まず地蔵盆の開催の有無と、その日取りを尋ねている。この設問の意図は特に記すまでもなく，現在の地蔵盆実施の実態と，開催日がどの程度地蔵の縁日である24日を意識しているかということを知るものだった。結果，実に2,902件、回答の78.8％の地域で地蔵盆が開催されていたことがわかった。この数値は，地蔵盆の実施率は現在においても「高い」，とすべき数値であろう。もちろん，アンケートに回答があった自治会や町内会は，地蔵盆を執り行っているところの方が多かった可能性は想定できる。しかしながら，本調査の前年，平成24年に行われた「自治会・町内会活動に関するアンケート調査」[6]においても、地蔵盆を開催した自治会が76.9％と、本調査とほぼ同様の比率を示している。いわゆる自治会・町内会活動全般のアンケート調査において，地蔵盆の開催に関する数値が近似しているということは，本調査の数値の妥当性の高さを示していると解してよい。

参考に，「自治会・町内会活動に関するアンケート調査」（平成24年度）の結果概要を記す。

> 京都市（文化市民局地域自治推進室）では，平成24年度に，市域の自治会長・町内会長を対象に，自治会・町内会活動に関するアンケート調査を行っている。 本調査は，平成23年11月に公布された「京都市地域コミュニティー活性化推進条例」の推進にあたって，自治会や町内会の現状把握を目的としたもので，調査対象数（配布数）6,590件，回答数3,721件，回答率56.5％の大規模な調査であった。そのなかで，地蔵盆が出てくる結果が２例みられる。
> ひとつは，自治会・町内独自で取り組んでいる活動は何かという設問の中で，最も多かったのが「地蔵盆」で76.9 ％，次いで「葬儀等の手伝」が72.6％，「親睦の会食・旅行等」が46.5％と続く。いまひとつは，今後力を入れたい活動についての回答で，多い順から，「高齢者の見守り・交流」（46.3％），「防火・防犯活動」（34.2％），「防災訓練」（32.8％），「清掃・美化」（26.6％），「児童の見守り・交流」（25.3％），そして「地蔵盆」（23.8％）となっている。

いまひとつの開催日の設問は，地蔵菩薩

の縁日である24日を中心とする日程がどのように変異しているのかを知るという意図をもって設問に加えた。平成25年は8月25日が日曜であったので、25日の開催が多くなっているが。特筆すべきは平成25年では8月18日の日曜開催が31.5％と最多であったことである。これは盆休み期間の後半開催へ移行してきていることを示しているのであろう。

④　地蔵盆の開催場所
／移動したかどうか

この設問は、地蔵盆の開催場所を尋ねるものだが、同時に地蔵を移動して奉斎するかどうかを確認しようとしたものである。というのも、京都の都心部では、地蔵盆に際して地蔵を祠から出して各家持ち回りで斎場とする習俗が一般的であったという聞き取り成果や報告、また江戸時代の記録がある。果たしてそうした習俗は現在どの程度確認できるのか，また市域内でも地域的な差異はあるのかということを数的に確認するための設問であった。

⑤　地蔵盆の実施主体

この設問は，地蔵盆の実施主体を問うたものである。地蔵盆は純然たる宗教行事であるとする立場の方もおられるので，宗教や信条とは関係ない地縁組織が主催することへの抵抗がある場合が想定できた。よって子供会などが主体となる場合も相当数あるのではないか，また先ほど述べたように，村組（近隣組織）などの自治会・町内会の下部組織が主体となるケースも想定できた。

⑥　地蔵盆で行った行事内容

この設問は，地蔵盆で実施された行事の把握を目的としたものである。設問に，僧侶の読経／数珠回し／ご詠歌／お地蔵さんのお化粧／お菓子配り／福引／ふごおろし／盆踊り／一式飾りの９つ選択肢を設けるとともに，「その他」として自由回答欄を設けた。このうち「一式飾り」に関しては，回答者に設問の意図がうまく伝わらなかった。というよりも設問者側の説明不足のため，回答できなかったのが実情である。一式飾りの一式は，一種類か同種類の道具や用品を用いて，テーマ性のあるつくりものを造作して見せるというものである。たとえば織物関係の同業者が集住する地域で，糸車や筬，糸などの機織り関係の道具だけを用いて，「巌流島の決闘」の場面を演出し，地蔵盆の際に飾って見せるというような，「見せる」ことにこだわった行事があるかどうかを問うたものであるが，回答数からしても，地蔵や地蔵小祠，ありは祭壇を地蔵盆の際に飾ってみせることと解釈された回答者が多かったと想像される。

以上，アンケートの手法と設問項目設定の意図について述べた。

次に，行政区別の集計結果を確認しておく。この部分は，冒頭に記したように，すでに京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課のＨＰ「京都の文化遺産」にＰＤＦ形式で掲載されているので，詳しくはそちらを参照いただきたいが，論を進める便宜上，本稿においても節を設けて要点のみ紹介したい。

３．行政区別
アンケート集計結果の概要

①　行政区別の回答数（表１）

表１は、3,684件の有効回答数の区別の件数と、有効回答全体に占める百分率を示したものである。

②－１　地蔵の有無について（表２）

表２は地蔵のあるなしについて，全体と区別のデータを記したものだが，自治会・町内会のなかで，町内にお地蔵さんの「ある」ところが2,632箇所で全体の71.4%，「ない」ところが953箇所で25.9%，所有はしているが寺に預けるなど別の場所に保管するところが80箇所で2.2%，無回答が19で0.5%という結果である。

区別のデータでは，東山区が90.9%，上京区が84.4%と高い数値を示す。一方で，お地蔵さんのない自治会・町内会が高いのは西京区の54.1%である。また，全体のサンプル数が80と少ないものの，中京区（4.7）や北区（4.5），下京区（3.6）で高い数値を示すのが，お地蔵さんを寺や他の場所で保管する町内である。お地蔵さんを移動させてでも保有しようという意思が感じられる事例である。

表１　①　行政区別の回答数

区分	回答団体数	回答全体に占める比率（%）
全体	3,684	100.0
北区	309	8.4
上京区	423	11.5
左京区	350	9.5
中京区	444	12.1
東山区	208	5.6
山科区	218	5.9
下京区	366	9.9
南区	214	5.8
右京区	349	9.5
西京区	159	4.3
伏見区	593	16.1
無回答	51	1.4

表２　②－１　地蔵の有無について（数値単位は%）

	ある	ない	寺預けや別の場所に保管等	無回答
全体	71.4	25.9	2.2	0.5
北区	68.3	27.2	4.5	0.0
上京区	84.4	12.3	3.3	0.0
左京区	72.9	24.6	1.7	0.9
中京区	74.3	20.9	4.7	0.0
東山区	90.9	7.7	1.4	0.0
山科区	66.1	32.1	0.9	0.9
下京区	73.2	22.7	3.6	0.5
南区	71.0	27.6	1.4	0.0
右京区	72.2	26.9	0.6	0.3
西京区	44.7	54.1	0.0	1.3
伏見区	62.6	35.9	0.3	1.2

表３　②－２　地蔵祭祀の場所数（数値単位は%）

	１か所	２か所	３か所以上	無回答
全体	80.7	10.1	5.5	3.8
北区	84.4	7.1	6.2	2.4
上京区	81.5	12.6	3.1	2.8
左京区	67.1	17.3	10.6	5.1
中京区	91.5	5.8	0.6	2.1
東山区	72.5	14.8	11.6	1.1
山科区	70.8	10.4	13.2	5.6
下京区	85.8	8.2	1.9	4.1
南区	81.6	8.6	5.3	4.6
右京区	82.9	7.1	7.1	2.8
西京区	73.2	11.3	5.6	9.9
伏見区	82.2	9.2	3.8	4.9

②－２　地蔵祭祀の場所数（表３）

地蔵の「ある／なし」にあわせて，「ある」と答えた町内（2,632）について，何カ所に何体祀っているのかについて問うた集計が表３である。「1か所」のみに祀るのが最も多く80.7％を占める。以下，「2か所」が10.1%，「3か所以上」が5.5%となっている。

区別の集計では，「1か所」のみが卓越するのは中京区（91.5%）で，逆に少ないのが山科区（70.8％）である。箇所数の多い自治会・町内会は，左京区（「2か所」と「3か所以上」の計27.9%）と東山区（同26.4%），山科区（同23.6%）となる。第2節で述べたように，ほとんどが伝統的な都市域となる東山区と，村落域を数多く含む左京区や山科区の数値が近似しているからといっても解析は大きく異なるだろう。この点については，第4節で述べたい。ひとまず，アンケート結果を提示することに専念しよう。

②－３　地蔵の個体数（表４）

お地蔵さんがあると答えた場合，何体あるかという地蔵の個体数を問うた設問である。この設問は「②－２」とセットとなるもので，互いにデータを補完して一町内での地蔵の存在形態を知るように考えたものである。

全体では「1体」が62.7%，「2体」が14.7%，「3体以上」が18.2%である。行政区別にみると，「1体」の自治会・町内会は中京区（76.4%）と下京区（72.4%）に多く，一方，個体数の多い自治会・町内会は，左京区（「2体」と「3体以上」の計47.0%）と東山区（同47.6%），であった。この数値の解釈も②－２同様である。

③－１　地蔵盆の開催（表5）

2,902の町内会，実に市域の78.8%で地蔵盆が行われているという高い数値が出た。行わなかったところは747箇所，20.3%である。特にお地蔵さんを所有する2,902の自治会・町内会では，地蔵盆を

表４　②－３　地蔵の個体数（数値単位は%）

	1体	2体	3体以上	無回答
全体	62.7	14.7	18.2	4.4
北区	61.1	10.0	24.6	4.3
上京区	62.2	18.5	16.5	2.8
左京区	47.1	14.5	32.5	5.5
中京区	76.4	14.8	6.1	2.7
東山区	49.7	20.6	27.0	2.6
山科区	55.6	9.7	26.4	8.3
下京区	72.4	16.0	8.2	3.4
南区	65.1	13.8	17.8	3.3
右京区	64.7	10.7	21.4	3.2
西京区	57.7	14.1	16.9	11.3
伏見区	64.7	14.6	14.6	6.2

表５　地蔵盆の開催（数値単位は%）

	行った	行わなかった	無回答
全体	78.8	20.3	1.0
北区	85.1	14.6	0.3
上京区	88.7	11.1	0.6
左京区	72.9	26.0	1.3
中京区	85.1	14.2	1.0
東山区	90.4	9.1	0.3
山科区	76.6	22.9	0.3
下京区	81.4	17.5	1.3
南区	78.0	21.0	0.6
右京区	81.9	17.2	1.0
西京区	65.4	34.0	0.3
伏見区	66.4	32.2	2.6

行っているのが94.3%という高数値である。また町内にはお地蔵さんはないが，寺に預けている，あるいは他の場所に保管している80地区のうちで，地蔵盆を行ったのは70地区で，87.5%にのぼった。またお地蔵さんがいないにもかかわらず地蔵盆を行ったところは349地区で，お地蔵さんがいない953地区の36.6%にあたる。当然の結果であるが，地蔵を所有する地区に，地蔵盆の執行率が高くなっている。

一方，お地蔵さんはあるが地蔵盆をしなかったのは，133地区で，地蔵を所有する2,632地区の5.1%にあたる。

お地蔵さんはないが地蔵盆を行った349地域で，執行にあたってお地蔵さん本体をどうしたかを聞くと，「借りてくる」が91地域（26.1%），「仏画を使用する」が82地域（23.5%），「その他」が119地域（34.1%）となっている。「その他」の内容は，67地域（119地域の56.3%）が，夏祭りという名称で行う，子供祭りとして行う，何も置かない，といった「地蔵なしで済ませる」というものである。これを地蔵盆というかどうか難しいところであるが，回答者当人が地蔵のない夏祭りを地蔵盆と認識しているところを評価した集計である。

また，子どもが少ない，あるいはお地蔵さんを共同管理している関係から，「近くの町内会と合同で行う」「別の町内会地蔵盆に参加させてもらう」「地蔵尊を持ち回りする」と回答した地域が19箇所，「お寺で行う」「お寺をお参りする」のは9地域（寺に預けている町内会とは別）だが，お地蔵さんは子供たちが毎年描く，など「自分たちで作っている」町内会も4地域あった。

以上，市域内での地蔵盆の多様な在り方がうかがえる結果となった。

行政区別の集計では，地蔵盆の執行率が高いのが東山区（90.4%），上京区（88.7%）であり，一方比率が低いのが西京区（65.4%），伏見区（66.4%）であった。

※伏見区のこの数値は，第4節で再分析の対象とする。

③－2　地蔵盆の開催日数・開催日と名称

地蔵盆を執行した2,902地区において，地蔵盆を何日間開催したかについて問うたところ，「1日のみ」が77.9%と大半を占めた。数十年前までは2日間行われることが通常だった時代を考えれば，開催日数だけを考えればずいぶん縮小化してきていることがうかがえる結果となった。ちなみに「2日間開催」は18.9%である。

開催日については，調査年の平成5年は，8月18日と25日が日曜であったことにより，盂蘭盆直後の土日である8月17日（11.9%）・18日（31.5%）と，翌週の土日である24日（29.8%）・25日（30.9%）と，この4日間に集中している（※この数値は複数回答可の数値）。以前は地蔵の縁日にあわせた22から24日開催がほとんどであったが，小学校の夏季休暇の短縮や，お盆休みとの関係もあり，開催日がお盆休みの期間に前倒しされている傾向が窺える。

地蔵盆の名称であるが，ほとんどが「地蔵盆」であったものの，「大日盆」（4.9%）と呼ぶところもある。「大日盆」と称するがところが目立って多かったのが東山区

（14.9%）である。

④－１　地蔵盆の開催場所（表６）

地蔵盆を行った場所は，「地蔵堂の前」が最も多く（38.9%），それ以外は「個人宅」（22.8%），「ガレージ等の空き地」（17.0%），「集会所・公園等」（12.0%），「道路上」（10.6%）となっている。

行政区別にみると，「地蔵堂の前」で行う自治会・町内会が多いのは東山区（55.9%）である。「個人宅」で行うところが多いのは上京区（36.6%），中京区（34.7%），下京区（32.2%）であり，とくに上京区と中京区は「地蔵堂の前」よりも多くなっている。「集会所，公園等」が目立って多いのは西京区であり（29.8%），ここでは逆に，「個人宅」が5.8%と少ない。

山科区も，西京区と同様「個人宅」が少ない（5.4%）。「集会所，公園等」（20.4%）も比較的多いが，他の区と比べると「道路上」が目立って多い（19.8%）。

④－２　地蔵を移動したか否か（表７）

「その他」の回答者に，お地蔵さんを移動したか，を尋ねると，「移動した」が809件/42.7%，「移動していない」が243件/12.8%、無回答が841件/44.5％であった。この設問は，表６の補完という意図をもっていたのであるが、設問の意図がうまく伝わらなかった可能性があり、純粋に地蔵盆をする際に地蔵を移動したか否かに

表７　④－２　地蔵を移動したか否か

	移動した		移動しなかった	
	件数	%	件数	%
全体	809	76.9	243	23.1
北区	59	72.8	22	27.2
上京区	138	84.7	25	15.3
左京区	67	69.8	29	30.2
中京区	114	78.6	31	21.4
東山区	37	68.5	17	31.5
山科区	42	76.4	13	23.6
下京区	77	81.1	18	18.9
南区	41	80.4	10	19.6
右京区	73	69.5	32	30.5
西京区	13	48.2	14	51.8
伏見区	139	82.7	29	17.3

表６　④－１　地蔵盆の開催場所（数値単位は%）

	① 地蔵堂の前	②その他						無回答
		個人宅	ガレージ等の空き地	集会所，公園等	道路上	寺社	その他	
全体	38.9	22.8	17.0	12.0	10.6	5.0	1.3	0.9
北区	45.6	16.3	11.0	12.9	10.6	4.2	0.8	0.8
上京区	31.8	36.6	19.3	5.9	2.9	5.6	0	0.5
左京区	42.7	9.0	16.1	12.2	12.2	6.3	0.8	1.6
中京区	32.3	34.7	13.5	5.0	6.6	6.9	0.5	0.8
東山区	55.9	16.0	12.8	3.7	6.4	6.9	0	0.5
山科区	41.3	5.4	11.4	20.4	19.8	2.4	0.6	0.6
下京区	40.3	32.2	10.7	5.0	3.7	6.7	1.7	0.3
南区	44.9	12.6	16.8	14.4	9.0	2.4	1.2	1.8
右京区	36.7	9.4	19.9	16.1	13.6	3.8	1.0	1.7
西京区	37.5	5.8	10.6	29.8	11.5	1.9	2.9	1.0
伏見区	34.8	19.3	15.5	20.1	5.1	3.3	2.5	0.5

ついて回答したものとして捉えた方がよいと判断した。無回答を考慮外として、地蔵盆の際に地蔵を移動したか否かで、行政区別に見たのが表７である。行政区別にみると，「移動した」町内会が比較的多いのは，上京区（84.7％）、伏見区（82.7%），下京区（81.1％），そして南区（80.4％）である。「移動していない」町内会が多いのは，西京区（51.8%）となっている。

⑤　地蔵盆の実施主体（表８）

地蔵盆の実施主体は全回答数2,902件のうち、圧倒的に「自治会・町内会」が高く、2,429件/83.7%を占める。以下、「町内の隣組」が242件/8.3％、「町内の有志」が136件/4.7％、「複数の自治会・町内会が共同して」が54件/1.9％、「町内の子供会」が130件/4.5％、「マンションの管理組合」が12件/0.4％となっている。

これだけ圧倒的な数値が出ているので、行政区別の傾向も明確ではないが、あくまでも傾向として「自治会・町内会」が少ないのは左京区（74.5%），南区（71.3%）であり，その代わりに「町内の隣組」や「町内の有志」が比較的多くなっていることが指摘できる。「町内の隣組」「町内の有志」を合わせて約20%に達するのは，上述の左京区・南区と，東山区となっている。

「町内の子供会」が主催するケースが多いのは，西京区（14.4%）と山科区（12.0%）である。西京区は，「町内の隣組」も「町内の有志」もほとんどなく，「町内の子供会」だけが全体傾向より10ポイント高いのが特徴である。

⑥　地蔵盆で行った行事（表９）

現行の地蔵盆でどのような行事が行われているのか。本来は、もっと多彩であるとは思うのだが、アンケートの都合上、こちらが設定した行事内容に答えていただくことで、全体的な、そして地域的な傾向を読もうとした。

表８　地蔵盆の実施主体（数値単位は%）

	①自治会・町内会	②町内の隣組	③町内の有志	④複数の自治会・町内会が共同して	⑤町内の子供会	⑥マンションの管理組合	⑦その他	無回答
全体	83.7	8.3	4.7	1.9	4.5	0.4	1.5	1.1
北区	82.5	8.4	4.9	2.3	2.3	0.0	2.3	1.5
上京区	89.8	8.0	2.4	0.5	1.3	0.3	0.8	0.5
左京区	74.5	10.2	9.0	3.5	5.9	0.8	3.5	1.6
中京区	85.7	9.3	3.2	1.6	1.6	0.5	0.5	1.3
東山区	81.4	11.7	8.0	0.5	1.6	0.5	0.0	1.1
山科区	82.0	3.6	7.2	1.8	12.0	0.6	4.2	1.2
下京区	86.2	9.7	5.0	1.0	2.3	0.0	0.7	0.3
南区	71.3	11.4	8.4	4.8	5.4	1.2	1.8	1.8
右京区	86.0	4.9	3.5	3.1	9.1	0.3	1.0	0.3
西京区	84.6	1.9	0.0	1.0	14.4	0.0	1.9	2.9
伏見区	87.1	8.4	2.5	1.5	4.1	0.3	1.5	0.8

全回答数2,902件のうち、最も多かったのが「お菓子配り」で2,902地区のうち実に2,626地区で行われ、回答のあった90.5%の地区で行われている。以下多い方から,「福引」が1,960件/67.5%,「一式飾り」が1,725件/59.4%,「僧侶の読経」が1,513件/52.1%,「数珠回し」が1,233件/42.5%,「お地蔵さんの化粧」が1,061件/36.6%となっている。

但し「一式飾り」については、地蔵の荘厳のことと捉えられてしまったようである。これは設問者側の不備であった。本来一式飾りは，限られた種類の日用品や生業具などを材料とし，何かのテーマに沿った飾り付けをさす。たとえばかつて西陣では、織物の道具や糸を使って人形などを地蔵盆に合わせて飾って、道行く人の目を楽しませた。

行政区別にみた特徴は、さほど明確には出ないものの、

- 「僧侶の読経」が下京区（67.1%）と東山区（60.1%）に多い。
- 「数珠回し」が上京区（66.0%）と中京区（53.4%）、北区（52.1%）に多い。
- 「お地蔵さんの化粧」が南区（59.3%）と伏見区（46.2%）に多い。
- 「盆踊り」はほとんど行われないが、西京区（10.6%）が突出している。

ということが指摘できるだろう。

以上が、先のアンケート結果の概要である。

では次に、このアンケートの主たる分析視角であった、都市部と村落部の差異という視点でもう一度、一部のデータを再集計してみる。

表９　地蔵盆で行った行事（数値単位は%）

	お菓子配り	福引	一式飾り	僧侶の読経	数珠回し	お地蔵さんのお化粧	ご詠歌	盆踊り	ふごおろし	その他	無回答
全体	90.5	67.5	59.4	52.1	42.5	36.6	10.2	1.8	1.1	38.2	1.1
北区	93.2	73.4	61.6	57.0	52.1	31.2	6.5	1.1	0.8	37.3	1.1
上京区	93.9	65.8	72.5	57.2	66.0	24.9	3.7	0.3	2.4	38.2	0.0
左京区	93.3	68.6	49.4	40.4	28.2	39.2	15.7	2.0	1.6	48.6	2.7
中京区	92.1	66.1	68.8	58.7	53.4	30.4	8.7	1.1	1.6	35.7	0.0
東山区	80.9	54.3	62.8	60.1	33.5	37.8	4.3	1.1	0.5	37.8	1.1
山科区	94.0	80.8	45.5	46.1	31.1	41.3	2.4	3.6	1.2	42.5	1.8
下京区	84.2	53.0	65.8	67.1	41.3	31.5	6.0	0.7	0.7	29.5	0.7
南区	88.0	62.3	55.7	52.7	16.8	59.3	7.8	0.6	0.0	39.5	1.2
右京区	94.4	86.0	51.4	50.0	27.6	42.3	12.9	1.7	0.7	37.8	1.4
西京区	88.5	76.0	36.5	30.8	17.3	25.0	8.7	10.6	0.0	46.2	3.8
伏見区	90.6	65.5	58.6	39.6	51.3	46.2	25.4	2.8	0.8	38.6	0.8

４．旧都市域と旧村落域の対比

本節では、都市域の地蔵盆と村落域のそれが、どういった点で相違し、また近似しているかということを数的に捉まえて示し、今後の研究に供したい。

但し、都市域と村落域の区別は相当に難問である。日本の大都市は、明治以降人口が急増し、周辺の近隣農村が開発され、行政的にも徐々に周辺部を編入してきた歴史を持つ。京都市においても同様である。加えて都市としての成立が他と比べて格段に歴史のある京都では、都市化の内容も年代もまちまちであり、さらに両者の区分を困難としている。しかしどこかで線引きせざるを得ないので、京都市における地蔵盆の都市的／村落的な傾向をアンケート集計の結果で比較するという目的に沿って、都市域の範囲を狭めに設定した。具体的には、旧京都市と旧伏見市の中で次のエリアに入る町々を都市域と設定した。

表10　本アンケートの旧都市域・旧村落域別回収数

区名	旧都市域の町数	旧村落域の町数	計	無回答
北区	0	309	309	3.8
上京区	423	0	423	2.4
左京区	21	329	350	2.8
中京区	239	205	444	5.1
東山区	167	40	208	2.1
山科区	0	218	218	1.1
下京区	262	104	366	5.6
南区	0	214	214	4.1
右京区	0	349	349	4.6
西京区	0	159	159	2.8
伏見区	111	483	593	9.9
計	1,223	2,410	3,633	4.9

○旧京都市：明治２年に設定された町組に所属する町[7)]

○旧伏見市：明治12年（1879）段階の伏見市の公称町名[8)]

そして、それ以外の地域をすべて村落域とした。もちろん村落域内には、たとえば宿場町、門前町的な町場は多数存在したわけであるが今回は考慮外とした。

結果、京都の中でもいわゆる「伝統的な」都市生活の舞台となった旧都市域として抽出したのが、上京区の全町、そして中京区、下京区、東山区、伏見区の一部である。今回のアンケートの回答数としては、1,223の個別町数となった。対する旧村落域は、上京区を除くすべての区のすべてか一部で、今回のアンケートの回答数としては、2,410の個別町数となった（表10）。

①　地蔵の有無についての比較（表11）

上記の都市域／村落域ごとに、地蔵の有無を集計したのが表11である。全体としては、都市域では「ある」が975町で、都市域全体の町数の79.7％、一方で村落域では「ある」が1,624町で、村落域全体の67.4％となった。３－②－１（表２）と比較すれば、全体では、旧都市域での地蔵の保有率の高さが明らかになった。特に、伏見区においては、区別の統計では62.6％であったのが、都市域だけ抽出すれば、90.1％という高比率を示している。

旧都市域・休村落域双方にまたがる区のうち、旧村落域の地蔵保有率が旧都市域のそれを上回るのが、中京区と下京区の２つの区である。両者は、京都駅から四条、御池界隈を含む京都市内の都心部である。オフィス街や繁華街をふくむこのエリア

は夜間人口ゼロの町もみられる。

②　地蔵盆の開催についての比較（表12）

平成25年に地蔵盆を行ったか否かの旧都市域と旧村落域の比較である。3節の③－1（表5）と対照して述べる。

旧都市域での開催比率が、旧村落域に比べて10ポイント以上高い。また旧村落域においても、北・中京・東山では85％以上の高い開催率を示す。伏見についてはより明確に旧都市域と旧村落域の差が出た。3節の③－1（表5）の区全体では、伏見区は66.4%の開催比率であったが旧都市部のみ取り出せば89.2％の高率を示した。

表11　地蔵の有無（旧都市域/旧村落域）

	都市域						村落域					
	ある		なし		預け		ある		なし		預け	
	町数	%	町数	%	町数	%	町数	%	町数	%	町数	%
全体	975	79.7	198	16.2	48	3.9	1624	67.4	739	30.7	32	1.3
北	0	0.0	0	0.0	0	0.0	211	68.3	84	27.2	14	4.5
上京	357	84.4	52	12.3	14	3.3	0	0.0	0	0.0	0	0.0
左京	19	90.5	2	9.5	0	0.0	236	71.7	84	25.5	6	2.8
中京	158	66.1	62	25.9	19	7.9	172	84.0	31	15.1	2	1.0
東山	154	92.2	11	6.6	2	1.2	34	85.0	5	12.5	1	2.5
山科	0	0.0	0	0.0	0	0.0	144	66.1	70	32.1	2	0.9
下京	187	71.3	60	22.9	13	5.0	81	77.9	23	22.1	0	0.0
南	0	0.0	0	0.0	0	0.0	152	71.0	59	27.6	3	1.4
右京	0	0.0	0	0.0	0	0.0	252	72.2	94	27.0	2	0.6
西京	0	0.0	0	0.0	0	0.0	71	44.7	86	54.9	0	0.0
伏見	100	90.1	11	10.0	0	0.0	271	56.1	203	42.0	2	0.4

表12　地蔵盆の開催（旧都市域/旧村落域）

	旧都市域						旧村落域					
	行った		行わなかった		無回答		行った		行わなかった		無回答	
	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%
全体	1,053	86.1	164	13.4	6	0.5	1,848	75.1	584	23.7	29	1.2
北	0	0.0	0	0.0	0	0.0	263	85.1	45	14.6	1	0.3
上京	374	88.4	47	11.1	2	0.2	0	0.0	0	0.0	0	0.0
左京	18	85.7	3	14.3	0	0.0	237	72.0	88	26.7	4	1.3
中京	194	81.2	43	18.0	2	0.2	184	89.8	20	9.8	1	0.3
東山	153	91.6	14	8.4	0	0.0	34	85.0	5	12.5	1	0.3
山科	0	0.0	0	0.0	0	0.0	167	76.6	50	22.9	1	0.3
下京	215	82.1	45	17.2	2	0.2	83	79.8	19	18.3	2	0.6
南	0	0.0	0	0.0	0	0.0	167	78.0	45	21.0	2	0.6
右京	0	0.0	0	0.0	0	0.0	286	81.9	60	17.2	3	1.0
西京	0	0.0	0	0.0	0	0.0	104	65.4	54	34.0	1	0.3
伏見	99	89.2	12	10.8	0	0.0	295	61.1	180	37.3	8	2.6

③　地蔵盆の際に地蔵を移動したかについての比較（表13）

地蔵盆の際に地蔵を移動したか否かについて、旧都市域と旧村落域を比較すると、僅差ではあるが全体で７ポイント旧都市域の方が高い。都市域のなかでも、上京、左京、下京、伏見の４区が80%を超えて高い数値をみせる。京都の町家では地蔵盆の際には、地蔵堂から地蔵を出して、当番制でまわしていったという伝承を裏付ける数値である。

一方、地蔵盆の開催比率が91.6％と最高値を示した東山区の旧都市域（表12）で、地蔵を移動したのは71.4％にとどまった。

また、旧村落域で際立って移動の比率が低いのが西京区（48.2%）である。

地蔵盆の開催場所については、第３節で区別の数値（表６）をもとに述べたが、ここではそれを補完して，旧都市域だけ抽出した数値（表14）（地蔵堂の前と個人宅で開催された数値）を記しておく。このように，旧都市域においては，個人宅にて行われる比率が高くなっている。すなわち地蔵の移動を行うケースが多いことを裏付けている。

表13　地蔵盆の際に地蔵を移動したかについての比較

	旧都市域				旧村落域			
	移動した		移動しなかった		移動した		移動しなかった	
	件数	%	件数	%	件数	%	件数	%
全体	337	81.0	79	19.0	472	74.3	163	25.7
北	0	0.0	0	0.0	59	72.8	22	27.2
上京	138	84.7	25	15.3	0	0.0	0	0.0
左京	6	85.7	1	14.3	61	68.5	28	31.5
中京	56	71.8	22	28.2	58	86.6	9	13.4
東山	30	71.4	12	28.6	7	63.6	4	36.4
山科	0	0.0	0	0.0	42	76.4	13	23.6
下京	55	85.9	9	14.1	22	71.0	9	29.1
南	0	0.0	0	0.0	41	80.4	10	19.6
右京	0	0.0	0	0.0	73	69.5	32	30.5
西京	0	0.0	0	0.0	13	48.2	14	51.8
伏見	51	85.0	9	15.0	88	81.5	20	18.5

（表６の一部）

	地蔵堂	個人宅
上京区	31.8	36.6
中京区	32.3	34.7
東山区	55.9	16.0
下京区	40.3	32.2
伏見区	34.8	19.3

表14　旧都市域のみ抽出

	地蔵堂	個人宅
上京区	31.8	36.6
中京区	23.7	42.8
東山区	53.6	18.3
下京区	40.0	37.7
伏見区	25.3	37.4

④　地蔵盆の行事内容の比較（表15）

地蔵盆の行事内容を，旧都市域での多い順に比較して示した。大きく異なることはないが，福引が旧村落域の方が20ポイント，地蔵の化粧が15ポイント多くなっている。また僧侶の読経，数珠回しについては，旧都市域が旧村落域をそれぞれ10ポイント，20ポイント上回る。数値的には目立たないが，盆踊りが旧都市域で0.5％，旧村落域で2.5%の開催比率である。京都の地蔵盆には盆踊りが付随することはほとんどないことがわかってはいたが，それを裏付ける数値である。ちなみに【表９】の区ごとの集計では，西京区が10.6％の地区で盆踊りを開催しているが，この数値は他の区を大きく引き離して高い数値である。

表15　地蔵盆の行事内容の比較

行事内容	都市域		村落域	
	のべ件数	%	のべ件数	%
お菓子配り	922	87.6	1703	92.2
福引	589	55.9	1371	74.2
一式飾り	707	67.1	1017	55.0
僧侶の読経	610	57.9	902	48.8
数珠回し	608	57.7	625	33.8
お地蔵さんのお化粧	278	26.4	783	42.4
ご詠歌	88	8.4	208	11.3
盆踊り	5	0.5	47	2.5
ふごおろし	19	1.8	13	0.7
その他	370	35.1	739	40
無回答	4	0.4	29	1.6

５．まとめにかえて

以上，平成25年９月から同年12月にかけておこなった地蔵盆に関するアンケート調査の結果を，その意図，旧都市域／旧村落域の対比分析とともにまとめた。この結果から得られた知見は，地蔵盆執行に関しては，一般的な理解と違い，旧都市域でより強い伝承力を保っているという事実である。この事実は，京都の民俗文化研究において，再確認すべき知見であると思う。と同時に，地蔵盆の現代的な意義を模索していく手がかりの一つになることは間違いない。

註・参考引用文献

1）http://kyo-tsunagu.net/wp-content/uploads/2014/05/jizo_bon.pdf

2）京都市文化財保護課『京の地蔵盆～地域と世代をつなぐまちの伝統行事～』A5版，2015年３月，32頁。

3）地蔵盆の研究は，①民俗学・宗教学的ないわゆる人文系の研究と，②都市計画系，建築系のそれに大別される。また他に地蔵盆が子供を対象とする側面が強いことから，教育学の論考が若干みられる。この二つの流れを対比すれば，近年の地蔵盆研究は，都市計画系，建築系の論考がその量からいっても圧倒的となってきている。これらの研究には，①研究対象地域が，村落域ではなく，都市域，もしくは都市化地域に偏っていること。②地域空間の中での地蔵・地蔵堂の立地，及び地蔵盆の開催空間の研究が主軸になっていること。③地蔵盆が地域コミュニティーの維持形成に果たす役割の分析へと進んできていること。という傾向が指摘できるだろう。なお，最近京都の地蔵盆の

歴史を統括する好書が編まれた。

村上紀夫『京都・地蔵盆の歴史』，法蔵館，2017年。

4）たとえば，長岡京市役所『長岡京市史民俗編』（1992年）は，京都のベッドタウンとして急成長した長岡京市域の自治会活動の詳細を報告している。また筆者は，同調査の成果から，神社祭祀に奉賛会組織が導入されていく経過を論じた。

村上忠喜「都市近郊農村における自治会と神社祭祀―混住化地域における自治会と神社祭祀―」『佛教大学総合研究所紀要３』，1996年。

5）地蔵建設をめぐる最高裁判決として有名なのが大阪市地蔵訴訟である。これは，市営住宅の建て替えに際して，大阪市が市有地を無償で町会に提供したことが政教分離に反すると，大阪市長を相手に違憲確認を求めた訴訟で，大阪地裁が1986年，大阪高裁が1991年，そして最高裁が1992年に，原告敗訴の判決が出ている。すなわち，寺院外の地蔵は習俗化し宗教性が希薄であるという認識を司法が行ったわけである。

6）http://www5.city.kyoto.jp/chiiki-npo/news/jichikai/30/1365553745.pdf

7）旧上京・下京それぞれ1番から33番までの番組小区に属する町を対象とした。

8）過去に存在した町組や「区」に相当する行政区画は現在では存在しないが，便宜上明治12年（1879），旧4区が6組に分かれた時点の区分を採用した。旧伏水第1組に属した町名は明治12年（1879）時点では35町であったが，変更を経て現在は4町である。

旧伏水第2組に属した町名は明治12年時点では35町であったが，変更を経て現在は46町である。

旧伏水第3組は30町であったが，変更を経て現在は29町。

旧伏水第4組は40町であったが，現在は33町である。

旧伏水第5組は35町であったが，変更を経て現在は32町。

旧伏水第6組は28町であったが，変更を経て現在は24町。その他14町を加えて，現182町を旧都市域とした。

村上（むらかみ）　忠喜（ただよし）（京都市歴史資料館　担当係長・文化財保護課　担当係長）

民俗文化財

大原野神社の御田刈祭と相撲の神事

福持　昌之

１．はじめに

大原野神社の神相撲（かみずもう）とは，毎年９月第２日曜日，京都市西京区大原野に鎮座する大原野神社で行われる御田刈祭（みたかりさい）に伴う神事相撲である[1]。旧暦では８月10日に行われていたとされ，明治になって９月10日となった[2]。

祭りに伴う相撲は，神事に際して奉納される競技としての相撲と，所作そのものが神事に不可欠な要素としての意味をもった神事相撲に大別できる。かつては，京都市内では年中行事として多くの相撲が行われていたが，現在確認できるのは８か所のみである。そのうち，神事相撲であるのは，大原野神社のほか，上賀茂神社（北区），平岡八幡宮（右京区）である。このうち，上賀茂神社のものは「烏相撲」として昭和58年（1983）６月１日に京都市の無形民俗文化財に登録されており，平岡八幡宮についても「平岡八幡宮の三役相撲」として平成11年（1999）４月１日に登録されている。

大原野神社についても，享保年間にはすでに恒例であったことが明らかであり，地域で継承されてきた民俗行事として貴重であると評価され，平成27年（2015）３月31日に京都市の無形民俗文化財に登録された。本稿は，その登録のための調査の成果に，その後の知見を加えて報告するものである。

２．神事の相撲について

相撲は『日本書紀』「垂仁天皇七年秋七月己巳朔乙亥（七日）」条の，野見宿禰（のみのすくね）と当麻蹶速（たぎまのけはや）の角力（すまい）の伝承があることが知られるが，全国各地から，相撲をかたどった埴輪や図案化された土器が出土していることから，６世紀には相撲の原型となる競技が存在していたことがわかる[3]。

『続日本紀』「天平六年秋七月丙寅（七日）」条（734）に「天皇観_相撲戯_」とあるのが，相撲節会の始めといわれ，９世紀前半の『内裏式』，９世紀後半の『儀式（貞観儀式）』，10世紀の『西宮記』などに，その祭式の詳細が掲載されており，その内容は競技の前後に様々な儀礼や芸能を伴うものであった[4]。相撲節会は，７月の七夕の節句の儀礼として宮中で行われてきたが，『玉葉』の承安４年（1174）７月27日の記事を最後に，史料上は見られなくなった[5]。一方で，院政期以降，石清水八幡宮，松尾大社など，京周辺の大社寺の祭礼で相撲が催されるようになり，中世半ば以降，勧進相撲の興行の形態が始まり近世に至る[6]。いわば，芸能の相撲から，競技の相撲へと次第に変化を遂げていったと言

表１　京都市内の相撲行事一覧

日　程	名　称	場　所	日次紀事（1676）	竹森著書（1996）※	現　行（2014）	備　考
5月3日	桂里上下御霊祭	西京区上桂・桂	○			
5月3日	梅宮神社子ども相撲	左京区岩倉		○	○	
7月24日	常磐里地蔵祭	右京区常磐	○			
8月1日	松尾社神供	西京区嵐山	○			
8月15日	西山平岡村八幡祭	右京区梅ケ畑	○			
8月最終日曜日	梅宮大社子供相撲大会	右京区梅津		○	○	
9月8日	上賀茂社相撲内取	北区上賀茂	○			
9月9日	上賀茂社神事	北区上賀茂	○			
9月9日	上賀茂神社烏相撲	北区上賀茂		○	○	京都市登録無形民俗文化財
9月12日	太秦広隆寺牛祭	右京区太秦	○			
9月14日	三宅八幡神社放生会の相撲	左京区上高野		○		
9月15日	貴船神社放生会の相撲	北区柊野		○	○	会場は柊野保育園
9月第1日曜日	松尾大社八朔相撲	西京区嵐山		○	○	
9月第2日曜日	大原野神社神相撲	西京区大原野		○	○	京都市登録無形民俗文化財
10月9日	静原天王社相撲神事	左京区静市		○		神事
10月16日	吉利具八幡宮相撲奉納	山科区勧修寺		○		
10月第3土曜日	三之宮神社子供相撲	山科区東野		○	○	会場は公園
体育の日の前日	平岡八幡宮三役相撲	右京区梅ケ畑		○	○	京都市登録無形民俗文化財

※竹森　章　『京都・滋賀の相撲－まつりと力士の墓』私家版，1996年

える[7]。現行の神社祭礼などに伴う相撲も，各社での呼称は「神事」であったり「奉納」であったりするものの，その性格による分類に基づけば，神事芸能もしくは儀礼としての相撲神事と，神前における競技の披露としての奉納相撲と大別することができる。

京都における相撲を伴う神社祭礼については，近世初期の状況を『日次紀事』から抽出すると７例であるが，近世中後期にかけて臨時の相撲興行も含めるとかなりの数になった様子である。竹森章『京都・滋賀の相撲―まつりと力士の墓』（私家版，1996年）には11例が紹介されているが[8]，現在も行われている行事は８例にすぎない。そのうち，多くが競技性の高い奉納相撲，つまり相撲大会であり，儀礼としての相撲は烏相撲，平岡八幡宮の三役相撲，大原野神社の神相撲だけであった[9]。

３.大原野神社について

（１）大原野神社の創建と祭神

京都市西京区大原野南春日町1152番地に鎮座する大原野神社は，藤原氏とのかかわりが深い古社である。社伝によれば，大原野の地は，延暦３年（784）の長岡京遷都の際，桓武天皇の后の藤原乙牟漏（おとむろ）が，春日大社の分霊を勧請して，たびたび鷹狩をおこなっていた地とされる。その後，嘉祥３年（850），文徳天皇により，奈良の春日大社より分霊が遷され，社殿が造営された[10]。『日本紀略』「仁寿元年二月十二日条」（851）に「別制_大原野祭儀_。一准_梅宮祭_。」と見え，この時はじめて梅宮祭にならって勅祭の制が整ったと考えられ

ている。その後，大原野祭は，春秋（２月と11月）の２回行われるようになった[11]。

なお，社蔵文書（大原野神社文書）により，建武３年（延元元）12月５日，足利尊氏によって大原野社領が安堵されていることが知られる[12]。祭神は，春日大社と同じで，武御賀豆智命（武甕槌命），伊波比主命（経津主命），天之子八根命（天児屋根命），比咩大神（比売神）の四柱である。

（２）氏子地域の歴史

大原野神社は，室末時代中期には，上羽村，北野田・南野田（大原野北春日町），冨坂庄（長岡京市北部），鞆岡庄（長岡京市友岡），久我神田（久我），久世神田（久世）など，近隣地域を領有していた[13]。

その後，応仁の乱（1467～1477）で社殿が全焼し，皇室や藤原氏を中心とした官祭も中断となったが，慶安２年（1649）後水尾上皇の勅命により社殿が再建された[14]。

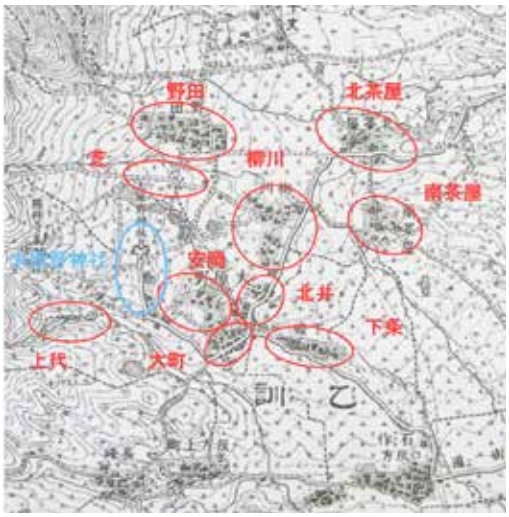
享保２年（1717）頃の氏子地域は，大原野村と上羽村の２ヶ村で，大原野村は野田村・柳川村・南条村からなっていた[15]。

この大原野村は，明治22年（1889）に乙訓郡のうち石作村，大原野村，小塩村，上羽村，石見上里村，外畑村，出灰村の７村が合併し，大原野村となった。そして昭和34年（1959）に京都市（右京区）へ編入され，北春日町・南春日町で大原野区となった。洛西ニュータウンの入居が始まった昭和51年（1976）には，右京区から西京区が分離し，大原野は西京区に含まれるようになった。

（３）大原野神社の年中行事

大原野神社では，毎月のように恒例の年中行事が執り行われているが，最も重要な行事は，大原野祭とも呼ばれる４月の例祭である。16世紀の『山城名所寺社物語』には，大原野神社の由緒とともに，２月初卯の日の祭には，春日祭と同じように上卿らの参向があると記している。

昭和初期，京都史蹟宣揚会『京都名社史』には「毎年四月八日祭と正月廿二日古式御弓祭名高く」とあり，正月の御弓祭も



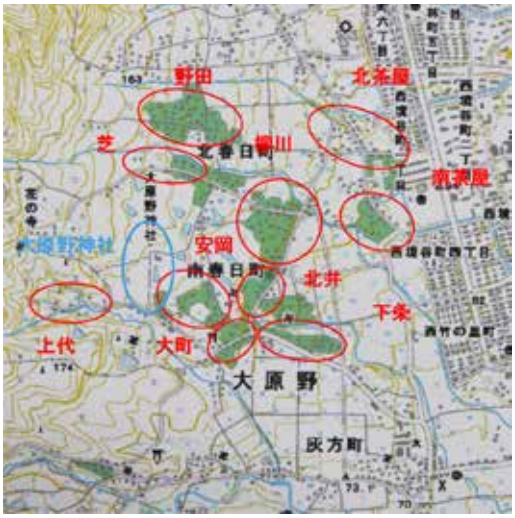


図１　大原野神社と周辺集落
（　左：陸地測量部発行の２万分の１地形図に加工　右：国土地理院刊行の数値地図25,000に加工）

大原野祭とともに紹介されているが，ここでは御田刈祭には言及されていない[16]。

平凡社の『日本歴史地名大系第27巻 京都市の地名』では，大原野祭について詳述したあと，御弓祭と御田刈祭について，次のように記されている。

> 特殊神事では，かつては毎年１月22日に射場野（いぼの）（雀の森）で御弓祭が行われた。伝承では長岡京時代，坂上田村麻呂が陸奥出兵の際，大原野出身の軍士が同将軍をたたえて始めたとも，飛鳥以前の正月破魔弓の風習より生じたともいう。武射に奉仕する者を弓太郎とよび，厳寒７日間の朝夕斎戒沐浴を怠らず，家族とも飲食調理の火を別にするなど厳格な潔斎を要した。五穀豊穣を感謝する御田刈祭は旧８月10日（現在は９月第２日曜）に執行。他に享保２年（1717）より始められた相撲神事（９月10日）があったがこれも今はない。

ここで，相撲神事が廃絶したとあるが，社伝によると大きな中断はなく，現在まで続いているといい，一方で御弓祭は，昭和17～18年ごろには廃絶している[17]。

４．大原野神社の御田刈祭と神事相撲

（１）行事の概要

ここではまず，神相撲が行われる御田刈祭当日の次第について概観しておく[18]。

御田刈祭の当日，午前10時から本殿前にて御田刈祭の祭典があり，その際，神相撲の力士２名は，神前に奉納されたまわしの白布を受け取ると参列者より先に退出し，社務所にてそれを着用する。力士は，神職以下，参列者とともに中門下で列を整え，土俵場に向かう。

土俵では，神職によるお祓いの後，両力士が清めの塩を包んだ白紙を口で咥え，四

大原野神社の年中行事

一月	一日	歳且祭
	三日	元始祭
二月	三日	節分祭
	初午日	初午祭
	十一日	紀元祭
	十七日	祈年祭
四月	一日	氏子児童小学校入学奉告祭
	八日	例祭・子供みこし祭
	十五日	若宮社例祭
五月	三日	献茶祭
六月	三十日	大祓式・茅の輪神事
七月	一・二日	御滝祭
九月第二日曜日		御田刈祭・奉納相撲神事
十一月	十六日	地主社祭
	二十三日	新嘗祭
十二月	二十三日	天長祭
	三十一日	大祓式
	三十一日	除夜祭
毎月一日		月次祭
毎年秋		業平と高子をしのぶ大原野神社歌会

（由良琢郎『大原野神社』大原野神社、一九九〇より）

方の柱を神酒で清める。北春日町から選ばれた東の力士は，土俵の北東の青い布を巻いた柱を，南春日町の西の力士は南西の白い布を巻いた柱を清め，北西の黒い布を巻いた柱の前で合流し，両者が同時に清める。続いて，互いに入れ替わって北東と南西の柱を清め，南東の赤い布を巻いた柱の前で合流して同様に清める。次に土俵の祭壇（八足台）を下げ，土俵中央の砂山に立てられた榊を北西の柱に結わえ，砂山を崩す。口の白紙はそれぞれ，動作ごとに改めるしきたりである。そして，２度の立ち会いが行われる。まず，東の力士が西の力士を押し切り，次は西が東を押し切り，一勝一敗で終わる。

なお，御田刈祭の神相撲に付随する相撲大会は，昭和30年頃までは，旧乙訓郡や京都市内から力自慢の相撲好きが集まった[19] なかには，大学の相撲部や自衛隊員も参加していたと言うが，大原野の住民が優勝することも多かったという。大人の相撲熱が醒めていくなか，昭和50年代から少年横綱（豆力士）の土俵入りや，神相撲の力士による赤ちゃんの土俵入りも始められた。昭和56年（1981）からは，近隣の６～９校の小・中学生による相撲大会になり，それに伴い御田刈祭および神相撲の日程が，９月月第２日曜日に変更された。また，平成４年までは，この日の晩に境内で盆踊りがおこなわれていた。

（２）相撲の期日の変遷

御田刈祭の神事相撲は，享保２年（1717）に始まったと伝えられているが，同時代史料での確認はなされていない。享保２年創始説は，管見の限り昭和12年（1937）が

図２　御田刈祭で白布（まわし）の授与

図３　土俵場での神相撲

図４　土俵場で子供横綱の土俵入り

図5　赤ちゃんの土俵入り

最初である。大原野村に隣接する京都市が発行する観光パンフ「九月の行事」制作のため，御田刈祭について照会があり，大原野神社は京都市産業部観光課に対しての回答文がそれである（史料１）。また，この回答案がもとになって作成された「九月の行事」にも，享保２年創始説が反映されており（史料２），いずれも社蔵文書として保管されている[20]。

その創始年代に近い時代の史料として知られるのが，宮司を世襲していた中澤家の日記の享保10年（1725）の記述である。まず７月20日条に「八月十日御田刈之御神事之内相撲御届ケ申上候」，同23日条に「御公儀へ神事相撲之義，窺ニ出申処ニ明朝出可申旨御定被成候」，同24日条に「御公儀へ出申処ニ神事相撲之義，従来通とらセ可申候」とある。このことから，毎回公儀へ届け出る必要があったものの，この時点においてすでに８月10日の御田刈祭に神事相撲が行われることが恒例であったことがわかる[21]。

大原野神社では社殿修復のために，少なくとも元禄14年（1701）と享保７年（1722）の二度，勧進相撲を催している[22]。いずれも，御田刈祭とは日程を異にしており，後者については興業主とみられる丹波屋八郎兵衛と組んで，京都の市中において勧進相撲を催していることから，相撲神事とは区別して考えるべきと思うが，大原野神社にとって相撲の位置づけを考える上で興味深い。

史料１によれば，その後しばらく中断し，天明４年（1784）に再興したとあるが，その詳細は不明である。

天保10年（1839）の日記では，八月一日条に「先年今日午刻儀，日食各之此時ハ早天御日米献進，相撲も早天子供二三人取テ仕舞候由，今年ハ早天之日食故，何刻ニ相撲興行有之筈ナリ」とあり，通常の形ではないが，子供の相撲が少しあって終わることもあったとわかる[23]。ただし，８月１日の開催ということもあり，御田刈祭に伴っていたかどうかは定かではない。８月１日の相撲については，その後もしばしば史料に登場する。慶應４年（1868）の日記では「当年角力客舎ノ南ノ方ニ而興行可有之旨，一社評定之処，雨天ニ付延引ニ相成候也」とあり，相撲を催す場所が変更になったが，雨天のため延期したことが分かる。明治４年（1871）の日記では「如例年　神事角力興行」，明治５年（1872）の日記では「雨天ニ付角力延引」と，いずれも，８月１日条の記述である[24]。その後，明治12年（1879）の社務日誌から，すでに９月10日に行われるようになっていたことがわかる（史料３）。

（３）奉納相撲から神相撲へ

明治時代の初期は，御田刈祭に伴う相撲は，明治13年（1880）の社務日誌の９月11日条に「御田刈祭典無滞相済候事，附相撲大原野村ヨリ奉納例年之通」とあるように，単に「角力」「相撲」あるいは「奉納角力」「奉納相撲」と記されていた。しかし，明治20年代後半からは，次第に「神相撲」という表現に移行していく。

明治15年（1882）９月５日条から10日条までの社務日誌のの内容から，奉納相撲の状況を確認しておこう。まず９月５日，大原野村の氏子総代齋藤仁兵衛が相撲を奉納したい旨の願書を明日持参したい

と大原野神社に申し出があり，翌６日，齋藤仁兵衛ほか一名が願書を提出した。７日，大原野神社の社務所で相撲奉納伺書を例年の通りしたため，宮司の印を捺し，すぐに許可をいただきたいと御願書を添えて，使いを立てて京都府に提出する。８日，京都府から書類不備のため返却されたため，再提出した。また，土俵の土築きに従事した人に酒と干烏賊を下賜した[25]。９日，京都府から許可が出る。また氏子より奉納相撲があるため，社領である桂村より神饌調進があった。10日，午前11時より御田刈祭の祭典，午後から日暮れ前まで奉納相撲があったとあり，相撲が神社ではなく村方の差配によるものであることがうかがえる（史料４）。

この御田刈祭に伴う相撲が「神相撲」と表記されるようになるのは，明治27年（1894）の「雑記」の記載からである。それは９月10日条に「午后二時迄雨止曇天，三時比神相撲奉納」とあるのみで，それだけでは理由を見出すことはできないが，その後の社蔵史料では「神相撲」でほぼ統一される。ただし，明治25年（1982）の「雑記」に，御田刈祭の相撲に先立って土俵場を清める所作について「午后一時相撲相始ム，一錫ノ徳利ニ酒壱合半ツヽ入，壱対幣壱本，四本柱分四本，三宝へ乗せ差出ス，力帯弐ツ化粧紙塩等ハ氏子ノ負担也，相撲撲止シテ三番へ付与スル，柳ヲ三本ニ扇子壱本ツヽ神札壱枚ツヽ□付ケ遣ス，夕方瓦斯灯ニ□□点等ス」と初めて具体的に説明されており，そこから勘案するに，この時期，相撲が娯楽性の高いものから儀礼的な面を重視する方向へ転換していったのではなかろうか。

その後，昭和２年（1927）の日記の９月10日条に「神相撲ノミニテ奉納相撲ノ氏子ノ模様無之当村青年諸氏奉納アリタリ」とあり，この頃までには，現在のように神相撲の後に奉納相撲大会（競技の相撲）があったことがわかる。昭和７年（1932）の日記の９月10日条に「角力ニ続テ青年会奉納角力」とあり，奉納相撲大会は青年会の差配するものであったとわかる。昭和11年（1936）の社務日誌には「本年ハ支那事変ニ多数ノ青年召集セラレタルニ付，神角力ノミヲ奉仕シ奉納角力ハ中止」とあり，戦争激化のなかでも神事としての神相撲だけは欠かせない行事として位置付けられてきたことがわかる。

なお，明治17年の日記に，御田刈祭の日の夜には，踊りの奉納が行われているとあり（史料５），その後，昭和12年（1937）の日記から，踊りなどは「余興」として恒例であったことがわかる（史料６）。

また明治以降，御田刈祭の晩に行われてきた盆踊りは，もともとは開催日が異なっており，村の休み日であった９月14日・15日の晩に大原野中の人たちが社前に集って，大踊り（盆踊り）があった[26]。

（４）力士にまつわる伝承

神相撲には，北春日町から「齋藤」姓の力士を，南春日町からは「畑（はた）」もしくは「幡（はた）」姓の力士をそれぞれ選び，引き分けの勝負とすることで両地区の豊作と共栄を祈るものであるとされている。昭和９年（1934）の時点では，氏子は旧乙訓郡大原野村（昭和36年に京都市に合併）のうち大字大原の200戸であった[27]。このうち，「齋藤」「畑」「幡」姓は120～130軒あり，

神事相撲に出る権利と共に，昭和初期に廃絶した正月の御弓祭の弓講の成員でもあった。

「齋藤」「畑」「幡」姓の由緒は，大原野神社の創建期に遡る。長岡京遷都の頃，桓武天皇の皇后藤原乙牟漏がこの地に春日大社の分霊を勧請し，のちに文徳天皇が嘉祥３年（850）に社殿を造営したと伝えるが，その際，平城京から移り住んできた藤原氏の一族の末裔が，のちに「齋藤」を名乗ったといわれる。その一族は，大原野神社の社家筋でもあり，集住した地域は春日大社の北方の地名に倣い野田と呼ばれるようになったという。一方，この地はもともと秦氏の勢力下で，その末裔は「畑」あるいは「幡」を名乗ったといわれ神社の南方を中心に住んだという。現在は，神事相撲の力士は「齋藤」「畑」「幡」姓に限っていないが，北春日町（野田を含む）と南春日町から，それぞれ力士を出すという伝統は守られている。

５．まとめにかえて

この地域は相撲好きの人たちが多く，地域社会と相撲は身近な関係にある。ことに北春日町の野田は相撲に熱心な地域で，児童公園に隣接して屋根付きの土俵が作られており，昭和51年（1976）より野田会相撲大会が開催されてきた。御田刈祭の当日に土俵入りをする少年横綱は，神相撲の力士たちの指導のもと，８月第３日曜日の野田会相撲大会でリハーサルをおこなっている。

現在，伊勢ノ海部屋の部屋付親方である甲山（かぶとやま）親方（本名：斉藤　剛）は，野田会出身で，高校時代に全国優勝し，同志社大学へ進み，1995年から2004年まで大相撲で活躍した関取大碇（おおいかり）である。

大原野神社の神相撲は，このような市域住民の熱意と愛着そして伝統をつむぐ誇りによって支えられてきた民俗文化財である。

史　料

（史料１）「御田刈祭照会ニ付回答ノ件」

（大原野神社所蔵『祭儀雑纂綴』昭和十一年以降）

記

九月十日執行ノ御田刈祭ハ五穀豊穣ヲ奉賽スル祭典ニシテ其ノ起原ハ不詳ナレドモ旧社家ノ日記ニヨレバ享保二年八月十日御田刈祭奉祝相撲神事ノ記事有之爾後百十年間中絶セシガ天明四年四月再興サレテヨリ毎年引続相撲神事ト共ニ執行サレテ現在ニ及ベリ

尚仝祭典ハ正午ヨリ執行シ引続社頭広場ニ於テ神相撲並ニ氏子奉納ノ相撲ガ賑ハシク催サレ近村ヨリノ賽者終日社頭ヲ埋ムルノ盛観ヲ呈ス

（九月十日ハ陰暦八月十日ニ相当スル物也）

（史料２）　京都市観光課「九月の行事」（1937）

（大原野神社所蔵『祭儀雑纂綴』昭和十一年以降）

九月十日　御田刈祭

乙訓郡大原野村　大原野神社

省線　向日町下車西

京阪電車新京阪線　東向日町下車西

京都乗合（七條大宮發亀岡行）中山下車，

西一里餘途中馬車の便あり

此の祭は享保二年（約二百二十年前）八月十日に初めて行はれたもので五穀豊穣を神に謝する意味で行はれる。現在では陽暦に依つて此の日正午より執行し，外に祭典後社頭広場に於て，古式に依る相撲神事並に氏子奉納の相撲が催される。

（史料３）「日記」明治十二年九月十条

（簿冊名『日記』明治十二年一月）

十日晴　当直齋藤房貞

御田刈祭典無滞相済

但シ本年ハ虎列刺病流行ニ付人民之群集ノ護病伝播ノ恐アルヲ以テ奉納角力無之

※明治19年（1886），明治20年（1887），明治28年（1895）も，コレラ流行により延引している。

（史料４）「日記」明治十七年九月

（簿冊名『日記』明治十七年一月）

（五日）

一例年之通当村ヨリ来ル十日角力奉納致度キ願ヲ以願書等ノ照会ヲ齋藤仁兵衛参社ス別明日御社宛ニ而願書可差出候間可罷御届斗ニ相成度ト申帰□

六日曇正午八十度　当直　主典岡本清心

一日供法師前直務之

一氏子総代齋藤仁兵衛同□太郎ヨリ例年之通本月十日境内ニ於テ角力奉納ノ願書ヲ差出ス

七日晴午後炎熱　八十四度　同　同

一午前八時日供奉仕

一京都府へ角力奉納伺書例文ノ如ク相認同受付掛へ即時指令相成候処取計有之度御願書ヲ副へ使ヲ以テ差出ス源兵衛ニ御使ヲ命シ先ツ宮司ノ捺印　ヲ要シテ差出サシム

九月八日晴　当直　禰宜

一日供奉仕ハ前宿之シヲ勤ム

一昨七日差出シタル伺書ハ願主ノ捺印有之分ヲ相別ヘキ旨宮司ヨリ申シ添テ返却セラレタルニ付今般古調印為シメテ前通ヨリ差出シタル趣ニテ午后二時比使源兵衛伺書ノ指令ヲ持テ帰社ス

但本件ハ前以郵便へ差出シ候ハヽ何処モ□済可申候様心得置ベク事也

一相撲ノ土築相済セシ者へ酒弐舛干烏賊ヲ下賜

九日　同　同　同

一日供奉仕午前第八時之シヲ相済ス

一氏子中ヨリ願出タル願書ノ扣ニ願ノ趣京都府へ伺書ノ差支無之旨指令相□□間□□□□相心得候事ト指令ヲ得テ使へ渡ス

一神饌所ヨリ東ノ裏路北側へ簾垣ヲ□サス

一明十日私祭ヲ営ミ氏子中ヨリ相撲奉納ニ付社領ヨリ神饌調進ヲ申付桂村ヨリ午后四時持参

一蒲団洗濯ノ分一枚洗人ヨリ持参

十日晴　当直　主典本村薫平

一御田苅祭典午前十一時ヨリ無滞相済候事附午後奉納角力日暮ニ相済候

（史料５）「日記」明治十七年九月十条

（簿冊名『日記』明治十七年）

一御田刈祭執行乙女五名伝供中沢□□□□□□

一角力興行午后六時畢力帯二筋榊三本御札団扇三握添

一六斎踊仮屋前ニ催ス人名下桂村川後村下津林千代原三ヶ村ヨリ奉納各神酒弐升鯛一把宛遣ス午后五時畢

一夜ニ入□御若輩中ヨリ踊奉納ニ付神酒三升鯛壱把遣ス但踊場打燈二張ヲ点ス

（史料６）「日記」昭和十二年九月十条

（簿冊名『社務日記・宿直日誌』昭和拾弐年）

一右祭典終了後角力場ニ一同参向神角力行事アリ齋藤主典祓行事所役終金□

清二，齋藤吉三郎両名ニテ神角力ヲナス

一本年は時局ノ為一般角力并余興ハ取止メトナル

一角力中止ノタメ例年ノ如ク境内露店皆無ニシテ社殿賑ヒヲ，見ヅ

註・参考引用文献

１）大原野神社の神相撲についてまとまった記事として，次のものがある。

京都新聞社　編・発行『京都滋賀 子どもの祭り』，1984年。

西京区大原野春日町自治会・春日町農家支部

編『春日の里（春日町集落センター竣工記念）』，1987年。

竹森　章『京都・滋賀の相撲―まつりと力士の墓』私家版，1996年。

（財）日本相撲協会編・発行『平成十年大相撲冬巡業』，1998年。

『別冊太陽139　京の歳時記　今むかし』，平凡社，2006年。

京都市編入50周年記念誌編集委員会　編『大原野』，大原野自治連合会，2010年。

2）９月第２日曜日になったのがいつなのかは判然としないが，『日本歴史地名大系第27巻　京都市の地名』，平凡社，1979年　に「御田刈祭は旧８月10日（現在は９月第２日曜）に執行」とあり，西京区大原野春日町自治会・春日町農家支部『春日の里（春日町集落センター竣工記念）』，1987年　に「毎年９月10日に決まっていたが，最近では９月の第２日曜日に開催されている」とあることから，昭和50年頃から昭和54年までの間のことと推察する。

3）佐藤豊三「日本の伝統的スポーツと描かれたスポーツ」『美術に見る日本のスポーツ』，徳川美術館，1994。

4）飯塚　好「相撲の節会と相撲神事」『儀礼文化』33号，2003年。

5）橋本　章「年中行事としての相撲儀礼の展開―伝承と文献の整合性についての試論」，日次紀事研究会編『日次紀事論叢』岩田書院，2010年。

6）下谷内勝利「中世の相撲に関する一考察―相撲節（すまいのせち）廃絶後の相撲人（すまいびと）のゆくえ」『駒澤大学総合教育研究部紀要』５　分冊１，2011年。

7）新田一郎『相撲の歴史』，山川出版社，1994年でも，奉納相撲と相撲神事については，「奉納相撲」よりも「相撲神事」のほうが，古い相撲の名残りをとどめている可能性が高いとしている。また，福原敏男「祭礼を飾るもの――一つ物の成立と伝播」『国立歴史民俗博物館研究報告』45集，1992年　では，相撲が，馬長（童）が田楽・王の舞・獅子舞・十列・巫女神楽・相撲・競馬・流鏑馬などと共に，当時の畿内の祭礼芸能の典型であるとしている。芸能の相撲が内包する競技性については，同様に競技性が高い競馬と比較研究を進める余地があるだろう。

8）11例のうち，吉利具八幡宮（山科区勧修寺）の相撲奉納は，昭和59年（1984）に神輿復興と引き換えに休止したと記されている。静原天王社（左京区静市）の相撲神事は，休止とは記されていなかったが，現地調査の結果，戦後しばらくして休止していたことがわかった。また，三宅八幡神社（左京区上高野）の放生会の相撲も休止している。

9）休止した静原天王社（左京区静市）の相撲神事は，儀礼としての相撲である。

10）京都市　編『史料　京都の歴史』第15巻，平凡社，1996年　には，次の資料が掲載されている。

〔大鏡紙背文書〕

大原野社長岡帝都の時，之を祀る。

〔公事根源〕

此神社は，后宮のまいらせ給はんため，春日の本社とほきによて，都ちかき所にうつし奉らる。されば，大原野の行啓などゝ申事の侍るにや。

〔神祇正宗〕

大原野大明神春日大明神，人皇五十四代仁明天皇の御宇，嘉祥三年，王城守護の為，閑院の左府（藤原）冬嗣申し沙汰し，之を勧請す。

これに準拠した地元の編纂物として，齋藤英雄『私本・大原野』（私家版，出版年不詳，ただし2002年以降），『春日の里（春日町集落センター竣工記念）』（西京区大原野春日町自治会・春日町農家支部1987）がある。

11）京都市　編『史料　京都の歴史』第15巻，平凡社，1996年　には，次の資料が掲載されている。

〔山城名所寺社物語〕巻三

大原野神社西の岡

人王五十四代仁明天皇の御宇に，王城守護のため閑院左府冬嗣の勧請し給ふ春日の四社なり。ならの都に春日，長岡の都に大原野，平安城に吉田の社なり。いにしへは，藤原氏の后宮かならず此社にもふで給ふといへり。御位は正一位なり。毎年二月初の卯の日，御神事なり。春日の祭りにおなじく，近衛使は上卿・弁・内侍参向ありてつとめ給へり。

12）京都市　編『史料　京都の歴史』第15巻，平凡社，1996年，には次の資料が掲載されている。

〔大原野神社文書〕

建武３年（延元元）十二月五日

元弘以来収公せらるる大原野社領并当知行地の事，元の如く相違あるべからざるの状，件の如し。

建武三年十二月五日　(足利尊氏)（花押）

なお，大原野神社には，約30点の中世文書が伝来し，元弘３年（1333）５月，足利高氏から神主宛に祈祷の感謝状，建武３年（1336）12月，足利尊氏から社領の安堵状，永禄12年（1569）４月，織田信長から社領の安堵状などが知られる。

安井庄次「大原野あちこち古文書と現地説明と（第４回）」，大原野歴史同好会　編・発行『郷愁の大原野：10周年記念誌』，2017年。

13）京都市　編『史料　京都の歴史』第15巻，平凡社，1996年，には，次の資料が掲載されている。

〔大原野神社文書〕宝徳三年二月二十八日

大原野社領目録

境内付上羽村　　七月十五日田北野田南野田

冨坂庄

鞆岡庄　　久我神田　久世神田

散在神田　　国松郷　　末吉名

以上

（中略）

宝徳参年二月廿八日

なお，ここに登場する「冨坂庄」とは，現在の長岡京市の北部に位置し，「鞆岡庄」とは長岡京市友岡のことであるとされている。

14）坂元和夫「終の住処「大原野」」，大原野歴史同好会編・発行『郷愁の大原野―10周年記念誌』，2013年，など参照。

15）享保２年（1717）頃の大原野神社の氏子地域について，『京都御役所向大概覚書』には，「大原野村　上羽村　弐ヶ村計」とある。また，正徳元年（1711）の白慧撰『山州名跡志』巻之十（野間光辰　編『新修京都叢書』第十五巻，臨川書店1969年）には，次のように記されている。

大原野又オホハラトモ共ニ用　去レルコト王城ヲ凡ソ三里　在リ丹波街道樫原ノ未申一里ニ。但シ總名也。號スル大原野ト中ニ有リ三ツノ村。野田，柳川。南條是レ也。

16）京都史蹟宣揚会『京都名社史』，京都史蹟宣揚会，1931年。

17）『日本歴史地名大系　第27巻 京都市の地名』，平凡社，1979年，の「大原野神社」の項。ただし，大原野神社の齋藤重介宮司（当時）は，京都市編入50周年記念誌編集委員会　編「大原野神社御田刈祭と神相撲神事」『大原野』大原野自治連合会，2010年　において，御田刈祭の神相撲の神事について「享保２年（1717）以来300年近く絶えることなく連綿として続いている。」と記している。それに対して，由良琢郎『大原野神社』，大原野神社，1990年　には，「大原野祭とは別に，大原野神社には，毎年１月22日に行われていた祭りがある。昭和17，18年ごろまでつづけられ，なかなか盛大なお祭りであった。お弓祭という」とあり，『京都市の地名』では，この二つの行事の存続状況を取り違えて記載したものと思われる。

18）福持昌之「大原野神社の神相撲（登録）」，京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課編・発行『京都市文化財ブックス第30集　三条せと物や町―桃山茶陶―』，2016年，で諮問・答申の要点について紹介した。

19）『春日の里（春日町集落センター竣工記念）』西京区大原野春日町自治会・春日町農家支部，1987，43p。

20）平成15年（2007），京都造形芸術大学の中村利則教授により，宝徳３年（1451）の「大原野社領目録」など中世文書16点を含む文書目録が作成された。その目録によると，近世の日記類は③-50「日記」（享保７年），③-46「日記」（享保10年），③-49「日次記」（享保14年），③-51「日次帳」（元文６年），④る-263「永代在所用登女并日記」（天保８年），④ち-166「桂群左衛門忠晴隠居屋敷引家日記」（嘉永３年），④ち-160「新親日記」（嘉永５年），④ち-155「壮月陽波（日記）」（嘉永６年），④ち-132-2「諸事日用録（四冊目）」（嘉永７年），④と-118「日記」（安政２年），④と-116「日記」（安政３年），④と-117「日記」（安政４年），④と-120「日記」（安政６年）の13点であり，享保２年の日記は確認できていない。

21）前掲注20）の③-46「日記」（享保10年）。ただし，８月７日から10日まで記載がなく，御田刈祭および神事相撲が実際に開催されたかどうかは不明である。

22）京都市　編『史料　京都の歴史』第15巻，平凡社，1996年，には次の資料が掲載されている。

〔中沢（隆）家文書〕中沢家記二十　享保七年六月

奉㆓指上㆒候一札

一，城州乙訓郡大原野村春日社為㆓修覆㆒，定日七日御赦免之寄進相撲，場所内野伏見様御領地主市兵衛抱之畑地ニおいて仕度旨奉㆑願候処，蒙㆓御赦免㆒難㆑有奉㆑存候。

一，相撲場所先格之通，日覆桟敷之仮屋并土俵四本柱等，軽ク可㆑仕候事。

一，相撲切猥成儀無㆑之様ニ行事其外肝煎之者共え，可㆓申含㆒候事。

一，相撲取之内，帯刀之者御座候ハゝ，前方ニ御断可㆓申上㆒候事。

一，此度所々より集り候相撲もの共，在京中不作法成儀無㆑之様ニ仕，場所ニ而も口論抔不㆑仕候様ニ急度可㆓申含㆒候事。

一，相撲場内外之水茶屋御定之通り，見隠無㆑之様ニ仕，勿論遊女体之者一切指置申間敷候事。

一，兼々被㆓仰渡㆒候通り，角力取之者共，桟敷え出し申間敷候事。

右之外御法度之儀，堅仕間敷候。且又相模（撲）雑用損徳之儀，最初より致㆓其心得㆒相催候様ニ可㆑仕候。若又及㆓出入㆒願上候共，御取上ケ被㆑成間敷旨，奉㆑畏候。為㆓後日㆒，仍如件。

享保七年　大原野社神主

寅六月　　中沢主悦

丹波屋八郎兵衛

小屋方中

御奉行所

23）・24）嵯峨井健氏所蔵の大原野神社祭儀日次記による。

25）安政６年（1859）の社務日誌によれば，８月８日に若中が境内に土俵を築いており，その際，大原野神社から若中に酒二升を遣すことが恒例であった。また，８月10日には，さらし木綿六尺を二つ用意したこともわかる。

26）明治17年（1884）の社務日誌では，同じ日の夜に盆踊りが行われるようになっていた。

26）昭和11年（1936）の社務日誌には「本年ハ支那事変ニ多数ノ青年召集セラレタルニ付神角力ノミヲ奉仕シ奉納角力ハ中止」

27）大原野神社所蔵『祭儀雑纂綴』昭和２年以降，同10年12月。

福持（ふくもち）　昌之（まさゆき）（文化財保護課　文化財保護技師（民俗担当））

洛外における堀の変遷

馬瀬　智光

１．はじめに

城館の成立から衰退までを論じるときに様々な手法がある。考古学的手法を用いて分析するにしても，縄張り分析から，個々の遺構の分類まで数多くの手法がある。主に城館を構成する要素としては，堀（濠），土塁，塀，石垣，櫓，天守，御殿，虎口（小口），門，郭の形態や配置など様々なものを取り上げることが可能である。今回は城館跡を特徴づけるいくつかの要素の内，最も遺構として残存する可能性の高い堀（濠）跡を取り上げた。土塁は削平される可能性があり，石垣も削平や石材転用等の可能性があるのに対し，堀は耕作や宅地造成で削平される危険性はあるものの，埋め戻されることが多い。また，農業用水や運河等で再利用されるなど，残存度が他の遺構に比べて高い。

洛中の堀の登場から終焉については，『京都府中世城館跡調査報告書』第４冊の中で馬瀬が報告している[1]。報告文中で堀の深さと幅の関係を調べたところ，織田信長が室町幕府第15代将軍足利義昭のために築城した武家御城（旧二条城跡）に伴う堀から急激な大型化が始まり，聚楽第跡及び聚楽第武家屋敷跡に伴う堀が従前とは隔絶した規模になるということがわかった。

一方，室町幕府の歴代将軍邸に伴う堀は幅・深さとも将軍邸以外の堀と大きな差異は認められない。

近年，足利義昭の将軍権力を見直す中で，相対的に織田信長の政治権力の限界が言われるようになってきた[2]が，少なくとも洛中における埋蔵文化財の調査成果からは織田信長の登場が一つの画期となっており，その権力基盤を受け継いだ豊臣秀吉の築城した城館には，その他の権力との明瞭な差が認められる。

今回，洛外においてはどのような状況が進行するのかを見るために，洛外及び平安京の条坊制の範囲外で平安時代後期から江戸時代前期までの区画溝及び堀とされる遺構を集成して考察を行った。区画溝は周囲や隣接地との境界を示すために築かれることが多く，堀（濠）は防御のために築かれることが多い。いくつかの区画溝は戦乱時には堀（濠）の機能を有することもあるし，逆に築城時に築かれた堀（濠）は，その内側と外側を区別するという意味では区画溝としての機能を有する。

筆者は，「堀（濠）は，一時的であれ，恒常的であれ，防御のために人工的に土地を溝状に掘削して，守ろうとする施設を周囲から隔絶させるもの」と考える[3]が，発掘調査において調査員に共通する堀（濠）に関する明確な基準はない。そのため，発掘調査担当者や報告書ごとに同じ遺構が堀と記述される場合や，溝と記述される場合

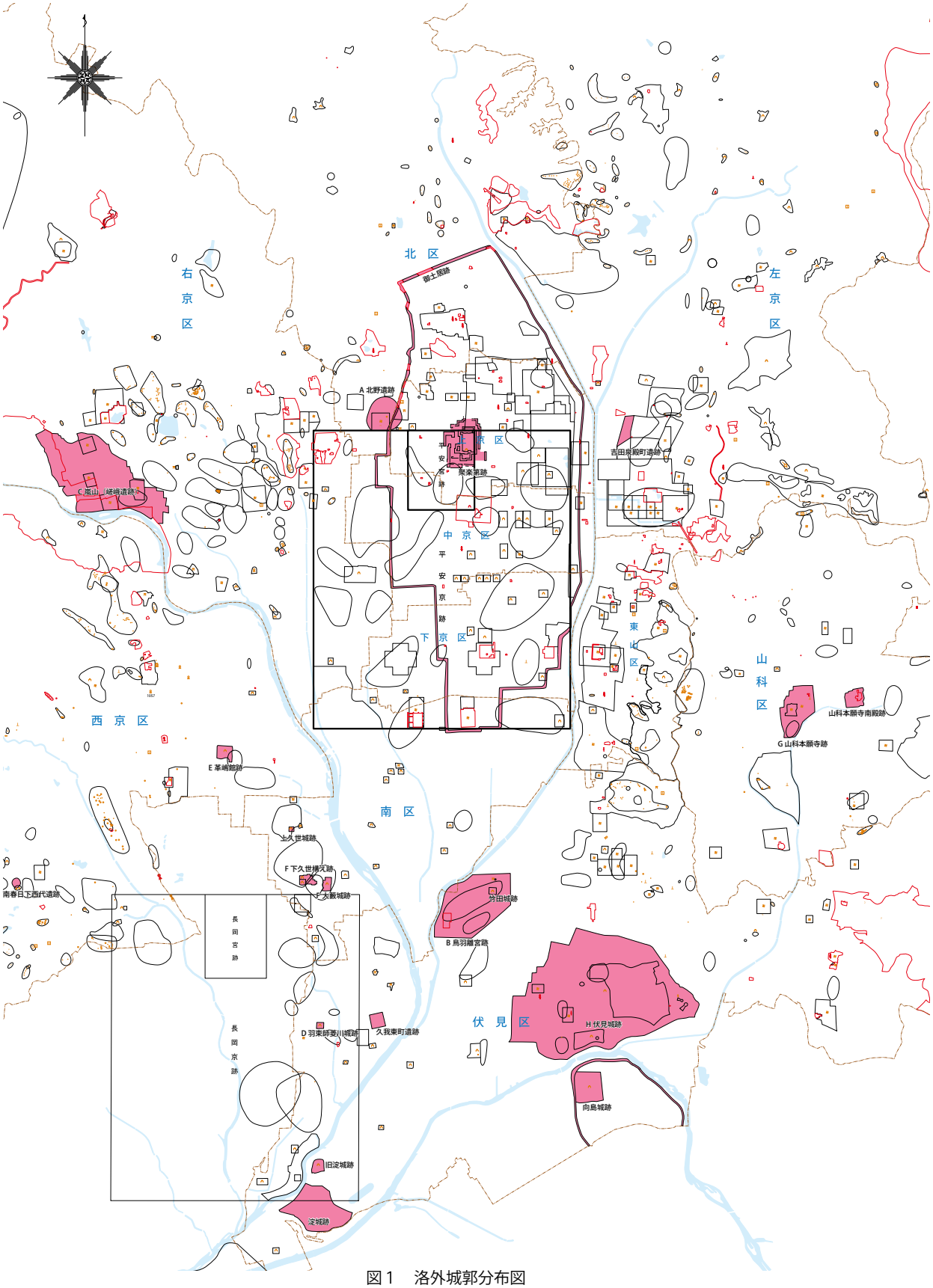

右京区
北区
左京区
A 北野遺跡
C 嵯峨遺跡
吉田泉殿町遺跡
聚楽第跡
中京区
平安京跡
下京区
東山区
山科区
山科本願寺南殿跡
G 山科本願寺跡
西京区
E 革嶋殿跡
南区
上久世城跡
F 下久世樋爪跡
南春日下西代遺跡
久我城跡
竹田城跡
B 鳥羽離宮跡
長岡宮跡
長岡京跡
D 羽束師菱川城跡
久我東町遺跡
伏見区
H 伏見城跡
向島城跡
旧淀城跡
淀城跡

図１　洛外城郭分布図

もあり，今回は区別せずに抽出した。これは発掘調査担当者が堀（濠）と溝とを区分する目安をどこに置くのかを分析するためでもある。洛中の分析でも参考にしたが，『延喜式』の京程によると，平安京の朱雀大路の側溝は「溝廣各五尺（約1.5ｍ）」，その他の大路側溝は「溝廣各四尺（約1.2ｍ）」，小路側溝は「溝廣各三尺（約0.9ｍ）」となる。宮城南大路（二条大路）には，隍（ホリ）があり，「隍廣八尺（約2.4ｍ）」の規模があったとされる[4]。発掘調査等で堀（濠）と認識するのは，遺構の時代とともに，『延喜式』京程の記述を上回る規模の遺構であることが多いと考える。その実態を探る上でもこの記述を上回る規模の遺構の急増する時期を探ることも同時に行っている。

２．研究史

京都市内とその周辺の城館について，体系的に初めてまとめられたのは，1986年に山下正男氏が報告した『京都市内およびその近辺の中世城郭－復原図と関連資料－』においてである[5]。京都の堀を体系的に整理したものについては，1995 年に山本雅和氏の発表した「中世京都の堀について」（『研究紀要』第２号財団法人京都市埋蔵文化財研究所）と，2014年に発表した「洛中の構」（『関西近世考古学研究　22』）があり[6]，洛中の堀（濠）に関しては筆者がまとめた前掲報告がある。

山下正男氏の論考では162箇所の城館が取り上げられており，堀の位置や現況について詳しく述べられている。山下氏の興味は，「土豪の小城の調査を発表するもの」であるが，「調査の過程で見つかった将軍，管領，守護，守護代の城，そして法華，門徒，キリシタンのつくった城をも報告」されている[7]。また，報告するにあたって，洛中，洛西，洛北，洛東，洛南，宇治・八幡の六地域に分類している。

山本雅和氏の論考では，洛外の堀を，Ａ：居館・寺院を囲むもの，Ｂ：集落を囲むもの，Ｃ：主に水路としての機能を担うものの３種類に分類している。さらにＡ型式をＡａとＡｂの二つに細分し，堀の形状による排土量の違いからみた土木量の差異を見出している[8]。

筆者は，平成16年の論考で，京都市内の城郭を築城主体と城郭面積から分類し，両者の間に密接な関係があることを明らかにした。中でも，足利将軍家の室町殿（花の御所）跡と豊臣秀吉の築城した伏見城跡では面積において230倍以上の開きがあり，織豊系武将達の築城した城館は，それまでの城館とは隔絶した大きさを有していたことを明らかにした[9]。

また，先述のとおり，堀（濠）の幅と深さの関係性の変化から織豊城郭の隔絶性を明らかにするとともに，堀の終焉には（１）戦乱の収束，（２）将軍の寺社への渡御，（３）天下人の破城令に基づくものがあることも明らかにした[10]。

３．資料の抽出

洛中・洛外といっても時代によってその範囲は大きく変遷するが，ここでは便宜的に豊臣秀吉の築造した洛中総構（御土居跡）に含まれる範囲を洛中とする。また，平安京の条坊施工範囲についても先の報

告（馬瀬2015）に含めており，今回の洛外のサンプルから除外している。

京都市内の史跡及び埋蔵文化財包蔵地の内，平安時代後期以降の洛外で検出された区画溝もしくは堀（濠）として記載された遺構734例を抽出した。耕作溝及び建物に取り付く雨落溝等は抽出例から外している。734例の中には，同一遺構が複数調査で検出された例もあるが，調査ごとにカウントしている。

埋蔵文化財調査は土木工事の内容によって決まることから，堀（濠）底の検出に至っていない例や，調査区設定の関係上，遺構の幅や最深部が調査区外となり規模の確定しないものも多い。また，削平等の人為的改変や，地震や土石流などによる自然的要因により，遺構の深度・幅とも築造当時と全く同じではない。さらに難しくするのが利便性の高い溝（堀・濠）ほど，浚渫・修理・掘り直しなどの改変を受けやすく，存続時期も長くなる傾向があるため，その遺構の当初の規模・形状を判別することが困難になることである。

抽出した734例の内，存続時期の長さを無視して幅及び深さの両数値が明らかなものは506例【表11】あり，表10に示した幅と深さの相関関係を見る資料として用いている。さらに，遺構の時期的な変遷を見る上で存続期間の設定が可能なものを抽出すると，幅の実測値が明らかなものは553例，深さの実測値が明らかなものは484例であった。存続期間は，平安時代後期，平安時代末期～鎌倉時代，室町時代前半，戦国時代（室町時代後半），桃山時代，江戸時代の６期に分類した。平安時代後期は京都盆地が戦乱に巻き込まれる直前の様相を示しており，戦国時代は応仁・文明の乱以降，旧二条城跡が造られるまでの時期である。

４．分析

（１）存続期間ごとの溝（堀）状遺構の規模の変遷（表１・図２）

幅のわかる溝（堀）状遺構553例の内，幅３ｍ未満のものが409例，約74％を占

表１　時代別　堀（幅・深さ）分布状況

時代	溝・堀（幅）														時代別合計
	0～3m	率	3～6m	率	6～9m	率	9～12m	率	12～15m	率	15～18m	率	30m以上	率	
平安時代後期	63	82.9%	9	11.8%	4	5.3%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%	76
平安時代末～鎌倉	124	77.0%	27	16.8%	10	6.2%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%	161
室町時代前半	49	79.0%	11	17.7%	2	3.2%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%	62
戦国時代	83	61.9%	36	26.9%	11	8.2%	3	2.2%	0	0.0%	1	0.7%		0.0%	134
桃山時代	85	78.0%	5	4.6%	0	0.0%	2	1.8%	0	0.0%	2	1.8%	15	13.8%	109
江戸時代	5	45.5%	3	27.3%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	3	27.3%	11
幅類型別合計	409	74.0%	91	16.5%	27	4.9%	5	0.9%	0	0.0%	3	0.5%	18	3.3%	553

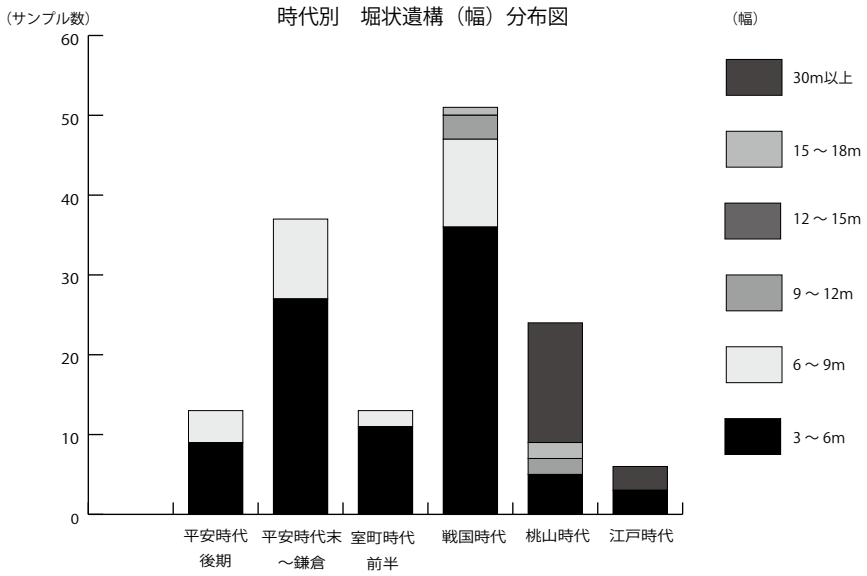
※各項目最大数自身は含まない。（3～6m＝3m以上，6m未満）

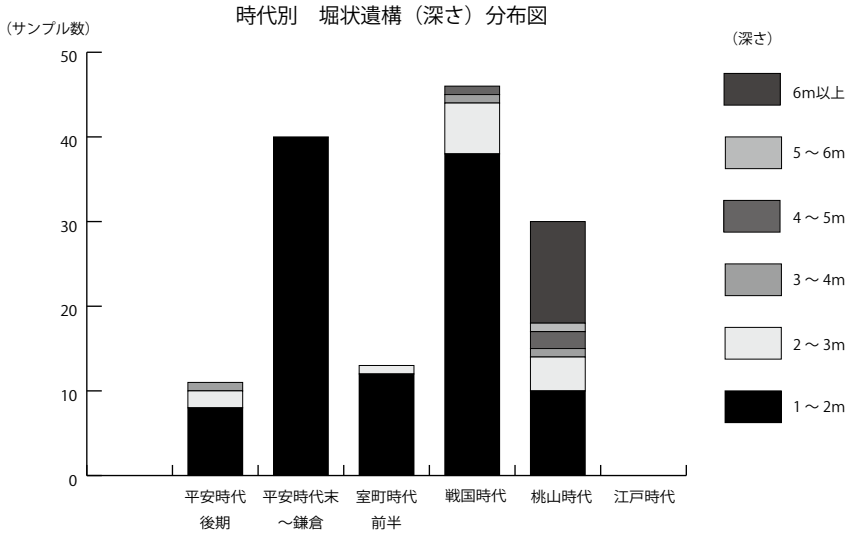
時代	溝・堀（深さ）														時代別合計
	0～1m	率	1～2m	率	2～3m	率	3～4m	率	4～5m	率	5～6m	率	6m以上	率	
平安時代後期	56	83.6%	8	11.9%	2	3.0%	1	1.5%		0.0%		0.0%		0.0%	67
平安時代末～鎌倉	112	73.7%	40	26.3%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%	152
室町時代前半	43	76.8%	12	21.4%	1	1.8%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%	56
戦国時代	70	60.3%	38	32.8%	6	5.2%	1	0.9%	1	0.9%		0.0%		0.0%	116
桃山時代	57	65.5%	10	11.5%	4	4.6%	1	1.1%	2	2.3%	1	1.1%	12	13.8%	87
江戸時代	6	100.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%		0.0%	6
深さ類型別合計	344	71.1%	108	22.3%	13	2.7%	3	0.6%	3	0.6%	1	0.2%	12	2.5%	484

※江戸時代築城の淀城跡は，堀底の深さが不明なため，含まれない。
※各項目最大数自身は含まない。（1～2m＝1m以上，2m未満）

める。同様に，深さのわかる484例の内，深さ１m未満のものが約71％を占めている。京都市内において，幅３m以上，深さ１m以上のものが堀と認識されることが多いことを考えると，示唆的な数値である。

時代ごとの変遷をみていくと，幅においては，平安時代後期において幅６m，深さ３mを超えるものが出現しているが，全体の83％は幅３m未満，深さ１m未満の小規模なものである。洛中とその近郊が本格的に戦乱に巻き込まれる平安時代末から鎌倉時代になると，幅３m，深さ１mを超えるものが全体の23％を占めるようになり，防御的な側面が増大したことを示すのであろうか。次の室町時代前半になると，





※　淀城跡の堀は深度不明のため，江戸時代の堀に関するサンプルが０となっている。

図２　時代別　堀（幅・深さ）分布状況

南北朝期の戦乱に巻き込まれるものの，比較的安定した時代でもあり，幅３m以上，深さ１m以上のものが前代に比較すると減少する傾向がある。ただし，後述する嵯峨遺跡ではこの時期に大型の遺構が認められており，地域差がある。

さて，応仁・文明の乱以降の戦国時代になると，幅３m未満，深さ１m未満のものが全体の60％程度に下る一方，幅３～６m，深さ１～２mのものが全体の30％前後となるだけでなく，それまでの時代で確認できなかった幅９mを超えるもの，中には幅15m以上に達するものが出現するようになる。深さについても２m以上のものが約７％に達し，深さが４mを超えるものも出現する。

桃山時代になると，幅３m未満のものの比率が78％，深さが１m未満のものが65％と増加する一方，伏見城跡では従来とはスケールの異なる超大型の遺構が出現し，幅30m，深さ６m以上のものが約14％を占めるようになる。

江戸時代になると，超大型に属すると考えられる徳川期に築造された淀城跡の堀について，幅に関する調査成果が蓄積されつつあるが，工事掘削深度の関係から深さに関する成果がなく，資料に偏りが出ている。傾向としては，幅30m以上ものが認められるとともに，幅３m未満のものが45％と前代に比べ減少している。

（２）事例研究

以下では，個別の遺跡ごとに堀の規模の変遷を見ていく。なお，文中で紹介する遺構名の後の（　）の番号は，表11の堀番号に一致しており，参照文献がわかるようになっている。

表２　北野遺跡　時代別　堀（幅・深さ）分布状況

北野遺跡

時代	溝・堀（幅）							時代別合計
	0～3m	3～6m	6～9m	9～12m	12～15m	15～18m	30m以上	
平安時代後期	2	1						3
平安時代末～鎌倉	2							2
室町時代前半	4							4
戦国時代	6							6
桃山時代								0
江戸時代								0
幅単位合計	14	1	0	0	0	0	0	15

※各項目最大数自身は含まない。（3～6m＝3m以上，6m未満）

北野遺跡

時代	溝・堀（深さ）							時代別合計
	0～1m	1～2m	2～3m	3～4m	4～5m	5～6m	6m以上	
平安時代後期	3							3
平安時代末～鎌倉	2							2
室町時代前半	4							4
戦国時代	6							6
桃山時代								0
江戸時代								0
幅単位合計	15	0	0	0	0	0	0	15

※各項目最大数自身は含まない。（1～2m＝1m以上，2m未満）

A　北野遺跡（表２・図３）

平安京の北郊に位置する集落跡であり，その中心部には平安京以前に成立した北野廃寺が存在する。近年，堀状遺構とされるものが複数検出されており，注目されている。

時期，幅，深さの三項目全ての判明した15例の内，幅３ｍを超える事例は平安時代後期の１例だけであり，それ以外の14例は全て幅３ｍ未満，深さ１ｍ以内に収まる。平安時代後期の溝１（274）は，幅3.2ｍ，深さ0.5ｍの溝で常住寺に関連する区画溝と考えられている。

平安時代末～鎌倉時代になると，幅2.5ｍ，深さ0.3ｍの溝２条（598・599）が南北方向に並行して確認されており，道路の側溝の可能性が指摘されている。

この遺跡で注目すべきは，戦国時代に造られた３ｍに満たないものの，「堀」と記述された二つの遺構である。堀30（531）と堀51（532）は，幅が1.3ｍと2.9ｍ，深さが0.5ｍと0.25ｍであり，遺構面が削平されていることを考えても規模は小さいが，これらの両堀は中央部で途切れており，しかもその途切れた部分に門状の遺構があることから屋敷地を囲う防御施設と考えられている。

B　鳥羽離宮跡（表３・図４）

平安時代後期の11世紀末に白河天皇の

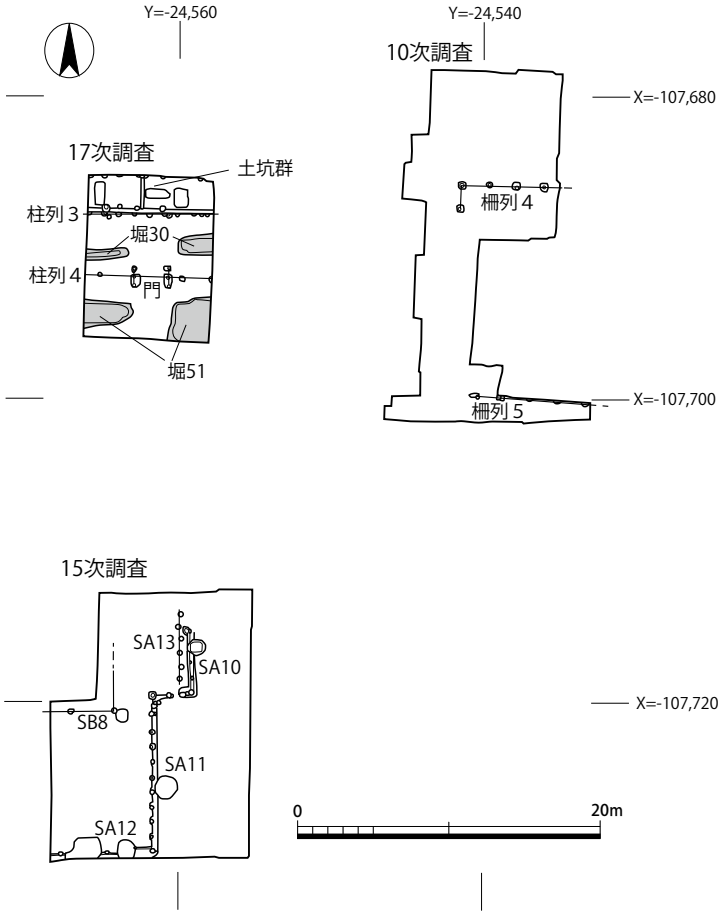


図３　北野遺跡中世以降　遺構分布状況（柏田有香　2011年の図144修正）

表３　鳥羽離宮跡（竹田城跡含む）時代別　堀（幅・深さ）分布状況

鳥羽離宮跡

時代	溝・堀（幅）							時代別合計
	0～3m	3～6m	6～9m	9～12m	12～15m	15～18m	30m以上	
平安時代後期	4	3	1					8
平安時代末～鎌倉	20	5	7					32
室町時代前半	3							3
戦国時代	2	2	2					6
桃山時代	1							1
江戸時代								0
幅単位合計	30	10	10	0	0	0	0	50

※各項目最大数自身は含まない。（3～6m＝3m以上，6m未満）

鳥羽離宮跡

時代	溝・堀（深さ）							時代別合計
	0～1m	1～2m	2～3m	3～4m	4～5m	5～6m	6m以上	
平安時代後期	5	3						8
平安時代末～鎌倉	19	13						32
室町時代前半	3							3
戦国時代	2	4						6
桃山時代								0
江戸時代	1							1
幅単位合計	30	20	0	0	0	0	0	50

※各項目最大数自身は含まない。（1～2m＝1m以上，2m未満）

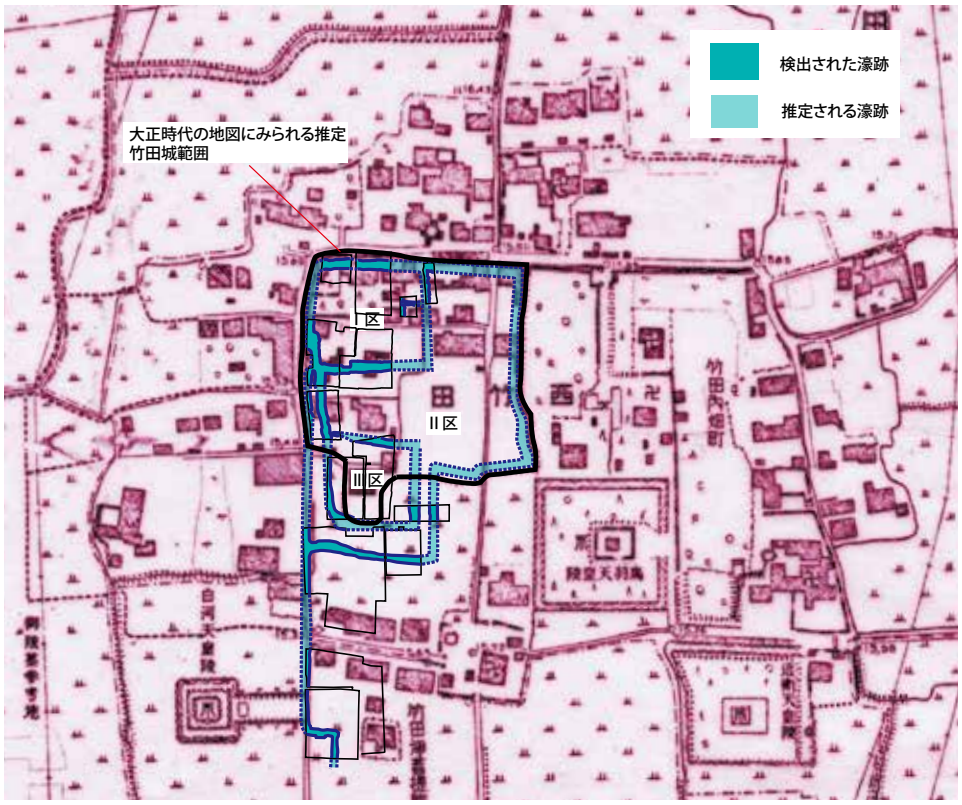


図４　竹田城跡復原図（馬瀬智光　2006年の図６転載）

退位後の後院として造営された離宮である。後鳥羽上皇が承久３年（1221）に挙兵した舞台の一つともなる。その後も当該地域の土豪である奥田氏の居城である竹田城が築かれるなど，中世を通じて居住が認められる。

鳥羽離宮跡では時期，幅，深さの判明するものが50例ある。草創期である平安時代後期８例の内，４例（50％）が幅３ｍを，３例が深さ１ｍを超える。平安時代末期～鎌倉時代の32例中幅３ｍを超えるものが12例（約38％），深さ１ｍを超えるものが13例ある。

室町時代前半の事例は３例と少ないが，戦国時代になると６例の内，幅３ｍ，深さ１ｍを超えるものが４例となり，約67％を占める。桃山時代の事例はなく江戸時代に１例あるが，幅３ｍ未満，深さ１ｍ未満となる。この遺跡においては室町時代前半を除き，当初から半数前後がいわゆる堀（濠）の基準を超える。

ただし，平安時代後期から鎌倉時代にかけての事例の内，幅３ｍを超えるものに白河天皇陵，近衛天皇陵の事例を複数含んでおり，これら天皇陵に関連する遺構を除くと，戦国時代に規模の大きなものが増加する傾向がある。

C　史跡名勝嵐山（嵯峨遺跡）（表４）

史跡名勝嵐山の指定範囲の内，桂川東岸から北岸にかけては，天龍寺とその塔頭群の展開する嵯峨遺跡に含まれる。当遺跡で時期，幅，深さの判明した事例は32例ある。平安時代後期に幅６ｍ，深さ２ｍの溝252（357）が出現する。平安時代後期から鎌倉時代の４例の内，２例は幅２ｍを超

表４　史跡・名勝嵐山，嵯峨遺跡　時代別　堀（幅・深さ）分布状況

史跡・名勝嵐山，嵯峨遺跡

時代	溝・堀（幅）							時代別合計
	0～3m	3～6m	6～9m	9～12m	12～15m	15～18m	30m以上	
平安時代後期			1					1
平安時代末～鎌倉	2	1	1					4
室町時代前半	8	5						13
戦国時代	10	3						13
桃山時代	1							1
江戸時代								0
幅単位合計	21	9	2	0	0	0	0	32

※各項目最大数自身は含まない。（3～6m＝3m以上，6m未満）

史跡・名勝嵐山，嵯峨遺跡

時代	溝・堀（深さ）							時代別合計
	0～1m	1～2m	2～3m	3～4m	4～5m	5～6m	6m以上	
平安時代後期			1					1
平安時代末～鎌倉	1	3						4
室町時代前半	8	5						13
戦国時代	7	6						13
桃山時代	1							1
江戸時代								0
幅単位合計	17	14	1	0	0	0	0	32

※各項目最大数自身は含まない。（1～2m＝1m以上，2m未満）

える。2012年に報告された溝１A（625）は幅６m，深さ1.5mある。室町時代前半でも13例中５例が幅３m，深さ１mを超える。逆に戦国時代になると，13例中幅３mを超えるものは３例となる。比率では室町時代前半が約38％，戦国時代が約23％に減少する。

この縮小傾向を示す事例として，2013年に報告されたSD16（647）とSD15（648）の新旧２本の区画溝がある。両溝は方位と切り合い関係から同じ天龍寺の塔頭を囲む溝と考えられる。戦国時代直前の15世紀中頃に埋没したSD16は幅４m，深さ1.7mあるのに対し，戦国時代である15世紀後半に成立しているSD15は幅1.7m，深さ0.8mに規模が縮小している。桃山時代になると幅３m未満，深さ１m未満の１例となる。

D　羽束師菱川城跡（表５・図５）

羽束師菱川城城はその成立時期が不明であるものの長岡京期以降，周辺よりも標高の高い微高地であったことから連綿と居住が認められる遺跡である。城主は不明であり，羽束師菱川の土豪層が集団で維持した可能性がある。2016年の発掘調査により遺跡のピークは15世紀であると考えられる。また，これまでの調査から遺跡中心部が移動している可能性がある。

成立時期及び幅と深さの両方の数値がわかる事例は５例ある。戦国時代に成立した堀が近世，近代まで幅を変えながらも存続するものの，中世城館の典型的な事例の一つである。平安時代末～鎌倉時代に成立した溝SD207（685）は幅0.3m，深さ0.26mである。次に戦国時代に成立した

表５　羽束師菱川城跡　時代別　堀（幅・深さ）分布状況

羽束師菱川城跡

時代	溝・堀（幅）							時代別合計
	0～3m	3～6m	6～9m	9～12m	12～15m	15～18m	30m以上	
平安時代後期								0
平安時代末～鎌倉	1							1
室町時代前半								0
戦国時代			3					3
桃山時代								0
江戸時代	1							1
幅単位合計	2	0	3	0	0	0	0	5

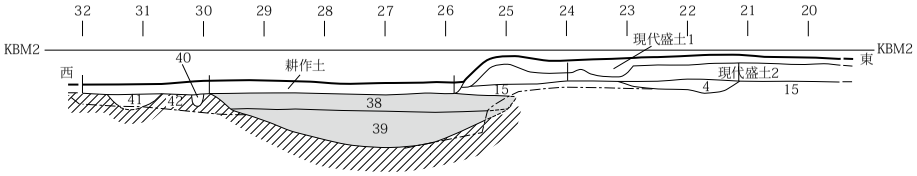
※各項目最大数自身は含まない。（3～6m＝3m以上，6m未満）

羽束師菱川城跡

時代	溝・堀（深さ）							時代別合計
	0～1m	1～2m	2～3m	3～4m	4～5m	5～6m	6m以上	
平安時代後期								0
平安時代末～鎌倉	1							1
室町時代前半								0
戦国時代		3						3
桃山時代	1							1
江戸時代								0
幅単位合計	2	3	0	0	0	0	0	5

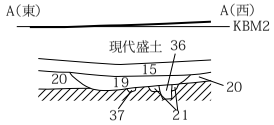
※各項目最大数自身は含まない。（1～2m＝1m以上，2m未満）

8Tr　濠2部分北壁断面図



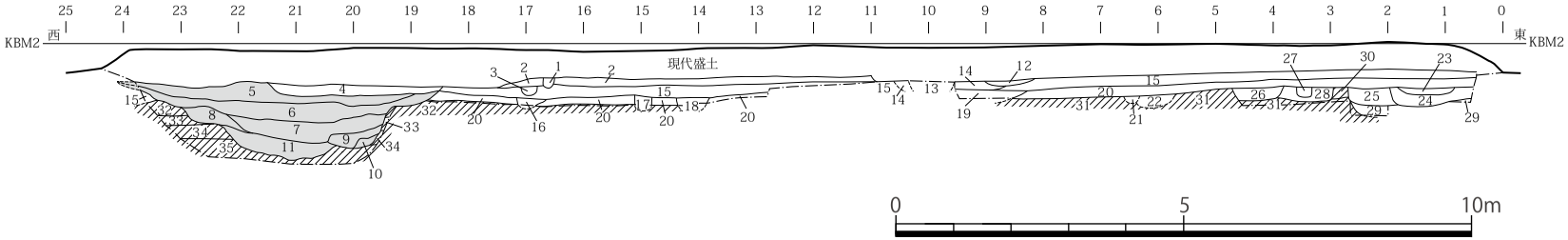
38　2.5Y4/2　暗灰黄色泥砂 ┐
39　2.5Y4/1　黄灰色泥土(最下層はグライ化して青灰色) ┘ 濠２埋土
40　10YR4/2　灰黄褐色泥砂(柱穴埋土)
41　2.5Y4/2　暗灰黄色泥砂(溝17埋土)
42　2.5Y5/3　黄褐色シルト(無遺物層:地山か?)

9Tr　濠2部分南壁断面図



36　10YR4/1　褐灰色砂泥(柱穴柱当たり)
37　5Y4/1　灰色砂泥(柱穴埋土)

9Tr　北壁断面図



1　2.5Y5/2　暗灰黄色泥砂
2　10YR5/2　灰黄褐色粘質土(整地土1)
3　10YR6/2　灰黄褐色粘質土
4　2.5Y4/1　黄灰色粘質土(濠7埋没後の凹地に堆積した土:江戸)
5　2.5Y5/2　暗灰黄色粘質土(濠7埋土:江戸)
6　10YR5/1　にぶい黄橙色粘質土をブロック状に含む褐灰色粘質土(濠7埋土)
7　10YR7/4　やや細砂の入るにぶい黄橙色粘質土(濠7埋土)
9　10YR5/1　細砂多く含む褐灰色粘質土(濠7埋土,濠壁面の崩落土)
10　5Y6/1　灰色粘土(濠7埋土,濠壁面の崩落土)
11　5Y3/2　有機物,細砂多く含むオリーブ黒色粘土(濠7埋土)
12　2.5Y5/3　黄褐色泥砂(近現代)
13　10YR4/3　にぶい黄褐色砂泥(土坑15埋土)
14　2.5Y6/4　にぶい黄色砂泥(土坑16埋土)
15　2.5Y6/1　黄灰色粘質土(整地土2)
16　2.5Y5/2　細砂をわずかに含む暗灰黄色粘質土(柱穴埋土)
17　2.5Y5/2　細砂をわずかに含む暗灰黄色粘質土(柱穴埋土)
18　10YR4/2　灰黄褐色粘質土(柱穴埋土)
19　10YR3/2　黒褐色泥砂(溝2埋土)
20　2.5Y6/1　黄灰色粘質土(整地土3)
21　7.5YR4/1　褐灰色泥砂(柱穴埋土)
22　10YR6/2　灰黄褐色泥砂(溝6埋土)
23　2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土(土坑13埋土)
24　2.5Y4/1　黄灰色砂質土(溝4埋土)
25　10YR4/2　灰黄褐色粘質土(溝3埋土上層)
26　10YR4/3　にぶい黄褐色粘質土(溝3埋土下層)
27　2.5Y4/1　黄灰色砂質土(土坑8埋土)
28　10YR5/1　褐灰色砂質土(土坑10埋土)
29　2.5Y4/2　暗灰黄色砂質土(溝5埋土)
30　2.5Y5/2　暗灰黄色砂質土(地山)
31　2.5Y6/4　にぶい黄色粘質土(地山)
32　10YR7/6　明黄褐色粘質土(地山)
33　10YR7/1　灰白色粘土(地山)
34　N6/0　灰色粘土(地山)
35　2.5GY6/1　オリーブ灰色粘土(地山)

図５　羽束師菱川城跡関連の堀断面図（馬瀬智光　2014年度の図86修正）

と考えられる堀３，羽束師菱川城北堀SD195（689），同東濠SD116（688）はそれぞれ，幅６m・深さ1.2m，幅７m・深さ1.9m，幅８m・深さ1.5mである。幅は戦国時代の標準的な規模である３～６mを上回るものの，深さは１～２mと標準的な規模である。桃山時代の溝SD176（686）は幅1.2m，深さ0.15mである。

E　革嶋館跡（表６・図６・７）

中世桂川西岸域の土豪である革嶋氏の館跡であり，近世まで存続するが濠は戦国時代まで遡る。近年の調査で時期，幅，深さのわかる事例が５例検出されている。５例とも深さは１mを超え，幅も１例を除き３m以上の規模を有する。その１例も幅2.7mと３mに極めて近いことから，堀といっても差し支えない。調査３の堀１（476）は幅5m，深さ1.9m，堀２（477）は幅５m，深さ2.0mである。残りの２例も幅約５mであり，統一的な企画で堀が構築されたと考えらえる。

F　大藪城跡・下久世構え跡（表７）

中世桂川西岸の土豪を中心とした居館である大藪城跡と下久世構え跡は東西に隣接した城館である。この二つの城館で共通するのは，幅に比して深さが極めて浅いことである。後の耕作でかなりの削平を受けたとしても，他の遺跡に比べて極めて浅い。

平安時代末～鎌倉時代に幅６m，深さ0.8mのSD20（102）が検出されているが，以後、戦国時代まで幅３mを超えるものは検出されていない。戦国時代になると幅３mを超えるものが13例中７例を占めるよ

表６　革嶋館跡　時代別　堀（幅・深さ）分布状況

革嶋館跡

時代	溝・堀（幅）							時代別合計
	0～3m	3～6m	6～9m	9～12m	12～15m	15～18m	30m以上	
平安時代後期	0	0						0
平安時代末～鎌倉	0	0						0
室町時代前半	0	0						0
戦国時代	1	4						5
桃山時代	0	0						0
江戸時代	0	0						0
幅単位合計	1	4	0	0	0	0	0	5

※各項目最大数自身は含まない。（3～6m＝3m以上，6m未満）

革嶋館跡

時代	溝・堀（深さ）							時代別合計
	0～1m	1～2m	2～3m	3～4m	4～5m	5～6m	6m以上	
平安時代後期	0	0	0					0
平安時代末～鎌倉	0	0	0					0
室町時代前半	0	0	0					0
戦国時代	0	4	1					5
桃山時代	0	0	0					0
江戸時代	0	0	0					0
幅単位合計	0	4	1	0	0	0	0	5

※各項目最大数自身は含まない。（1～2m＝1m以上，2m未満）

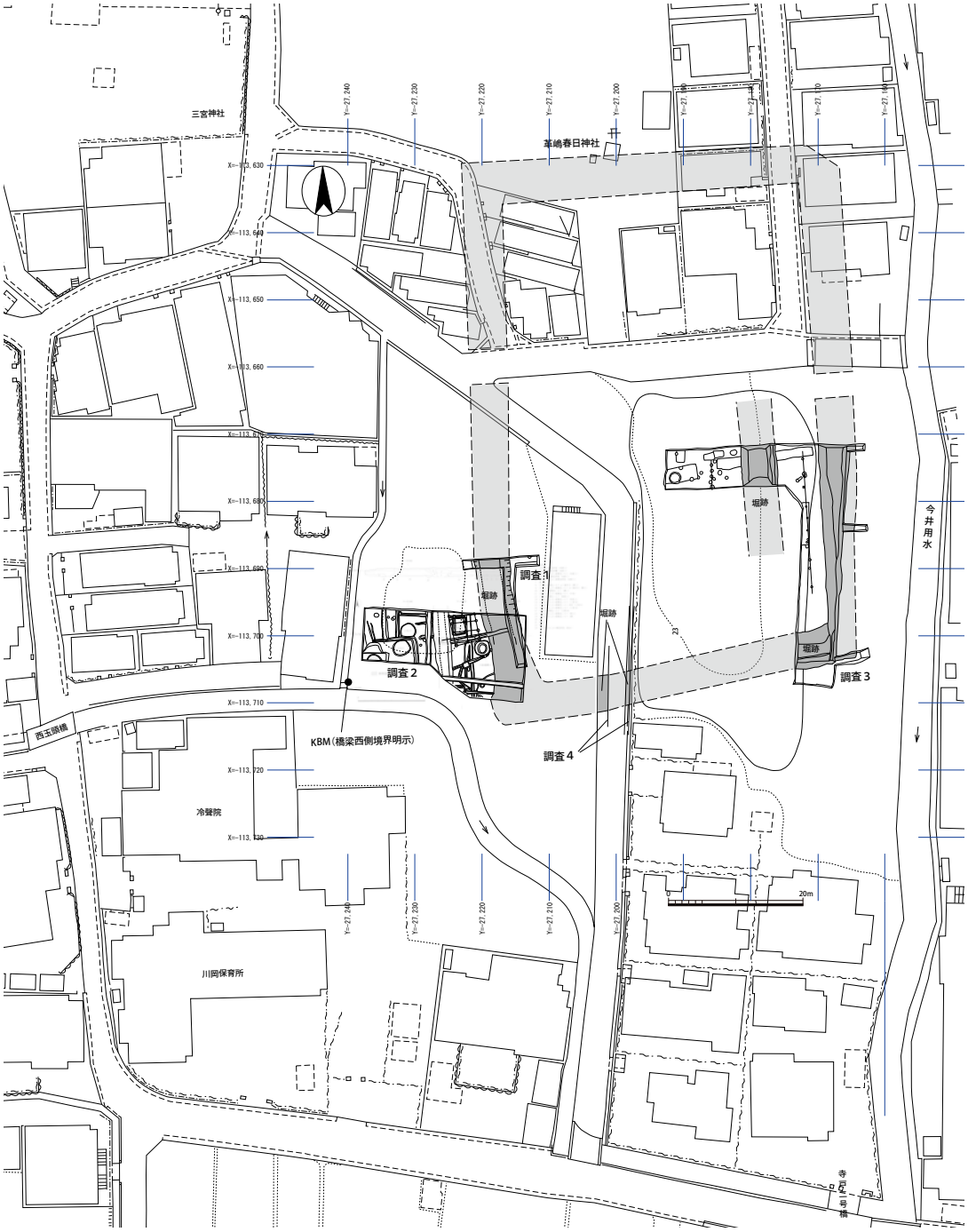


図６　革嶋館跡　調査位置と復原図

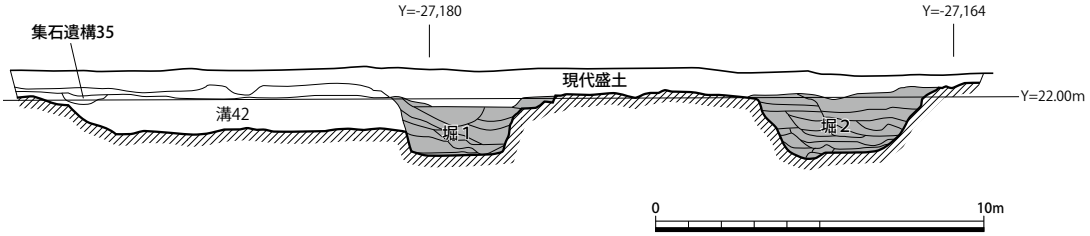


図７　革嶋館跡　調査３検出堀断面図（加納敬二・布川豊治・竜子正彦　2009年の図6修正）

表７　大藪城跡・下久世構え跡　時代別　堀（幅・深さ）分布状況

大藪城跡・下久世構え跡

時代	溝・堀（幅）							時代別合計
	0～3m	3～6m	6～9m	9～12m	12～15m	15～18m	30m以上	
平安時代後期	0	0	0	0	0	0		0
平安時代末～鎌倉	0	0	1	0	0	0		1
室町時代前半	2	0	0	0	0	0		2
戦国時代	6	5	1	0	0	1		13
桃山時代	1	0	0	0	0	0		1
江戸時代	0	1	0	0	0	0		1
幅単位合計	9	6	2	0	0	1	0	18

※各項目最大数自身は含まない。（3～6m＝3m以上，6m未満）

大藪城跡・下久世構え跡

時代	溝・堀（深さ）							時代別合計
	0～1m	1～2m	2～3m	3～4m	4～5m	5～6m	6m以上	
平安時代後期	0	0						0
平安時代末～鎌倉	1	0						1
室町時代前半	2	0						2
戦国時代	12	1						13
桃山時代	1	0						1
江戸時代	1	0						1
幅単位合計	17	1	0	0	0	0	0	18

※各項目最大数自身は含まない。（1～2m＝1m以上，2m未満）

表８　山科本願寺跡　時代別　堀（幅・深さ）分布状況

山科本願寺跡

時代	溝・堀（幅）							時代別合計
	0～3m	3～6m	6～9m	9～12m	12～15m	15～18m	30m以上	
平安時代後期	1							1
平安時代末～鎌倉								0
室町時代前半								0
戦国時代	7	4			1			12
桃山時代								0
江戸時代								0
幅単位合計	8	4	0	0	1	0	0	13

※各項目最大数自身は含まない。（3～6m＝3m以上，6m未満）

山科本願寺跡

時代	溝・堀（深さ）							時代別合計
	0～1m	1～2m	2～3m	3～4m	4～5m	5～6m	6m以上	
平安時代後期	1							1
平安時代末～鎌倉								0
室町時代前半								0
戦国時代	3	5	3		1			12
桃山時代								0
江戸時代								0
幅単位合計	4	5	3	0	1	0	0	13

※各項目最大数自身は含まない。（1～2m＝1m以上，2m未満）

うになる。特に大藪城の南北方向の堀状遺構であるSD40（520）は幅8.6ｍ，深さ0.35ｍ，同じく南北方向の堀状遺構SD40（515）は幅16ｍに達するが，深さは0.3ｍしかない。当該遺跡では桃山時代や江戸時代に相当する遺構も認められるが，深さ１ｍを超えるものは全18例で1例しか検出されていない。

G　山科本願寺跡（表８・図８～11）

浄土真宗中興の祖である蓮如上人が文明10年（1478）に創建した寺院である。数次の変遷を経て御本寺，内寺内，外寺内とそれに付随する複雑な折れをもつ土塁と堀を有する寺院であり，天文元年（1532）の焼き討ちにあうまで存続した。現代においても堀と土塁の一部は残存するが，調査事例が多いにも関わらず，堀の幅や深さを確認できることは少ない。これは堀が土地境界と一体となっており，堀の両側を確認することができないことも理由である。

山科本願寺が創建されるはるか以前に遡る平安時代後期の1例を除き，時期，幅，深さのわかる12例は戦国時代のものである。7例は幅３ｍ未満，３例は３～６ｍの範囲に収まり，事例中最大のものは天文元年の落城時の原因でもあった「水落」付近の堀（268）で幅12ｍ，深さ約４ｍを測る。また，山科本願寺跡の特徴は，幅は３ｍ未満であっても深さが1ｍ以上のものが4例あり，堀（濠）に近い構造を有していたことがわかる。

蓮如の隠居所であった山科本願寺南殿跡では内堀と土塁が現存している。現存土塁の延長上の3箇所で発掘調査が行われており，平成14年度の堀１（343）は埋没過程から3時期の変遷が認められ，規模は幅５ｍ，深さ2.2ｍに達する。

H　伏見城跡（表９・図12・13）

豊臣秀吉晩年の居城であり，徳川家康・秀忠・家光の３代が将軍宣下の儀式を執り行った桃山～江戸時代前期の武家の頭領の城郭である。南に宇治川，巨椋池を望み，大坂，京都，奈良，近江との交通の要衝であることから，古代より貴族の別業が営まれ，室町時代前期には伏見宮の屋敷が造られる他，三淵氏や三木氏の城館が築かれるなど，伏見城築城以前にも多くの城館が存在したと考えられる。伏見城も外堀の調査例は限られている他，深さのわかる事例は極めて少ない。

伏見城跡で時期，幅，深さの判明する事例は84例ある。平安時代後期1例は幅３ｍ未満，深さ１ｍ未満である。平安時代末～鎌倉時代にかけては4例あり，内2例は幅３ｍを超え，2015年に堤と共に検出された溝119（690）は幅６ｍ，深さ0.9ｍを測る。ただし，この事例を含め，深さ１ｍを超えるものは戦国時代にならないと事例がない。戦国時代に属する9例の内，2例が幅３ｍ以上であり，深さ２ｍを超えるものも出現する。伏見城の時期となる桃山時代は70例あるが，幅３ｍ未満のものが50例，深さ１ｍ未満のものが47例ある。しかし，前代までと大きく異なるのは，この時期の小規模な溝の内，石垣前面の雨落ち溝や道路側溝としての石組み溝など，石材で護岸した溝が多く認められることである。

一方，この遺跡が特殊であるのは，幅

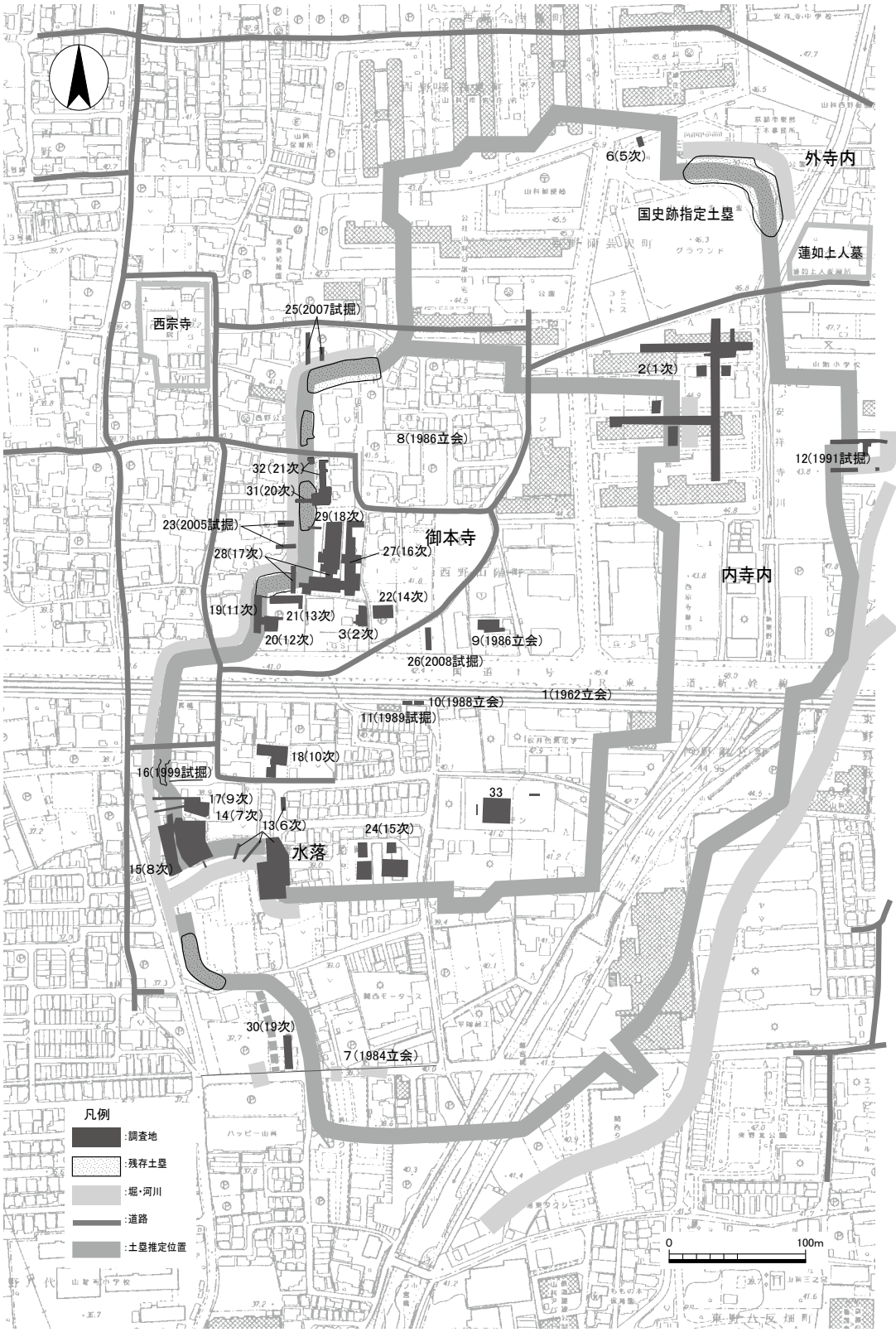


図８　山科本願寺跡と調査位置（近藤章子　2015年の図６修正）

30ｍ，深さ６ｍを超える規模の濠が出現することである。現存する「北堀」（122・145）は，平面E字形をしており，E字形の突出部３箇所で調査が行われている。西端の突出部では石垣が良好に残っており，中央および東端の発掘調査で堀の規模が明らかになっている。突出部以外の堀幅は100ｍ前後，突出部に至っては165ｍに達するところもある。深さは約14ｍを測る。

前代までの最大規模のものが山科本願寺跡のものであるが，隔絶した巨大化を遂げている。

上記の事例から，遺跡ごとにかなりの変異が認められることが分かった。北野遺跡では明確に門遺構に伴う屋敷の区画溝であり，報告者も堀としている遺構は，「堀（濠）」と認識する幅３ｍ以上，深さ１ｍ以上の規模を有していない。

鳥羽離宮跡では，洛中とその近郊が本格的に戦乱に巻き込まれる以前の平安時代後期に既に大型の堀状遺構が開削されている。事例の多くが天皇陵に伴うとはいえ，幅３ｍ以上，深さ１ｍ以上のものが

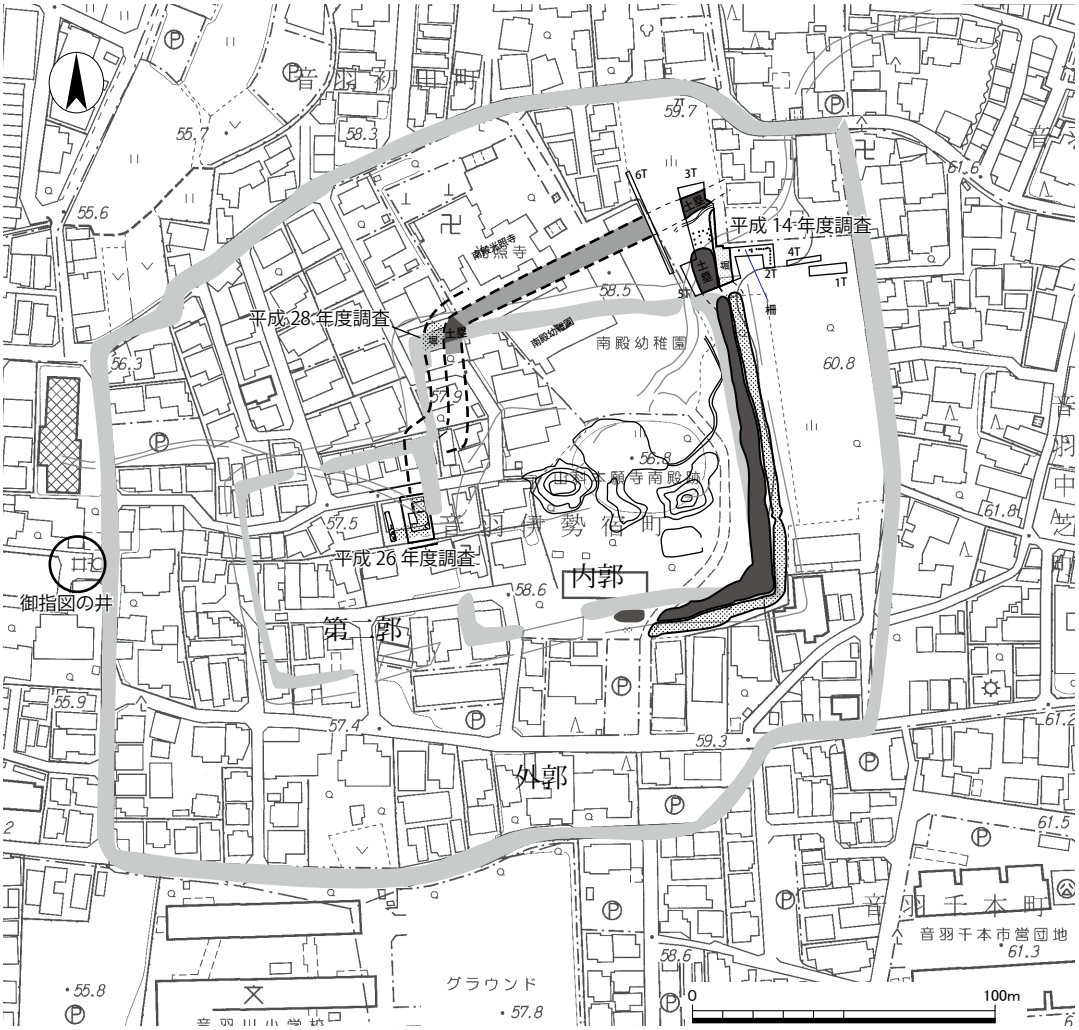


図９　山科本願寺跡南殿跡と調査位置（赤松佳奈　2017年の図11修正）

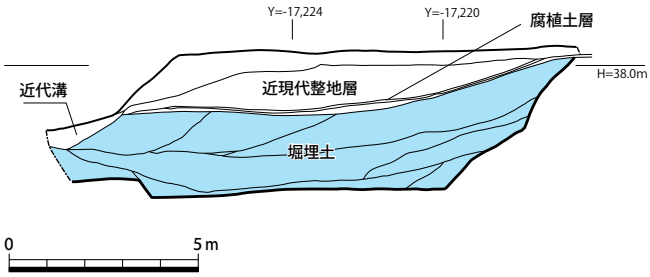


図10　山科本願寺跡　水落部分堀跡北壁断面図
（永田宗秀・近藤知子　1999年の図137修正）

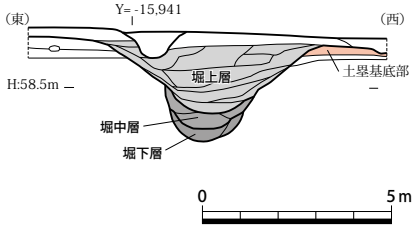


図11　山科本願寺跡南殿跡　堀１断面図
（出口　勲　2003年の図８修正）

表９　伏見城跡　時代別　堀（幅・深さ）分布状況

伏見城跡

時代	溝・堀（幅）							時代別合計
	0～3m	3～6m	6～9m	9～12m	12～15m	15～18m	30m以上	
平安時代後期	1							1
平安時代末～鎌倉	2	1	1					4
室町時代前半								0
戦国時代	7	2						9
桃山時代	50	4		2		2	12	70
江戸時代								0
幅単位合計	60	7	1	2	0	2	12	84

※各項目最大数自身は含まない。（3～6m＝3m以上，6m未満）

伏見城跡

時代	溝・堀（深さ）							時代別合計
	0～1m	1～2m	2～3m	3～4m	4～5m	5～6m	6m以上	
平安時代後期	1							1
平安時代末～鎌倉	4							4
室町時代前半								0
戦国時代	7	1	1					9
桃山時代	47	6	1	1	2	1	12	70
江戸時代								0
幅単位合計	59	7	2	1	2	1	12	84

※各項目最大数自身は含まない。（1～2m＝1m以上，2m未満）

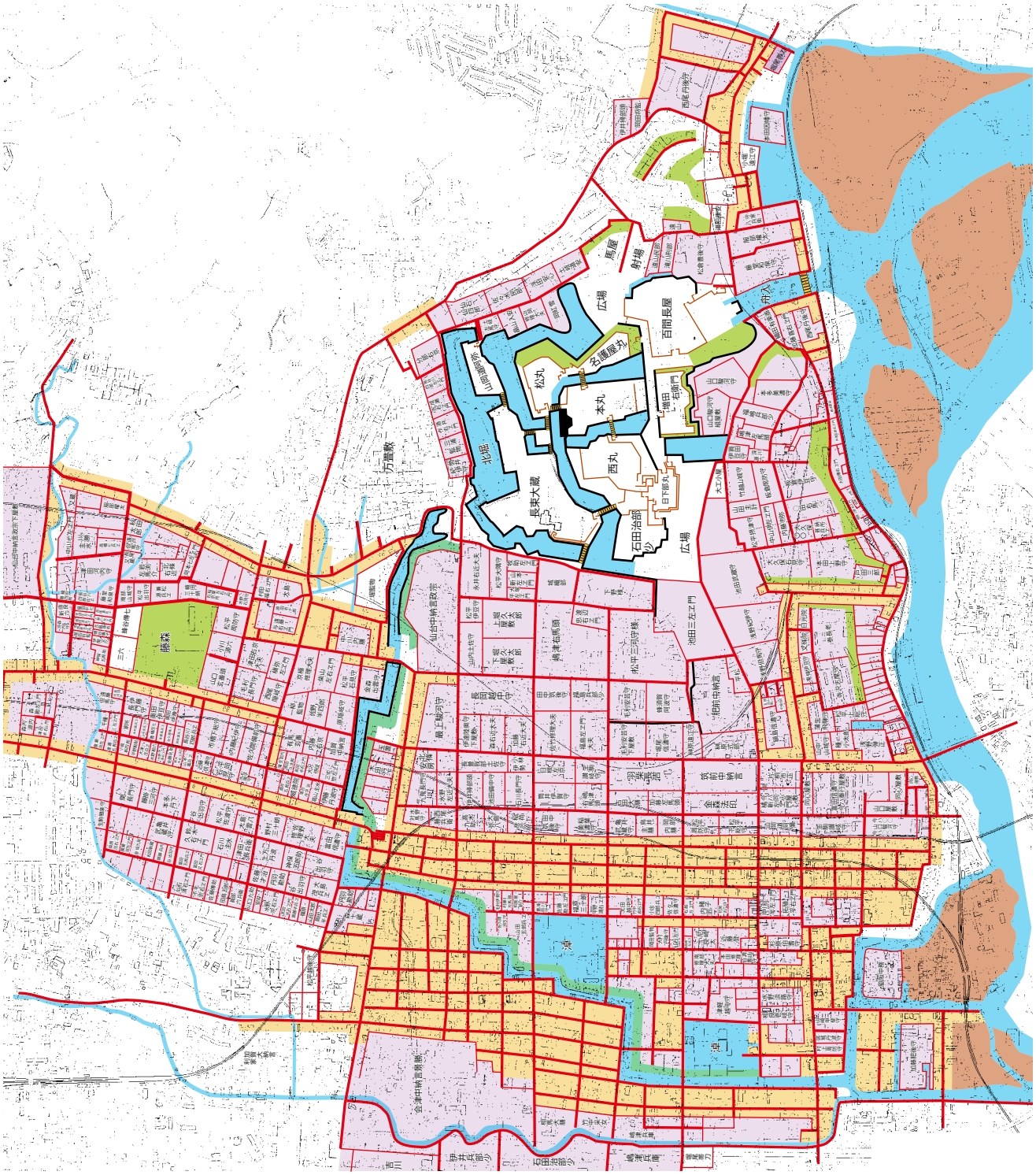


図12　伏見城跡復原図と北堀の位置（馬瀬智光・新田和央　2017年の図40修正）

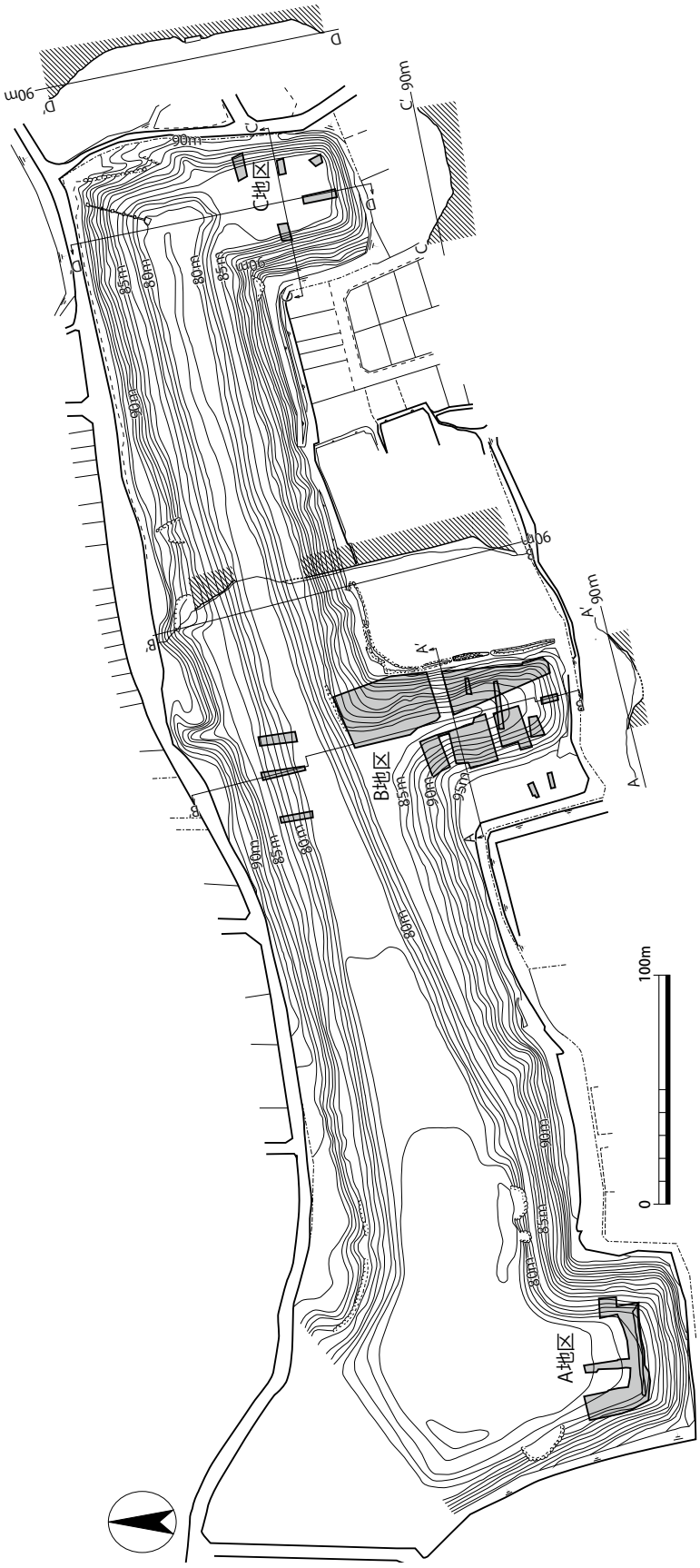


図13　伏見城跡　北堀調査　平・断面図（星野猷二・三木善則・江谷　寛　1990年の図25修正）

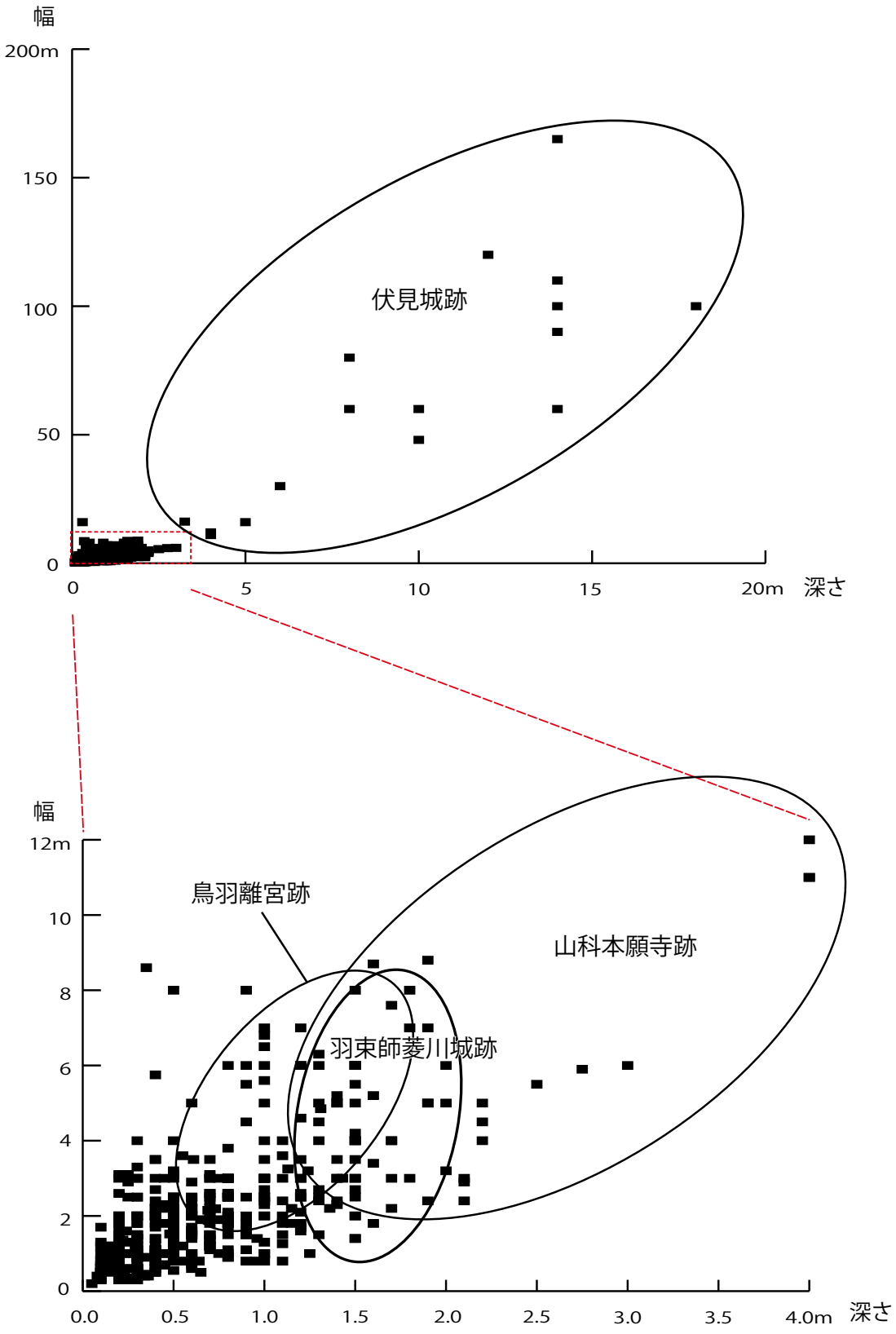


表10　洛外城館跡　堀（溝）　幅・深さ相関表

50％を占めており，戦国時代の67％に次いで高い比率を示している。

天龍寺とその塔頭群を中核とする嵯峨遺跡においては，幅３m，深さ１mを超える遺構のピークが戦国時代ではなく，嵯峨遺跡の創建期である室町時代前半にある。幅３m以上の事例は室町時代前半に約38％であるのに対し，戦国時代では約23％に低下する。ただし，深さ１mを超えるものは室町時代前半が約38％，戦国時代が約46％とあまり大きな変動はない。

羽束師菱川城跡，革嶋館跡，大藪遺跡・下久世構え跡，山科本願寺跡は堀状遺構のピークが戦国時代にある。

一方，伏見城跡は戦国時代で幅３m，深さ１mを超える事例が約22％，桃山時代でも約29％と大きな変動はないが，他遺跡では見ることのできない幅30m，深さ６mを超える事例が17％を占めるだけでなく，３m以上の堀に限ると，幅30m以上の堀が占める割合は60％に達する。また，大型の堀は先述の北堀のように，石垣を伴う事例が多い。しかも伏見城跡に関しては，幅や深さの全貌を明らかにできる事例が少ないため，今後も巨大な堀の事例は増える傾向がある。

５．考察

以上の個別事例や全体の傾向を踏まえたうえで，堀及び区画溝の幅と深さの関係性を見たときに，伏見城跡に伴う堀は他の堀と著しく隔絶した規模を有していることがわかる。伏見城以前で最大の規模を誇る山科本願寺跡や大藪城跡でさえ，表10上段ではその特徴を見出すことはできない。表10下段においては，山科本願寺跡に伴う堀がそれ以外のものよりも巨大であることがわかるものの，伏見城跡とはスケールがはるかに違うことが認識できる。伏見城跡については，遺構一覧表にあるとおり，幅10m・深さ３m未満のものも認められるが，表10上段にあるとおり，巨大な堀状遺構の事例は全て伏見城跡に伴うものである。

山科本願寺跡の分布域は，サンプルの大半が幅４m未満・深さ1.5m未満の範囲に集中する中では突出した規模を有している。

幅３m以上，深さ１m以上の遺構は平安時代後期に既に存在するが，爆発的に急増するのは戦国時代である。この規模の遺構が戦乱の最中に急増することは，この規模を堀（濠）と認識することが有効であることを示している。特に幅９m以上や12m以上の大型の堀が出現するのは戦国時代であり，深さが４mを超えるものも戦国時代である。

桃山時代になると，幅３m以上，深さ１m以上のものは急減する。これは，前著でも明らかにしたとおり，為政者の数次にわたる破城令の影響や戦乱そのものが収束していく中での出来事と考えられる。一方で伏見城跡だけが突出しており，洛中の聚楽第と並び，豊臣秀吉や徳川将軍による権力の集中度を示していると考える。

６．おわりに

今回の論考を考えるきっかけは二つあった。一つは京都府が中心となり府下の市町村とともに進めた京都府中世城館跡

調査がある。もう一つは，近年，足利義昭と織田信長との関係を見直す動きが文献史学を中心に進められていることに対し，考古資料から何が言えるのかということである。もし，戦国時代や桃山時代に古代以前のように十分な文字資料がなかった場合，遺構からどのようなことが言えるのかということである。

『京都府中世城館跡調査報告書』で扱った洛中と，今回の洛外での分析結果を通して，堀（濠）という特定の遺構を中心に見ていくと，戦国時代に堀（濠）が急増すること，織田信長の築造した旧二条城跡や本能寺城跡は，石垣を要所で用いることと規模の巨大化の点でそれまでの城館と大きく異なることが分かった。さらに豊臣秀吉が洛中で築いた聚楽第跡と洛外で築いた伏見城跡は，隔絶した規模の堀を有するようになる。

以上，堀（濠）という遺構に着目する限りは，足利将軍家や細川京兆家等の築く城館と織田信長の築く城館では，規模と構造の両面で大きく異なる。さらに豊臣秀吉の築城した二城（聚楽第跡・伏見城跡）は，隔絶した規模を有しており，権力の集中度を表現していると見ることが可能である。

今回の調査では徳川幕府が畿内支配の拠点として築いた淀城跡を十分取り上げることができなかったことである。将来の課題としたい。

註

1）馬瀬智光「室町から戦国時代京都の様相－洛中の堀を中心に－」『京都府中世城館跡調査報告書』第4冊（－山城編２－），京都府教育委員会，2015年，375～385頁。

2）久野雅司（編）『足利義昭』，戎光祥出版，2015年。

3）註１文献，375頁。

4）一丈＝十尺＝2.98445ｍ。
以下の計算式を参考として使用。
辻　純一「条坊制とその復元」『平安京提要』，（財団法人古代学協会・古代学研究所，1994年，104頁。

5）山下正男「京都市内およびその近辺の中世城郭－復原図と関連資料－」『京都大学人文科学研究所調査報告』第35号，京都大学人文科学研究所，1986年。

6）「中世京都の堀について」『研究紀要』第２号，財団法人京都市埋蔵文化財研究所，1995年，61～88頁。

7）註５文献，１頁。

8）註６文献。

9）馬瀬智光「洛中・洛外の城館について～築城主体の類型化から～」『第12回京都府埋蔵文化財研究集会発表資料集－京都の城・構・館－』，京都府埋蔵文化財研究会，2004年，40～56頁。

10）註１文献。

参考文献

赤松佳奈「山科本願寺南殿跡」『京都市内遺跡発掘調査報告』平成28年度，京都市文化市民局，2017年，30～39頁。

馬瀬智光「洛中・洛外の城館について～築城主体の類型化から～」『第12回京都府埋蔵文化財研究集会発表資料集－京都の城・構・館－』，京都府埋蔵文化財研究会，2004年，40～56頁。

馬瀬智光「京の城」『京都市文化財ブックス』第20集，京都市，2006年。

馬瀬智光「長岡京左京四条三坊十三・十四町・四坊三・四町・羽束師菱川城跡」『京都市内遺跡試掘調査報告』（京都市文化市民局，2014年，78～88頁）

馬瀬智光「室町から戦国時代京都の様相－洛中の堀

を中心に－」『京都府中世城館跡調査報告書』第4冊（－山城編２－），京都府教育委員会，2015年，375～385頁）。
馬瀬智光・新田和央『天下人の城』京都市文化財ブックス　第31集，京都市，2017年。
柏田有香「北野廃寺17次調査」『京都市内遺跡発掘調査報告』平成22年度，京都市文化市民局，2011年，134～156頁。
加納敬二・布川豊治・竜子正彦『革嶋館跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009－6，財団法人京都市埋蔵文化財研究所，2009年。
近藤章子「山科本願寺跡（1）」『京都市内遺跡発掘調査報告』平成26年度，京都市文化市民局，2015年，375～385頁。
出口　勲「山科本願寺南殿跡」『京都市内遺跡発掘調査概報』平成14年度，京都市文化市民局，2003年，1～20頁。
永田宗秀・近藤知子「山科本願寺跡１」『平成９年度京都市埋蔵文化財調査概要』，財団法人京都市埋蔵文化財研究所，1999年，157～161頁。
星野猷ニ・三木善則・江谷　寛『伏見城跡発掘調査報告－伏見北堀公園整備工事に伴う事前発掘調査－』，伏見城研究会・京都市建設局公園建設課，1990年。
星野猷ニ・三木善則・江谷　寛『伏見城跡発掘調査報告－伏見北堀公園整備工事に伴う事前発掘調査－』，伏見城研究会，1989年。
辻　純一「条坊制とその復元」『平安京提要』，財団法人古代学協会・古代学研究所，1994年。
久野雅司（編）『足利義昭』，戎光祥出版，2015年。
山下正男『京都市内およびその近辺の中世城郭－復原図と関連資料－』京都大学人文科学研究所調査報告　第35号，京都大学人文科学研究所，1986年。
山本雅和「中世京都の堀について」『研究紀要』第2号，財団法人京都市埋蔵文化財研究所，1995年，61～88頁。
山本雅和「洛中の構」『関西近世考古学研究　22』，関西近世考古学研究会，2014年。

馬瀬（うませ）　智光（ともみつ）（文化財保護課　埋蔵文化財係　係長）

表11　堀・溝　一覧表（1）

幅・深さ番号	堀番号	時期	遺跡名	遺構名	性格	堀幅（m）	検出深度（m）	報告書名	発行年
1	154	平安末～鎌倉	仁和寺境内	SD21	仁和寺の僧坊北側の築地SC20の北辺から1.7m離れた位置にある東西方向の溝。	0.20	0.05	『仁和寺境内発掘調査報告-御室会館建設に伴う調査-』（『京都市埋蔵文化財研究所調査報告第9冊』）	1990/6/30
2	25	室町時代前期	大藪遺跡（大藪城跡）	SD2	中世大藪集落の南北溝？	0.30	0.10	『大藪遺跡発掘調査概要　昭和55年度』	1981/3/31
3	28	室町時代	鳥羽離宮跡	SD2	礎石群を取り囲み南北方向から東に折れ曲がる。	0.30	0.30	「第70次発掘調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概要　昭和56年度』	1982/3/31
4	388	江戸時代	淀城跡	石組溝5	淀城内の屋敷地の石組12の西側に接する石組溝。	0.30	0.25	『長岡京跡・淀城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-3』）	2006/6/30
5	390	江戸時代	淀城跡	石組溝24	淀城内の屋敷地の石組12の西側に接する石組溝で暗渠排水。	0.30	0.20	『長岡京跡・淀城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-3』）	2006/6/30
6	561	中世	鳥羽離宮跡	SD4601	中世竹田の東西溝。	0.30	0.20	「鳥羽離宮跡46次調査」『昭和53年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2011/12/15
7	567	平安末～鎌倉	勝持寺旧境内	溝12	勝持寺旧境内平坦面4南半部の西辺掘形裾部で検出した南北方向の溝。	0.30	0.30	『勝持寺旧境内』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2011-5』）	2012/3/20
8	583	江戸時代	淀城跡	溝17（石製トラフを伴う）	淀城中堀（本丸東側）の石垣29に通じる石製トラフを有する暗渠排水。	0.30	0.25	『長岡京跡・淀城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2011-7』）	2012/3/30
9	674	室町時代前期	史跡・名勝嵐山	溝13	臨川寺に関連する遺構。門基壇推定範囲北端に取り付く東西溝，溝17に並行。	0.30	0.10	『史跡・名勝　嵐山』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2014-7』）	2015/3/31
10	685	平安末～鎌倉	羽束師菱川城跡	SD207	羽束師菱川城内の南北方向の素掘り溝。	0.30	0.25	『羽束師菱川城跡・長岡京跡（長岡京跡第561次調査）』	2015/5/26
11	381	室町時代	白河街区跡	溝255	溝428との心々間距離が1.5m，室町時代の南北区画溝で，白河街区の南北区画東側築地の推定ラインのうち側に位置し，宅地内の溝の可能性。	0.35	0.25	『白河街区跡・岡崎遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-4』）	2005/9/30
12	512	室町時代前半以前	北野廃寺	SD20A	平安京北限北側に展開する斜行溝。	0.35	0.10	『北野廃寺発掘調査報告書』	2010/9/30
13	127	平安時代後期	尊勝寺跡	SD4	尊勝寺境内の東西方向の溝で，SD5と並行。心々距離は約3m。	0.40	0.10	「尊勝寺跡」『昭和61年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1989/3/31
14	329	桃山時代	伏見城跡	SD325	南北道路西側溝。	0.40	0.20	『伏見城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-11』）	2002/10/31
15	340	室町時代	草木町遺跡	溝31	中世草木町の農道側溝。溝60とは1.6m前後の間隔で並行する。	0.40	0.10	『草木町遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-13』）	2003/2/28
16	341	室町時代	草木町遺跡	溝60	中世草木町の農道側溝。溝31とは1.6m前後の間隔で並行する。	0.40	0.10	『草木町遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-13』）	2003/2/28
17	370	室町時代前期	石見城跡・長岡京跡	溝2053	初期石見城の区画溝？溝2050に合流し，建物9の雨落ち溝の可能性あり。	0.40	0.20	『長岡京右京一条四坊十五町跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報　2004-15』）	2005/3/31
18	429	戦国時代	伏見城跡（以前）	溝1731	1区溝1660と3区溝940で東を画された集落内を南北に走る小型の溝。	0.40	0.30	『伏見城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2006-27』）	2007/3/31
19	435	桃山時代	伏見城跡	溝484	伏見城城下町造営時の「段差」遺構の上段段差下部で検出した南北方向の溝74の延長。	0.40	0.20	『伏見城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2006-27』）	2007/3/31
20	447	戦国時代	伏見城跡	溝23	室町時代後期の溝。4区溝249とつながるか？1区の同時期の区画溝と同じ方位をとる。	0.40	0.20	『伏見城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2007-15』）	2008/3/12
21	469	室町時代	常盤仲之町遺跡，広隆寺求刑代	溝39	太秦中世寺院等の区画溝。	0.40	0.20	『常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-3』）	2008/9/29
22	480	室町時代	法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡	溝3-120a・溝195	法住寺殿期の南北道路を踏襲する道路西側溝。溝223と対になる。溝の西側に門2がある。	0.40	0.20	『法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-8』）	2010/1/29
23	494	桃山時代	伏見城跡・桃陵遺跡	溝SD1003	伏見城内の安土桃山時代の小規模な区画溝。	0.40	0.30	『伏見城跡・桃陵遺跡発掘調査報告書-（仮称）公務員宿舎伏見住宅整備事業に伴う-』	2010/3/20
24	570	室町時代前期	勝持寺旧境内	溝240	勝持寺旧境内の基壇建物の北東側を画する雨落ち溝の可能性。L字状に屈曲する。平坦面5の南部で検出した南北方向の溝。土坑230・363を繋ぐ。	0.40	0.20	『勝持寺旧境内』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2011-5』）	2012/3/20
25	576	平安末～鎌倉	常盤仲之町遺跡	溝143	広隆寺旧境内の子院に関連する区画溝もしくは，旧城北街道側溝。	0.40	0.36	『常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2011-8』）	2012/3/30
26	662	桃山時代	伏見城跡	SD403	伏見城武家屋敷街の南北方向の区画溝。掘立柱建物4と6の区画溝。浅野但馬守もしくはその西隣の屋敷地の可能性（鍋島信濃守の屋敷地の可能性）。	0.40	0.08	『伏見城跡-集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』（『イビソク京都市内遺跡調査報告』第9輯）	2014/12/26
27	691	平安末～鎌倉	伏見城跡	溝147	中世集落に伴う南北溝119，堤135に関連する内溝か？	0.40	0.34	『伏見城跡・桃陵遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015-2』）	2015/9/30
28	162	平安時代後期	尊勝寺跡	SD34	尊勝寺跡に関連する南北区画溝か？	0.45	0.20	「尊勝寺跡」『昭和62年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1991/12/5
29	380	室町時代	白河街区跡	溝428（柵3）	溝255との心々間距離が1.5m，室町時代の南北区画溝で，白河街区の南北区画東側築地の推定ライン付近。	0.45	0.35	『白河街区跡・岡崎遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-4』）	2005/9/30
30	513	室町時代前期	北野廃寺	SD20B	平安京北限北側に展開する斜行溝。	0.45	0.10	『北野廃寺発掘調査報告書』	2010/9/30

表11　堀・溝　一覧表（2）

幅・深さ番号	堀番号	時期	遺跡名	遺構名	性格	堀幅（m）	検出深度（m）	報告書名	発行年
31	24	室町時代前期	大藪遺跡（大藪城跡）	SD1	中世大藪集落の南北溝？	0.50	0.20	『大藪遺跡発掘調査概要　昭和55年度』	1981/3/31
32	32	平安時代後期～鎌倉時代	鳥羽離宮跡	SD6	鳥羽離宮期の東西溝。	0.50	0.10	「第70次発掘調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概要　昭和56年度』	1982/3/31
33	225	平安末～鎌倉	上里遺跡	溝2	上里遺跡の東西方向の溝で建物1の南側を流れる区画溝。	0.50	0.40	「上里遺跡」『平成4年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1995/9/1
34	282	桃山時代	伏見城跡	SD1	伏見城武家屋敷・上板橋通と伊達街道との交差点で，石垣1と並行する石組溝。	0.50	0.40	「伏見城跡」『平成10年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2000/3/31
35	284	桃山時代	伏見城跡	SD1	伏見城武家屋敷。上板橋通沿いの北端の溝。石垣1と並行する東西方向の石組溝。	0.50	0.30	「伏見城跡」『平成10年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2000/3/31
36	295	桃山時代	伏見城跡	SD2	伏見城武家屋敷。上板橋通沿いの北端の溝。SD1の下層にあり，東西方向の溝。2区の続き。	0.50	0.20	「伏見城跡」『平成10年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2000/3/31
37	428	桃山時代	伏見城跡（以前）	溝1357	1区溝1660と3区溝940で東を画された集落内を南北に走る小型の溝。	0.50	0.20	『伏見城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2006-27』）	2007/3/31
38	431	桃山時代	伏見城跡	溝74	伏見城城下町造営時の「段差」遺構の上段段差下部で検出した南北方向の溝。	0.50	0.20	『伏見城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2006-27』）	2007/3/31
39	433	桃山時代	伏見城跡	溝185	伏見城城下町造営時の「段差」間の平坦面で溝102に並行して検出した南北方向の溝	0.50	0.10	『伏見城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2006-27』）	2007/3/31
40	434	桃山時代	伏見城跡	溝469	伏見城城下町造営時の「段差」遺構の上段段差下部で検出した南北方向の溝74の延長。	0.50	0.10	『伏見城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2006-27』）	2007/3/31
41	467	平安末～鎌倉	常盤仲之町遺跡，広隆寺求刑代	溝172	太秦中世寺院等の区画溝。	0.50	0.15	『常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-3』）	2008/9/29
42	490	桃山時代	伏見城跡・桃陵遺跡	溝SD182	伏見城内の安土桃山時代の小規模な区画溝。	0.50	0.65	『伏見城跡・桃陵遺跡発掘調査報告書-（仮称）公務員宿舎伏見住宅整備事業に伴う-』	2010/3/20
43	496	桃山時代	伏見城跡・桃陵遺跡	溝SD1002	伏見城内の徳川期伏見城の石垣直下の雨落ち溝。	0.50	0.20	『伏見城跡・桃陵遺跡発掘調査報告書-（仮称）公務員宿舎伏見住宅整備事業に伴う-』	2010/3/20
44	508	平安末～鎌倉	常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内	溝1	常盤仲之町遺跡の東西方向の区画溝。	0.50	0.20	『常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-4』）	2010/8/31
45	601	平安末～鎌倉	中久世遺跡	SD6	SB11,SB12,SB10，SA1で構成される屋敷地の北限を限る東西区画溝。	0.50	0.20	「中久世遺跡」『昭和54年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2012/3/31
46	610	室町時代	常盤仲之町遺跡・一ノ井遺跡	溝1-11	溝1-30廃絶後の耕作溝の可能性。	0.50	0.10	『常盤仲之町遺跡・一ノ井遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2012-11』）	2013/1/31
47	621	平安時代後期	法住寺殿跡	溝706	法住寺殿内を東西方向に走る区画溝で，この溝の北側に柱列778が並行する。	0.50	0.10	『法住寺殿跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2012-10』）	2013/1/31
48	634	桃山時代	伏見城跡	溝6・土塁15	伏見城伊達屋敷の北限の総構え土塁15の内溝。	0.50	0.30	『伏見城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2012-17』）	2013/3/31
49	656	中世前半	鶏冠井清水遺跡	溝1	中世の鶏冠井清水遺跡の耕作もしくは区画等に関する溝か？	0.50	0.20	『長岡京左京三条三坊十町跡・鶏冠井清水遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2014-3』）	2014/8/29
50	672	室町時代前期	史跡・名勝嵐山	溝1	臨川寺に関連する遺構。北端で東に屈曲して止まる石組溝。1975年調査の石組溝の延長。	0.50	0.20	『史跡・名勝　嵐山』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2014-7』）	2015/3/31
51	124	桃山時代	伏見城跡	SD1（南北石組溝）	伏見城下武家屋敷に伴う石組溝で，石垣・犬走りとセット。	0.55	0.50	「伏見城跡（FD32）」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和63年度』	1989/3/31
52	660	桃山時代	伏見城跡	SD230	伏見城武家屋敷街の東西方向の区画溝。堀形には最大径26cmの割石が平坦面を溝内壁に沿うように配置されている。浅野但馬守もしくはその西隣の屋敷地の可能性（鍋島信濃守の屋敷地の可能性）。	0.56	0.23	『伏見城跡-集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』（『イビソク京都市内遺跡調査報告』第9輯）	2014/12/26
53	36	平安時代後期～鎌倉時代	鳥羽離宮跡	SD1	鳥羽離宮期の南北溝，北大路に取り付くか。	0.60	0.30	「第74次発掘調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概要　昭和56年度』	1982/3/31
54	53	平安末～鎌倉	鳥羽離宮跡	SD42	白河天皇陵に近接する東西溝。	0.60	0.25	「第91次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報　昭和58年度』	1984/3/31
55	140	室町時代前期	鳥羽離宮跡	SD1	鴨川の溢流対策の溝か？	0.60	0.20	「第133次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報　平成元年度』	1990/3/11
56	195	平安時代後期	下鳥羽遺跡	北側の溝（SD4）	下鳥羽の平安時代末の集落に関連する溝？	0.60	0.30	「下鳥羽遺跡（92TB325）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成5年度』	1994/3/31
57	216	平安末～鎌倉	南春日町遺跡	溝1	大原野神社を支える神職集団の敷地の東西溝。建物1の北側を走る。	0.60	0.60	「南春日町遺跡第22～24次調査」『平成3年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1995/3/31
58	262	平安末～鎌倉	下三栖遺跡	SD27	下三栖の平安時代末～鎌倉時代初頭の屋敷地の南限を示す東西方向の溝。	0.60	0.10	「下三栖遺跡」『平成8年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1998/3/31
59	286	桃山時代	伏見城跡	SD1	伏見城武家屋敷。上板橋通沿いの北端の溝。石垣1と並行する東西方向の石組溝。2区の続き。	0.60	0.30	「伏見城跡」『平成10年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2000/3/31
60	288	桃山時代	伏見城跡	SD1	伏見城武家屋敷。上板橋通沿いの北端の溝。石垣1と並行する東西方向の石組溝。2区の続き。	0.60	0.30	「伏見城跡」『平成10年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2000/3/31
61	293	桃山時代	伏見城跡	SD1・1期	伏見城武家屋敷。上板橋通沿いの北端の溝。石垣1と並行する東西方向の溝。2区の続き。犬走り1に対応。石組なし。	0.60	0.30	「伏見城跡」『平成10年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2000/3/31

表11　堀・溝　一覧表（3）

幅・深さ番号	堀番号	時期	遺跡名	遺構名	性格	堀幅（m）	検出深度（m）	報告書名	発行年
62	317	平安時代後期	六波羅政庁跡方広寺跡	溝276	六波羅政庁に関連する東西溝か？	0.60	0.15	「六波羅政庁跡」『平成11年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2002/6/30
63	376	室町時代	白河街区跡	溝342	室町時代の南北区画溝で，柵1と並行する。	0.60	0.30	『白河街区跡・岡崎遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-4』）	2005/9/30
64	414	室町時代	長岡京跡	溝11	長岡京跡東京極大路を踏襲する区画溝	0.60	0.15	『長岡京左京三条四坊十三町跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-17』）	2007/1/31
65	432	桃山時代	伏見城跡	溝102	伏見城城下町造営時の「段差」間の平坦面で検出した南北方向の溝	0.60	0.10	『伏見城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2006-27』）	2007/3/31
66	436	桃山時代	伏見城跡	溝483	伏見城城下町造営時の2区下段「段差」の南延長上にある。	0.60	0.20	『伏見城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2006-27』）	2007/3/31
67	445	桃山時代	伏見城跡	溝215	伏見城期の区画溝。南部町通に直行する。	0.60	0.30	『伏見城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2007-15』）	2008/3/12
68	446	戦国時代	伏見城跡	溝249	室町時代後期の溝。南側の1区溝1731と関連する。	0.60	0.30	『伏見城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2007-15』）	2008/3/12
69	475	室町時代前期	南禅寺境内	石組溝	南禅寺境内の参道に伴う東西方向の石組溝	0.60	0.40	『史跡　南禅寺境内』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-2』）	2009/6/30
70	491	桃山時代	伏見城跡・桃陵遺跡	溝SD333	伏見城内の安土桃山時代の小規模な区画溝。	0.60	0.10	『伏見城跡・桃陵遺跡発掘調査報告書-（仮称）公務員宿舎伏見住宅整備事業に伴う-』	2010/3/20
71	524	桃山時代	大藪城跡	SD341	大藪城内の溝。SD151とSD255の合流部の角に沿って検出。建物の建つ微高地から溝（堀）に至る傾斜変換点に掘られている。	0.60	0.40	『大藪遺跡・大藪城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-9』）	2010/11/30
72	525	室町時代	大藪城跡	SD5	大藪城内の東西方向の溝。SL3に並行している。	0.60	0.40	『大藪遺跡・大藪城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-9』）	2010/11/30
73	562	桃山時代	松ヶ崎廃寺	東西方向溝SD31	松ヶ崎廃寺内の東西区画溝。	0.60	0.20	「松ヶ崎廃寺」『昭和53年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2011/12/15
74	572	室町時代前期	勝持寺旧境内	溝342	勝持寺旧境内の平坦面5東部で検出した東西方向の溝。掘り込み地業である地業3と対となる一つの建物の基礎をなしていた可能性。	0.60	0.30	『勝持寺旧境内』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2011-5』）	2012/3/20
75	658	中世前半	鶏冠井清水遺跡	溝3	中世の鶏冠井清水遺跡の耕作もしくは区画等に関する溝か？	0.60	0.25	『長岡京左京三条三坊十町跡・鶏冠井清水遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2014-3』）	2014/8/29
76	353	桃山時代	伏見城跡	溝1	武家屋敷西側の区画溝。	0.65	0.10	「伏見城跡・御香宮廃寺跡・金森出雲遺跡　No.57」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成15年度』	2004/3/31
77	68	平安末～鎌倉	鳥羽離宮跡	SD2	鳥羽離宮田中殿金剛心院跡で，南北方向の区画溝，SD3との間隔は8mある。	0.70	0.20	「鳥羽離宮跡　第89次調査」『昭和58年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1985/3/31
78	69	平安末～鎌倉	鳥羽離宮跡	SD3	鳥羽離宮田中殿金剛心院跡で，南北方向の区画溝，SD２との間隔は８mある。	0.70	0.20	「鳥羽離宮跡　第89次調査」『昭和58年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1985/3/31
79	76	平安末～鎌倉	法住寺跡	SD04	法住寺の寺域及び最勝光院の推定地にあたる場所でSD03の北側にほぼ並行する形で検出された小規模な溝。	0.70	0.10	「法住寺跡」『昭和58年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1985/3/31
80	103	平安時代後期	法住寺殿跡	溝（南北溝）	蓮華王院（二町四方）の東西を二分する位置にある南北溝。	0.70	0.20	「法住寺殿跡（RT26）」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和62年度』	1988/3/31
81	194	平安時代後期	下鳥羽遺跡	南側の溝（SD3）	下鳥羽の平安時代末の集落に関連する溝？	0.70	0.44	「下鳥羽遺跡（92TB325）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成５年度』	1994/3/31
82	312	戦国時代	六波羅政庁跡，方広寺跡	南北溝162	妙法院に関連する南北溝か？	0.70	0.15	「六波羅政庁跡」『平成11年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2002/6/30
83	334	室町時代	鹿苑寺庭園	SD47	鹿苑寺の門跡柱列に伴う区画溝か？	0.70	0.20	『特別史跡・特別名勝　鹿苑寺（金閣寺）庭園』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-9』）	2003/1/31
84	392	平安末～鎌倉	常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡	溝109	中世常盤付近の南北区画溝？	0.70	0.40	『常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-6』）	2006/7/31
85	430	戦国時代	伏見城跡（以前）	溝2006	1区溝1660と3区溝940で東を画された集落内を東西に走る溝。	0.70	0.20	『伏見城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2006-27』）	2007/3/31
86	444	桃山時代	伏見城跡	石組側溝	伏見城武家屋敷街の部分で，大和大路の東側溝。佐竹氏館跡？	0.70	0.60	『伏見城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2007-10』）	2008/1/31
87	448	伏見城期	伏見城跡	溝1	伏見城期の区画溝で，1区溝1453につながる。	0.70	0.20	『伏見城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2007-15』）	2008/3/12
88	486	桃山～江戸初期	法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡	溝43	方広寺南門東の整地にあたって，谷部の湧水を処理するために一時的に穿たれた東西溝。	0.70	0.45	『法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-8』）	2010/1/29
89	487	桃山～江戸初期	法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡	溝92	方広寺南門東の整地にあたって，谷部の湧水を処理するために一時的に穿たれた南北溝。	0.70	0.45	『法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-8』）	2010/1/29
90	555	鎌倉時代	白河北殿跡	SD55	白河北殿地域の東西方向に走る礫を大量に含み溝。	0.70	0.15	「白河北殿跡」『昭和55年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2011/9/30
91	557	室町時代～安土桃山時代	鳥羽離宮跡	SD3	中世竹田の南北方向の区画溝。	0.70	0.15	「鳥羽離宮跡57次調査」『昭和55年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2011/9/30

表11　堀・溝　一覧表（4）

幅・深さ番号	堀番号	時期	遺跡名	遺構名	性格	堀幅（m）	検出深度（m）	報告書名	発行年
92	571	鎌倉時代～室町時代	勝持寺旧境内	溝258	勝持寺旧境内旧境内の平坦面5上の西辺掘形に添って検出した東西方向の溝。平坦面掘形裾部の排水機能を担う。	0.70	0.30	『勝持寺旧境内』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2011-5』）	2012/3/20
93	597	鎌倉時代～室町時代	北野廃寺	SD25	中世北野の建物を囲う区画溝。東西方向から南北方向に逆L字状に屈曲する北西コーナーを検出。	0.70	0.20	「北野廃寺1」『昭和54年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2012/3/31
94	644	室町時代後期	妙法院境内・法住寺殿跡	溝260	仏光寺に関連する溝。調査区中央の段の底部に沿って作られた境界を意識した溝で，西面に石組がある。段の上には，この溝に並行して溝240がある。	0.70	0.20	『妙法院境内・法住寺殿跡』	2013/5/31
95	10	平安時代後期	最勝寺跡	南側溝	最勝寺北築地内溝？	0.80	0.10	「尊勝寺跡跡推定地第Ⅲ次発掘調査概要」『六勝寺跡　京都市埋蔵文化財年次報告　1976-II[平安時代後期の寺院跡]」	1977/3/31
96	14	室町時代	臨川寺旧境内	SD8	臨川寺旧境内の東西方向の溝。	0.80	0.50	『臨川寺旧境内遺跡発掘調査報告』（『京都市埋蔵文化財研究所調査報告Ⅳ』）	1979/3/20
97	20	安土桃山時代	伏見城跡	溝－1	東西方向の石組溝。段上には長さ50cm程度の自然石，掘方幅240cm，肩口から段上まで45cm。	0.80	1.00	『伏見城跡　文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要　昭和54年度』	1980/3/31
98	44	平安時代後期	鳥羽離宮跡	SD-2	鳥羽離宮東殿跡の東西区画溝。	0.80	0.15	「鳥羽離宮跡第77次調査」『昭和57年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1984/3/1
99	104	15世紀末～1532年まで	山科本願寺跡	石組溝（東西溝）	山科本願寺御本寺内部の東西溝。	0.80	0.60	「山科本願寺跡（61年度RT10）」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和62年度』	1988/3/31
100	123	15世紀末～1532年まで	山科本願寺跡	東西石組遺構	山科本願寺御本寺の区画溝，元年度のRT21に続く溝。	0.80	0.60	「山科本願寺跡（RT5）」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和63年度』	1989/3/31
101	141	15世紀末～1532年まで	山科本願寺跡	石組東西溝	山科本願寺御本寺の区画溝。	0.80	0.90	「山科本願寺跡（RT21）」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成元年度』	1990/3/11
102	177	14世紀中頃	珍皇寺旧境内	溝SD5	平安時代再興の珍皇寺に関わる区画溝。	0.80	0.64	「珍皇寺旧境内（92RT240）」『京都市内遺跡立会調査概法　平成4年度』	1993/3/31
103	203	鎌倉時代	南春日町遺跡	溝2・石組遺構	大原野神社を支える神職集団の敷地内で，石組遺構をコ字状に囲う溝。	0.80	0.50	「南春日町遺跡第17・19次調査」『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1994/9/10
104	283	桃山時代	伏見城跡	SD2	伏見城武家屋敷・上板橋通と伊達街道との交差点で，石垣2と並行する石組溝。	0.80	0.50	「伏見城跡」『平成10年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2000/3/31
105	338	鎌倉時代	草木町遺跡	溝139	中世草木町集落の屋敷境の溝？西端で南に折れ曲がる。	0.80	0.30	『草木町遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-13』）	2003/2/28
106	350	平安時代後期	慈照寺（銀閣寺）旧境内	溝SD23	慈照寺成立前の石積SX22に伴う南北方向の溝。	0.80	0.20	『史跡　慈照寺（銀閣寺）旧境内』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-1』）	2003/7/31
107	369	14世紀後半～15世紀初頭	石見城跡・長岡京跡	溝2050	初期石見城の土塁内溝か？	0.80	0.40	『長岡京右京一条四坊十五町跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報　2004-15』）	2005/3/31
108	459	1480年代～16世紀前半	慈照寺（銀閣寺）旧境内	溝8（石組溝）	慈照寺旧境内の石組みの区画溝。	0.80	0.95	『史跡　慈照寺（銀閣寺）旧境内』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007-16』）	2008/3/31
109	463	鎌倉時代	常盤仲之町遺跡，広隆寺求刑代	溝35	太秦中世寺院等の区画溝。	0.80	1.10	『常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-3』）	2008/9/29
110	478	平安時代後期	法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡	溝3-149・溝270	法住寺北殿に関連する南北泥の西側溝，溝150と対になる。溝の西側に門1がある。	0.80	0.50	『法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-8』）	2010/1/29
111	479	平安時代後期	法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡	溝150	法住寺北殿に関連する南北泥の西側溝，溝270と対になる。	0.80	0.55	『法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-8』）	2010/1/29
112	503	平安時代後期	常盤仲之町遺跡	溝500	常盤仲之町遺跡の東西区画施設で，高まり272-1，石組790，石敷784を伴う。	0.80	0.40	『常盤仲之町遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-16』）	2010/3/31
113	537	鎌倉時代～室町時代	常盤仲之町遺跡	溝2-47	中世常盤の南北区画溝で，調査区南端より北へ約8mの地点で東に東西溝が取り付く。	0.80	0.50	『常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2010-15』）	2011/3/31
114	566	室町時代	勝持寺旧境内	溝6	勝持寺旧境内平坦面2西辺掘形にそって検出した南北方向の溝。	0.80	0.10	『勝持寺旧境内』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2011-5』）	2012/3/20
115	630	中世	白河街区跡	SD162	白河街区の溝で，SK60に取り付く斜行溝。SD123と直行して交わる可能性。	0.80	0.40	「京都大学病院構内AJ16区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2010年度』	2013/3/29
116	641	室町時代後期	史跡・名勝嵐山	溝136	調査地北側で検出した室町時代後期の溝は，整地層より深く開削され，区画溝もしくは堀と考えられる。	0.80	0.20	『史跡・名勝　嵐山』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012-22』）	2013/5/31
117	706	室町時代後半	一ノ井遺跡	溝147	一ノ井遺跡の中世区画溝。L字形に屈曲する。	0.86	0.17	『一ノ井遺跡発掘調査報告書』	2016/3/31
118	4	中世	上久世遺跡	溝状遺構-2	上久世遺跡で北西方向～南東方向の溝。	0.90	0.20	『上久世遺跡発掘調査報告』	1976/3/31
119	27	室町時代～	鳥羽離宮跡	SD2	中世竹田の区画溝，SD1に先行する。	0.90	0.60	「第63次発掘調査」」『鳥羽離宮跡発掘調査概要　昭和55年度』	1981/3/31

表11　堀・溝　一覧表（5）

幅・深さ番号	堀番号	時期	遺跡名	遺構名	性格	堀幅（m）	検出深度（m）	報告書名	発行年
120	245	室町時代	法金剛院境内	SD8	法金剛院境内西端に近いの南北区画溝。	0.90	0.40	「法金剛院境内」『平成７年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1997/3/31
121	246	室町時代	法金剛院境内	SD16	法金剛院境内西端に近いの南北区画溝。	0.90	0.50	「法金剛院境内」『平成７年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1997/3/31
122	248	室町時代末	上ノ段町遺跡	溝1-2	上ノ段町の東西区画溝。溝1-1に先行する。	0.90	0.80	「上ノ段町遺跡」『平成７年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1997/3/31
123	251	Ⅸ期古	北野遺跡	SD1	道祖大路末西築地関連溝。	0.90	0.30	「北野遺跡・北野廃寺２（97RH65）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成９年度』	1998/3/31
124	255	13～14世紀	法住寺殿跡	東西溝	法住寺殿跡に関連する区画溝	0.90	0.80	「法住寺殿跡・六波羅政庁跡（96RT512）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成９年度』	1998/3/31
125	291	桃山時代	伏見城跡	SD2	伏見城武家屋敷。上板橋通沿いの北端の溝。SD1の下層にあり，東西方向の溝。2区の続き。	0.90	0.50	「伏見城跡」『平成10年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2000/3/31
126	294	桃山時代	伏見城跡	SD1・2期	伏見城武家屋敷。上板橋通沿いの北端の溝。石垣１と並行する東西方向の溝。2区の続き。犬走り2に対応。石組なし。	0.90	0.40	「伏見城跡」『平成10年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2000/3/31
127	316	14世紀	六波羅政庁跡方広寺跡	溝281	六波羅政庁に関連する東西溝か？	0.90	0.30	「六波羅政庁跡」『平成11年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2002/6/30
128	458	16世紀後半	慈照寺（銀閣寺）旧境内	溝33・堤30・小堤35・37	慈照寺旧境内の区画溝で小堤36を伴う。溝8に連続する。	0.90	0.35	『史跡　慈照寺（銀閣寺）旧境内』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007-16』）	2008/3/31
129	505	平安時代後期	常盤仲之町遺跡	溝412	常盤仲之町遺跡の東西区画施設で，高まり272-1，石組790，石敷784を伴う。	0.90	0.30	『常盤仲之町遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-16』）	2010/3/31
130	514	平安時代末～鎌倉時代	龍安寺御陵ノ下町遺跡	溝５Ａ	龍安寺御陵ノ下町遺跡の南北方向の溝。前代の溝５Ｂを踏襲しているならば，南北道路の側溝の可能性。	0.90	0.20	『龍安寺御陵ノ下町遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-5』）	2010/9/30
131	564	13世紀中頃～後半	白河街区跡・吉田上大路町遺跡	溝157	白河街区北半にある南北方向の区画溝で，東側に集石土坑が連続する。平安時代後期の福勝院に関連する遺構か？	0.90	0.20	『白河街区跡・吉田上大路町遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2011-3』）	2012/1/31
132	573	鎌倉時代～室町時代	勝持寺旧境内	溝90	勝持寺旧境内の５区北東部にあるＬ字状に屈曲する溝。	0.90	0.50	『勝持寺旧境内』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2011-5』）	2012/3/20
133	635	伏見城期	伏見城跡	溝９・溝11	整地層13の下層の水切り溝。	0.90	0.30	『伏見城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2012-17』）	2013/3/31
134	6	桃山時代～江戸時代初期	六波羅政庁跡	SD2	方広寺周辺の豊臣秀吉関連の造成に伴う溝？	1.00	1.25	『六波羅政庁跡 - 東山郵便局新築敷地埋蔵文化財発掘調査報告』	1977/3/30
135	7	桃山時代～江戸時代初期	六波羅政庁跡	SD3	方広寺周辺の豊臣秀吉関連の造成に伴う溝？	1.00	0.75	『六波羅政庁跡 - 東山郵便局新築敷地埋蔵文化財発掘調査報告』	1977/3/30
136	15	桃山時代～江戸時代前期	臨川寺旧境内	SD04	臨川寺旧境内の南北方向の溝。	1.00	0.80	『臨川寺旧境内遺跡発掘調査報告』（『京都市埋蔵文化財研究所調査報告Ⅳ』）	1979/3/20
137	33	平安時代後期～鎌倉時代	鳥羽離宮跡	SD7	鳥羽離宮期の東北から南西に向かう溝。	1.00	0.20	「第70次発掘調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概要　昭和56年度』	1982/3/31
138	41	室町時代	北野廃寺	SD04	北野廃寺の範囲内の中世南北方向の溝。溝の西方が屋敷群。	1.00	0.60	『北野廃寺発掘調査報告書』（『京都市埋蔵文化財研究所調査報告第７冊』）	1983/3/25
139	51	安土桃山時代～江戸時代初期	伏見城跡	石組溝	伏見城跡。桃山町伊賀で検出された東西方向の石組溝。	1.00	0.40	「伏見城跡(2)」『昭和57年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1984/3/1
140	65	平安時代後期～鎌倉時代	鳥羽離宮跡	SD3	鳥羽離宮東殿に関連する東西方向の溝。	1.00	0.50	「鳥羽離宮跡　第88次調査」『昭和58年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1985/3/31
141	135	平安時代後期	鳥羽離宮跡	SD2	鳥羽離宮造営時の区画溝（東西溝）か？	1.00	0.30	「第130次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報　平成元年度』	1990/3/11
142	136	鎌倉時代	鳥羽離宮跡	SD6a（南北方向の堀）	在地土豪の屋敷の東南隅を区画する堀。	1.00	0.30	「第130次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報　平成元年度』	1990/3/11
143	137	室町時代前半	鳥羽離宮跡	SD6b（南北方向の堀）	在地土豪の屋敷の東南隅を区画する堀。	1.00	0.60	「第130次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報　平成元年度』	1990/3/11
144	139	室町時代前半	鳥羽離宮跡	SD7b（東西方向の堀）	在地土豪の屋敷の東南隅を区画する堀。	1.00	0.50	「第130次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報　平成元年度』	1990/3/11
145	152	平安時代後期～中世	仁和寺境内	SD17	仁和寺の僧坊北側の土塁SA15の北側を東西に走る溝。	1.00	0.20	『仁和寺境内発掘調査報告 - 御室会館建設に伴う調査 -』（『京都市埋蔵文化財研究所調査報告第９冊』）	1990/6/30
146	178	平安時代後期	深草坊町遺跡	南北溝	平安時代前期～後期頃の寺院関連施設の溝。南で途切れる。	1.00	0.20	「深草坊町遺跡（92FD79）」『京都市内遺跡立会調査概法　平成４年度』	1993/3/31
147	252	Ⅸ期古	北野遺跡	SD2	道祖大路末西築地関連溝。	1.00	0.40	「北野遺跡・北野廃寺２（97RH65）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成９年度』	1998/3/31

表11 堀・溝 一覧表（6）

幅・深さ番号	堀番号	時期	遺跡名	遺構名	性格	堀幅（m）	検出深度（m）	報告書名	発行年
148	325	13世紀前半～中頃	下三栖遺跡	溝590	下三栖の鎌倉時代集落に関連する舌状に張り出す溝。南北方向から東西方向に屈曲する。建物5を取り囲むようにあり，その外側に建物3と南北柵列がある。	1.00	0.50	「下三栖遺跡」『平成11年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2002/6/30
149	377	12世紀後半代	白河街区跡	溝121	白河街区に関連する南北区画溝。	1.00	0.25	『白河街区跡・岡崎遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-4』）	2005/9/30
150	397	鎌倉時代後半	常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡	溝13	中世常盤付近の南北区画溝？	1.00	0.10	『常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-6』）	2006/7/31
151	398	平安時代後期～鎌倉時代	中臣遺跡	溝211	中世中臣の南北区画溝。	1.00	1.00	『中臣遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-8』）	2006/9/30
152	423	13世紀中葉	吉田本町遺跡	溝状遺構SD14	吉田本町の南北溝。	1.00	1.00	「京都大学本部構内AU25区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2002年度』	2007/3/30
153	461	16世紀後半	慈照寺（銀閣寺）旧境内	溝34・小堤35・37	慈照寺旧境内の区画溝で小堤35・37を伴う。	1.00	0.25	『史跡　慈照寺（銀閣寺）旧境内』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007-16』）	2008/3/31
154	466	鎌倉時代	常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内	溝171	太秦中世寺院等の区画溝。	1.00	0.15	『常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-3』）	2008/9/29
155	468	鎌倉時代	常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内	溝453	太秦中世寺院等の区画溝。	1.00	0.60	『常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-3』）	2008/9/29
156	473	平安時代後期	村ノ内町遺跡・常盤仲之町遺跡	溝1	中世城北街道に伴う側溝か？2008年5-1区の溝453に関連するか？	1.00	0.15	『常盤東ノ町古墳群・村ノ内町遺跡・常盤仲之町遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-20』）	2009/3/31
157	547	平安時代～鎌倉時代	得長寿院跡	東西溝SD8	得長寿院跡の東西区画溝。	1.00	0.30	「得長寿院跡」『昭和52年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2011/9/30
158	565	13世紀頃	白河街区跡・吉田上大路町遺跡	溝166	白河街区北半にある南北方向の区画溝。溝の途切れた部分で柱穴が集中する。平安時代後期の福勝院に関連する遺構か？	1.00	0.45	『白河街区跡・吉田上大路町遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2011-3』）	2012/1/31
159	586	室町時代後期	六波羅蜜寺境内	溝99	六波羅蜜寺に関連する区画溝。門1の南東で検出された東西方向の溝で，門1の手前で南に屈曲する。	1.00	0.20	『六波羅蜜時境内・六波羅政庁跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2011-6』）	2012/3/30
160	593	室町時代	鳥羽離宮跡	SD1	中世竹田の南北区画溝。	1.00	0.60	「鳥羽離宮跡51次調査」『昭和54年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2012/3/31
161	615	室町時代後期	常盤仲之町遺跡・一ノ井遺跡	溝3-17	溝3-18と合流する南北溝。広隆寺子院の区画溝か？	1.00	0.20	『常盤仲之町遺跡・一ノ井遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2012-11』）	2013/1/31
162	629	中世	白河街区跡	SD123	白河街区の溝で，SK60に取り付く斜行溝。SD162と直行して交わる可能性。	1.00	0.45	「京都大学病院構内AJ16区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2010年度』	2013/3/29
163	659	平安時代後期以降	常盤東ノ町古墳群	溝138	太秦一ノ井町の東西の区画溝。	1.00	0.20	『常盤東ノ町古墳群』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2014-4』）	2014/8/31
164	673	室町時代前期	史跡・名勝嵐山	溝3	臨川寺に関連する遺構。溝1に並行する区画溝。	1.00	0.50	『史跡・名勝　嵐山』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2014-7』）	2015/3/31
165	677	室町時代後期	史跡・名勝嵐山	溝9	臨川寺に関連する遺構。南北溝で石列4及び5の西側に位置し，これら石列に関連する建物の西限を画する溝。	1.00	0.20	『史跡・名勝　嵐山』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2014-7』）	2015/3/31
166	8	平安時代後期	得長寿院跡	南北溝	得長寿院跡の築地塀に伴う溝？	1.10	0.30	「得長寿院跡推定地発掘調査概要」『六勝寺跡　京都市埋蔵文化財年次報告　1976-II[平安時代後期の寺院跡]」	1977/3/31
167	17	平安時代後期～鎌倉時代	尊勝寺跡・最勝寺跡	SD60	築地関連遺構か？SD67との心々距離は5.1m。	1.10	0.30	『六勝寺跡発掘調査概要　1978』	1979/3/31
168	193	平安時代後期	六波羅政庁跡	南北溝（西）	平氏六波羅邸に関連する南北溝？	1.10	0.40	「六波羅政庁跡（93RT225）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成５年度』	1994/3/31
169	253	Ⅳ期新	北野遺跡	SD3	道祖大路末西築地関連溝。	1.10	0.70	「北野遺跡・北野廃寺２（97RH65）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成９年度』	1998/3/31
170	297	京都Ⅳ期中段階	仁和寺院家跡	溝270	3区南端で溝443となる。仁和寺の子院の一つである浄光院に関連する区画溝。	1.10	0.80	『仁和寺院家跡（花園宮ノ上町遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-1』）	2002/1/31
171	413	平安時代後期	長岡京跡	溝10	長岡京跡東京極大路を踏襲する区画溝。	1.10	0.15	『長岡京左京三条四坊十三町跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-17』）	2007/1/31
172	449	伏見城期	伏見城跡	溝8	伏見城期の区画溝で，1区溝1472につながる。	1.10	0.40	『伏見城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2007-15』）	2008/3/12
173	497	安土桃山時代	伏見城跡・桃陵遺跡	溝SD2011	伏見城内の安土桃山時代の小規模な区画溝。	1.10	0.15	『伏見城跡・桃陵遺跡発掘調査報告書 -（仮称）公務員宿舎伏見住宅整備事業に伴う-』	2010/3/20
174	511	室町時代後半	北野廃寺	SD40	平安京北限北側に展開する南北溝。	1.10	0.14	『北野廃寺発掘調査報告書』	2010/9/30

表11　堀・溝　一覧表（7）

幅・深さ番号	堀番号	時期	遺跡名	遺構名	性格	堀幅（m）	検出深度（m）	報告書名	発行年
175	516	室町時代後期～江戸時代初頭	大藪城跡	SD41	大藪城の南北方向の溝で，SD40の東肩沿いの下部で検出。	1.10	0.50	『大藪遺跡・大藪城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-9』）	2010/11/30
176	535	鎌倉時代～室町時代	常盤仲之町遺跡	溝1-150	中世常盤の北東から南北方向の区画溝。	1.10	0.50	『常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2010-15』）	2011/3/31
177	542	室町時代後半～	常盤仲之町遺跡	溝3-150	中世常盤の溝。南北方向から西に直角に屈折する。溝3-149の埋没後に掘削されている。	1.10	0.40	『常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2010-15』）	2011/3/31
178	602	中世以降	大藪遺跡	逆L字形の溝	調査区南東部で検出された大藪遺跡の区画溝。逆L字形にクランクする。	1.10	0.50	「大藪遺跡」『昭和54年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2012/3/31
179	676	室町時代前期	史跡・名勝嵐山	溝21	臨川寺に関連する遺構。南北方向から東西方向にL形に屈曲する溝	1.10	0.30	『史跡・名勝　嵐山』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2014-7』）	2015/3/31
180	681	13世紀代	吉田二本松町遺跡	SD5	吉田二本松町遺跡の南北方向の溝	1.10	0.40	「京都大学吉田南構内AN21区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2013年度』	2015/3/31
181	699	京都Ⅷ中～新	法勝寺跡	溝42	法勝寺の北限溝もしくは中世岡崎村の村境の溝	1.10	0.90	「岡崎遺跡・法勝寺跡　No.14」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成27年度』	2016/3/31
182	71	室町時代	一乗寺松田町遺跡	矩形を呈する溝	一乗寺里ノ西町の中世区画溝。南北から東西方向に直角に折れ曲がる。北肩と西肩に長径20～30cmの川原石及び花崗岩で護岸されている。	1.20	0.30	「一乗寺松田町遺跡隣接地」『昭和58年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1985/3/31
183	243	平安時代後期	法金剛院境内	SD5	法金剛院境内の南北区画溝。	1.20	0.30	「法金剛院境内」『平成7年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1997/3/31
184	254	Ⅴ期中	北野遺跡	SD4	道祖大路末西築地関連溝	1.20	0.70	「北野遺跡・北野廃寺2（97RH65）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成９年度』	1998/3/31
185	285	桃山時代	伏見城跡	SD2	伏見城武家屋敷。上板橋通沿いの北端の溝。SD1の下層にあり，東西方向の溝。	1.20	0.70	「伏見城跡」『平成10年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2000/3/31
186	289	桃山時代	伏見城跡	SD2	伏見城武家屋敷。上板橋通沿いの北端の溝。SD1の下層にあり，東西方向の溝。2区の続き。	1.20	0.70	「伏見城跡」『平成10年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2000/3/31
187	339	室町時代	草木町遺跡	溝36	柵１・２を伴う中世草木町集落の境の溝？	1.20	0.10	『草木町遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-13』）	2003/2/28
188	441	15世紀前半～16世紀初頭	大藪遺跡・下久世構え跡	溝176	下久世構え跡の居館の北限を示す堀。	1.20	0.15	『大藪遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-32』）	2007/3/31
189	493	安土桃山時代	伏見城跡・桃陵遺跡	溝SD1002	伏見城内の安土桃山時代の小規模な区画溝。	1.20	0.20	『伏見城跡・桃陵遺跡発掘調査報告書-（仮称）公務員宿舎伏見住宅整備事業に伴う-』	2010/3/20
190	495	安土桃山時代	伏見城跡・桃陵遺跡	溝SD1004	伏見城内の安土桃山時代の小規模な区画溝。	1.20	0.30	『伏見城跡・桃陵遺跡発掘調査報告書-（仮称）公務員宿舎伏見住宅整備事業に伴う-』	2010/3/20
191	509	室町時代後半	北野廃寺	SD7	平安京北限北側に展開する東西溝	1.20	0.29	『北野廃寺発掘調査報告書』	2010/9/30
192	618	室町時代	常盤仲之町遺跡・一ノ井遺跡	溝4-40・4-60	東北東～西南西の区画溝。広隆寺子院の区画溝か？	1.20	0.40	『常盤仲之町遺跡・一ノ井遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2012-11』）	2013/1/31
193	623	京都Ⅹ期	法住寺殿跡	溝630	法住寺殿内を南北方向に走る区画溝。路面821の東側溝か？	1.20	0.55	『法住寺殿跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2012-10』）	2013/1/31
194	686	17世紀初頭	羽束師菱川城跡	SD176	羽束師菱川城内の東西方向の溝で，西に行くと二筋の並行した溝になる。濠SD116の手前で南へ屈曲する。	1.20	0.15	『羽束師菱川城跡・長岡京跡（長岡京跡第561次調査）』	2015/5/26
195	695	中世	嵯峨遺跡	南北溝	嵯峨遺跡の南北溝	1.20	0.50	「嵯峨遺跡・嵯峨北堀町遺跡No.68」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成27年度』	2016/3/31
196	507	中世	常盤仲之町遺跡	溝10	常盤仲之町遺跡の東西方向の区画溝	1.26	1.10	『常盤仲之町遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-18』）	2010/4/15
197	85	鎌倉時代前半	鳥羽離宮跡	溝1	鳥羽離宮時の区画溝か？	1.30	0.20	「鳥羽離宮跡（60年度TB53）」『京都市内遺跡試掘・立会調査概報　昭和61年度』	1987/3/31
198	192	平安時代後期	六波羅政庁跡	南北溝（西）	平氏六波羅邸に関連する南北溝？	1.30	0.50	「六波羅政庁跡（93RT225）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成５年度』	1994/3/31
199	211	15世紀	六波羅政庁跡	溝SD22	中世六波羅地域の東西区画溝。	1.30	1.00	「六波羅政庁跡」『平成2年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1994/12/10
200	228	室町時代	南春日町遺跡	溝1	南春日町遺跡の建物2の北側及び西側を区画する溝。	1.30	0.50	「南春日町遺跡28次調査」『平成5年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1996/3/1
201	481	桃山～江戸初期	法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡	溝3-120 溝140	法住寺殿期の南北道路を踏襲する安土桃山時代の西側溝。	1.30	0.10	『法住寺殿跡・六波羅政庁跡・方広寺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-8』）	2010/1/29
202	510	15世紀以降	北野廃寺	SD8	平安京北限北側に展開する東西溝	1.30	0.20	『北野廃寺発掘調査報告書』	2010/9/30
203	531	京都Ⅸ期中～新段階	北野廃寺	堀30	堀51及び門遺構・柱列2・3と群をなした小口遺構（門のある中央で途切れる）。門は南門で屋敷地が北側に展開する可能性	1.30	0.50	「北野廃寺１７次調査」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成22年度』	2011/3/31

表11　堀・溝　一覧表（8）

幅・深さ番号	堀番号	時期	遺跡名	遺構名	性格	堀幅（m）	検出深度（m）	報告書名	発行年
204	675	室町時代前期	史跡・名勝嵐山	溝17	臨川寺に関連する遺構。門基壇推定範囲南端に取り付く東西溝，溝１３に並行。	1.30	0.30	『史跡・名勝　嵐山』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2014-7』）	2015/3/31
205	680	13世紀代	吉田二本松町遺跡	SD4	吉田二本松町遺跡の南北方向の溝。	1.30	0.70	「京都大学吉田南構内AN21区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2013年度』	2015/3/31
206	705	16世紀末	一ノ井遺跡	溝145	一ノ井遺跡の中世区画溝。溝144と直角に交わり，T字形をなす。	1.30	0.25	『一ノ井遺跡発掘調査報告書』	2016/3/31
207	577	中世	常盤仲之町遺跡	溝10	広隆寺旧境内の子院に関連する区画溝。	1.35	0.70	『常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2011-8』）	2012/3/30
208	704	室町時代後半	一ノ井遺跡	溝144	一ノ井遺跡の中世区画溝。溝145と直角に交わり，T字形をなす。	1.36	0.22	『一ノ井遺跡発掘調査報告書』	2016/3/31
209	23	中世(土師器，石器，青磁，白磁）	植物園北遺跡	SD1	上賀茂の南北区画溝か？	1.40	0.70	「植物園北遺跡試掘調査（No.329）」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告　国庫補助による試掘・立会調査報告　昭和54年度』	1980/3/31
210	73	平安時代後期	法住寺殿跡	SF5・SD4	SF5は蓮華王院の寺域の東西を二分する位置にあたり，これを境に西と東では約２ｍの段差がある。SD4は西側溝。	1.40	0.30	「法住寺殿跡」『昭和58年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1985/3/31
211	258	12世紀末	吉田泉殿町遺跡	溝438	吉田泉殿の平安時代末の東西区画溝で，柵と出入口を伴う。溝438と西側で接続する。地方武士の京屋敷の区画溝の可能性。	1.40	0.50	「京都大学構内遺跡」『平成８年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1998/3/31
212	287	桃山時代	伏見城跡	SD2	伏見城武家屋敷。上板橋通沿いの北端の溝。SD1の下層にあり，東西方向の溝。２区の続き。	1.40	1.50	「伏見城跡」『平成10年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2000/3/31
213	323	13世紀中～後半	下三栖遺跡	溝1	下三栖の鎌倉時代集落に関連する南北溝。溝40と並行。	1.40	0.40	「下三栖遺跡」『平成11年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2002/6/30
214	324	13世紀中～後半	下三栖遺跡	溝40	下三栖の鎌倉時代集落に関連する南北溝。溝１と並行。	1.40	0.40	「下三栖遺跡」『平成11年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2002/6/30
215	502	平安時代後期	常盤仲之町遺跡	溝797	常盤仲之町遺跡の東西区画施設で，高まり272-2，溝802-1，石敷853を伴う。	1.40	0.30	『常盤仲之町遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-16』）	2010/3/31
216	589	室町時代後期	六波羅蜜寺境内	堀135	六波羅蜜寺の建物１の西に位置し，南は調査区が，北端は東に曲がって終わる。	1.40	1.50	『六波羅蜜時境内・六波羅政庁跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2011-6』）	2012/3/30
217	608	京都IX期古段階	史跡・名勝嵐山	堀404	天龍寺境内に近接する東西堀。	1.40	0.96	『史跡・名勝　嵐山』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012-3』）	2012/8/31
218	679	13世紀後半	史跡・名勝嵐山	溝6	亀山殿殿以前の区画溝の可能性あり。2004年度１区溝２２４と関連する可能性あり。	1.40	0.60	『史跡・名勝　嵐山』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2013-17』）	2015/3/31
219	692	13世紀～14世紀	伏見城跡	溝366	中世集落に伴う南北溝119，堤135に関連する溝か？	1.40	0.50	『伏見城跡・桃陵遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015-2』）	2015/9/30
220	717	平安時代後期～鎌倉時代	鳥羽離宮跡	SD-01	田中殿東側の区画溝。SA-01（築地）を伴う。	1.40	0.30	「第39次（田中殿Ⅳ)発掘調査」『鳥羽離宮跡　国庫補助による発掘調査概要－昭和53年度』，「鳥羽離宮跡39次調査」『昭和53年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1979/3/31，2011/12/15
221	18	平安時代後期～鎌倉時代	尊勝寺跡・最勝寺跡	SD67	築地関連遺構か？SD60との心々距離は5.1ｍ。	1.50	0.20	『六勝寺跡発掘調査概要　1978』	1979/3/31
222	77	室町時代後半頃	法住寺跡	SD05	法住寺の寺域及び最勝光院の推定地にあたる場所でSD03が埋まった後に成立する溝。	1.50	0.70	「法住寺跡」『昭和58年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1985/3/31
223	144	平安時代末期	中久世遺跡	溝1	条里区画に関連する東西溝か？	1.50	0.50	『中久世遺跡発掘調査概報　平成元年度』	1990/3/31
224	188	平安時代末～鎌倉時代	鳥羽離宮跡	溝244	城南宮道南側に面した屋敷地の東西区画溝か。溝190と対。	1.50	0.50	「鳥羽離宮跡第127次調査」『昭和63年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1993/3/31
225	222	鎌倉時代	史跡・名勝嵐山	濠2	嵐山の東西方向の濠で北側に濠1が走る。濠の南側に遺構が展開する。	1.50	1.10	「史跡名勝嵐山」『平成４年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1995/9/1
226	234	室町時代	北野遺跡	SD4	北野遺跡の南北方向の溝。この溝の東２ｍの位置で，南北方向の柵SA34がある。SA34の南端で東西方向の垣塀SA1が東西方向にある。	1.50	0.50	「北野遺跡」『平成６年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1996/11/1
227	247	室町時代末	上ノ段町遺跡	溝2-1	上ノ段町の南北区画溝。これに先行する溝2-3は平安時代中期に遡る。	1.50	0.20	「上ノ段町遺跡」『平成７年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1997/3/31
228	307	13世紀	六波羅政庁跡，方広寺跡	溝1	六波羅政庁に関連する南北溝か？	1.50	0.70	「六波羅政庁跡」『平成11年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2002/6/30
229	308	秀頼期整地層（17世紀初頭）	六波羅政庁跡，方広寺跡	路面東側溝	秀頼期方広寺の南北路面の東側溝。護岸の杭列あり。	1.50	0.30	「六波羅政庁跡」『平成11年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2002/6/30
230	322	平安時代後期～鎌倉時代前期	醍醐廃寺	溝79	下醍醐の子院，越智堂に関連する地業及び築地に関連する南北方向の側溝か？	1.50	0.30	「醍醐廃寺」『平成11年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2002/6/30
231	330	12世紀後～13世紀初頭	鳥羽離宮跡	SD2	鳥羽離宮に関連する溝か？No.31トレンチのSD1と同一の溝？	1.50	0.30	『鳥羽離宮跡・下鳥羽遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-8』）	2002/11/30

表11　堀・溝　一覧表（9）

幅・深さ番号	堀番号	時期	遺跡名	遺構名	性格	堀幅（m）	検出深度（m）	報告書名	発行年
232	400	京都Ⅸ期中～新相	史跡・名勝。嵐山	堀60B（中）	天龍寺と霊庇廟を一緒に取り囲む区画の東限の堀。	1.50	0.60	『史跡・名勝　嵐山』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-9』）	2006/10/31
233	474	平安時代後期	村ノ内町遺跡・常盤仲之町遺跡	溝2	中世城北街道に伴う側溝か？2008年5-1区の溝453に関連するか？	1.50	0.80	『常盤東ノ町古墳群・村ノ内町遺跡・常盤仲之町遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-20』）	2009/3/31
234	605	京都Ⅸ期中～新段階	史跡・名勝嵐山	堀90	天龍寺境内に近接する堀。	1.50	0.90	『史跡・名勝　嵐山』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-3』）	2012/8/31
235	606	京都Ⅸ期中～新段階	史跡・名勝嵐山	堀117	天龍寺境内に近接する南北堀。	1.50	1.30	『史跡・名勝　嵐山』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-3』）	2012/8/31
236	612	室町時代後半	常盤仲之町遺跡・一ノ井遺跡	溝2-45（第1面）	1区の溝に延長する可能性のある区画溝。広隆寺子院の区画溝か？門2-1も関連するか？	1.50	0.50	『常盤仲之町遺跡・一ノ井遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2012-11』）	2013/1/31
237	649	室町時代	六波羅政庁跡，六波羅蜜寺跡	溝511	南北方向の室町時代溝。	1.50	0.60	『六波羅蜜時境内・六波羅政庁跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2013-9』）	2014/1/31
238	655	平安時代後期～室町時代	法勝寺跡	SD01	法勝寺寺域西辺の溝。	1.50	0.90	「法勝寺跡・岡崎遺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成25年度』	2014/3/31
239	657	中世前半	鶏冠井清水。遺跡	溝2	中世の鶏冠井清水遺跡の耕作もしくは区画等に関する溝か？	1.50	0.30	『長岡京左京三条三坊十町跡・鶏冠井清水遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2014-3』）	2014/8/29
240	661	桃山時代～江戸時代前期	伏見城跡	SD403	伏見城武家屋敷街の南北方向の区画溝。掘立柱建物4と5の区画溝。浅野但馬守もしくはその西隣の屋敷地の可能性（鍋島信濃守の屋敷地の可能性）。	1.50	0.60	『伏見城跡-集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-』（『イビソク京都市内遺跡調査報告』第9輯）	2014/12/26
241	668	伏見城期	伏見城跡	溝2	桑山丹波守屋敷推定地の路面152の東側溝。	1.50	0.50	『伏見城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2014-8』）	2015/3/31
242	669	伏見城期	伏見城跡	溝149	桑山丹波守屋敷推定地の路面152の西側溝。	1.50	0.70	『伏見城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2014-8』）	2015/3/31
243	265	平安時代末期～鎌倉時代	法住寺殿跡	東西溝	八条坊門小路末の北側溝か？	1.52	0.48	「法住寺殿跡（98RT194）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成10年度』	1999/3/31
244	16	平安時代後期～鎌倉時代	鳥羽離宮跡	SD-02	建物SB01の外周石垣より約13m隔てたところをめぐるL字状の溝。	1.60	1.20	「第45次（田中殿Ⅷ）」『鳥羽離宮跡　国庫補助による発掘調査概要ー昭和53年度』	1979/3/31
245	74	平安時代後期	法住寺跡	SD02	法住寺の寺域及び最勝光院の推定地にあたる場所の南北区画溝。この溝を境に東側は一段高い。	1.60	0.50	「法住寺跡」『昭和58年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1985/3/31
246	257	12世紀末	吉田泉殿町。遺跡	溝253・柱列4・5・出入口	吉田泉殿の平安時代末の東西区画溝で，柵と出入口を伴う。溝438と西側で接続する。地方武士の京屋敷の区画溝の可能性。	1.60	0.60	「京都大学構内遺跡」『平成8年度京都市埋蔵文化財調査概要』	1998/3/31
247	464	鎌倉時代	常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内	溝39	太秦中世寺院等の区画溝。	1.60	0.60	『常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2008-3』）	2008/9/29
248	489	平安時代後期	伏見城跡・桃陵遺跡	溝SD1136	平安時代後期の区画溝であり，伏見山荘等の別業に伴うものか。	1.60	0.24	『伏見城跡・桃陵遺跡発掘調査報告書-（仮称）公務員宿舎伏見住宅整備事業に伴う-』	2010/3/20
249	526	鎌倉時代前期	法性寺跡	溝22	東福寺伽藍と同じ地割りで造られた可能性のある区画溝。	1.60	0.50	『法性寺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2010-11』）	2010/12/28
250	563	13世紀中頃～後半	白河街区跡・吉田上大路町遺跡	溝106	白河街区北半にある南北方向の区画溝で，平安時代後期の福勝院に関連する遺構か？	1.60	0.20	『白河街区跡・吉田上大路町遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2011-3』）	2012/1/31
251	683	14世紀代	吉田二本松町遺跡	SD10	吉田二本松町の南北方向のV字溝。	1.60	0.90	「京都大学吉田南構内AN21区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2013年度』	2015/3/31
252	233	15世紀	中臣遺跡	濠SD1	中臣遺跡内にある中世館もしくは村落を囲む施設。	1.70	0.60	「中臣遺跡73次調査」『平成6年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1996/11/1
253	437	16世紀後葉	伏見城跡	溝931	1区溝1660と3区溝940で画された集落において，溝940の西側（内側）を弧状に巡る溝。	1.70	0.50	『伏見城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2006-27』）	2007/3/31
254	539	鎌倉時代～室町時代	常盤仲之町遺跡	溝3-149	中世常盤の区画溝で，南北方向から西に直角に折れ曲がる。城北街道西側溝の位置にくる。	1.70	1.20	『常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2010-15』）	2011/3/31
255	541	鎌倉時代～室町時代	常盤仲之町	溝3-9	中世常盤の区画溝で，東西方向の溝。北1.8mの位置に，対応すると考えられる柱列がある。	1.70	0.50	『常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2010-15』）	2011/3/31
256	543	室町時代～江戸時代	法性寺跡	溝6	中世本町通付近の溝で，北から東へ弧をなす溝。	1.70	0.40	『法性寺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2010-19』）	2011/6/30
257	575	平安時代後期～鎌倉時代	常盤仲之町遺跡	溝40	広隆寺旧境内の子院に関連する区画溝もしくは，旧城北街道側溝。	1.70	0.10	『常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2011-8』）	2012/3/30
258	648	京都Ⅸ期中段階	嵯峨遺跡	SD15	嵯峨天龍寺の塔頭を囲む区画溝。北東～南西方向。	1.70	0.80	『嵯峨遺跡・嵯峨北堀町遺跡』（『西近畿文化財研究所調査報告書　7』	2013/9/30
259	42	平安時代後期～鎌倉時代	鳥羽離宮跡	SD13	田中殿北限付近の区画溝。	1.80	0.70	「第74次Ⅱ・75次・76次・79次発掘調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報　昭和57年度』	1983/3/31

表11　堀・溝　一覧表（10）

幅・深さ番号	堀番号	時期	遺跡名	遺構名	性格	堀幅（m）	検出深度（m）	報告書名	発行年
260	57	室町時代	鳥羽離宮跡	SD4	中世竹田周辺の東北から南西方向に流れる区画溝？	1.80	0.90	「第100・101次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報　昭和59年度』	1985/3/31
261	61	平安時代後期	成勝寺跡	SD28・SD45	成勝寺跡に関連する南北区画溝。	1.80	0.45	「成勝寺跡」『昭和58年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1985/3/31
262	230	伏見城期	伏見城跡	南北溝跡	伏見城武家屋敷もしくは町家に伴う溝（濠）跡。2条の石列を伴う。	1.80	0.80	「伏見城跡　No.69」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成7年度』	1996/3/31
263	354	伏見城期	伏見城跡	溝2	武家屋敷西側の区画溝。	1.80	0.40	「伏見城跡・御香宮廃寺跡・金森出雲遺跡　No.57」『京都市内遺跡試掘調査概報　平成15年度』	2004/3/31
264	385	IX期新～X期古（15世紀～16世紀）	山科本願寺跡	堀9a	山科本願寺御本寺内部の堀。南北方向の堀。9bを造り替えたもの。	1.80	1.20	「山科本願寺跡（1）」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成17年度』	2006/3/3
265	506	中世	常盤仲之町遺跡	溝5	常盤仲之町遺跡の南北方向の区画溝。	1.80	0.80	『常盤仲之町遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2009-18』）	2010/4/15
266	538	平安時代～室町時代	常盤仲之町遺跡	溝3-140	中世常盤の東西方向の溝で，平安時代に開削。北壁と南壁に石垣を施す。上下2層に分かれる。	1.80	1.10	『常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2010-15』）	2011/3/31
267	568	鎌倉時代？	勝持寺旧境内	溝24	勝持寺旧境内平坦面4上の西辺に沿って検出した南北方向の溝。	1.80	0.30	『勝持寺旧境内』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2011-5』）	2012/3/20
268	569	室町時代	勝持寺旧境内	溝190	勝持寺旧境内の基壇建物の北東側を画する雨落ち溝の可能性。L字状に屈曲する。	1.80	0.30	『勝持寺旧境内』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2011-5』）	2012/3/20
269	587	室町時代	六波羅蜜寺境内	溝133	六波羅蜜寺の門1西側にある東西方向の溝で，西区の溝134につながる。	1.80	0.20	『六波羅蜜時境内・六波羅政庁跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2011-6』）	2012/3/30
270	604	京都IX期新段階	史跡・名勝嵐山	堀86	天龍寺境内に近接する東西堀。	1.80	1.15	『史跡・名勝　嵐山』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-3』）	2012/8/31
271	607	京都VIII期新～IX期古段階	史跡・名勝嵐山	堀119	天龍寺境内に近接する東西堀。	1.80	1.60	『史跡・名勝　嵐山』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-3』）	2012/8/31
272	613	室町時代	常盤仲之町遺跡・一ノ井遺跡	溝2-10（第2面）	門2-1の南端から始まる南北溝で，広隆寺子院の区画溝か？	1.80	0.20	『常盤仲之町遺跡・一ノ井遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2012-11』）	2013/1/31
273	26	室町時代～	鳥羽離宮跡	SD1	中世竹田の区画溝。	1.90	0.75	「第63次発掘調査」」『鳥羽離宮跡発掘調査概要　昭和55年度』	1981/3/31
274	156	江戸時代	鳥羽離宮跡	溝11	溝6と関係，中世～近世竹田村に関連する溝	1.90	0.50	「第136次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報　平成2年度』	1991/3/30
275	393	鎌倉時代	常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡	溝56	中世常盤付近の南北区画溝？	1.90	0.70	『常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-6』）	2006/7/31
276	394	鎌倉時代	常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡	溝266	中世常盤付近の南北区画溝？	1.90	0.65	『常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-6』）	2006/7/31
277	399	京都IX期中～新相	史跡・名勝嵐山	堀60A（新）	天龍寺と霊庇廟を一緒に取り囲む区画の東限の堀。	1.90	0.50	『史跡・名勝　嵐山』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-9』）	2006/10/31
278	619	室町時代	常盤仲之町遺跡・一ノ井遺跡	溝5-20	南北方向の区画溝。広隆寺子院の区画溝か？	1.90	0.80	『常盤仲之町遺跡・一ノ井遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2012-11』）	2013/1/31
279	13	中世？	鳥羽離宮跡	溝	中世竹田の南北溝。	2.00	0.50	「第34次（東殿XIX）」『鳥羽離宮跡-国庫補助による発掘調査概要-昭和52年度』，「鳥羽離宮跡34次調査」『昭和52年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1978/3/31
280	31	平安時代後期～鎌倉時代	鳥羽離宮跡	SD5	鳥羽離宮期の南北方向から東西方向に折れ曲がるL字形の溝。	2.00	0.40	「第70次発掘調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概要　昭和56年度』	1982/3/31
281	64	平安時代後期～鎌倉時代	鳥羽離宮跡	SD2	鳥羽離宮東殿に関連する東西方向の溝。	2.00	0.80	「鳥羽離宮跡　第88次調査」『昭和58年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1985/3/31
282	72	平安時代後期	中久世遺跡	SD2	中久世の中世前半の区画溝。北から南へ直行し，調査区の北半部で西へ曲折するL字状の溝。	2.00	0.60	「中久世遺跡」」『昭和58年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1985/3/31
283	134	平安時代後期	鳥羽離宮跡	SD1	鳥羽離宮造営時の区画溝（東西溝）か？	2.00	0.60	「第130次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報　平成元年度』	1990/3/11
284	189	室町時代	羽束師志水町遺跡	東西溝（北）	羽束師志水町の東西区画溝で，乙訓郡条里阿刀里十七坪と二十坪の境と考えられる。	2.00	0.90	「長岡京左京四条三・四坊，羽束師志水町遺跡」『昭和63年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1993/3/31
285	200	平安時代末～鎌倉時代	鳥羽離宮跡	溝2	鳥羽離宮南限付近の北東から南西に向かう溝。	2.00	0.30	「鳥羽離宮跡第135-2次調査」『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1994/9/10
286	208	14～15世紀	六波羅政庁跡	溝SD1	六波羅政庁の南北区画溝で，南端で西に屈曲する。同軸線上にSD8があり，SB157（西門）とSA150（柱列：塀）の西側を走る。	2.00	0.60	「六波羅政庁跡」『平成2年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1994/12/10
287	209	14～15世紀	六波羅政庁跡	溝SD8	六波羅政庁の南北区画溝で，同軸線上にSD1があり，SB157（西門）とSA150（柱列：塀）の西側を走る。	2.00	0.60	「六波羅政庁跡」『平成2年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1994/12/10

表11　堀・溝　一覧表（11）

幅・深さ番号	堀番号	時期	遺跡名	遺構名	性格	堀幅（m）	検出深度（m）	報告書名	発行年
288	235	11世紀末～12世紀初頭	安朱遺跡（安祥寺下寺跡）	溝3-22	安朱遺跡の南北区画溝。	2.00	1.50	「安祥寺下寺跡」『平成6年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1996/11/1
289	249	室町時代末	上ノ段町遺跡	溝1-1	上ノ段町の東西区画溝。溝1-2の造り替え。	2.00	0.20	「上ノ段町遺跡」『平成7年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1997/3/31
290	328	桃山時代	伏見城跡	流路	伏見城切岸に伴う流路。	2.00	1.00	『伏見城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-11』）	2002/10/31
291	333	鎌倉時代前期以降	史跡木嶋坐天照御魂神社（蚕ノ社）境内	溝SD2	木嶋坐天照御魂神社（蚕ノ社）境内の東限土塁の内溝。	2.00	0.30	『史跡木嶋坐天照御魂神社（蚕ノ社）境内』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-15』）	2002/12/27
292	342	平安時代～室町時代	白河街区跡	SD2・SD4	白河街区の寺院又は屋敷に伴う区画溝で，溝の東端に南北の柵を伴う。	2.00	0.50	『白河街区跡・岡崎遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-14』）	2003/2/28
293	359	京都Ⅶ期新～Ⅷ期中	史跡・名勝嵐山	溝128	天龍寺塔頭に関連する区画溝。柵D及び溝184と関連する。	2.00	0.50	『史跡・名勝　嵐山』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2004-11』）	2005/1/31
294	362	12世紀以降	栢ノ杜遺跡	溝3上層	栢ノ杜遺跡塔基壇及び石垣2の西側の区画溝。	2.00	0.30	「栢ノ杜遺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報　平成16年度』	2005/3/31
295	422	12世紀後葉～13世紀代	吉田本町遺跡	溝状遺構SD5	白川道北側溝？	2.00	0.40	「京都大学本部構内AU25区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2002年度』	2007/3/30
296	427	16世稀代	伏見城跡（以前）	溝1449	1区溝1660と3区溝940で東を画された集落内を東西に走る排水溝。	2.00	0.60	『伏見城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2006-27』）	2007/3/31
297	460	京都X期（16世紀後半）	慈照寺（銀閣寺）旧境内	溝31・小堤36	慈照寺旧境内の区画溝で小堤36を伴う。	2.00	1.10	『史跡　慈照寺（銀閣寺）旧境内』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007-16』）	2008/3/31
298	552	平安時代後期	白河北殿跡	SD125	白河北殿の基壇SR21の南側を東西方向に走る側溝。	2.00	0.80	「白河北殿跡」『昭和55年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2011/9/30
299	588	室町時代	六波羅蜜寺境内	溝134	六波羅蜜寺の東西方向の溝で，東区の溝133につながる。	2.00	0.30	『六波羅蜜時境内・六波羅政庁跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2011-6』）	2012/3/30
300	600	中世以降	北野廃寺	南北溝	中世北野の南北区画溝。南端で東西方向の落ち（もしくは溝）に合流する。	2.00	0.20	「北野廃寺2」『昭和54年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2012/3/31
301	616	室町時代後期	常盤仲之町遺跡・一ノ井遺跡	溝3-18	溝3-17と合流する南北溝で，北側を溝3-16に撹乱されている。広隆寺子院の区画溝か？	2.00	0.20	『常盤仲之町遺跡・一ノ井遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2012-11』）	2013/1/31
302	632	平安時代後期	鳥羽離宮跡	堀	白河天皇陵の東堀。	2.00	1.50	「鳥羽離宮跡・鳥羽遺跡」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成24年度』	2013/3/31
303	684	14世紀代	吉田橘町遺跡	SD1	吉田橘町遺跡の南北方向の区画溝。	2.00	0.50	「自家発電設備設置にかかわる発掘調査および立合調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2013年度』	2015/3/31
304	702	古代～中世	長岡京跡	溝1	中世下久世等の区画溝？	2.00	0.40	「長岡京左京北辺二坊十四町跡No.111」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成27年度』	2016/3/31
305	708	15世紀代	吉田二本松町遺跡	南北溝SD10	吉田二本松町遺跡の南北溝。『山城國吉田村古図』では，西側が「堀之内」「公方」，東側が「西の辻」となる。クランク状に曲がる溝。SD13とともに東西方向の区画の要地に相当している。	2.00	1.00	「京都大学吉田南構内AM21区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2014年度』	2016/3/31
306	82	平安時代後期～鎌倉時代	鳥羽離宮跡	SD1	鳥羽離宮関連か？SD1に合流。N-90°-Eである。	2.10	0.50	「第11 3次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報　昭和60年度』	1986/3/31
307	105	室町時代後半	北野鳥居前町遺跡	SD30	北野鳥居前町にある室町時代後半の南北方向の堀状遺構。	2.10	0.80	「北野鳥居前町遺跡」『昭和60年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1988/3/31
308	371	14世紀後半～15世紀初頭	石見城跡・長岡京跡	溝3003	初期石見城の北限の区画溝か？溝2001に合流する可能性あり。	2.10	0.70	『長岡京右京一条四坊十五町跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報　2004-15』）	2005/3/31
309	519	室町時代後期～江戸時代初頭	大藪城跡	SD114	大藪城内の南北方向の溝。SD40の西肩沿いの下部で検出。	2.10	0.50	『大藪遺跡・大藪城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-9』）	2010/11/30
310	590	室町時代後期	六波羅蜜寺境内	溝204	六波羅蜜寺の南北方向の区画溝。	2.10	0.70	『六波羅蜜時境内・六波羅政庁跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2011-6』）	2012/3/30
311	682	14世紀代	吉田二本松町遺跡	SD2	吉田二本松町の南北方向のV字溝。	2.10	1.20	「京都大学吉田南構内AN21区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2013年度』	2015/3/31
312	645	京都V期中～新（12世紀前半～中頃）	白河街区跡	溝1050	白河街区の南北方向の区画溝。歓喜光院推定地。溝の上面（溝中心線）にはこぶし大～人頭大の川原石が石の面を揃えずに並べられている。	2.15	0.69	『白河街区跡・岡崎遺跡』（『イビソク京都市内遺跡調査報告』第5輯）	2013/9/30
313	646	京都V期中～新（12世紀前半～中頃）	白河街区跡	溝2031	白河街区の南北方向の溝。歓喜光院推定地。	2.19	0.73	『白河街区跡・岡崎遺跡』（『イビソク京都市内遺跡調査報告』第5輯）	2013/9/30
314	81	平安時代後期～鎌倉時代	鳥羽離宮跡	SD1	鳥羽離宮の他の方位と異なり，N-21° 5′30″-Eである。	2.20	1.70	「第11 3次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報　昭和60年度』	1986/3/31

表11　堀・溝　一覧表（12）

幅・深さ番号	堀番号	時期	遺跡名	遺構名	性格	堀幅（m）	検出深度（m）	報告書名	発行年
315	185	平安時代後期	白河街区跡	SD123	東光寺もしくは元応寺に関連する南北区画溝。	2.20	0.70	「白河街区・岡崎遺跡1」『昭和63年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1993/3/31
316	197	室町時代	法勝寺跡	南北溝46	法勝寺の寺域西側の南北街路の東側溝が中世まで踏襲。南北溝2と切り合う。南北溝2が新しい。	2.20	0.60	「法勝寺跡・岡崎遺跡」『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1994/9/10
317	224	鎌倉時代	上里遺跡	溝1	上里遺跡の東西方向の溝で建物1の北側を流れる区画溝。	2.20	0.60	「上里遺跡」『平成4年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1995/9/1
318	351	13世紀前半代	鹿苑寺庭園	溝SD6-8	北山第・西園寺の頃の区画溝。	2.20	0.45	『特別史跡・特別名勝　鹿苑寺（金閣寺）庭園』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-6』）	2003/12/28
319	361	12世紀以降	栢ノ杜遺跡	溝3上層	栢ノ杜遺跡塔基壇及び石垣2の西側の区画溝。	2.20	0.50	「栢ノ杜遺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報　平成16年度』	2005/3/31
320	374	12世紀後半代	白河街区跡	溝668	白河街区の南北区画内溝，2区溝308と同一。	2.20	0.40	『白河街区跡・岡崎遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-4』）	2005/9/30
321	462	鎌倉時代	常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内	溝146	太秦中世寺院等の区画溝。	2.20	0.60	『常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-3』）	2008/9/29
322	548	平安時代～鎌倉時代	得長寿院跡	東西溝SD23	得長寿院の南限（二条大路末北限）にあたると推定される。	2.20	1.15	「得長寿院跡」『昭和52年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2011/9/30
323	574	鎌倉時代～室町時代	勝持寺旧境内	溝187	勝持寺旧境内の5区北端にある東西方向の溝，2区溝25に連続する。	2.20	0.40	『勝持寺旧境内』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2011-5』）	2012/3/20
324	614	室町時代後期	常盤仲之町遺跡・一ノ井遺跡	溝3-16	L字形に屈曲する区画溝。広隆寺子院の区画溝か？	2.20	0.60	『常盤仲之町遺跡・一ノ井遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2012-11』）	2013/1/31
325	710	10世紀～13世紀	吉田本町遺跡	溝SD2	吉田本町遺跡の南北溝で，道路SF1を切る。AT27区のSD5と繋がる可能性がある。	2.20	1.36	「京都大学本部構内AU27区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2014年度』	2016/3/31
326	237	12世紀末～13世紀初頭	安朱遺跡（安祥寺下寺跡）	溝5-207	安朱遺跡の東西区画溝。削平著しく初期の深さは不明。	2.30	0.45	「安祥寺下寺跡」『平成6年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1996/11/1
327	250	12世紀末～13世紀初頭	安朱遺跡（安祥寺下寺跡）	溝1	安朱遺跡の南北区画溝で，1次・2次調査と同様のもの。	2.30	1.40	「安祥寺下寺跡1」『平成7年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1997/3/31
328	299	京都V期古段階	仁和寺院家跡	溝449	建物1の西雨落溝から約3.5m（12尺）離れて位置しており，仁和寺の子院の一つである浄光院の建物1に関連する区画溝。	2.30	1.00	『仁和寺院家跡（花園宮ノ上町遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-1』）	2002/1/31
329	556	室町時代～安土桃山時代	鳥羽離宮跡	SD2	中世竹田の東西方向の区画溝。	2.30	0.50	「鳥羽離宮跡57次調査」『昭和55年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2011/9/30
330	56	鎌倉時代	鳥羽離宮跡	SD5	鳥羽離宮南端付近の東西溝。	2.40	0.60	「第100・101次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報　昭和59年度』	1985/3/31
331	79	桃山時代～江戸時代初期	伏見城跡	SD1・SD2	伏見城内の徳川屋敷と島津屋敷の境付近の南北溝。	2.40	1.10	「伏見城跡（2）」『昭和58年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1985/3/31
332	161	鎌倉時代～室町時代	尊勝寺跡	SD3	尊勝寺跡に関連する東西区画溝か？	2.40	1.40	「尊勝寺跡」『昭和62年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1991/12/5
333	236	12世紀末～13世紀初頭	安朱遺跡（安祥寺下寺跡）	溝3-1	安朱遺跡の南北区画溝で，北で約1度西に振れる。柵3-1と同時期。	2.40	1.30	「安祥寺下寺跡」『平成6年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1996/11/1
334	311	室町時代～桃山時代	六波羅政庁跡・方広寺跡	溝249	溝102に切られる南北方向の溝。	2.40	1.00	「六波羅政庁跡」『平成11年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2002/6/30
335	382	IX期新～X期古（15世紀～16世紀）	山科本願寺跡	堀7	山科本願寺御本寺内部の堀。堀8を切る。北西から南東に向かう堀跡。	2.40	1.90	「山科本願寺跡（1）」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成17年度』	2006/3/3
336	384	IX期新～X期古（15世紀～16世紀）	山科本願寺跡	堀9b	山科本願寺御本寺内部の堀。南北方向の堀。	2.40	2.10	「山科本願寺跡（1）」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成17年度』	2006/3/3
337	395	鎌倉時代	常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡	溝187	中世常盤付近の南北区画溝？	2.40	0.40	『常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-6』）	2006/7/31
338	540	鎌倉時代～室町時代	常盤仲之町遺跡	溝3-312	中世常盤の区画溝で，溝3-149のコーナー部の約1m南から調査区の東端に沿うように南へ延びて，直角に西に折れ曲がる溝。東辺部は溝3-149と同様，城北街道西側溝の位置にくる。	2.40	0.70	『常盤仲之町遺跡・常盤東ノ町古墳群』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2010-15』）	2011/3/31
339	1	鎌倉時代前期以降	円勝寺跡	大溝	円勝寺後期の区画溝か？東西方向の溝。	2.50	1.20	「円勝寺の発掘調査（上）」『佛教芸術』第82号	1971/11/5
340	21	安土桃山時代	伏見城跡	溝－2	伏見城の区画溝。	2.50	0.50	『伏見城跡　文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要　昭和54年度』	1980/3/31
341	60	鎌倉時代	中久世遺跡	溝（SD）2	中世久世の区画溝？	2.50	0.25	「中久世遺跡（MK6）」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和59年度』	1985/3/31

表11　堀・溝　一覧表（13）

幅・深さ番号	堀番号	時期	遺跡名	遺構名	性格	堀幅（m）	検出深度（m）	報告書名	発行年
342	187	平安時代末～鎌倉時代	鳥羽離宮跡	溝190	城南宮道南側に面した屋敷地の東西区画溝か。溝244と対。	2.50	0.60	「鳥羽離宮跡第127次調査」『昭和63年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1993/3/31
343	231	平安時代後期	最勝寺跡	南北溝	最勝寺東限の溝。	2.50	0.80	「最勝寺跡・岡崎遺跡（94K39）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成７年度』	1996/3/31
344	279	京都Ⅹ期後半～Ⅺ期前半（16世紀後半開削～17世紀初頭埋没）	長岡京跡（戊井遺跡隣接地）	SD4	土川集落に関連する南北溝。調査2のSD4に繋がる可能性。	2.50	0.80	「長岡京左京一条三坊3」『平成10年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2000/3/31
345	349	室町時代後期	慈照寺（銀閣寺）旧境内	溝SD18	慈照寺旧境内の石敷SX17の東延長上で，SX17の敷石が抜き取られ溝状になったもの。	2.50	0.50	『史跡　慈照寺（銀閣寺）旧境内』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-1』）	2003/7/31
346	365	15世紀	史跡・名勝嵐山	SD28	神主家西限付近の南北方向の濠，塞き止めるような石垣，付随するSD29がある。	2.50	1.50	「史跡・名勝嵐山」『京都市内遺跡発掘調査概報　平成16年度』	2005/3/31
347	368	14世紀後半～15世紀初頭	石見城跡・長岡京跡	溝2001	溝3003に合流する可能性のある初期石見城の区画溝。	2.50	0.60	『長岡京右京一条四坊十五町跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報　2004-15』）	2005/3/31
348	372	桃山～江戸前期	伏見城跡	溝SD287	伏見城武家屋敷に伴う東西区画溝か？柵1と並行し，柵2とも関連する可能性あり。	2.50	0.90	『伏見城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004-18』）	2005/5/31
349	396	鎌倉時代	常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡	溝294	中世常盤付近の南北区画溝？	2.50	0.50	『常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-6』）	2006/7/31
350	421	12世紀後葉	吉田本町遺跡	溝状遺構SD13	白川道下層の溝で，路面地業の際に深く掘り込まれた遺構の可能性が高い。土の採取や貯蔵の用に供していた可能性がある。	2.50	1.20	「京都大学本部構内AU25区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2002年度』	2007/3/30
351	440	15世紀前半～16世紀初頭	大藪遺跡・下久世構え跡	溝90	下久世構え跡の水堀で東に存在した旧河川から水を引き込んでいたと考えられる。	2.50	0.50	『大藪遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-32』）	2007/3/31
352	523	室町時代後期～江戸時代初頭	大藪城跡	SD170	大藪城内。2箇所で折れを持つ堀状遺構。	2.50	0.50	『大藪遺跡・大藪城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-9』）	2010/11/30
353	544	室町時代後期	大藪城跡？	溝80	大藪城の東に展開する東西方向の溝で，溝80下層に繋がる。	2.50	0.80	『大藪遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2010-18』）	2011/6/30
354	598	鎌倉時代～室町時代	北野廃寺	SD27	中世北野の南北方向の区画溝？南端で切れる。SD28に並行。	2.50	0.30	「北野廃寺1」『昭和54年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2012/3/31
355	599	鎌倉時代～室町時代	北野廃寺	SD28	中世北野の南北方向の区画溝？南端で切れる。SD27に並行。	2.50	0.30	「北野廃寺1」『昭和54年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2012/3/31
356	611	室町時代後半	常盤仲之町遺跡・一ノ井遺跡	溝1-30	2区の溝に延長する可能性のある区画溝。広隆寺子院の区画溝か？	2.50	0.80	『常盤仲之町遺跡・一ノ井遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2012-11』）	2013/1/31
357	617	室町時代後期	常盤仲之町遺跡・一ノ井遺跡	溝3-1・3-2・溝4-1	北は5区溝5-20に続き，南端でL字形に屈曲する区画溝。広隆寺子院の区画溝か？	2.50	1.30	『常盤仲之町遺跡・一ノ井遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2012-11』）	2013/1/31
358	651	室町時代後期後半	六波羅政庁跡・六波羅蜜寺跡	溝513	南北方向の室町時代溝。土橋572を伴う。六波羅蜜寺北西部の防御施設。	2.50	1.00	『六波羅蜜時境内・六波羅政庁跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2013-9』）	2014/1/31
359	671	伏見城期	伏見城跡	溝88（堀）	桑山丹波守屋敷推定地，西岸に船が接岸できる係留施設がある堀	2.50	0.70	『伏見城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2014-8』）	2015/3/31
360	709	13世紀前半代	吉田二本松町遺跡	東西溝SD35	吉田二本松町遺跡の東西方向の溝で，この溝が途切れる部分は柱穴やピットが南北方向に密に分布している。南北溝SD37とともに一つの区画を形成する可能性。	2.50	1.00	「京都大学吉田南構内AM21区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2014年度』	2016/3/31
361	9	平安時代後期	最勝寺跡	溝（堀）	最勝寺北築地溝？	2.60	0.70	「尊勝寺跡跡推定地第Ⅲ次発掘調査概要」『六勝寺跡　京都市埋蔵文化財年次報告　1976-II[平安時代後期の寺院跡]」	1977/3/31
362	128	平安時代後期	尊勝寺跡	SD5	尊勝寺境内の東西方向の溝で，SD4と並行。心々距離は約3m。	2.60	0.70	「尊勝寺跡」『昭和61年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1989/3/31
363	465	平安時代～鎌倉時代	常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内	溝164	太秦中世寺院等の区画溝。	2.60	0.20	『常盤仲之町遺跡・広隆寺旧境内』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-3』）	2008/9/29
364	654	11世紀後半開削・12世紀以降埋没	山科本願寺跡（旧野村）	溝33	検出された掘立柱建物と同様，条里区画に規制された領主居館の萌芽的な存在の可能性。	2.60	0.80	「山科本願寺跡・左義長町遺跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成25年度』	2014/3/31
365	667	12世紀以降	芝古墳	後円部	前方後円墳の周溝を中世に防御用に再利用した可能性	2.60	1.20	「芝古墳」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成26年度』	2015/3/31
366	701	平安時代後期～鎌倉時代	中臣遺跡	溝10	中世前半の区画溝。	2.60	0.80	「中臣遺跡　No.92」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成27年度』	2016/3/31
367	210	14～15世紀	六波羅政庁跡	溝SD140	六波羅政庁の南北区画溝でSB157（西門）とSA150（柱列：塀）の東側を走る。	2.70	0.40	「六波羅政庁跡」『平成2年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1994/12/10
368	401	京都Ⅸ期中～新相	史跡・名勝嵐山	堀60C（古）	天龍寺と霊庇廟を一緒に取り囲む区画の東限の堀。	2.70	1.30	『史跡・名勝　嵐山』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-9』）	2006/10/31

表11　堀・溝　一覧表（14）

幅・深さ番号	堀番号	時期	遺跡名	遺構名	性格	堀幅（m）	検出深度（m）	報告書名	発行年
369	500	中世～元禄15年（1702）頃	革嶋館跡	水路5	西堀から約６m西側。「外構之堀」か？	2.70	1.00	「革嶋館跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成21年度』	2010/3/31
370	665	京都Ⅸ期新段階	山科本願寺跡	堀１	山科本願寺創建時もしくは山科七郷に伴う南北堀。	2.70	1.50	「山科本願寺跡（２）」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成26年度』	2015/3/31
371	438	16世紀後葉	伏見城跡	溝940	1区溝1660とともに伏見城造営前の集落の東側を画する溝。	2.90	0.60	『伏見城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2006-27』）	2007/3/31
372	532	15世紀後半	北野廃寺	堀51	堀30及び門遺構・柱列２・３と群をなした小口遺構（門のある中央で途切れる）。門は南門で屋敷地が北側に展開する可能性	2.90	0.25	「北野廃寺１７次調査」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成22年度』	2011/3/31
373	663	発桃山時代～江戸時代初頭	伏見城跡	SD7	伏見城推定伊達屋敷の東西の段差間にある南北堀状遺構。4期の変遷がある。	2.90	2.10	『伏見城跡発掘調査報告書』	2014/12/30
374	2	南北朝期	臨川寺旧境内	南北溝	臨川寺庭園部分の南北溝	3.00	0.80	『臨川寺庭園遺跡発掘調査概要』	1975/3/31
375	3	南北朝期	臨川寺旧境内	東西溝	臨川寺庭園部分の南北溝	3.00	0.80	『臨川寺庭園遺跡発掘調査概要』	1975/3/31
376	5	桃山時代～江戸時代初期	六波羅政庁跡	SD1	方広寺周辺の豊臣秀吉関連の造成に伴う溝？	3.00	0.75	『六波羅政庁跡 - 東山郵便局新築敷地埋蔵文化財発掘調査報告』	1977/3/30
377	30	平安時代後期～鎌倉時代	鳥羽離宮跡	SD4	鳥羽離宮期の東西溝	3.00	0.30	「第70次発掘調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概要　昭和56年度』	1982/3/31
378	62	平安時代後期～鎌倉時代	尊勝寺跡	SD1	白河街区跡の東西区画溝？	3.00	1.50	「尊勝寺跡」『昭和58年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1985/3/31
379	78	桃山時代～江戸時代初期	伏見城跡	溝	伏見城期の屋敷地境の溝	3.00	1.40	「伏見城跡（１）」『昭和58年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1985/3/31
380	80	平安時代後期	鳥羽離宮跡	SD3（溝3）	近衛天皇陵西限の堀？	3.00	0.50	「第112次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報　昭和60年度』	1986/3/31
381	143	15世紀末～16世紀前半	植物園北遺跡	溝4	上賀茂社家町の構えに関する堀。L形に屈曲し，調査では西側と南側を確認。	3.00	1.43	『植物園北遺跡発掘調査概報　平成元年度』	1990/3/31
382	153	平安時代後期～中世	仁和寺境内	SD19	仁和寺の僧坊北側の土塁SA15に伴う溝。	3.00	0.30	『仁和寺境内発掘調査報告 - 御室会館建設に伴う調査 -』（『京都市埋蔵文化財研究所調査報告第９冊』）	1990/6/30
383	190	室町時代	羽束師志水町遺跡	東西溝（南）	羽束師志水町の東西区画溝で，乙訓郡条里阿刀里十七坪と二十坪の境と考えられる。	3.00	1.40	「長岡京左京四条三・四坊，羽束師志水町遺跡」『昭和63年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1993/3/31
384	202	鎌倉時代	南春日町遺跡	溝1	大原野神社を支える神職集団の敷地を限る大溝。	3.00	1.00	「南春日町遺跡第17・19次調査」『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1994/9/10
385	270	11世紀中頃～12世紀末	史跡醍醐寺境内	溝707	醍醐寺境内内，「實相寺」の境界を区切る東西区画溝か。土橋状に幅約３mにわたって途切れる。建物1に切られる。	3.00	0.80	「史跡醍醐寺境内2」『平成9年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1999/3/31
386	277	戦国期～江戸時代初期	長岡京跡（戌井遺跡隣接地）	SD2	土川集落に関連する溝。	3.00	1.00	「長岡京左京一条三坊１」『平成10年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2000/3/31
387	336	平安時代後期～17世紀中葉	史跡賀茂御祖神社境内	流路1（奈良の小川）	下鴨神社の奈良の小川	3.00	0.20	『史跡賀茂御祖神社境内』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-12』）	2003/2/28
388	344	14～15世紀前半	栢ノ杜遺跡	南北溝状遺構	栢ノ杜遺跡西側の区画溝	3.00	0.80	「栢ノ杜遺跡」『京都市内遺跡発掘調査概報　平成14年度』	2003/3/31
389	355	15世紀中～16世紀初頭	史跡・名勝嵐山	溝260	天龍寺に関連する防御用の堀	3.00	1.80	『史跡・名勝　嵐山』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2004-7』）	2004/11/30
390	356	12世紀～13世紀	史跡・名勝嵐山	溝224	葛野郡条里に近い方向をもつ防御用の堀？	3.00	1.70	『史跡・名勝　嵐山』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2004-7』）	2004/11/30
391	358	京都Ⅸ期	史跡・名勝嵐山	溝33	天龍寺塔頭に関連する防御用の堀？	3.00	1.00	『史跡・名勝　嵐山』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2004-11』）	2005/1/31
392	366	15世紀	史跡・名勝嵐山	SD32	神主家西限付近の南北方向の濠。中央部が一段深くなる断面形状を示している。	3.00	1.20	「史跡・名勝嵐山」『京都市内遺跡発掘調査概報　平成16年度』	2005/3/31
393	383	Ⅸ期新～Ⅹ期古（15～16世紀）	山科本願寺跡	堀8	山科本願寺御本寺内部の堀。東西方向の堀。	3.00	2.10	「山科本願寺跡（１）」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成17年度』	2006/3/3
394	439	15世紀前半～16世紀初頭	大藪遺跡・下久世構え跡	溝81	下久世構え跡の居館区域の区画溝でL字に屈曲する。	3.00	0.40	『大藪遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-32』）	2007/3/31
395	472	Ⅸ期新～Ⅹ期古（15世紀～16世紀）	北白川廃寺	溝54	室町時代前半の15世紀代に形成され，流水があったと考えられる。16世紀までに埋没。	3.00	0.70	「北白川廃寺」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成20年度』	2009/3/31
396	529	16世紀中頃～17世紀初頭	大藪城跡	溝3B	大藪城の南北方向の溝で，堀211が北へ方向を変える辺りで繋がる。堀210との間に土塁があった可能性。	3.00	1.00	『大藪遺跡・大藪城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2010-13』）	2011/2/28
397	533	中世以降	鳥羽離宮跡	溝1	流水堆積。護岸の繰り返し施工，大正11年都市計画図にも水路として認められる。	3.00	1.10	「鳥羽離宮跡１　No.20」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成22年度』	2011/3/31

表11　堀・溝　一覧表（15）

幅・深さ番号	堀番号	時期	遺跡名	遺構名	性格	堀幅（m）	検出深度（m）	報告書名	発行年
398	594	中世	鳥羽離宮跡	SD6	中世竹田の南北濠で，逆L字状にクランクする。	3.00	0.70	「鳥羽離宮跡54-A次調査」『昭和54年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2012/3/31
399	609	江戸時代	大藪城跡	堀12	大藪城跡に伴う堀か，近世集落に伴う堀かは不明。埋没時期は江戸時代。	3.00	0.80	『大藪遺跡・大藪城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012-6』）	2012/9/28
400	624	14～15世紀	史跡・名勝嵐山	溝1B	室町時代の天龍寺期の朱雀大路側溝。	3.00	1.50	『史跡・名勝　嵐山』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012-16』）	2013/2/28
401	627	京都Ⅶ期新～Ⅷ期	吉田橘町遺跡	SD40	吉田橘町の東西方向の大規模な溝状遺構。単純な区画溝というよりは，土取りの遺構を天地返し状に埋め戻したかのような状態といえる。	3.00	0.80	「京都大学医学部構内AQ18区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2010年度』	2013/3/29
402	631	中世	白河街区跡	SD100	白河街区の斜行溝。	3.00	0.45	「京都大学病院構内AJ16区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2010年度』	2013/3/29
403	707	15世紀代	吉田二本松町遺跡	東西溝SD13	吉田二本松町遺跡の東西方向の溝。『山城國吉田村古図』の南側の小字「堀之内」と北側の小字「西の辻」を隔てる東西ライン上に位置しており，中世以来重要な地境。	3.00	1.20	「京都大学吉田南構内AM21区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2014年度』	2016/3/31
404	712	13世紀代	吉田本町遺跡	溝SD1	吉田本町遺跡の東西溝。	3.00	1.00	「京都大学本部構内AU27区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報　2014年度』	2016/3/31
405	59	鎌倉時代	中久世遺跡	溝（SD）1	中世久世の区画溝？	3.10	0.25	「中久世遺跡（MK6）」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　昭和59年度』	1985/3/31
406	488	13世紀中葉	伏見城跡・桃陵遺跡	溝SD1064	平安時代後期の区画溝であり，伏見山荘等の別業に伴うものか。	3.10	0.20	『伏見城跡・桃陵遺跡発掘調査報告書-（仮称）公務員宿舎伏見住宅整備事業に伴う-』	2010/3/20
407	504	平安時代後期	常盤仲之町遺跡	溝290	常盤仲之町遺跡の東西区画施設で，高まり272-1，石組790，石敷784を伴う。	3.10	0.70	『常盤仲之町遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-16』）	2010/3/31
408	521	室町時代後期～江戸時代初頭	大藪城跡	SD323	大藪城内。SD255の西肩沿いの下部で検出した南北方向の溝。	3.10	0.50	『大藪遺跡・大藪城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-9』）	2010/11/30
409	95	15世紀末～16世紀前半	山科本願寺跡	I-6区濠（南北方向，西北～東南方向の濠と繋がる）	山科本願寺跡の土塁とセットになる濠。	3.20	1.24	「山科本願寺跡」『昭和59年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1987/3/31
410	274	平安時代前期後半代	北野遺跡	溝1	常住寺関連の区画溝か？	3.20	0.50	「北野遺跡（99RH132）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成11年度』	2000/3/31
411	666	京都Ⅸ期新段階	山科本願寺跡	堀2	山科本願寺創建時もしくは山科七郷に伴う東西堀。	3.20	2.00	「山科本願寺跡（2）」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成26年度』	2015/3/31
412	256	12世紀前半～室町時代	下三栖城跡	溝1	下三栖集落に関連する堀跡か？	3.25	1.13	「下三栖遺跡（97TB63）」『京都市内遺跡立会調査概報　平成９年度』	1998/3/31
413	378	12世紀後半代	白河街区跡	溝308	白河街区の南北区画内溝，1区溝668と同一。	3.30	0.30	『白河街区跡・岡崎遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-4』）	2005/9/30
414	271	室町時代	伏見城跡・三淵伏見城跡	溝30（堀）	伏見城以前の堀。前回調査区の延長で室町時代の堀跡。	3.40	1.60	「伏見城跡・御香宮廃寺」『平成9年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1999/3/31
415	86	室町時代	北野廃寺	SD47（南北溝）	北野付近の中世集落に伴う南北区画溝？	3.50	0.70	「第11次発掘調査」『北野廃寺発掘調査概報　昭和61年度』	1987/3/31
416	90	鳥羽離宮期	鳥羽離宮跡	SD75	鳥羽離宮I金剛心院東限の溝の延長。	3.50	1.50	「鳥羽離宮跡第106次調査」『昭和59年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1987/3/31
417	160	鎌倉時代～町時代	尊勝寺跡	SD1	尊勝寺跡に関連する東西区画溝。	3.50	1.40	「尊勝寺跡」『昭和62年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1991/12/5
418	276	戦国期～江戸時代初期	長岡京跡（戌井遺跡隣接地）	SD1南北溝	土川集落に関連する溝。	3.50	1.00	「長岡京左京一条三坊１」『平成10年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2000/3/31
419	335	平安時代後期	史跡賀茂御祖神社境内	流路2	奈良の小川に切られる南北方向の流路。	3.50	0.40	『史跡賀茂御祖神社境内』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-12』）	2003/2/28
420	442	京都Ⅷ期新段階	法勝寺跡	溝11	中世岡崎村の境界溝か？溝1と溝2の肩口間の距離は3.7～4.0mある。冷泉小路末の側溝の可能性もある。	3.50	0.61	『法勝寺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007-9』）	2007/12/28
421	545	室町時代後期	大藪城跡？	溝105	大藪城の東堀210より上層にある南北方向の区画溝。溝80の下層と接続。	3.50	0.40	『大藪遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2010-18』）	2011/6/30
422	670	伏見城期	伏見城跡	溝3（堀）	桑山丹波守屋敷推定地，北岸に船が接岸できる係留施設がある堀。	3.50	1.20	『伏見城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2014-8』）	2015/3/31
423	457	京都Ⅹ期新段階	慈照寺（銀閣寺）旧境内	溝29・堤30	慈照寺旧境内の大規模な区画溝で堤30を伴う。	3.60	1.10	『史跡　慈照寺（銀閣寺）旧境内』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2007-16』）	2008/3/31
424	517	室町時代後期～江戸時代初頭	大藪城跡	SD50	大藪城の南北方向の溝で，SD40の底部ほぼ中央で検出。	3.60	0.55	『大藪遺跡・大藪城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-9』）	2010/11/30

表11 堀・溝 一覧表（16）

幅・深さ番号	堀番号	時期	遺跡名	遺構名	性格	堀幅（m）	検出深度（m）	報告書名	発行年
425	622	京都Ⅴ期～Ⅵ期古段階	法住寺殿跡	溝833	法住寺殿内を南北方向に走る区画溝。路面900B及び路面900Aに伴う東側溝か？	3.80	0.80	『法住寺殿跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-10』）	2013/1/31
426	22	安土桃山時代	伏見城跡	溝－3	伏見城の区画溝	4.00	1.30	『伏見城跡 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 昭和54年度』	1980/3/31
427	101	平安時代末～鎌倉時代	鳥羽離宮跡	溝31	中世前半の区画溝	4.00	0.50	「第124次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報 昭和62年度』	1988/3/31
428	238	室町時代前期	小倉町別当町遺跡	SD15	小倉町別当町の南北堀状遺構	4.00	2.20	「小倉町別当町遺跡」『平成6年度 京都市埋蔵文化財調査概要』	1996/11/1
429	269	15世紀末～1532年まで	山科本願寺跡	SD66	山科本願寺内部の東西方向の石組溝で，堀に注ぎ込む。	4.00	1.70	「山科本願寺1」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』	1999/3/31
430	345	鳥羽離宮期	鳥羽離宮跡	溝（SD101）	金剛心院北限を画する溝	4.00	1.10	『鳥羽離宮跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-18』）	2003/6/30
431	352	中世	史跡・名勝嵐山	溝1	慈済院の区画溝か？	4.00	0.30	「史跡名勝嵐山 No.44」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成15年度』	2004/3/31
432	551	室町時代後半？	鳥羽離宮跡	東西溝SD11B	室町時代後半には西端部で張り出しを持つ壕SD11A（図なし）となる。第53次濠と繋がる可能性。	4.00	1.50	「鳥羽離宮跡35次調査」『昭和52年度 京都市埋蔵文化財調査概要』	2011/9/30
433	647	京都Ⅸ期古段階	嵯峨遺跡	SD16	嵯峨天龍寺の塔頭を囲む堀か？北東～南西方向の堀。	4.00	1.70	『嵯峨遺跡・嵯峨北堀町遺跡』（『西近畿文化財研究所調査報告書 7』	2013/9/30
434	678	14世紀末～15世紀初頭	史跡・名勝嵐山	溝38	亀山殿期の区画溝？	4.00	1.50	『史跡・名勝 嵐山』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013-17』）	2015/3/31
435	716	室町時代	鳥羽離宮跡	SD3302	中世竹田の東西溝	4.00	1.00	「第33次（東殿XVIII）発掘調査」『鳥羽離宮跡-国庫補助による発掘調査概要-昭和52年度』，「鳥羽離宮跡33次調査」『昭和52年度 京都市埋蔵文化財調査概要』	1978/3/31，2011/9/30
436	718	平安時代後期～鎌倉時代	鳥羽離宮跡	溝（SD-01）	鳥羽離宮期の北東から南西に流れる区画溝？11次・32次調査で検出されたものと一連。	4.00	1.50	「第49次（東殿XXIX）発掘調査」『鳥羽離宮跡 文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要 昭和54年度』，「鳥羽離宮跡49次調査」『昭和54年度 京都市埋蔵文化財調査概要』	1980/3/31 2012/3/31
437	424	15世紀中頃	吉田二本松町遺跡	SD13・SD14	吉田二本松町のクランク状に折れ曲がる溝。	4.20	1.50	「京都大学吉田南構内AR25区の立合調査」」『京都大学構内遺跡調査研究年報 2002年度』	2007/3/30
438	259	13世紀中～近世	下三栖遺跡	SD2	東西方向の溝で3時期に分かれる。紀伊郡条里の坪境。	4.50	1.30	「下三栖遺跡」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』	1998/3/31
439	263	15世紀末～16世紀	醍醐廃寺	SD2	「醍醐総構」に関連する南北方向の堀状遺構か？	4.50	2.20	「醍醐廃寺」『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』	1998/3/31
440	426	16世紀末～17世紀前葉	伏見城跡（以前）	溝1660	3区溝940とともに伏見城造営前の集落の東側を画する溝	4.50	0.90	『伏見城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-27』）	2007/3/31
441	223	室町時代	史跡・名勝嵐山	濠1	嵐山の東西方向の濠で南側に濠2が走る。濠の南側に地業をはじめ宅地であったことを示す遺構が展開する。濠の南肩の一部で石垣がある。	4.60	1.20	「史跡名勝嵐山」『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』	1995/9/1
442	142	15世紀末～16世紀前半	植物園北遺跡	溝1	上賀茂社家町の構えに関する堀。東端で堀幅が細くなり，門等の遺構が考えられる。	4.85	1.31	『植物園北遺跡発掘調査概報 平成元年度』	1990/3/31
443	11	戦国時代～桃山時代	鳥羽離宮跡	SD3103	SD1201，SD3511と関連した中世竹田の城館に伴う南北濠跡，SD04とは幅6mの間隔	5.00	1.00	「第31次（東殿XVI）発掘調査」『鳥羽離宮跡-国庫補助による発掘調査概要-昭和52年度』	1978/3/31
444	43	平安時代後期	鳥羽離宮跡	SD-1	鳥羽離宮東殿跡の東西区画溝	5.00	0.60	「鳥羽離宮跡第77次調査」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』	1984/3/1
445	63	平安時代後期～鎌倉時代	鳥羽離宮跡	SD1	鳥羽離宮東殿に関連する東西方向の溝	5.00	1.30	「鳥羽離宮跡 第88次調査」『昭和58年度 京都市埋蔵文化財調査概要』	1985/3/31
446	83	平安時代末～鎌倉時代	鳥羽離宮跡	SD1	田中殿北限の区画溝	5.00	1.40	「第119次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報 昭和61年度』	1987/3/31
447	217	室町時代	南春日町遺跡	堀1	大原野神社を支える神職集団の敷地の東を限る大溝。第19次・21次調査と同一。	5.00	1.90	「南春日町遺跡第22～24次調査」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』	1995/3/31
448	343	15世紀末～1532年まで	山科本願寺南殿跡	堀1	山科本願寺南殿の内堀北東隅，西側に土塁あり。	5.00	2.20	「山科本願寺南殿跡」『京都市内遺跡発掘調査概報 平成14年度』	2003/3/31
449	471	中世～元禄15年（1702）頃	革嶋館跡	濠1	革嶋館の西堀で堀東側に土塁56が伴う。	5.00	1.50	「革嶋館跡 No.24」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成20年度』	2009/3/31
450	476	室町時代～江戸時代	革嶋館跡	堀1・柵1	堀2との共存関係の可能性があるとともに，館に先行する政所屋敷の堀の可能性もある。	5.00	1.90	『革嶋館跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-6』）	2009/10/30
451	477	室町時代～江戸時代	革嶋館跡	堀2・柵2	2009年調査の堀と関連する革嶋館の堀跡。	5.00	2.00	『革嶋館跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-6』）	2009/10/30

表11　堀・溝　一覧表（17）

幅・深さ番号	堀番号	時期	遺跡名	遺構名	性格	堀幅（m）	検出深度（m）	報告書名	発行年
452	499	中世～元禄15年（1702）頃	革嶋館跡	堀3	革嶋館の西堀で堀東側に土塁56が伴う。	5.00	1.40	「革嶋館跡」『京都市内遺跡発掘調査報告　平成21年度』	2010/3/31
453	54	12世紀後半	法住寺殿跡	水路跡	法住寺殿の庭園関連の排水路として機能した可能性。	5.20	1.60	『大谷中・高等学校構内遺跡発掘調査報告書』	1984/10/1
454	58	平安時代後期～鎌倉時代	鳥羽離宮跡	SD2（東西溝）	田中殿北限の区画溝	5.20	1.40	「第104次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報　昭和59年度』	1985/3/31
455	603	室町時代末～桃山時代	伏見城跡	溝	指月城期舟入の東側台地上で西北西～東南東へ走る堀	5.50	2.50	「伏見城跡１」『昭和54年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2012/3/31
456	652	中世	羽束師菱川城跡	濠2	鬼門の塚西端を南北に限る濠，濠3よりも古い	5.50	0.90	「長岡京左京四条三坊十三・十四町・四坊三・四町跡・羽束師菱川城跡　No.34,No.138」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成25年度』	2014/3/31
457	721	平安時代後期	白河街区跡	堀26	白河街区の南北区画に関連する堀	5.50	1.50	『白河街区跡・岡崎遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2002-17』）	203/5/31
458	326	鎌倉時代中期	下三栖遺跡	溝132	下三栖の鎌倉時代集落に関連する東西方向の溝。溝の一部に杭列がある。	5.60	1.00	「下三栖遺跡」『平成11年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2002/6/30
459	260	13世紀中～後期	下三栖遺跡	SD3	下三栖の鎌倉時代屋敷地の北限を示す東西方向の溝。	5.75	0.40	「下三栖遺跡」『平成８年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1998/3/31
460	620	京都Ⅴ期	法住寺殿跡	濠150	法住寺殿内の東西方向の濠で，濠の東部で濠内部を遮断する南北方向の木組み遺構あり。	5.90	2.75	『法住寺殿跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2012-10』）	2013/1/31
461	12	戦国時代～桃山時代	鳥羽離宮跡	SD3104	SD1201，SD3511と関連した中世竹田の城館に伴う南北濠跡，SD03とは幅６ｍの間隔	6.00	1.00	「第31次（東殿XVI）発掘調査」『鳥羽離宮跡-国庫補助による発掘調査概要-昭和52年度』	1978/3/31
462	34	平安時代後期～鎌倉時代	鳥羽離宮跡	SD4	鳥羽離宮「北大路」SF10の北側溝	6.00	1.20	「第72次発掘調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概要　昭和56年度』	1982/3/31
463	75	平安時代後期以降	法住寺跡	SD03	法住寺の寺域及び最勝光院の推定地にあたる場所でSD02を切って成立する堀。	6.00	3.00	「法住寺跡」『昭和58年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1985/3/31
464	84	12世紀前半	鳥羽離宮跡	SD3	白河天皇陵北堀（南面は石垣）	6.00	1.50	「第121次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報　昭和61年度』	1987/3/31
465	102	鎌倉時代～	大藪遺跡（大藪城跡）	SD20（南北濠）	大藪城もしくは下久世構え跡の南北濠	6.00	0.80	『大藪遺跡発掘調査概報　昭和62年度』	1988/3/31
466	239	平安時代後期～天文年間	鳥羽離宮跡	堀（SD1）	白河天皇陵の西堀	6.00	1.50	「鳥羽離宮跡第140次調査」『京都市内遺跡発掘調査概報　平成８年度』	1997/3/31
467	357	11世紀～12世紀	史跡・名勝嵐山	溝252	嵐山付近の平安時代後期の区画溝？	6.00	2.00	『史跡・名勝　嵐山』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2004-7』）	2004/11/30
468	595	室町時代～江戸時代	鳥羽離宮跡	SD7	中世竹田の南北濠。	6.00	1.30	「鳥羽離宮跡54-B次調査」『昭和54年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2012/3/31
469	625	13～14世紀	史跡・名勝嵐山	溝1A	鎌倉時代亀山殿期の朱雀大路側溝	6.00	1.50	『史跡・名勝　嵐山』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2012-16』）	2013/2/28
470	653	戦国～近世初頭	羽束師菱川城跡	濠3	鬼門の塚西端を南北に限る濠，濠2よりも新しい	6.00	1.20	「長岡京左京四条三坊十三・十四町・四坊三・四町跡・羽束師菱川城跡　No.34,No.138」『京都市内遺跡試掘調査報告　平成25年度』	2014/3/31
471	690	13世紀～14世紀	伏見城跡	溝119・堤135	中世集落に伴う南北溝，堤135，溝147を伴う。	6.00	0.90	『伏見城跡・桃陵遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2015-2』）	2015/9/30
472	719	平安時代後期～桃山時代	鳥羽離宮跡	濠	第35次調査SD-11と同一化。	6.00	1.50	「第53次（東殿XXXIII）発掘調査」『鳥羽離宮跡　文化庁国庫補助事業による発掘調査の概要　昭和54年度』，「鳥羽離宮跡53次調査」『昭和54年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1980/3/31 2012/3/31
473	720	平安時代後期～桃山時代	鳥羽離宮跡	SD5	鳥羽離宮東殿南東隅の区画溝，32次で検出したものと同一であり，さらに当地から南西へ大きく迂回しながら，10次調査，さらに49次調査で検出している溝へと続く。総延長320ｍに達する。	6.00	1.50	「第59次発掘調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概要　昭和55年度』，「鳥羽離宮跡59次調査」『昭和55年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1981/3/31 2011/9/30
474	199	平安時代末～鎌倉時代	鳥羽離宮跡	溝1	鳥羽離宮南限付近の北東から南西に向かう溝。	6.30	1.30	「鳥羽離宮跡第135-2次調査」『平成元年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1994/9/10
475	215	戦国時代～江戸時代初頭	大覚寺御所跡	堀状遺構	東西方向の大規模な堀で，東側で幅2.4ｍに狭まる。	6.50	1.00	「史跡大覚寺御所跡」『平成３年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1995/3/31
476	191	室町時代後期	吉田泉殿町遺跡	大溝	吉田泉殿町の北東から南北方向の区画溝	6.80	1.00	『京都工芸繊維大学構内遺跡発掘調査報告書-京都大学西部構内遺跡-』	1993/9/30
477	100	平安時代末～鎌倉時代	鳥羽離宮跡	溝28	中世前半の区画溝	7.00	1.20	「第124次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報　昭和62年度』	1988/3/31
478	159	14世紀～15世紀	岡崎遺跡	SD38	中世岡崎の南北区画溝。	7.00	1.00	「岡崎遺跡・法勝寺跡隣接地」『昭和62年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1991/12/5

表11　堀・溝　一覧表（18）

幅・深さ番号	堀番号	時期	遺跡名	遺構名	性格	堀幅（m）	検出深度（m）	報告書名	発行年
479	689	15世紀半ば～17世紀第二四半期	羽束師菱川城跡	SD195（北濠）	羽束師菱川城の北堀。15世紀半ば～16世紀前半に掘削され，16世紀前半～半ばに濠の分断と拡張が行われる。16世紀半ば～末に水濠として機能し，16世紀末～17世紀初頭には水濠機能が喪失し，17世紀第2四半期に終焉を迎える。	7.00	1.90	『羽束師菱川城跡・長岡京跡（長岡京跡第561次調査）』	2015/5/26
480	714	平安時代末～桃山時代	鳥羽離宮跡	SD3202	東殿東辺を南北に走る大溝	7.00	1.80	「第32次（東殿XVII）発掘調査」『鳥羽離宮跡-国庫補助による発掘調査概要-昭和52年度』，「鳥羽離宮跡32次調査」『昭和52年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1978/3/31 2011/9/30
481	55	平安時代後期～鎌倉時代	鳥羽離宮跡	SD10	白河天皇陵北西隅の堀	7.60	1.70	「第96次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報　昭和59年度』	1985/3/31
482	298	京都Ⅳ期中段階～Ⅴ期古段階	仁和寺院家跡	溝443	3区で溝270となる。仁和寺の子院の一つである浄光院に関連する区画溝	8.00	0.50	『仁和寺院家跡（花園宮ノ上町遺跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-1』）	2002/1/31
483	559	平安時代後期～室町時代	沖殿町遺跡	SD1	修学院周辺の集落に伴う溝？	8.00	0.90	「沖殿町遺跡」『昭和55年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2011/9/30
484	560	平安時代後期～室町時代	沖殿町遺跡	SD4	修学院周辺の集落に伴う溝？	8.00	1.80	「沖殿町遺跡」『昭和55年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	2011/9/30
485	688	15世紀～18世紀代	羽束師菱川城跡	SD116（東濠）	羽束師菱川城の東濠。	8.00	1.50	『羽束師菱川城跡・長岡京跡（長岡京跡第561次調査）』	2015/5/26
486	520	室町時代後期～江戸時代初頭	大藪城跡	SD255	大藪城内の南北方向の堀状遺構。SD40より0.5m間隔をあけた西側に位置し，北部でSD151と合流する。	8.60	0.35	『大藪遺跡・大藪城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-9』）	2010/11/30
487	52	平安時代後期～鎌倉時代	鳥羽離宮跡	SD10	白河天皇陵北東隅の堀	8.70	1.60	「第91次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報　昭和58年度』	1984/3/31
488	99	平安時代末～鎌倉時代	鳥羽離宮跡	溝3	白河天皇陵南堀（北面は石垣）	8.80	1.90	「第122次調査」『鳥羽離宮跡発掘調査概報　昭和62年度』	1988/3/31
489	49	安土桃山時代～江戸時代初期	伏見城跡	南北堀状遺構	伏見城跡。桃山町伊賀で検出された南北堀状遺構	11.00	4.00	「伏見城跡(2)」『昭和57年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1984/3/1
490	50	安土桃山時代～江戸時代初期	伏見城跡	南北堀状遺構	伏見城跡。桃山町伊賀で検出された南北堀状遺構	11.00	4.00	「伏見城跡(2)」『昭和57年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1984/3/1
491	268	15世紀末～1532年まで	山科本願寺跡	堀	山科本願寺落入り部分の堀。	12.00	4.00	「山科本願寺1」『平成9年度　京都市埋蔵文化財調査概要』	1999/3/31
492	498	安土桃山時代	伏見城跡・桃陵遺跡	堀SD1400	伏見城内の安土桃山時代の南北方向の堀で，B地区の堀SD1001に継続する。	16.00	5.00	『伏見城跡・桃陵遺跡発掘調査報告書-（仮称）公務員宿舎伏見住宅整備事業に伴う-』	2010/3/20
493	515	室町時代後期～江戸時代初頭	大藪城跡	SD40	大藪城の南北方向の溝	16.00	0.30	『大藪遺跡・大藪城跡』（『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-9』）	2010/11/30
494	492	安土桃山時代	伏見城跡・桃陵遺跡	堀SD1001	伏見城内の安土桃山時代の南北方向の堀で，B地区の堀SD1400に継続する。	16.20	3.25	『伏見城跡・桃陵遺跡発掘調査報告書-（仮称）公務員宿舎伏見住宅整備事業に伴う-』	2010/3/20
495	725	桃山時代	伏見城跡	本丸北堀	伏見城本丸北堀	30.00	6.00	「桃山（大正11年測図・昭和10年修正測図）」都市計画図	昭和11年
496	724	桃山時代	伏見城跡	出丸北堀	伏見城出丸北堀	48.00	10.00	「桃山（大正11年測図・昭和10年修正測図）」都市計画図	昭和11年
497	723	桃山時代	伏見城跡	西ノ丸北堀	伏見城西ノ丸北堀	60.00	8.00	「桃山（大正11年測図・昭和10年修正測図）」都市計画図	昭和11年
498	727	桃山時代	伏見城跡	松ノ丸北堀	伏見城松ノ丸北堀	60.00	10.00	「桃山（大正11年測図・昭和10年修正測図）」都市計画図	昭和11年
499	728	桃山時代	伏見城跡	本丸・西ノ丸間堀	伏見城本丸・西ノ丸間堀	60.00	14.00	「桃山（大正11年測図・昭和10年修正測図）」都市計画図	昭和11年
500	729	桃山時代	伏見城跡	治部池	伏見城治部少丸堀	80.00	8.00	「桃山（大正11年測図・昭和10年修正測図）」都市計画図	昭和11年
501	726	桃山時代	伏見城跡	紅雪堀	伏見城紅雪堀	90.00	14.00	「桃山（大正11年測図・昭和10年修正測図）」都市計画図	昭和11年
502	145	安土桃山時代	伏見城跡	北堀中央部～東部	伏見城北堀。E字形で現存しており，中央E字部分を含めると，幅152mとなる。	100.00	14.00	『伏見城跡発掘調査報告-伏見北堀公園整備工事に伴う事前発掘調査-』	1990/3/31
503	730	桃山時代	伏見城跡	木幡山期舟入	伏見城木幡山期舟入	100.00	18.00	「桃山（大正11年測図・昭和10年修正測図）」都市計画図	昭和11年
504	731	桃山時代	伏見城跡	指月城期舟入	伏見城指月城期舟入	110.00	14.00	「桃山（大正11年測図・昭和10年修正測図）」都市計画図	昭和11年
505	722	桃山時代	伏見城跡	北堀	伏見城北堀	120.00	12.00	「桃山（大正11年測図・昭和10年修正測図）」都市計画図	昭和11年
506	122	安土桃山時代	伏見城跡	北堀西部	伏見城北堀。E字形で現存しており，西端E字部分を含めると，幅165mとなる。	165.00	14.00	『伏見城跡発掘調査報告-伏見北堀公園整備工事に伴う事前発掘調査-』	1989/3/20

羽束師遺跡周辺の環境復元
—弥生時代後期～古墳時代初頭の調査成果を中心として—

黒須　亜希子

１．はじめに

羽束師遺跡は，伏見区羽束師菱川町，志水町，古川町に広がる周知の遺跡である。長岡京跡の下層遺跡のひとつであり，弥生時代後期から古墳時代まで存続した集落跡として知られている。

昭和55年（1980年），京都外環状線（府道49号）建設に先立つ発掘調査により，弥生時代後期の竪穴建物や古墳時代前期の土坑，遺物を多量に含む河川跡等が発見された。またその翌年に行われた西羽束師川河川改修工事に伴う発掘調査では，弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴建物が重複して確認された。このため，現在ではこれらの竪穴建物と河川を含む南北約800ｍ，東西約1㎞が遺跡範囲として周知されている。ただし，当該時期の遺物はこの範囲外においても採取されていることから，その範囲はさらに広がる可能性が高い。

筆者は近年，羽束師遺跡の北西地点において発掘調査を実施する機会を得たが，その際にも後世の遺物にまじり弥生時代後期～古墳時代初頭（庄内式）の土器片が出土する様相を認識した。また土層確認において暗色化した粘土質シルト層（水田耕作に適した軟質土壌）の存在を確認するに及び，羽束師遺跡は居住域の周辺に一定規模の生産域（水田等）を備えた農耕集落であった可能性を思い描くに至っている。

これを検証するため，本文では羽束師遺跡付近における既往の調査成果に，近年加えられた新たな知見を加味して整理し，覚書としたい。

２．羽束師遺跡の調査概要

羽束師遺跡及びその周辺は，都城跡である長岡京跡の範疇にあることから，開発行為に先立つ試掘調査や詳細分布調査（立会調査）の成果が累積するエリアである。すなわち，遺跡周辺の地中データを悉皆的に入手する機会を得やすい状況にある。これらの成果を収集し，整理したものが表１・図１である。以下，調査ごとに概観する。

調査①　市立羽束師小学校と神川中学校の校舎建設に伴い実施された発掘調査である。長岡京期遺構面の基盤層を除去した段階で流路や溝を有する古墳時代後期遺構面が検出されている。さらにその基盤層となる粘土質シルト層（第５層）を報告者は水田耕作土と推測し，その上面から切り込む杭列を伴う溝状遺構（SD22）を関連施設として認識する。SD22の出土遺物は寡少であるが，古墳時代後期の遺物に混じり弥生時代の遺物が含まれることは注目される。なお第５層の残存状態は，低地である２トレンチが最も良い。

調査②・③・⑤　京都外環状線建設工事

に先立つ調査で，一連の調査区は羽束師遺跡を東西に横断する形となる。②B区と②C区の調査区北辺では弥生時代後期～古墳時代後期の自然流路が蛇行し，調査区外へとのびている。最下層からは弥生時代後期の土器群が多量に出土した。また②B区で

表１　羽束師遺跡周辺の調査事例

No.	調査番号（調査次数）	調査区	調査期間	種類	調査事由	面積 ㎡	調査内容（弥生時代～古墳時代）	調査機関	文献
①	左京 第９次	１～３ トレンチ	1976/12/25 ～ 1977/03/31	本調査	学校建設	7,200	２トレンチ／黒灰色粘土層（水田耕作土？）が堆積。 杭列を伴う溝（古墳時代後期）を検出。	（財）京都市埋蔵文化財研究所	『長岡京跡発掘調査報告』1977 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第２冊
②	80NG-PV1	A～E 区	1980/08/04 ～ 1981/02/03	本調査	道路建設	1,825	B区／竪穴建物（弥生後期～古墳前期）， 大型土坑（古墳前期）， 自然流路（弥生後期～奈良） C区／自然流路（弥生後期～奈良） D区／弥生後期～古墳前期包含層， 大溝（古墳後期） E区／弥生後期～古墳前期包含層	（財）京都市埋蔵文化財研究所	『昭和55年度京都市埋蔵文化財調査概要』2011
③	80NG-PV1	F～H 区	1980/11/11 ～ 1981/01/29	本調査	道路建設	520	G区／弥生以前の溝	（財）京都市埋蔵文化財研究所	
④	80NGSS	２G～６ G区	1981/01/14 ～ 1981/05/31	立会	水道敷設	870	２G地点／古墳前期の流路	（財）京都市埋蔵文化財研究所	
⑤	81NG-PV2	I～N 区	1981/07/11 ～ 1981/12/28	本調査	道路建設	2,382	I区／竪穴建物（弥生末），流路（古墳） J区／竪穴建物（弥生末～古墳），断面V字形の溝（弥生後期），柱穴 K区／水田（古墳後期） L区／水田（古墳後期） M区／水田（古墳後期） N区／水田（古墳後期）	（財）京都市埋蔵文化財研究所	『昭和56年度京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』1983
⑥	82NG704	１・２区	1984/02/20 ～ 1984/03/23	本調査	宅地造成	450	１区／流路（弥生～古墳前期） ２区／断面V字形溝（古墳前期）	（財）京都市埋蔵文化財研究所	『昭和57年度京都市埋蔵文化財調査概要』1984
⑦	15NG465 15NG469 左京 第585次		2016/01/12 ～ 2016/02/16	本調査	個人住宅建設	96	地形の変化点 T.P.10.1mに暗色帯	京都市文化財保護課	『京都市内遺跡発掘調査報告』平成28年度 2017
⑧	00NG106		2000/06/19 ～ 2000/09/08	本調査	学校建設	300	落込状遺構（長岡京期） 建物・土坑（平安時代） 溝（鎌倉～室町時代） 畦・溝・土坑（江戸時代）	（財）京都市埋蔵文化財研究所	『平成12年度京都市埋蔵文化財調査概要』2003
⑨	00NG213	１～４ トレンチ	2000/09/06 2000/09/07	試掘	宅地造成	85	４トレンチ／竪穴建物３棟・土坑 （弥生後期～古墳前期）	京都市文化財保護課	『京都市内遺跡試掘調査概報』平成12年度　2001
⑩	08NG466		2009/02/05	試掘	福祉施設建設	38	ラミナを伴う湿地堆積（古代以前）	京都市文化財保護課	『京都市内遺跡試掘調査報告』平成21年度　2010
⑪	09NG536		2010/12/27 ～ 2011/03/11	本調査	学校建設	530	畦畔を伴う水田跡（古墳後期）	（財）京都市埋蔵文化財研究所	『長岡京跡・羽束師遺跡』2011 京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2010-16
⑫	12NG289	１～９ トレンチ	2012/11/01 ～ 2013/11/05	試掘	宅地造成	322	３トレンチ／湿地堆積（古代以前）	京都市文化財保護課	『京都市内遺跡試掘調査報告』平成25年度 2013
⑬	80NGSD2	A～E トレンチ	1981/10/26 ～ 1981/12/17	試掘	河川改修	500	A2グリッド／南へ下がる湿地堆積 B3グリッド／竪穴建物３棟・土坑 （弥生末～古墳初頭） D1グリッド／流路（古墳後期） Eグリッド／流路（弥生）	（財）京都市埋蔵文化財研究所	『昭和55年度京都市埋蔵文化財調査概要』2011
⑭	80NG2096 左京 第174次	X1～４区	2012/12/20	本調査	道路建設	4,920	北西－南東の溝，方形周溝墓（古墳初頭）	京都市文化財保護課	『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』1991
⑮	98NG068		1998/06/29	試掘	共同住宅建設		竪穴建物１棟・土坑（弥生後期～古墳前期）	京都市文化財保護課	『京都市内遺跡試掘調査概報』平成12年度　2001

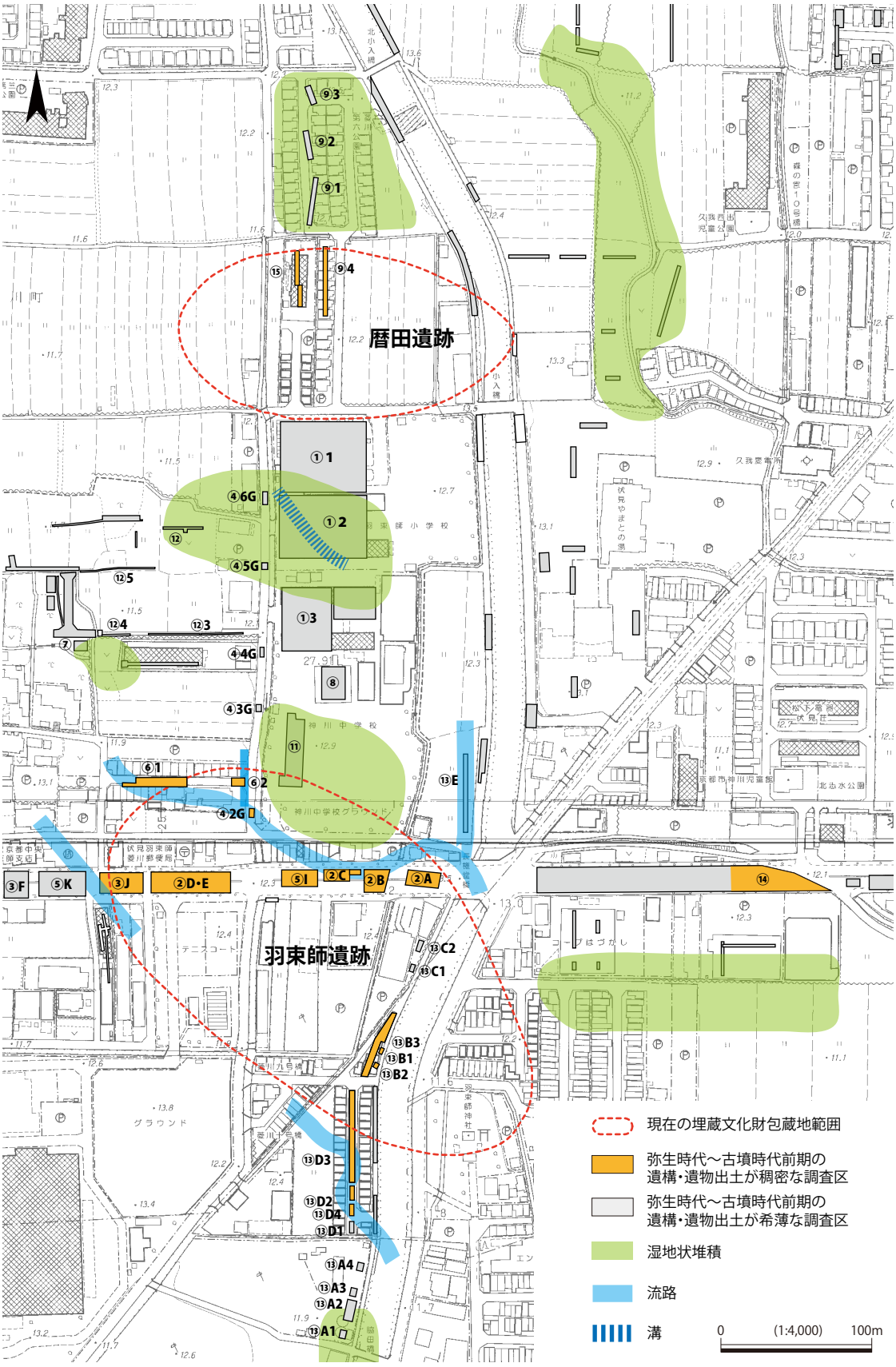


図１　羽束師遺跡の位置と周辺の調査事例

はこの流路に切られる形で方形プランをもつ竪穴建物（弥生時代後期）と大型土坑もしくは井戸（古墳時代前期）が確認されている。また，②D・E区では弥生時代後期～古墳時代の包含層が50cmの層厚をもって残存している。

③I区・③J区では，弥生時代後期～古墳時代の竪穴建物と溝（SD２），古墳時代の流路が検出されている。なお，SD２からは，直柄鍬を含む木製品が出土した（後述）。

調査④　水道敷設に伴う立会調査である。神川中学校の南西側に設定した２G地点では，GL-9.3ｍ以下において古墳時代前期に遡る流路が確認されている。

調査⑥　宅地造成に伴う発掘調査である。西側の⑥１区では弥生時代～古墳時代前期の流路を幅10ｍ以上にわたり確認した。また東側の⑥２区では南北にのびる断面V字形を呈する溝が検出された。

調査⑦　個人住宅建設に伴う発掘調査である。微高地から低地へ下がる地形の変化点にあたり，T.P.10.1ｍ以下に存在する暗色帯が南東へ向かい徐々に厚くなる様相を確認できる。

調査⑧　神川中学校敷地内に設定された調査区である。微高地にあたるため，①２トレンチで確認された第５層は残存しない。

調査⑨・⑮　羽束師中学校の北側で計画された共同住宅建設と宅地造成工事に先立つ試掘調査である。⑨４トレンチと⑮では，T.P.+10.8ｍの深度において弥生時代後期～古墳時代前期の遺構面が確認された。検出された竪穴建物４棟は方形プランをもち，うち２棟は切り合い関係にあり，埋土には多量の炭化物が混じる。これらの発見に伴い，周辺は暦田遺跡として新規に周知された。なお⑨１トレンチ以北は徐々に下がり，湿地状堆積となる。

調査⑩　福祉施設建設に伴う試掘調査である。長岡京期の基盤層はラミナを伴う泥砂層で，湿潤な堆積環境を示す。

調査⑪　神川中学校校舎建設に先立つ調査である。古墳時代後期の水田が良好な状態で検出されている。畦畔の主軸は北西－南西を指す。古墳時代前期以前の遺構・遺物は確認されていない。

調査⑫　大規模な宅地造成に先立つ試掘調査である。弥生時代～古墳時代の遺構面は確認されていないが，北半部のトレンチに比べて南半部の⑫３トレンチ，⑫４トレンチは湿潤な堆積環境にある。

調査⑬　西羽束師川の整備事業に伴う発掘調査である。このうち⑬B３Gでは，弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴建物が３棟検出された。いずれも近接し，うち２棟は切り合い関係にある。⑬D3Gでは北西から南西へ流れる古墳時代前期に埋没した流路が確認された。その埋土には弥生土器が一定量含まれていた。⑬A２G以南では徐々に南へ下がり，湿地状堆積となる。

調査⑭　外環状線道路のうち西羽束師川より東の範囲において行われた発掘調査である。弥生時代～古墳時代前期の遺構は，調査区東端部の微高地上において検出された。北西－南東に通る複数の溝と，方形周溝墓と目される鉤形に曲がる溝が確認されている。

以上，弥生時代～古墳時代における羽束師遺跡周辺の調査状況を整理した。このう

ち，弥生時代後期～古墳時代前期という時期幅にフォーカスすると，以下の点を確認することができる。

1）図１に示した範囲（南北800ｍ，東西500ｍ）の中には，竪穴建物を主体とする居住域が２箇所存在する（羽束師遺跡・暦田遺跡）。いずれも住居が重複することから，一定期間存続したと推測される。弥生時代後期～古墳時代前期という限られた時間幅を考慮すると，この二者は200ｍ程度の距離を保ちつつ共存したこととなる。

2）この両居住域の間には自然流路が存在する。この流路は，弥生時代後期～古墳時代後期の間，静かな埋没堆積を示す。このことは，当該地域では流路が主軸を大幅に違えるような事態はおこっておらず，大規模な地形変化も免れたことが窺える。

3）自然流路の周囲には，「湿地帯」が存在したと報告されている。当該地点では，古墳時代後期になると水田が営まれるが，気候変動が小さい環境下では，それを遡る弥生時代後期～古墳時代前期にも，すでに水田耕作に適した土壌が形成されていた蓋然性が高い。

このことは，弥生時代後期においてすでに原始的な水田耕作が行われていた可能性を示すものであり，これが古墳時代後期にはより高度な水田の経営に推移したことを想起させる。

4）⑭調査地点では，小規模ながら方形周溝墓の一部と見られる遺構が確認されている。これ以東は弥生時代・古墳時代の遺構・遺物の検出が希薄であることから，これが墓ならば，羽束師遺跡集落に付随する墓域の一部となる可能性がある。

以上のことから，弥生時代後期～古墳時代前期の羽束師遺跡・暦田遺跡を含む当該地域には，複数の居住域ユニットと生産域（水田），墓域を有する定型的な集落が存在したと想定される。

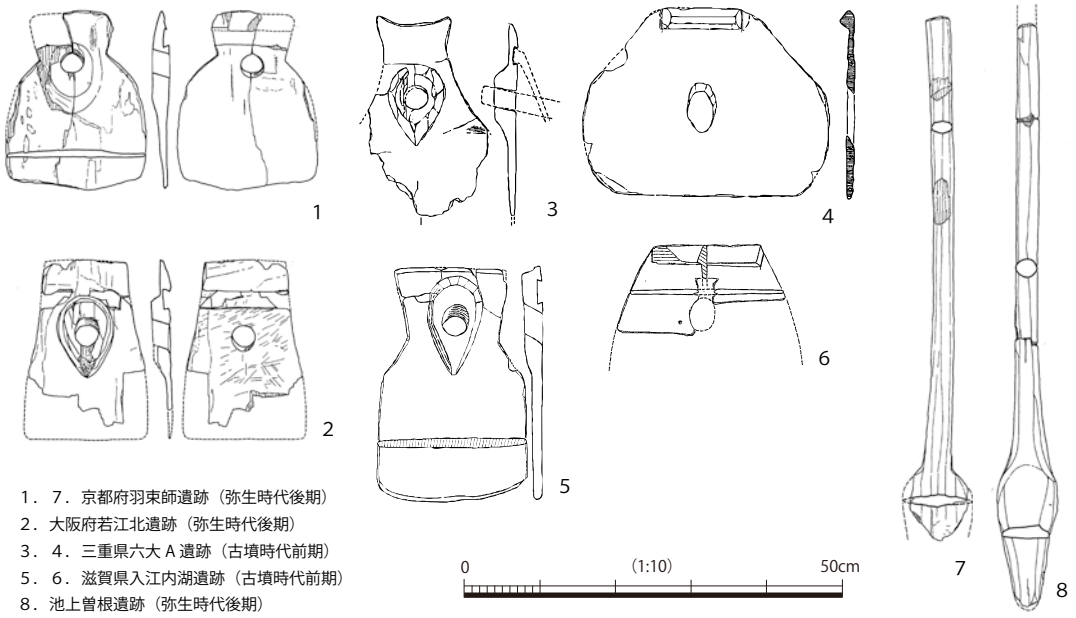
３．農耕集落の特徴

居住域と生産域，墓域を併せ持つ集落は，弥生時代における農耕を生業とするムラの一般的な形態である。羽束師遺跡では，当該期に遡る水田遺構はいまだ報告されていないが，その可能性は多分にある。これは当該時期の木製鍬が出土したことからも確実視される。

図2-1は直柄鍬の鍬身で，調査③Ｊ区から出土したものである。詳細な報告書が未刊行であるため出土状況は明らかではないが，典拠である奈良国立文化財研究所刊行の『木器集成』[1]には，「断面Ｖ字形を呈し，幅1.0ｍ，深さ0.7～0.8ｍを測る溝から畿内第Ｖ様式併行期の壷・甕・一木鋤・掘棒（図2-5）とともに出土した」とある。

図2-1の法量は最大長23.4cm，最大幅18.5cm，最大厚2.3cm，逆台形に張り出した頭部と湾曲する肩をもつ。柄孔隆起は突起をもたないＢ類で，柄孔角度は鋭角，頭部前面に泥除を装着するための蟻溝を備える。側縁と頭部の一部を欠損すること，また刃先にも使い減りが見えることから実用品であることが窺える。

近畿地方の直柄鍬を概観すると，蟻溝を持つ平鍬（近畿型鍬Ｖ式）[2]は弥生時代中



1．7．京都府羽束師遺跡（弥生時代後期）
2．大阪府若江北遺跡（弥生時代後期）
3．4．三重県六大 A 遺跡（古墳時代前期）
5．6．滋賀県入江内湖遺跡（古墳時代前期）
8．池上曽根遺跡（弥生時代後期）

図２　羽束師遺跡出土木製品と近畿の出土事例

期末の河内平野南部にその萌芽があり，やがて近畿一円に伝播，西は瀬戸内・山陰，東は東海・北陸地方にも及ぶ。河内地域で盛行するのは弥生時代後期前半であるが，近江地域では古墳時代前期まで使用されているため，羽束師遺跡の年代観と齟齬は生じない（図３）。

泥除を装着した直柄鍬は湿潤な水田耕土を整える際に使用する道具であり，その出土は当該地域で水田耕作が行われていたことを明確に示すものである。また羽束師遺跡ではその道具を使いこなしていたと考えられることから，その農耕技術力は他の集落と同様，一定水準に達していたと考えられる。

４．おわりに

以上，弥生時代後期～古墳時代前期における羽束師遺跡とその周辺について，記述した。

当該時期に営まれた一般的な農耕集落は居住域のみでは成り立たず，その生業の源となる生産域を必ず保持している。大小の差はあるものの，生産域と墓域とあわせて扱うことが，当該集落を理解する上で重要な視点となる。現在，羽束師遺跡・暦田遺跡では居住域のみが遺跡範囲として周知されているが，生産域，墓域がその周辺に存在することを視野に入れて，調査に臨む必要があると言えよう。

註・参考文献

１）奈良国立文化財研究所「B農具」（『史料第三六冊　木器集成図録　近畿原始編』1993年）。
２）黒須亜希子「木製泥除の再検討」（『考古学研究』日本考古学研究会　2017年）

黒須亜希子（くろすあきこ）（文化財保護課　文化財保護技師（埋蔵文化財担当））

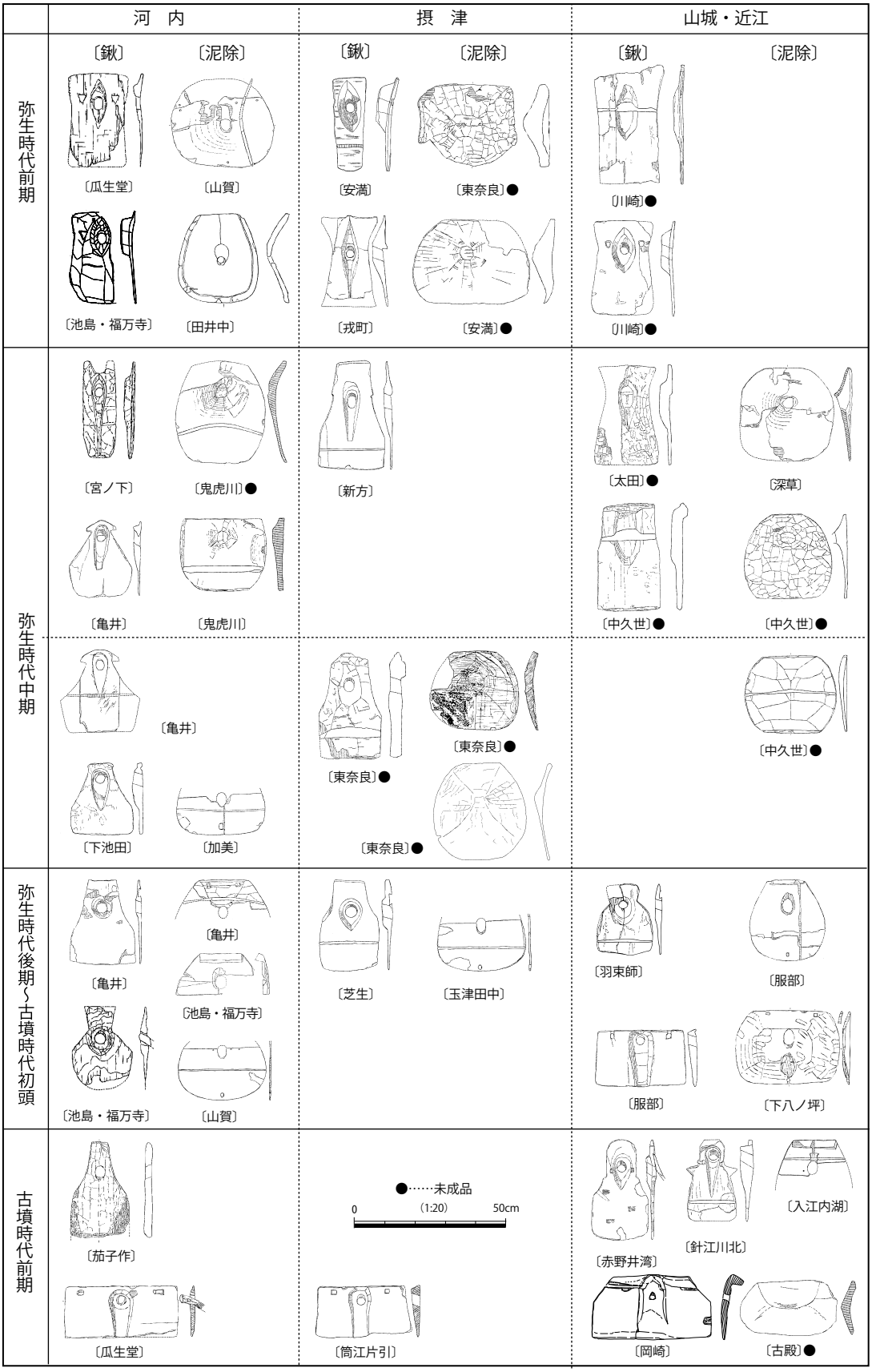


図３　広鍬と泥除の出土事例

京都市文化財保護課研究紀要

－　投稿規定　－

（名称）

1．紀要の名称は『京都市文化財保護課研究紀要』とする（以下，本紀要とする）。

（目的等）

2．本紀要は，京都市における文化財の調査等を通して得た研究成果を広く社会に発信し，専門領域の学術的な進展に寄与することを目的とする。

3．前項にいう専門領域とは，建造物，美術工芸品，民俗，史跡，名勝，天然記念物，埋蔵文化財，文化遺産等，文化財保護課において扱うものを指し，これらをもって本紀要の主要項目とする。

4．本紀要の編集及び発行は，本規定の定めるところとする。

（投稿資格）

5．執筆者は，原則として，京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の職員及び職員の経験が有る者とする。ただし，編集委員が執筆を委嘱する場合はこの限りではない。

（原稿の種類）

6．本紀要に投稿できる原稿の種類は，論文，研究ノート，資料紹介等とする。

7．論文は，原則として未発表のものに限る。

8．論文は本文・註を含めて一篇20,000文字以内，挿図は20点以内，あわせて40ページ以内とする。欧文は，1文字を2分の1として計算する。

9．研究ノート，資料紹介は原則として一編8,000文字以内とし，挿図の点数は特に制限を設けない。但し，総頁数は20ページ以内とする。

10. 一回の投稿は原則として完結した一篇に限るが，原稿量が大部の場合は，編集委員と協議の上，分号することを認める。

（原稿のエントリーと締切）

11. 執筆のエントリーは，別途様式にその題名，説明文，氏名等を明記の上，編集委員に提出する。なお，原稿の締切日は別に定める。

（原稿の体裁）

12. 原稿の提出はデータで行い，必要に応じて割付指定用紙を添える。横書きを原則とし，完全原稿として提出する。

13. 挿図，表等の数量と大きさは，執筆者の意向を尊重しつつ編集委員が決定する。

14. その他執筆細目は，別途定める。

（校正）

15. 執筆者校正は1回とし，あくまでも誤植訂正等にとどめる。原文の大幅な増減は認めない。

（著作権等）

16. 論文等に使用する挿図・写真には，「執筆者撮影」を含め，出典を明記する。

17. 挿図等に用いる写真や挿図の掲載については，執筆者が自らの責任において，日本国における慣行を配慮しつつ，事前に書面等により許可をとる。但し，必要に応じて，文化財保護課として許可を求める依頼文を作成する。

18. 職務上，知り得た個人情報については言及しない。また，個人を特定できる写真等は掲載しない。但し，祭礼，習俗等に係る事例は，事前に保存会等に許可を得た上で掲載する。また，新出の個人所有の文化財については，許可を得た上で「個人所有」として掲載する。

（その他）

19. 差別用語等，人権に係る事例については執筆者が自らの責任において公務員倫理に則り，適切な記述を行う。なお，編集委員により不適切と認められた場合は，指示に従い，表現を改める。但し，史料等原文の引用，翻刻等においてはこの限りではない。

20. その他，この規定に記されていない事項については編集委員が判断する。

（改廃）

21. この規定の改廃は，文化財保護課の議を経て行い，周知する。

附則

平成29年11月　制定

2018年（平成30年）３月　発行

京都市文化財保護課研究紀要　創刊号

編集・発行

京都市文化市民局　文化芸術都市推進室　文化財保護課

〒604-8006　京都市中京区河原町通御池下る下丸屋町394　Y･J･Kビル２階

TEL）075-366-1498　　FAX）075-213-3366

京都市印刷物　第293228号